

南国市民俗文化財調査報告書 第一集

# 南国市後川流域の エンコウ祭



令和六年三月  
南国市教育委員会



## 序 文

南国市は物部川と国分川に育まれた肥沃な香長平野に抱かれ、「土佐のまほろば」といわれるように古くから人が生活を営むのに大変適した場所で、数多くの遺跡が所在し、中世まで土佐の中心地として栄えた歴史あふれる街です。代表的なものとして、旧石器時代の奥谷南遺跡に始まり、弥生時代の田村遺跡群、紀貫之の土佐日記にも記される土佐国衙跡、中世守護代細川氏の居館である田村城跡、長宗我部氏の居城である岡豊城跡などがあります。

そうした歴史風土のなかで、南国市後川流域のエンコウ祭は南国市南部を流れる後川流域でエンコウと呼ばれる河童に似た妖怪を祀って水難防止を祈願する行事で、小学一年生から中学三年生までの子ども達によつて準備から片付けまで行われることなど、数多くの特色があります。本行事の特色が評価され、平成二十三年三月九日には国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選ばれました。しかし、近年少子化の影響で行事の存続が危ぶまれています。そのため、南国市では現在の様子を記録し、次世代に伝えるために平成二十五年度から調査を行い、報告書としてまとめました。

調査にあたりご指導を賜りました文化庁、高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課、また、調査への深いご理解とご協力をいただいた各地域の方々、そして調査にご尽力いただいた皆様に、心より厚くお礼申し上げます。

南国市後川流域のエンコウ祭は、地域の子ども達を守り育てる行事として、地域で大切に継承されてきた貴重な民俗文化財であり、次世代へと受け継がれていくべきものです。この報告書がその理解と認識を深める一助となり、あわせて学術分野の研究においても活用していただければ幸いです。

令和六年三月

南国市教育委員会

教育長 竹内 信人

## 例言

- 一 本書は、高知県補助事業により、平成二十五年度～平成二十九年度・令和五年度にかけて実施した、南国市後川流域のエンコウ祭の調査報告書である。
- 二 本調査では、南国市後川流域のエンコウ祭調査委員会を設置し、文化庁伝統文化課（現文化庁文化第一課）、高知県教育委員会文化財課（現高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課）の指導を受け、南国市教育委員会が実施した。
- 三 本報告書作成にあたっての現地調査、聞き取り調査については、前浜・下島・久枝地区の住民の方々に多大な協力を得て実施することができた。また、周辺行事調査では、各地域の方々に調査に応じていただいた。氏名表記にあたって、敬称は省略している。
- 四 本書中で使用される民俗語彙とされるものは、原則的にまずカタカナ表記にし、漢字表記が可能なものは、その後漢字表記とした。
- 五 本書掲載の写真は、各調査者の撮影したもののほか、高知県立歴史民俗資料館が収蔵する写真、南国市および南国市の住民の方からの提供によるものである。
- 六 本書掲載の写真については、分担執筆および掲載構成の関係上、大きさの統一はしていない。
- 七 平成二十六年のエンコウ祭全地区調査には委員の他、永原順子、中村淳子、植野由里恵、大藪寛子、（高知県立大学生）味元有里江、角森美佳子、福田真由、松田優香、角田昌治、田村莉歩、吉村祐依、下村亮太、吉本晴香、吉廣真紀が分担して調査した。
- 八 聞き取り調査にご協力いただいたのは、前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）、前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）、前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）、前浜浜窪の橋田正廣さん（昭和十年生）、久枝西組の下司順一さん（昭和十五年生）、前浜中組の高木貞夫さん（昭和二十四年生）である。
- 九 本書掲載の図表の作成および整理は、各執筆者による。
- 十 本書の執筆分担・文責は次のとおりである。  
第一章：油利崇／第二章一：濱田真尚／第二章二・第三章・第五章・第六章一・二・四：梅野光興／第四章・第七章：橋尾直和／第六章三：橋本達広
- 十一 本書の編集は油利崇が担当した。

# 目次

第一章	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第二章	調査対象地域（南国市浜改田・前浜・下島・久枝地区）の 地理的歴史的環境と民俗・・・・・・・・・・	4
	一．地理的歴史的環境	
	二．前浜・久枝の民俗	
第三章	南国市後川流域のエンコウ祭の記録と記憶・・・・・・・・	25
第四章	平成二十六年のエンコウ祭・・・・・・・・・・	40
	前浜里組、前浜西組、前浜中組、前浜寺家、前浜浜窪、 久枝西組、久枝中組、久枝東組	
第五章	高知県のエンコウ伝承・・・・・・・・・・	74
	一．高知県のエンコウのイメージ	
	二．江戸時代の土佐の河童系妖怪	
	三．「土佐化物絵本」にみるエンコウとシバテンの姿	
	四．民俗伝承のなかのエンコウ	
第六章	高知県内のエンコウ祭と関連行事・・・・・・・・・・	99
	一．エンコウ祭の歴史資料	
	二．高知県内のエンコウ祭と関連行事の文献資料	
	三．高知県内のエンコウ祭と関連行事の現地調査	
	高知市高須「エンコウ祭」	
	日高村宇井「えんこうまつり」	
	南国市稲生「河泊祭」	
	南国市領石「牛月地藏の祭り」	
	南国市久礼田西「地藏祈願祭」	
	南国市植田「洞ヶ淵のお地藏様の祭り」	
	香南市香我美町稗地「孟蘭盆」	
	香南市香我美町堀ノ内「施餓鬼」	
	香南市香我美町岩鍋「施餓鬼供養」	
	香南市香我美町中山川「川供養」	
	香南市土佐山田町神母ノ木「川施餓鬼」	
	香南市野市町上岡「エンコウ祭」	
	高知市布師田「おいげ祭り」	
	高知市春野町仁ノ「龍の不動祭」	
	香南市香我美町山北「岩淵の祭り」	
	南国市篠原「エンコウ祭」	
四．後川流域のエンコウ祭の特徴		
第七章	総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・	151
	一．「南国市後川流域のエンコウ祭」の記録調査	
	二．研究史と本調査の特徴	
	三．全国の水神・河童祭祀の事例	
	四．エンコウ祭と全国の事例との比較	
	五．平成二十二年以降から現在までの「エンコウ祭」の開催状況	
	六．今後の課題と取り組み	
資料編	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	166
	一．エンコウ祭写真資料	
	二．エンコウ祭関連資料	
	三．聞き取り調査資料	



## 第一章 はじめに

南国市後川流域のエンコウ祭は、夏の水遊びが始まる前に子どもたちが、エンコウと呼ばれる妖怪を祀って水難防止を祈願する行事で、高知県中央部に位置する南国市の南部を流れる後川流域の3つの地区の10の組に伝承されているものである。10の組は、前浜地区の里組、西組、中組、寺家、東組、浜窪、下島地区の下島浜、久枝地区の西組、中組、東組である。なお、このほか前浜地区に久保組、下島地区に下島里があるが、少子化のため、久保組は平成十五年頃、下島里は同二十年頃に行事を中止している。

この行事で祀られるエンコウとは、シバテンとともに、高知県では河童に似た妖怪の一種とされており、高知県内にはエンコウが川の中に馬を引きずり込もうとした話やエンコウが大人に相撲を挑んだ話など、エンコウにまつわる話が数多く伝承されている。



南国市位置図

この行事は、小学1年生から中学3年生までの子ども達によって執り行われる。かつては男子だけで行われていたが、少子化のため、どの組も二十年ほど前より女子も参加するようになった。子ども達は、タイショウ(大将)と呼

ばれる最年長者の指示に従いながら行事の準備から執行、後片付けまでを行う。

まず行事の数日前、子ども達は各家をまわってお金を集める。子ども達はこのお金で花火を買ったり、当日の供物を用意したりする。当日早朝、エンコウが住んでいるとされる川を清掃して川岸に生えているショウブを刈り取る。

昼になると、ショウブを洗い、橋のたもとに、木や竹を骨組みにしてショウブで葺いた、高さ1m、幅50cmほどの小屋を作る。この小屋は、ショウブゴヤ(菖蒲小屋)、オヤシロ(御社)などと呼ばれ、かつては川岸に作られていたが、昭和五十年代に護岸工事が行われた後は、橋のたもとに作られるようになった。小屋の中や外側には提灯を吊す。小屋の屋根の形には、平らにしたものや上部を結んで円錐形にしたものなどがあるが、組ごとに異なるだけでなく、その年の大将の指示によっても異なり一定していない。また、同時に川幅いっぱい綱を張って提灯を吊り下げる。エンコウは明るいものを喜ぶとされ、提灯はできるだけたくさん吊す。

夕方になると、子どもたちは食事をとってから再び小屋の前に集合する。そして、提灯に明かりを灯し、小屋にキュウリとタコの酢の物や御神酒、ナスやトマトなどの夏野菜を供えてから、橋の上で花火を楽しむ。やがて辺りが暗くなると、大人たちがめいめいに小屋に来て、供物を食べて御神酒を飲んでお参りしていく。

花火がなくなると行事は終了となるが、このうち前浜地区の浜窪は最後に児童公園に移動して子ども相撲を行う。また、下島浜と久枝地区の三つの組では、エンコウの川流れと称して、提灯の蓋に蠟燭を灯して川に流し、子どもたちは全員で「エンコウの川流れ」と大声で繰り返し唱える。流す蓋の数は、かつては大将の人数分であつ



南国市後川流域のエンコウ祭位置図 (S=1/10,000)



たが、現在は3つほどである。明かりが見えなくなるまで見送るが、途中で木などに引っかかると良くないという。

翌日は、他の組の者に小屋を壊されると良くないといって、できるだけ早くに小屋を解体して、シヨウブを川に流す。

この行事は、子どもたちがエンコウと呼ばれる妖怪の一種を祀って水難防止を祈願する行事である。エンコウは、河童に似た妖怪といわれているが、水神の化身と考えられ、この行事には、本格的な夏を前にして水神に安全を祈願するだけでなく、災厄を払おうとする要素も見受けられ、我が国の水に対する民間信仰を考える上で注目されるものである。また、子どもたちが大将と呼ぶ最年長者を中心とした年齢階梯的な組織のもと、行事の準備から後片付けまでを執り行っている点で地域的特色も豊かである。

この行事のようにエンコウに水難防止を祈願する行事は、高知県下では香長平野を中心として六月中旬頃に盛んに行われていたことが知られている。しかし、社会構造の変化や少子化などによりほとんどが衰滅しており、今日では南国市の後川流域などいくつかの地域に伝承されるのみとなっている。さらに、後川流域のエンコウ祭についても、少子化により参加者が減少しており、近隣の2つの組も数年前より中止しているなど、行事の衰退・変貌のおそれが極めて高いことから、早急に記録を作成する必要がある。

平成二十三年三月九日付けで文化庁より記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に採択された。この行事は子どもが主体となっていくものであるが、近年地域の過疎化・高齢化に伴って子どもが減少してきており、行事の存続が危ぶまれている。そのため、平成二十五年度よりエンコウ祭の詳細な民俗学的・現状記録調査を

実施した。調査にあたって、南国市後川流域のエンコウ祭調査委員会を設置し、調査方法や内容を協議検討し、委員等による現地調査や情報交換を経て、執筆を分担して報告書としてまとめた。

#### 調査組織

南国市後川流域のエンコウ祭調査委員会

濱田 眞尚（南国市文化財審議委員）

橋尾 直和（高知県立大学文化学部教授）

梅野 光興（高知県立歴史民俗資料館学芸課）

橋本 達広（高知中学・高等学校教諭）

浜田 豪（元大湊史談会会長）

高木 貞夫（前浜地区地域活性化委員会会長）

#### 調査指導

石垣 悟（文化庁文部科学技官）

中内 勝（高知県文化財課）

#### 事務局

調査担当 南国市教育委員会生涯学習課 油利 崇

（いずれも所属は調査時のもの）

## 第二章 調査対象地域

（南国市浜改田・前浜・下島・久枝地区）  
の地理的歴史的環境と民俗

## 一、地理的歴史的環境

## （1）位置

エンコウ祭の行われている南国市は高知県中央部に位置し、県都高知市の東に位置している。本調査対象地域は、南国市の最南部にあり太平洋に面し、高知県第三の河川である物部川の河口西側域にある。

## （2）地理的、歴史の変遷の概略

海岸部は砂浜で、浜堤状に東西に伸びるが、この浜堤形成は地質年代にまで遡るもので、浜堤内陸側に弥生時代以降の遺跡が認められる。

平安時代、紀貫之は土佐での国司の任を終え、京に帰る際に日記文学『土佐日記』を書き残している。紀行文学ながら、土佐の地名が多く登場し江戸時代以降多くの研究がなされている。この日記中「大湊」の地名が記され、その具体的場所が論ぜられ、いくつかの説が展開されているが、最も有力なのが前浜（物部川河口付近）説である。往事、物部川の最下流部はデルタ地帯が形成されており、本流河口部は前浜と下島の境（切戸）であったとされ、良好な川湊の形成を想定しているが、現在「大湊」の地名は残存していない。ちなみに、この大湊の地名が記された唯一の記録がある。それは長宗我部氏の軍記物『土佐物語』である。軍記物語であり史実に忠実ではないと考えるべきであるが、天正元年に大阪小島から巨漢力士源蔵が大湊に来ていて、元親の前で御前相撲を行ったというもので

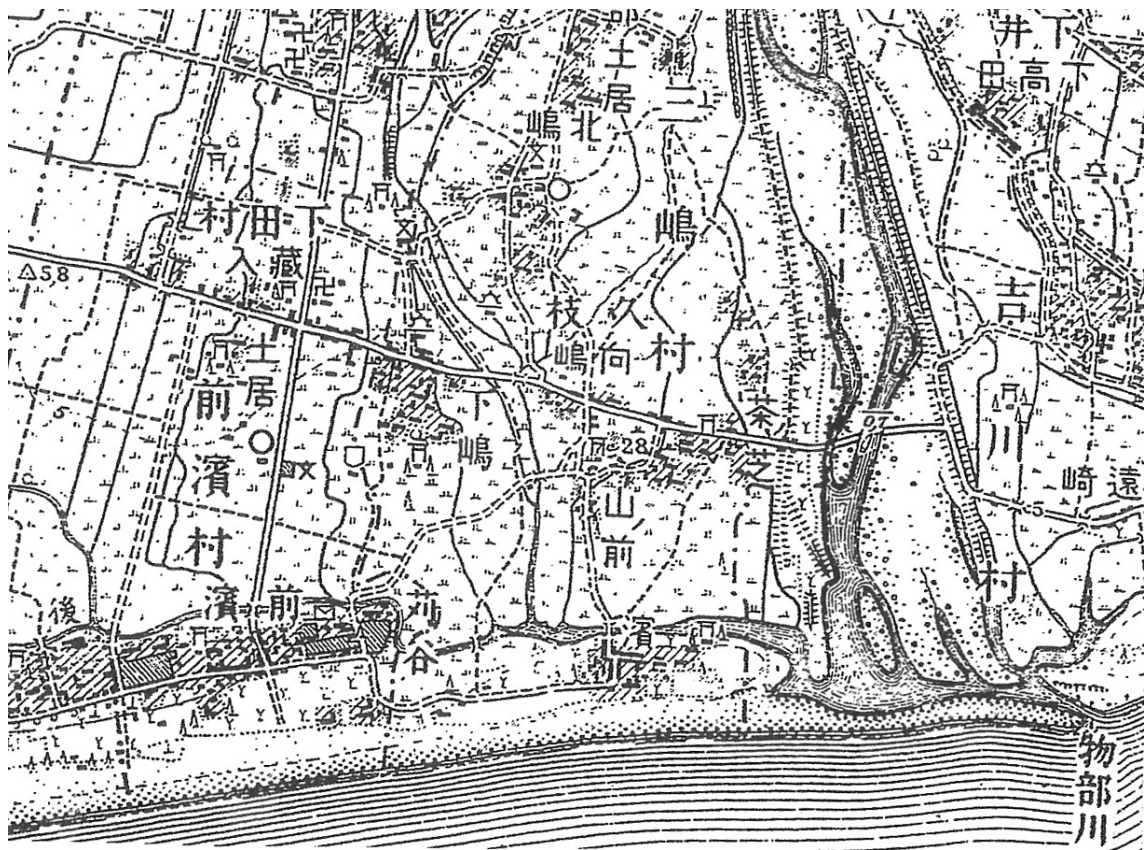
ある。この十六年後、検地の際には記述がないので不可思議ではあるが、地域の総称的に物部川河口付近が大湊と呼ばれていた可能性を残すものである。

天正十六年に検地が行われた長宗我部地検帳（香我美郡久枝村、上島・下島・原寺、下田庄分）の時点ではおおむね現地形であったと考えられるが、「大湊」の地名は見えず、「前浜」の地名もまだ使用されていない。その後、『土佐國七郡郷村名附』（寛文七年）において「下田村の内前浜」と記されている。なお、「前浜」の地名初出資料は「兵庫北関入船納帳」の（文安二年（一四四五）三月二十一日の条とされる。当地は南国市制施行前、香美郡長岡郡境にあたる地域で、郡界線は浜堤部で、旧長岡郡三和村（浜改田村）分（細工所、中ノ丁、東場）が旧香美郡前浜村分に食い込む形となっているが、地検帳時点では全て下田庄分となっている。なお、現在の伊都多神社（前浜）の氏子域には同地域が含まれている。

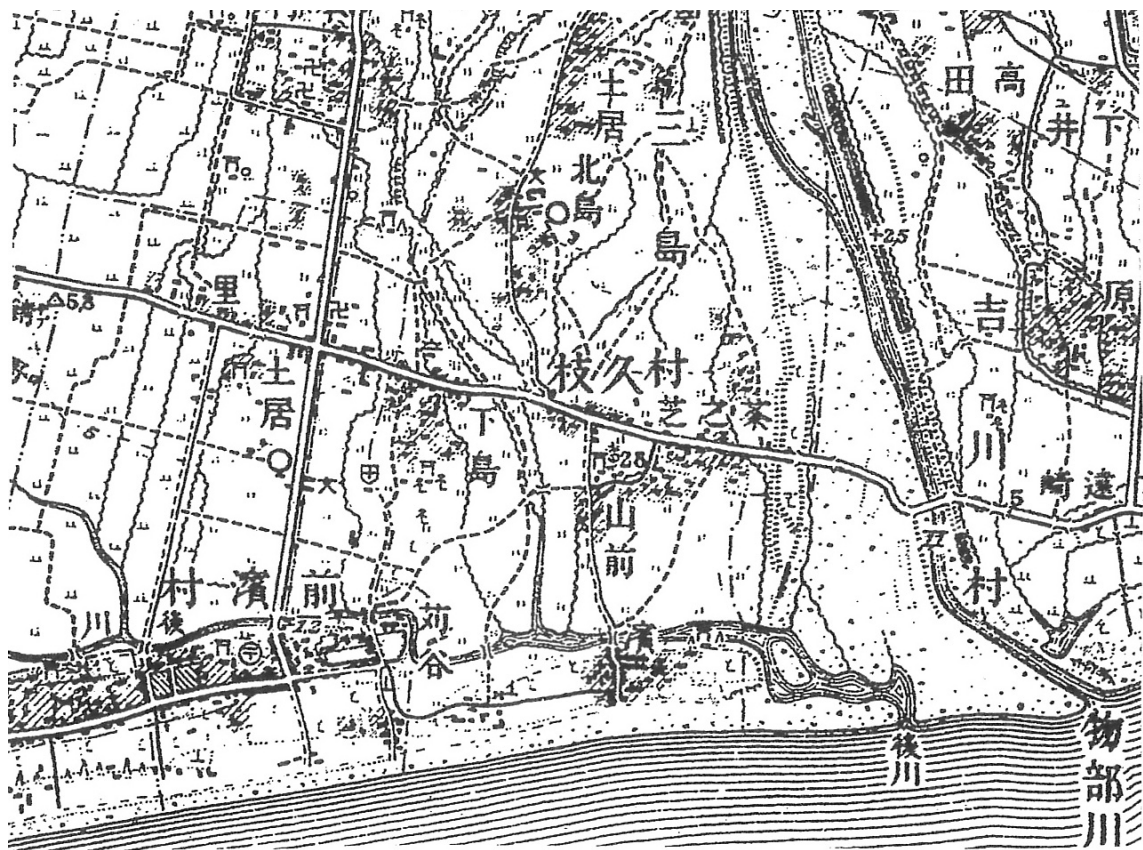
前述の旧物部川本流河口の閉塞時期は現存史資料から確定できうるものに乏しく詳らかではないが、中世以前に既に地形変化があり、香長平野の水流は浜堤に阻まれ、現在の地形が形成されたものである。

また、太平洋戦争に伴って高知海軍航空隊が編成される際、旧三島村域が造成地となり、大規模な村落移転や室岡山撤去、河川の付け替えをはじめとして、大きく地形が変貌した。明治四十年、昭和八年、昭和二十八年、昭和四十五年の各時期の地形図を別図としたので、参照されたい（『日本図誌大系四国』朝倉書店、一九七五年）。

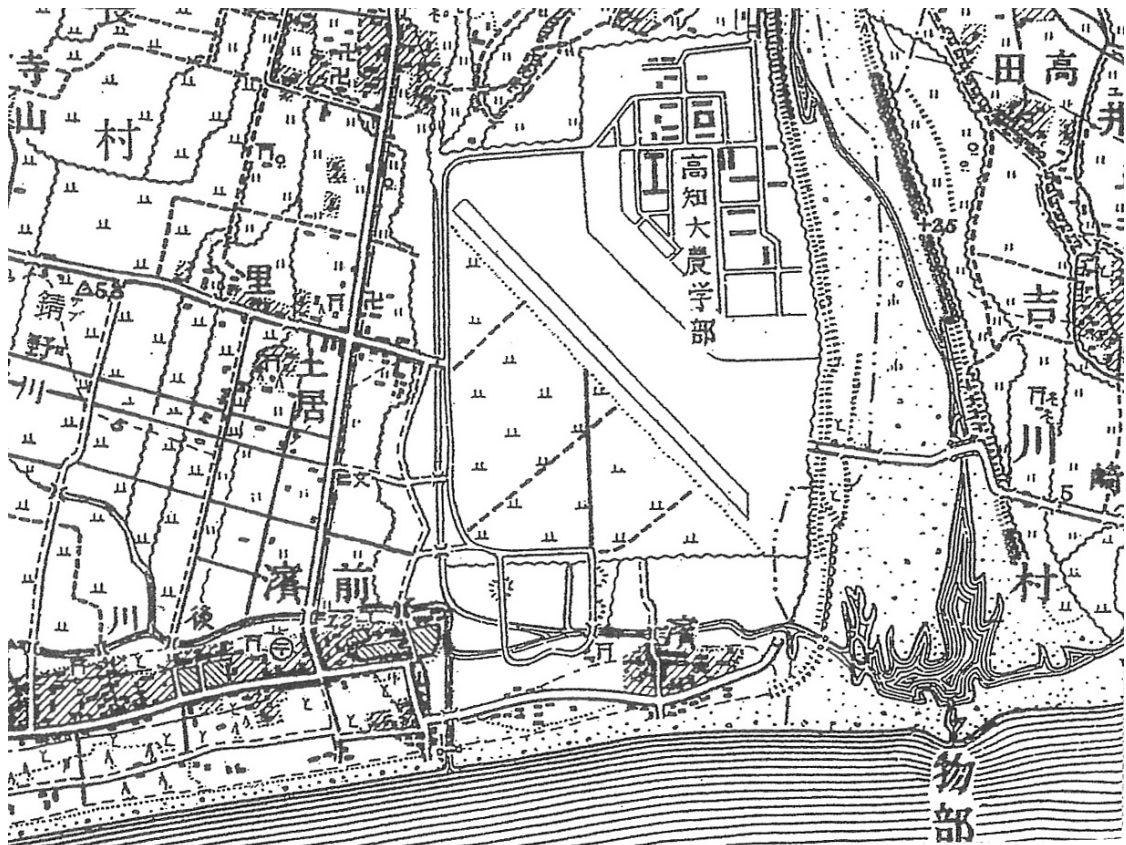
戦前期、香長平野の水流は浜堤北側に集まり、後川筋となり前浜、下島、久枝地区の北側を東流し、物部川と河口をほぼ同じくして太平洋に流れ出た。前浜地区最東端で浜堤が低地に落ち込むあた



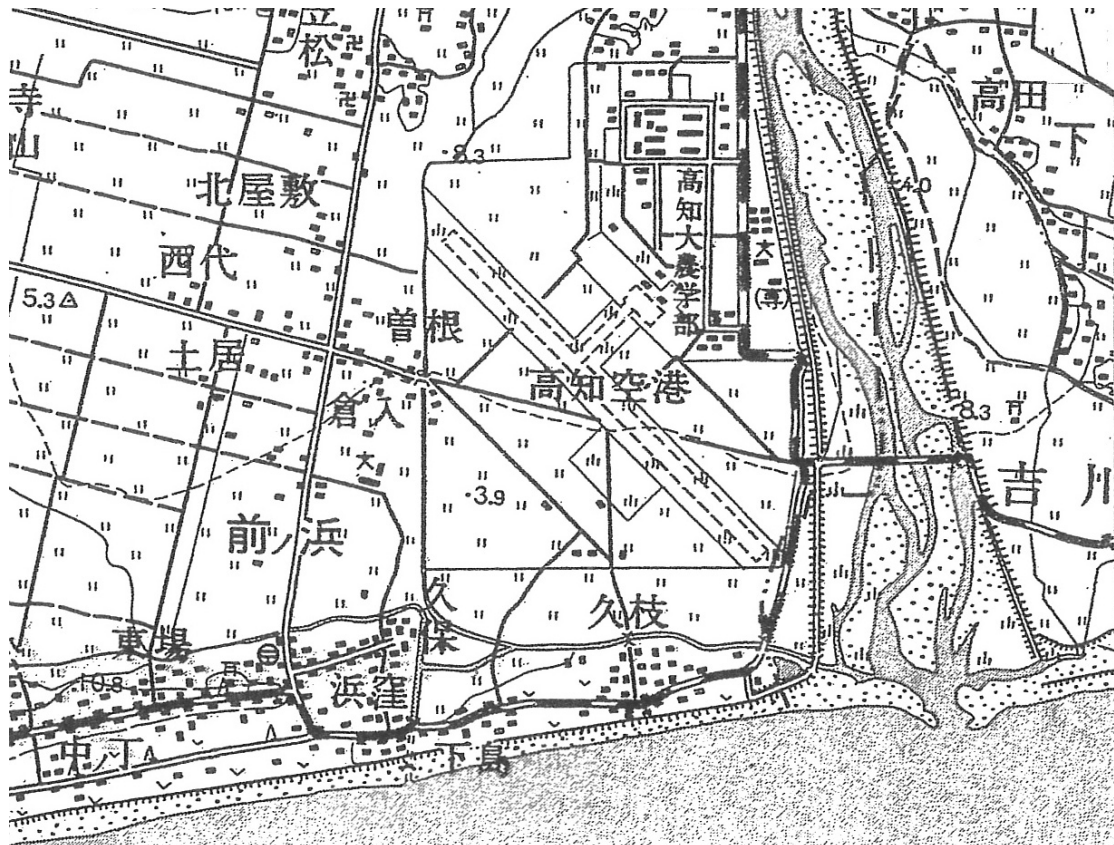
明治40年の後川周辺地図



昭和8年の後川周辺地図



昭和 28 年の後川周辺地図



昭和 45 年の後川周辺地図

りで一旦南に向きを替え蛇行していたが、再度浜堤に行き場を阻まれ下島地区へ入るあたりで、再度東流する。ここが現在の切戸放水路北方でこの地点が旧物部川本流河口に想定される場所である。昭和八年の地図では、後川は物部川河口とは合流せず単独の河口となっているが、現物部川の本流の流路の時期的变化が著しかったことがわかる。久枝地区を見ると、前述の高知海軍航空隊敷地（現高知龍馬空港）が造成され、地形の大幅な改変が如実に見て取れる。造成以前には、下島地区北方から南流していた「秋田川」が描かれているが、昭和二十八年の地図では川の付け替えが行われ、敷地西端を南流し切戸放水路北方で東に向きを変えている。また、切戸放水路が建設（昭和十二年三月竣工・後述）されている。この時点では、秋田川と後川の合流はまだなされていない。現在は前浜地区東端で二河川を合流させ、切戸放水路から太平洋に排出させている。この二つの川の流路痕跡は下島浜地区北方に現在もそのまま残っており、クリーク様を呈している。

(3) 史資料に見る地域の姿

① 『長宗我部地検帳』（天正期）

- ・ 香我美郡久枝村（天正拾六年戊子霜月十日〜廿三日）
- ・ 香我美郡上島、下島、原寺（天正十六年十月廿日頃）
- ・ 香我美郡下田庄（天正拾六年戊子八月十日〜拾月廿日）



後川 久枝西組を望む



後川 前浜寺家方面を望む

以上の三帳に分かれて資料が現存するが、久枝村分では、浜堤北側の後川北岸の最東端「タカミ」から始まり、北岸を西に進み、徐々に北方面に移る形で検地がなされている。後川南岸にあたりと想定される浜堤部の検地は行われていない。

下島分は戦時中の改変が著しいためホノギの特定が難しいが、おおね南から北へ向かつての検地順となっており、久枝村同様浜堤部の検地は行われていない。

下田庄分では、浜堤北面の後川南岸（伊都多神社の東方）から東進する形で始まり、下島境で後川北岸に渡り西進し境目あたりで旧浜改田村分の浜堤北面に移りさらに西進し、北岸に渡り返し徐々に北に移っていく。これとは別に塩浜分（浜堤南面の浜改田地区か）が記載されている。

この時期、集落は前浜、浜改田地区においては浜堤北面が中心で、下島、久枝地区においては、後川北岸北方域が中心であったことがわかる。物部川河口から下島（切戸）にかけての浜堤部の検地記載はない。

② 『土佐州郡志』（元禄期頃）

江戸時代前期〜中期に成立したもので、村ごとの地誌を中心とした記述に特徴があり、山川、寺社、古蹟、人物、土産等の記載がある。香我美郡前之瀨村久枝村、下嶋村、長岡郡瀨蚊居田村の地誌的な記述を見ると、長宗我部地検帳ではなかった村名「前之瀨村」が成立し、下田村は村内の小村として記述されており、現在の前浜地区と同様の村落範囲が出来上がっている。前之瀨村分に山川の記載はなく、「後川」の呼称も出てこない。久枝村の山川の項には、

「岡山

在村中周匝二百五十間

前川

在村南

秋田川

在村西

物部川

在村東網鮎魚

とあり、室岡山は岡山と記され、後川は前川と呼ばれていたことがわかる。また、下嶋村の山川の項で、

「秋田川

傳云古秋田源兵衛者所領故名」

とあり、河川名称の語源が記されている。さらに濱蚊居田村の山川の項には、

「川

経村東流入物部川」

と、単に「川」とある。土産の項には塩が記されている。

③ 『南路志』

江戸時代後期に成立したもので、寺社関連の記述に特徴があるが地誌的な記述は比較的少ない。その寺社の立地場所を見ると、久枝村、下嶋村分においては、浜堤部での記載は皆無に等しく、中心的記述は現高知龍馬空港敷地内における集落拠点内にあつて歴史性の高さは十分に伺える記述が見られる。これらの寺社等も海軍航空隊敷地の造成に伴い移転や合祭がなされ、浜堤部等周辺域への移動が行われた。前浜村においては、下田村（里組）分を除いて中心集落は江戸時代の様相を残していると考えられる。伊都多神社は広大な神社地を有し海岸線にまで伸びる広い参道が往事を物語り、長禄二年銘の鰐口が残存している。正興寺は香長平野南部の中心的存在で

あつた真言宗寺院で、明治初年の神仏分離令に伴い廃寺となつたが、後川に架かる「正興寺橋」（久保組の橋）にその名を留めている。この正興寺の記載中に、正平年間の地震記録を示す応永二年の古文書（内容は康安元年の大潮（正平地震）時に寄進状を紛失したというもの）が残されていたことが記されている。本県における当該地震被害を示す唯一の記録である。この時期、正興寺は下田村分（里組）にあり、そこまで津波であろうか潮が入つたというを示しており、貴重な記録である。蚊居田村分を見ると、長宗我部地検帳時に下田庄分に含まれていた、東場（今在家）の地藏堂の記述が出てくる。

④ 『高知縣香美郡町村誌三島村』『高知縣香美郡前濱村誌（仮題）』

これらの村誌は、明治八年に出された太政官布達に基づき、全国規模で編纂された「皇国地誌」の「村誌」編の写本であるとされている資料である。南国市関係では、香美郡下の前浜村、三島村、立田村、岩村分が残っており、長岡郡の各村誌は未発見である。

これらの村誌群は、記述項目が定型的に定められ編纂されており、各村誌の記述中に「川」の記載項目があり当時の呼称が明確に記されている。後川関連の記述を見ると、

・三島村誌中の久枝村

「久枝前川

本郡下島村ニテハ三島川ト称ス」

・三島村誌中の下島村

「三島川

前川トモ云ヒ本郡前濱ニテハ後川ト称ス」

「秋田川

或ハ久枝ノ西川トモ云本郡田村ニテハ下島川ト云フ」

・前濱村誌

「後川

或ハ三ノ嶋川ト称ス（中略）

源アリ一ヲ大留川ト称シ一ヲ八松川ト称ス大留川ハ長岡郡濱改田村堺本村小字吉井ヨリ東南二向ヒ八松川ハ同郡全村堺本村小字時光ヨリ東二流レ元標ノ成方小字堺目橋詰ニテ相會シ始テ後川ト称シ東流シテ小字荻谷ニ至リ南二曲リ東二折レ本郡下嶋村ニ入ル（後略）」

とある。また、前濱村誌には橋の記述があり、上流から大留橋（西組）、堺目橋（西組）、花枝橋（中組）、橋本橋（寺家組）、正興寺橋（久保組）、荻谷橋（東組）が収載され、橋本橋と堺目橋以外は耕路橋と記述されている。

これらの明治初期の村誌から、当時「後川」の呼称が使用されていた地域は前浜村のみであり、上流部は大留川と八松川（浜改田村）、下流部は三島川あるいは前川（下島村）、久枝前川（久枝村）と呼ばれていたことがわかる。

⑤濱田善一著『前濱村誌』（大正三年九月刊）

地理の項で当時の前濱村の部落名が列挙されており、浜分（浜堤上）では、刈谷、久保東、久保西、中、西組の五部落となっている。また、里分は、蔵入、北屋敷、西代の三部落となっていて、現在の部落名とは異なるものとなっている。河川橋梁部分は明治の村誌をおおむね踏襲した記述となっているが、橋の記載で「荻谷橋（山王橋トモ云フ）」とあるのと、「元橋本橋のあつたほとりに「前濱橋」が架橋されたことが記されている。

⑥濱田春水氏遺稿『前浜縦観横考』（昭和二十九年著）

郷土史家として、昭和三十六〜三十七年に「土佐日記の大湊」（土

佐史談）を発表するなど、地元前浜に関する優れた論文を残した濱田春水氏の手記的稿文である。ノートに手書きされたもので、未完成的のままとなっている。残念ながら、えんこうまつりや祭礼行事、風習等民俗学分野に関する記述はごく一部しかない。しかしながら、大湊に関する論考的記述や戦前、戦中のドキュメント的記述は出色のもので、当時の様子や考え方が生き生きと記されている。当該資料は、昭和六十一年に山中弁幸氏により、著者の遺族から提供された直筆ノートのコピーを南国市立図書館に寄贈されていたものを、筆者が再確認したものである。本資料は、近現代期の後川筋の変遷を判然とさせるものでもあり、切戸放水路の建造についても、昭和十二年の竣工に至る経過を確認することができる。かつて久保組と浜窪間にあつた窪地形成も江戸時代文化期の人為的所作による地形変化であることが判明した。

⑦田辺寿男氏資料（高知県立歴史民俗資料館蔵）

田辺寿男氏は民俗学者、民俗写真家として多大な足跡を残している。県下一円の膨大な写真資料とともに、聞き取り調査等の調査カードが高知県立歴史民俗資料館に保存されている。その中に、エンコウ祭に関する三次（昭和四十九年、昭和五十八年、平成七年のもの）にわたる聞き取り調査記録が残されている。この中で、昭和四十九年に濱田美春氏（寺家組）からの聞き取り調査結果によると、戦前期の久枝地区では宝生寺から、家の数だけの祈祷札（エンコウ除け）を各戸に配布し、門口に貼つたという。また寺家組では、宝生寺の大きな祈祷札を2箇所のみ地に立てていたというものもある。明治生まれの話者からの貴重な証言記録であろう。

⑧濱田善三郎著『土佐日記の大港に関する私考ならびにわが古里の大港と徒然の記』（昭和五十九年刊）

地元在住である著者の出版したもので、大港（湊）に関する記述の集成に重点をおいており、前浜に関する備忘録的歴史の記述（徒然の記）に特徴があり、地形変化に関する記述は在地地名や地理を理解するものにとつてはわかりやすくまとめられている一書であり、参考資料として佳書である。

(4) 地域伝承に関すること

本地域のエンコウに関する口承について、(3) ⑦ 田辺寿男氏の濱田美春氏からの聞き取りの中に、断片的ではあるが正興寺畔のえんこうの化身に関わるものが注目されると、『土佐の民話第二集』に収載された一文「逃げ出したエンコウ」（収録題、話者浜田真潮氏・久保組）があり、エンコウとの知恵比べ話が残っている。いずれも正興寺近くの渚でのシーン設定となっていることがわかる。

(5) 正興寺立地の重要性とエンコウ祭の起源

宝生寺は明治期に徳島県小松島から寺籍を移し復興された寺院名称であるが、神仏分離令に伴い廃寺となった本堂寺が前身であり、この本堂寺は正興寺の隠居寺で戦国時代天文期の創建と伝えられている。エンコウに関する地域伝承にも登場する正興寺については、『宝生寺々史』によると鎌倉時代の創建と想定され、宝生寺に伝わる旧本尊阿弥陀如来坐像は平安時代（十二世紀代）の造像にかかる古仏である。また、伊都多神社の大永八年銘棟札に十二代堯善とある。江戸期の檀家域は、香美郡下の前浜のほか立田、啞内、物部、田村、三島、郡域を超えて、長岡郡片山、里改田、浜改田地域に及び広大なものである。江戸時代初期の一時期には稲生の熊野神社棟札によると、下田村にまで及んでいた可能性が強い。その立地について、元は里分にあつたものを天正期に浜分（寺家組）に移転がなされていることが、長宗我部地検帳の記述からわかる。その移転理

由については資料がないが、これだけの大寺の移転が行われたのであるから、集落形成の変化やその地域統治の利便性などが思料されるところであろう。ここでは本題ではないので詳述は避けるが、地形変化（大湊（物部川河口）閉塞）に伴う水辺の変化や集落経済拠点域の移動（浜通りの交通便利性向上や塩浜の形成など）も考えられないだろうか。中世期すでにその水辺環境の変化が起こり、広い低湿地が耕地に生まれ変わったとも想定できるのである。えんこうを祀る習俗の起源について、前述の明治生まれで久枝出身の濱田美春氏の話から、氏の幼年期にはその習俗が存在したのは確実であり、その起こりについての言及はないことから、その起源は江戸時代以前にまで遡る可能性が高いと考えられる。この地域の地理的環境から水との縁は想像以上に深く、台風や豪雨後には香長平野最南部に集まり、甚大な浸水洪水が頻繁であつたし、日常の水難も多かつたと考えられる。その水辺に地藏尊を祀つた例が久枝地区、下島地区、浜改田東場地区に見られ、その建立年代はおおむね江戸時代後期である。東場地蔵堂には、元後川の合流地点にあつたとされる地藏石仏が移転されており、エンコウ祭はその境内で行われていた。こうした地区ごとの仏事を中心とする寺院は正興寺（明治以降は宝生寺）であり、憶測の域を出ないものの、正興寺は後川南岸にあり近在の水辺の祀りに関与していたとしても不思議はないのである。こうした寺院の関連関与性について、南国市稲生の河泊神社の例を見ると、現存棟札から円福寺（旦ノ坊）の境内地に江戸時代中期には漂須部大明神としてあり、江戸時代後期にはその池塘が設けられたと考えられる資料がある。当該地も水辺と関係の深い地勢にあり、こうした地域の寺院との関連が垣間見られるのである。



## 二. 前浜・久枝の民俗

前浜・久枝の歴史については前項で詳述しているのですが、ここでは主に暮らしや民俗について紹介しよう。一九八一年から一九八二年にかけて行なわれた高知県の「民俗文化財分布調査」の前浜地区の調査表をベースに、適宜今回の聞き取り調査の内容を加えて記述してみたい。

「民俗文化財分布調査」は、高知県教育委員会が文化庁の事業として行なったもので、調査者は棚野薫氏、話者は、西組の浜田福繁、浜田正照、松下兼重、中組の浜田善三郎、浜田久美、末政竹於の諸氏である。南国市内で3ヶ所の調査だったため、前浜以外の久枝、下島についての報告は無いが、この地域の生活文化を知るうえでは、貴重な報告であり、これまで活字化されたものは無いので、この機会に一部採録することにした。

### 1. 生業

調査表の「地域の概要」には「元来この地区は長宗我部の時代より土佐では数少ない製塩地帯で明治期には唯一の産業であったが明治四十三年塩専売制になり火の消えた如く産業が止まる。次で底曳網の出現によって村民の沖網、地曳網が大きな痛手をこうもり、農業も余り振るわず従って民俗資料に乏しい訳である。」とある。広大な香長平野の南端に位置し、太平洋に面していることから農業と漁業、製塩業などが行なわれてきたことがわかる。

#### (1) 農業

「生産(A)」の項目には農業に関する記述がある。水稻、麦、ソバ、野菜、芋が作物としてあげられ、「稲作は水稻二期作である。

麦作も多かったが順次二期作になる。畑地に於いては品種改良による唐芋の作付け多し」「当地区の畑作は野菜の外に主要作物にサツマ芋がある。改良された新品種のサツマ芋を早く取り入れ普及して当地主要の産物となり、食用に加工に販売に主要農産物となる」とある。

寛永地検帳では下田村とあわせて一、四一七石、寛保三年の郷村帳は前浜単独で五四石、天保郷帳八四石余、明治三年の郷村帳は再び下田村とあわせて一、五九四石余。明治八年には田一四三町一反余、畑一二町四反余、同一二年で粳二、八一七石余、糯九〇石、小麦二〇石、裸麦四〇〇石、大豆一七石、蕎麦一五〇石、実綿六、〇〇〇斤で圧倒的に粳米が多い。粳は高知に売られている。昭和の終わり頃は水田耕作を主としながらハウス園芸が盛んだと記されている(『角川日本地名大辞典』39 高知県、角川書店、一九八六年)。

前浜中組の高木貞夫さん(昭和二十四年生)は農業で、一町二反の水田を借りて耕作していた。加持子米を払わないといけなかったので食べていくばあだった。その他蚕を飼いよったと言う。久枝西組の下司順一さん(昭和十五年生)によると、家の近くの畑は砂地だが「稲以外はたいてい何でも作れる」とのこと。中組の西山幸雄さん(大正十三年生)は、田は無かったが畑を



前浜寺家付近の道路  
人家の中心を東西の道路  
が横断する。



前浜中組付近  
(砂丘)の上に人家が  
並ぶ。



前浜の耕作地  
後川の北側に水田地帯が  
広がる。



前浜風景  
手前が後川。向こうの段丘  
(砂丘)上に人家が密集し  
ている。

二反ほど持つており、よその畑へあたるなどしながら追々増やしていき、一時は五反くらいになっていったのではないかと言う。砂地で大根やネギなどの露地野菜を作り、モーターで高知の九反田の青果市場へ出していた。市場は後に弘化台へ移転した。大根やネギは水をたくさんかけないといけないので、仕掛けのある桶を使った。園芸もやっていたが、ビニールハウスの前は障子紙だった。砲台跡のすぐ西や大野さんく、浜にモートルがあつて水を揚げていた。園芸ではトマトなどを作っていた。

水田を耕すにあたって、牛馬の貸借があつた。「賃牛」とも言つて、山間部と平野部の耕作時期のズレを利用して、山間部から平野の水田地帯に牛を貸すことである。高知市大津では、香美市物部町や香北町などの韮生から借りることが多く、山田あたりに牛市場があつた。大津田辺島での聞き取りでは、土佐山の桑尾や高知市長浜から借りたことがあるとの情報もあつた（高知県立歴史民俗資料館『昔のくらしと道具―高知市大津民具館の資料から―』、一九九九年）。

前浜の「民俗文化財調査」にも「牛馬の貸借」の記述がある。「浦戸湾を隔てて長浜以西から耕牛を借る。春耕のみをひと鍬と云つた。米一俵。春耕、秋耕二度は二鍬と云い、米二俵位である。連絡して双方仁井田のお宮迄ツノ土産を付けた牛を追い上げ、金は高知新聞3年相場を支払した由。この場合、来年の予約もしたらしいが牛が瘦て居ると予約を渋つたとも云ふ」と記されている。「ツノ土産」とは借りた側が正式なお礼以外に鯉節など角につけて持ち主に返した慣習のことである。ちなみに寛保三年（一七四三）の郷村帳には、牛三、馬二八と記載され、「前濱村誌」には、明治九年（一八七六）には牛七、馬八八と記されている（『角川日本地名大辞典39高知県』、前掲）。江戸時代の前浜地区は、圧倒的な馬地帯であつた。

## （2）養蚕業

養蚕業については、『角川日本地名大辞典』に、明治四十三年に製塩業が全廃された後、業者が養蚕業に転向し、それも衰えると園芸に移行したと記されている。昭和七年には農産一五万円のうち繭二万六、〇六二円、工産五万五千円余のうち生糸一万五、六五一円で養蚕・製糸業が一定の位置を占めていることがわかる。

養蚕業のことは古老たちの記憶にも残っていて、前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）は、春秋二回飼っていて、最盛期は寝る所が無いくらいだったと言う。前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）は、家でカイコを飼っていたが、第二伊勢湾台風の時（昭和三十四年）、桑が無くて渡しに乗つて高知市横浜まで買いに行ったことを覚えてる。十市の札場でも買ったことがあると言う。戦後しばらく養蚕業も行なわれていたことがわかる。

## （3）漁業

海に面した立地を活かした海産物について「民俗文化財調査表」は「当地区の漁家は地曳網漁業で主として大バ鰯、シラスなどを漁獲するが、これを煮沸してダシ雑魚、チリメン雑魚に加工する業者が当時4人くらい当地区に住んでおり、水揚げした魚類はその場でこれらの者と網元の間で売買された。そしてまた加工された雑魚は高知市辺りの商人と取引されるが、一部は当地区の者が塩とともに山間部の村々に売りに行った。」と記されている。現在はテトラポットで見る影も無いが、かつては砂浜が広がり、地曳き網漁が盛んだったのだ。また、それ以外の網漁もあつたようで、同報告の「生産（B）漁労」の項には、網漁として、沖網、地曳網、大敷網、ヒョータン

網が記され、漁獲物には雑魚、ブリ、カツオ、サバ、アジ、タチウオ、青アジ、赤物などが、また釣漁の所には磯づり、沖づり、一本づりが記され、漁獲物にイカ、フグ、ボラ、アギナシ、クマビキを記す。他に貝取りとしてまいご、そして特別な漁法として物部川河口の投網漁が記され、うなぎ、ぼら、あい、ごりが並ぶ。「大正期の木船は底の長さ約二〇尺で仕上げの約四〇日を要す。今はプラスチックになって木舟は一隻もなし」と漁船についての記述もある。



前浜付近の海岸堤防の  
内側(右手)に松並木が  
え、外側に砂浜が残る。

寛保三年の郷村帳には前浜村に船四、網四とあり、網漁が行われていたことがうかがわれ、『前浜村誌』によると、明治九年(一八七六)には、五〇石未満日本型漁船四〇、同十二年に煎雑魚二五〇石、乾魚二〇〇荷で食塩四、五一四石とともに、山田野地村、葦生郷、豊永郷、本山郷などで売られているとあり、先の記述を裏付ける。明治二十四年にも船三六と漁業は継続している。大正九年(一九二〇)に香美市物部町岡ノ内西谷に生まれた宗石春子さんは、前ノ浜などからウルメやジャコをザルを担って売りに来たことを覚えている。売り屋さんのことをトイさんと言って、「ジャコ売りトイが来よる」などと言った。前ノ浜からヒロジドイというのが、カメドイというのがどこから来たか。皆年寄りだったと言う(高知県立歴史民俗資料館『おばあちゃんの見た山村の八〇年―物部村岡ノ内の民具生活誌―』、二〇〇〇年)。

浜窪の橋田正廣氏(昭和十年生)によると、地曳き網の網元は七、八軒あり(東組1、切戸1、寺家1、中組2、西組2くらい。浜窪にはなかった)、だいたい集落の人は曳き子をしていた。はつきり

したことはわからないが昭和四十年くらいまで、波の低い時は毎日やっていたのではないか。網を上げる時は曳き子が集まり、始めは男性がろくろに棒をつけて廻し、女性は巻いた網を引っ張る。網が近づいて来たら男性は口クロをやめて網を曳く。漁師は砂浜に船を上げていた。橋田さんが大人になる頃には漁師はいなくなっていたという。中組の西山幸雄さんも、この辺は漁業がだいぶで、網を曳く時は皆手伝いに行きよったと言う。

砂浜の消滅が前浜の生業だった地曳き網漁を断絶させた。前浜中組の高木貞夫さん(昭和二十四年生)は、物部川にダムが出来て石が流れて来なくなつたのがその原因だと言う。砂利や砂が海岸に来ないので、侵食されればなしになり、砂浜は無くなり今はテトラポットを入れるようになった。貞夫さんが中学生の時は浜で砂利をとって売っている人がいたが、二十才の頃にはもうテトラポットになっていた。昭和三十年代後半から四十年代前半のことだと言う。それまでは浜で地曳き網をやっていて、ちりめんじゃこを釜揚げしてムシロに干して高知の煎り場で製品にして大阪へ出しており、前浜に網元が六軒あったと言う。

#### (4) 製塩業

「民俗文化財調査」には、「当地区の海浜は古くから地曳網漁業とともに塩田による製塩が盛んで、主として香美郡赤岡町の商人と取引したが、一部は地元の方が駄馬につけて本山郷、葦生郷などの山村に売りに行き、楮、コンニャク芋、米などと物々交換が行われたが、このルートを本山塩道、葦生塩道と呼んだ。明治三十八年塩の専売制が布れ、自由な小売りは出来なくなつたが雑魚とともに密売が行われた。」塩専売在。大正期になりて折々塩の抜け荷売買があつ

たらしく税務署の収税さんに追われた話もあったと古老は云う。これにつきて塩道と云う間道があったと云う「塩と米との交換があった。塩一升に米二升位の割合と云う、しかし塩は量的に少なく、雑魚（いりこ）など売るざるの底にかくして持って行ったとも云う」などの記述がある。

寛保三年の郷村帳には塩浜も記されている。塩は前浜の産物として知られていたようで、文化四年以前の作と思われる「土佐ノ国土産名物」にも「前ノ浜ノ塩」があり、「前ノ浜ノ土俗、沖ノ潮ヲ汲テ焼之、毎日御城下市中其外近里へ荷出テ沽之、前ノ浜十市ヨリ出ル塩味、カラクシテ色白ク如雪勝レテ宜シ、依テ塩所ノ名アリ」と記されている。明治四十三年の全廃時に製塩場数九十四、製造人員一五六、従業員四一一、塩田反別三町九反余、生産高七万六、七二〇斤とあり、前浜の一大産業だったことがわかる（『角川日本地名大辞典』、前掲）。

#### （5）その他の産業

明治十二年と昭和七年頃の資料には清酒の記載もあり、明治四十二年八月刊の『土佐名鑑』には、香美郡前浜村に、濱田幾太郎（清酒 日の出鶴、曙）と西川馬次（清酒 八重櫻、太平洋）の二軒の醸造元が記されている（香崎和平『土佐名鑑』にみる明治期の酒造業界について、『土佐地域文化』10、酒特集、土佐地域文化研究会、二〇〇六年）。豊富な米を使った酒造業も見られたのである。

また「調査表」には、「他の地区から来る者」として、大正五、六年頃から、高知市から「注文取り」と称する者が村に出入りして、生活諸品の注文を聞いて廻り注文品を届けに来る行商人があったと記されている。他にランプ屋と言って大きい竹籠にランプの部品を

入れて背負って家々を廻り、これらの物を売ったり修理する商人や富山の薬売りも来た。

史料に「前浜」が登場する最も古い記述は「兵庫北関入船納帳」の文安二年（一四四五）三月二十一日の条で「前浜 材木百八十石×……木工作左衛門 二郎三郎」などと記されており、物部川河口に位置する前浜が中世には土佐の山間部で伐採された木材の積み出し地点であったことがわかる。また、元禄地払帳には「御船頭庄兵衛給田十四石、御船頭八右衛門給田八石」などと見え、江戸時代前期には有力な船頭がいるような村だったようだ。だが、野中兼山によって作られた港が残る夜須町手結や、江戸時代に栄えた名残の建物や町並みが残る田野や吉良川と異なり、前浜にそのような気配は今感じられない。おそらく港湾施設が整備されなかった前浜は、江戸時代中頃には他の商業地と肩を並べるような村ではなくなったのだろう。

以上、「民俗文化財分布調査」等によって、前浜の生業について紹介した。

後述するエンコウ祭との関連では、前浜が決して太平洋岸に孤立した集落ではなく、米、塩、魚などによって近隣や遠く四国山地の村々ともつながっており、特に江戸時代には塩を名産として高知城下町とのつながりがあったことを指摘しておきたい。前浜は城下町や山間部などさまざまな所と結ばれた文化の結節点のひとつであったのだ。

戸数や人口も、『土佐州郡志』には下田村とあわせた戸数300、寛保三年郷村帳では前ノ浜村の戸数177、人数756。明治九年

の戸数432、人口1,958。同二十四年は戸数406、人口2,072。昭和七年頃は戸数408、人口1,905。昭和六十一年刊行の『角川日本地名事典』では597世帯、人口1,789人で、令和四年三月末は前浜地区549世帯、人口1,080人となっている。

## 2. 年中行事

引き続き「民俗文化財分布調査」から「年中行事」の項を活字化しておこう。エンコウ祭が、家や地域で行なわれる前浜地区の多種多様な行事の一つに過ぎないことがよくわかる。

### 一月

正月祭 正月祭りは門松、しめかざり、歳床棚は例の通りであるが、歳床棚は中心の軸で天井からつるし、本年の明き方に向って祭る。  
鍬初め 正月二日には鍬初祭りで田の神様に餅、米、煮物、酒など供えて御詣りする。各田に行く家と苗床のみにする家があった。  
のりぞめ 漁家では正月二日に船を出し海の神様に御酒をまつり地曳など少しの漁をして酒宴を開く。  
大正期にはカイツリがまだあって其の晩は変装して餅などもらいに  
行き「オイトヲ〜」と呼んだ。

正月十日頃迄に富裕な家では餅をつく。これを若餅と云う。サギツ  
チヨを聞いてみたが明治頃にあった様だが大正期にはない。  
この地方は正月は十五日で済んだ様である。

### 二月

旧正月 節分 当地方大正期は旧正で正月は節分からであった。節  
分にはよくコンコンさまの占があった。四本足のひねりが三本足で

立ったり二本足で立ったり喜んだものです。節分の豆占はない。  
大正期には旧暮の集金がなかなか大変で旧正になって午前5時頃で  
も提灯をつけて行けば支障なかった。

旧正が過ぎると正月中に家祈禱はあった様である。

### 三月

節句祭り 三月桃の節句はなかなか盛大であった。親族など近い家  
は束帯など近隣の者は押絵を贈った。家の人を呼んで酒宴を催す他  
に儀礼なし。

彼岸祭り 彼岸には必ず墓掃除をして墓参を行う。当地方は墓が比  
較的近いのでよく墓参が行われる。彼岸の社日祭は各戸おはぎを御  
祭りする。社日様と云う祠なし。

### 四月

苗床初め 本月は農家には大切な種蒔きの時である。平穏な日を選  
んで苗床を作り、田頭にオサバイ様を祭り豊作を祈る。

漁期に入る 漁家は本月あたりから漁期に入る。特に地曳網など忙  
しくなる。此に対する儀礼はない。

早期（二期作）植付始む 二期作になると下旬頃からぼつ〜田植  
も始められる。田植にイイ、又はコヲロクの例はない。借り牛は本  
日から来て居ると云う

### 五月

節句祭 五月は男子の節句である。四月の初め頃からノボリ、フラ  
フ、鯉などにぎやかになる。大正期はノボリが主であった。五月五  
日にはその祝宴であった。此のノボリ、フラフは小学校になると立  
て止む。

五月四日女の日を祝って菖蒲、かや、よもぎ、など束ねて屋根に揚  
げる風習あり

田植 農家には田植も続く。田休み、虫送りなどには芝餅をつくる風習はどこも同じである。

#### 六月

厄入り 六月一日は厄入りであるので近親者や近所などから赤樽や鮮魚などで無事息災を祈って樽入れを行う。近い親族からは着物地などを贈る。当の家では日を定めて祝宴を張る。またこの日ニンニクの芋と小豆の粒、正月餅で作ったカキ餅を食べる。漁業も真夏に入りて忙しくなる。

梅雨 農家では田の草取り、麦の収穫など。これから七月にかけて雨乞いが行われる年もあった。

六月のエンコー祭りは当地では菖蒲で小屋を作り、胡瓜茄子を祭り、提灯をつけ花火などで遊ぶ。

#### 七月

盆祭り 七月十五日を中心として盆祭りである。普通の祭典で格別の事はない。盆踊りもない。法界様という松明は十三、十四、十五の三日間とぼしたと云う。酒宴も三日行い、新盆の家では大変である。初盆を迎える新亡のみは盆月の一月前の旧六月の十三、十四、十五日、庭に水棚を造って供養し、十六日には棚をこわすとともに仏壇の下段に据えてあつた位牌を上段にあげ、古い仏の位牌と同列に並び、七月の十三日から十六日まで古い仏とともに改めての供養を受ける。

台風 当月あたりから台風期に入るので浜辺の家では油断もなく注意せねばならない。竹竿の先に鎌をつけて台風の目を切る風習はない。

収穫 二期作の場合には下旬頃から収穫や趾作の植付けが始まる。夕方祭りは子供達のやる程度、エンコー祭りも子供達でやる。盆飯

の風習はない。伊豆田神社（イヅノタ）の夏祭が盛大に催される。

#### 八月

収穫 一期作の収穫及二期作の植付け最盛期である。中旬終了すると田休みであるが格別の祭りや行事はない。農作業が終了すると角土産を付けた賃牛を追って戻しに行く。

祭り 楽しみ 八月下旬は土佐一宮の大祭に皆んなが行く。これが農家も漁家も楽しみの一つであった。其の時買ってきた松明は雷の時や伝染病のはやる時には焚いたものだ。

#### 九月

祭り 当地方には八月一日のハツサク祭りは無いが、其の日に門側へニンニクを植えたものと云う。

旧八月十五日は名月であつてお月見をしたり又当夜は田畑にある作物は何を取っても支障なしの風習あり。

今月は秋野菜の蒔付け時である。此に対する祭祀は無い。彼岸の行事はある（墓参）。

#### 十月

神祭 伊都田神社（イヅノタ）は本村唯一の大社で祭神は伊豆那姫の尊と云い近郊に聞ゆる大社で大永、天文、永禄、天正等の棟札も現存し、氏子の尊崇を集めて居る。秋の大祭には盛大な祭典が催される。

収穫物の感謝祭と云う様な祭りや行事はない。

#### 十一月

祭り 俗に云うオトゴツイタチの風習もない。又卯の神様の祭りもないと云う。只、境荒神と云ふ祭りがあつて、収穫祭があるが祠もなく各戸毎の感謝祭の様である。

奇習にはホーソーを小児が植た場合、其の順調を念じて臨時に竹を編んで棚を作り、赤いカザリをつけた御参りもあつた。供物など判

らない。個々の飾り棚は北向の便所の前で行うと云う。

### 十二月

年中の決算 年中の決算此れを暮仕舞と云う。それと同時に来年の薪の準備する。此の場合正月用飾りの用意も出来る。正月食品 数の子、青昆布、煮物、黒豆。餅は必ずつく。

歳越し準備 暮の餅搗きは二十九日にせず（苦をつくると云う）大概二十五、二十六、二十七、二十八日頃に搗く。此の場合餅一と白はつかない。

その他毎月二十一日、お大師講と称し、主として中老年の女性が、順廻りの当屋に集まり、弘法大師の尊像を描いた掛け軸をかけ、御詠歌を合唱の後、各自持参のお弁当で会食をした。

「民俗文化財分布調査」の記述はここまでだが、漁家の行事は正月ののりぞめ程度で、鋤初祭りに始まり、3月彼岸の社日祭、4月のオサバイ様、5月の虫送りなど稲作の年中行事が基調となつていくことが読み取れる。また4月には苗床初めや植え付け、田植え、地曳き網が忙しくなる、6月、漁家も真夏に入り忙しくなる、7月から8月の収穫と二期作の植え付け、田休みなど一年の労働暦も簡単に記されている。秋祭りが若い衆や大人が主役になるのに対し、エンコウ祭や夏祭りなどで子どもが目立つのは、春から夏の頃は大人は忙しくてそれどころではない、ということかも知れない。

### 3. 信仰

「民俗文化財調査」の「住」や「信仰」の項から、家や村で祭る神々の記述を抜き書きしてみよう。

### 家の神

竈はクドと言ひ、釜屋（台所）が母屋と別の建物にある場合は、二つあるいは三つ一組で石を主とし赤土やハンダ、あるいは漆喰で造る。かまど荒神様あるいはおかま様を祀るが、特別な儀礼は無く、餅を搗いたり飯を炊いた時に盆に入れて祭る。

便所に対しては正月には輪注連と餅を供え、盆には便所の入口で小束の松明を焚く。子供がハシカにかかると、北向きの便所の入口で御飯を炊いて食べさす。子供が眼病にかかると便所の入口に赤い紙の小旗2本を立てて平癒を便所の神様に祈る。

家によつては卯の神を、茶の間か、茶の間と次の間の境の天井裏か天井に接したところに棚を吊り、旧十一月初卯の日の卯の刻に戸主か長男によつて棚に鮎二尾と柳の箸十二膳を供えて祭つた。なお卯の神への供え物は家の娘に食べさせない。もし食べると嫁入りの縁が遠くなり、あるいは嫁入りしても必ず不縁になつて離縁となると言われた。

先祖様 本家筋の家内に祀る小祠

若宮様 五十年忌を終えた仏を神として祀る

地主様 その家の家地の守護神として祀る。ともにその家の家地の一隅に小祠を設け、氏神社の祭日、正月、十月三十日に先祖様とともに本、分家が集まつて祭りを行う。

飲料水は、所々に共同使用の掘り込み井戸があり、水神様を祀ると言うが特別な儀礼は無い。川の水は飲料水に利用しない。

田の神としては、社日様即ちオサバエ様を祭る。正月二日の鋤初め様に始まり年末の荒神祭りをもちて終わる。オサバエ様は春の社日に田に御出になり作物を作りその成育を守り秋の社日に豊作を与えてお帰りになる。その日を感謝しておはぎを供えお祭りする。

漁の神としては恵比須があり、旧十一月十日に海の神様とともに祭祀を行うと言う。船には金比羅様、住吉様、伊豆田様の御守札各一枚に恵比須様とともに二つを持って舟の中央に安置してお祭りしてある。又海浜に恵比須様の小さな祠がありお祭りしていたが今は跡形も無い。

船を建造する儀礼としては、家屋建築の場合と同じく材料が集まればチヨーナ初めのお祭り酒宴をする。仕上がれば、舟下ろしを行う。

近所や舟子どもあい集まり舟を海に押し出してみんなで大いにゆさぶり海神に御神酒を供えて平穩を祈り後自宅において披露宴を行い祝盃を寿ぐ。不漁続きの場合はエンギ直しを行う。近隣舟子どもあい集い酒宴を開く。その時御かみさん連中が湯巻を少しめくって大漁になりましたら全部見せますと拝んだ事もあった。

以上は「民俗文化財調査」に記載の分だが、他に聞き取り調査の中であがってきたものを記す。

ダンゴ様 田の神、野々神社。五月十五日、九月十五日が祭日で、以前は祠の前でお客をしていた。（中組 西山幸雄）

久枝では東組の橋の道路北に実盛神社が祭られている。七月二十五日前後にオトウヤを決めて、竹に幟を付けて立てて御参りに行く。木を伐ったり蛇を殺したりすると災いが起きると言われた。

シヨウコウジの裏の川で昭和三十年頃、タヌキにバカされたという話があった。

#### 4. 伊都多神社の祭礼

##### (1) 祭事の概要

前浜の氏神である伊都多神社の祭礼は、エンコウ祭と直接関わるものではないが、前浜という地域の性格を考える上では重要なので、そのあらましを見てみよう。まず、境内に立てられた「伊都多神社略記」と題した看板が、神社の歴史や祭礼についてよくまとまっているので、その内容を紹介したい。

##### 伊都多神社略記

鎮座地 高知縣南国市前浜字境目橋詰四百壹拾四番ノイ地  
境内地面積 壹町二反壹畝八歩

東西七拾貳間 南北四拾貳間

御祭神名 伊豆那比咩命（イツナヒメミコト）他

五 由緒 勸請年月縁起論（沿） 革未詳

当社は古来より前濱村並に三和村のうち細工所中ノ丁東場地区の惣産土神なり

室町時代長祿二年（一四五八年） 戌年卯月五日土州安藝郡和食村庄大日寺常住 尼妙亭鱒口奉納の記録あり

土佐国田村下ノ庄前濱村伊都多神社二座、西殿伊都多大明神、幡多郡高知山二本社アリ、伊都坂ノ西也 何年カニ此ノ地御勸請有事未詳也

又、「旧祠宮横田家ノ舊記ニワ「尾張国熱田宮ヲ勸請齋キ奉ルトアリ」

按ずるに長祿二年以前より当社に御鎮座尊宗されてい



伊都多神社



た古社であり、往時は特に「脚氣」譜氏のお伊都多様として、土佐一円に病氣平癒の為来拝され祭典等も随分賑やかに祭行された由

昭和二十七年八月十日(第壹〇五九号) 宗教法人法により 神社規則承認され神社本庁に諸属し今日に至る

祭典日

- 一、元旦祭 一月一日 午前〇時
  - 二、春 祭 二月十七日 午前十時
  - 三、夏 祭 旧六月十五日 午後七時
  - 四、注連おろし 十月二十六日 午前十時
  - 五、御穀祭 十一月 二日 夜間  
三日 明方
  - 六、御羽毛竹立 十一月 吉日 当家にて
  - 七、例大祭 十一月 十日 午前十時
  - 八、御神幸祭 十一月 吉日
  - 九、秋祭 十一月二十三日 午前十時
  - 十、月並祭 毎月 一日 夜
- 伊都多神社 宮司 山中秀彦 敬白

看板には十の祭りや儀式が記されている

夏祭りは絵馬提灯を飾る。絵馬提灯とは、絵馬型(五角形)の立体的な枠に紙を貼り口ウソクを立てた燈籠で、紙には子供達が絵を描く。中組の西山幸雄さん(大正十三年生)、浜窪の橋田正廣さん(昭和十年生)は「エンマ」と呼んでいる。

(2) オミコク祭

注目すべきは十一月二、三日の御穀祭(おみこくさい)である。深夜に餅米一斗二升(閏年は一斗三升)を蒸し、蒸し米を作り、おむすびのような形にぎって神前に供え、氏子に配る行事である。

その一週間前の十月二十六日午前八時から行なわれる「注連おろし」はその準備の祭儀と思われる。神社の注連繩をすべておろして新しい物に張り替える。最初に三十分ほど式典があつて、その後注連繩をかけ替える。

御穀祭は、十一月二日午前八時に当屋地区の男性が集まり、境内、煙突、屋根を掃除する。糯米を洗って水に浸し、竈の回りに注連繩を張るなど準備を行なう。一旦家に帰り、午後五時半頃、供物や玉串の準備を行なう。社殿で午後七時から神職による月並祭、続いて竈の前で忌火祭(いみびさい)が行われる。その後竈に火を入れて、羽釜と蒸し器を据えて、午前〇時に神前に供える分が蒸し上がるように糯米を蒸す。本来は一斗二升だが今は半分の六升を蒸すように変更している。最初の一升が蒸し上がったたら神前に供え、三日午前〇時頃から社殿で神職が御蒸行事を行う。神事が終わると、集まっている男たちがおむすびのような形に作る。全ての糯米が蒸し上がり、おむすびができあがる二、三時頃、太鼓を叩いて、できあがり知らせる。二〇二一年一月三日は午前二時二〇分頃だった。その音を聞いて村人が神社に集まり、おむすびを頂いて帰る。最近の者はあまりもらいに行かないが、以前は「にぎりを食べたらええ」と言つて待ちかねて取りに行つていた。かつては糯米の量も倍だったので、おむすびが出来るのは夜明け近くだったと思われる。近年はもらいに来る人も少ないので、あとで各家に配ることにしている。そしてオミ

コク祭が終わると、神幸祭のために七日まで公民館で太鼓組の練習が始まる。

御穀祭は、糯米を蒸して深夜神に供えることを目的としたもので、秋の収穫祭と言つて良い。

類似した行事が香南市野市町に伝えられている。大谷の大谷神社の古式祭である。祭日は旧暦六月十四日から翌十五日と、前浜の十一月とは季節が異なるが、深夜に甕で蒸し飯を作り、神に供えるところはそっくりである。ただ、大谷の方が古風を残しており、お蒸し役が裸で務める、田芋の田粟を作る、蒸し飯を供え、祝詞奏上が終わったあと消灯し、約二時間神が御膳を頂くのを暗闇でじつと待つ、など興味深い祭儀が行なわれる。また、前浜ではできあがると太鼓を叩いて知らせるが、大谷では蒸し上がり近くなると、軽トラックに太鼓を乗せて、トーントーンと蒸し上がったことを各地区に告げて回る。これを聞くと地区の宮年番は、容器を抱えて蒸し飯を頂きに来ていたと言う（高木啓夫「古式祭」、『高知県の祭り・行事』、高知県教育委員会、平成十八年、五八、五九頁）。

オミコク祭りの名称は、有名な中土佐町久礼のおみこくさんとも共通する。久礼のおみこくは、やはりお櫃に入れた炊飯した御飯と一六〇余個の餅で、餅はガマのムシロで包まれ、御飯を入れたお櫃とともにオーク（担い棒）で担われる。深夜当屋から神社まで、大松明などの先導でオミコクを運ぶ行事が祭のハイライトである。御



オミコク祭2  
当屋が蒸し米でおむすびを作る



オミコク祭1 忌火祭

飯は神社につくと神前でイチ役の少女が麴と混ぜて一夜酒を作る。当屋の所有する土地には、オハケと同様の御幣を挿した竹であるホードーを立てるなど伊都多神社の祭礼との共通点も多い。

神社の神に御飯や一夜酒を供える同種の行事は、香長平野から中土佐町まで散在している。その主眼は米を材料にした神饌を神に供えることなので、稲作を基盤とする社会が保持してきた儀礼と考えて良いだろう。おみこくさんを伝える中土佐町久礼にしても、カツオの一本釣りで知られる漁業集落に見えるが、オミコク祭を担うのは、漁業・商業地区の浦ではなく、農業地帯の郷であり、ホードー地をもつ家々も農村地帯に散在している。

ということは、海岸沿いに立地し、地曳き網漁や製塩業がかつては盛んで、中世には木材の交易などで栄えた海村・前浜も、その集落の基盤には稲作があると考えて良いだろう。伊都多神社が古代の延喜式に記載される古社であることや、前浜のすぐ北方に高知県を代表する弥生時代の集落・水田跡が出土している田村遺跡群があることも、この地域が稲作を基盤にした古い歴史をもつことを思わせる。伊都多神社の御穀祭は、そのような地域の歴史のアイデンティティを伝える貴重な神事なのである。

### (3) 例大祭・御神幸祭

伊都多神社の祭礼で興味深いのは、同じ十一月に御穀祭の他に、例大祭、御神幸祭、さらに秋祭までもが異なる日程で行われることだろう。

御羽毛竹立は、看板には十日の例大祭の一週間前、御穀祭が終わった翌日の四日に行なわれることになっているが、平成二十八年は八日に「御羽毛竹立」を行なった。「御羽毛」は、香長平野の秋祭り



御神幸祭1 オハケ  
当屋の庭に立てられる



御神幸祭2 太鼓叩き  
要所要所で若い衆が太鼓を叩く



御神幸祭3 神輿を担ぐ  
ハクチョウ

でよく見られるオハケのことで、当屋の庭などに立てる、御幣を挿した竹のことである。前浜では、オハケ用の真竹は七日に稲生の山に取りに行き、当屋の庭に柱を埋め込み、中心の竹以外を設置する。当日午前七時半頃幣串を付け、竹を立てる。神官は九時半から十分程度、祭儀を行ない、午後四時頃から直会である。オハケは九日の御神幸祭で神輿が境内を出発するにあわせて倒すことになっている。

例大祭と御神幸祭は、御神幸祭が吉日を選んで行なわれるということで、どちらが先になるかわからないが、前後して行なわれる。平成二十八年は、御羽毛竹立は八日、例大祭は十日午前十時、忌籠祭は午後六時半、御神幸祭は十三日(日)午前十時、還幸祭は同日午後四時半であった。また、令和元年は十一月八日が御羽毛立、例大祭と御神幸祭を同じ十一月十日(日)午前十時より行なった。祭礼は氏子を七ヶ所に分けた当屋(組)が担当する。現在は、前浜の寺家、中、西、久保、浜改田の細工所、東場、中ノ丁の七つで回している。前浜東と浜窪は元は伊都多神社の氏子ではなかった。

神輿が出る御神幸祭には、白化粧して花笠をかぶった若者が十数名付き添い、大きな太鼓を運んで要所要所で激しく力任せに叩く。他の祭りでは見られない光景で、高木啓夫氏『土佐の祭り』(高知新聞社、一九九四年)でもスポットを当てて紹介されている。

一方、神輿をかつぐのはハクチョウ(白丁)と呼ばれる白い衣装に身を包んだ八人から十人ほどの役で、小学校を卒業してから二十五歳までの未婚の男性がこの役を務める。ハクチョウは、十一月九日の夜、社殿の向かって右側のお通夜堂に泊まる。

祭りの役は年令によって変わるようになっており、小学校をすんだら(法螺貝の)「貝吹き」、若い衆は先述の「太鼓叩き」、結婚して若い衆組を出たら白い着物を着て神輿をかつぐ「ハクチョウ」、洋服を着て参加し祭りの世話を焼く「世話焼き」と役回りが決まっていた。エンコウ祭は直接は伊都多神社の祭礼とは関係ないが、エンコウ祭を行なう地区とその氏子は重なっており、若い衆以上が伊都多神社の祭礼を担当するのに対し、子どもはエンコウ祭という役割分担が漠然とだが行われていた。

秋祭は別名新嘗祭と書いた資料もあり、十一月二十三日の勤労感謝の日に行われることから、全国的な新嘗祭の広がりに伴って行われるようになったものだろう。伊都多神社においては、二三日の御穀祭が実質的な新嘗祭に相当すると思われる。

## 5. 社会

「民俗文化財分布調査表」の「社会生活」の項には、年令集団として、子供組、若者組が記されている。子供組の担当は、「夏の神祭り(祇園社)、エンコー祭り」とあり、「これらの行事を行うとき子供が主体となる臨時的なもので「組」と呼ばれるものではない」

とある。これは、祭り以外に子供組の役割や勤めがあるわけではない、ということである。そこが若者組との違いだろう。加入と脱退は、「小学生で加入、卒業で止む」とある。「6月のエンコー祭りは当地では菖蒲で小屋を作り胡瓜茄子を祭り提灯をつけ花火などで遊ぶ」とも記されている。

若者組の方は、若衆組のち青年団とし、加入は十五、十六才、脱退は二十才とあり、年令・事由には「青年期又は徴兵」とあり、「氏神社伊都田神社祭礼に中心的役割を務める」とする。中組の西山幸雄さんも、「若い衆というものがあり、高等1年から若い衆に入った」と語っている。

「調査表」には出ていないが、地域の組織に「常会」があった。西山幸雄さんによると、中組の常会は7班に分かれており、常会長を選ぶ。例えば運動会を開くと常会を開いてその選手を選んだりする。1軒から1人出席、欠席したら500円を徴収することになっている。他に総決算の時も常会が開かれる。

## 6. 川と水の民俗

本節では、後川流域における水の妖怪・エンコウを考える前段階として、前浜・久枝地区の古老への聞き取りから、川の利用や川での遊び、井戸など水をどこから汲んでいたかなどの体験や記憶を列記しておく。

前浜浜窪の橋田正廣さん（昭和十年生）は、川に洗濯に行っていたと言う。昔は割と川がきれいだった。川へ降りていくと橋がかかっていた。下島浜のあたりをシンデ川と呼び、ネコヤナギが咲いてきれいだった。また、橋の周辺や河口で魚やナマズ、ウナギ、ツガニを取った。河口はユルと呼び、砂や土がたまっていて、場合によっ

て右や左に流れが変わっていた。突堤のようにメント（セメント）で囲いがあった。台風の際に、砂でユルがふさがって、ボラが上がって来て、釣りをしたら入れ食いになったことがある。水中メガネをかけて川にもぐって、石の下の魚をカナツキやテップウ（チャンとも）で取った。これらの道具は久保組にある店で買った。

前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）によると、川沿いには楊などの木が生えており、川はゴンゴン流れていた。ふかりんぼ（深い所）は部落に一つか二つはあった。下田村と川の合流点のドンドもその一つ。舟が通るような川は無かった。田舟も聞いたことがない。クミジ（汲み地）は、寺家には2ヶ所で、1ヶ所は久保と共用だった。そこでは、洗濯や、カイクを飼うエビラを洗うのに使った。エビラはモッコークかオークで担うた。何人かが一度に作業できるくらいの広さがある。クミジへは、土手からの道（階段）がついており、足場まで歩いて降りることができるようになっていた。クミジ付近の川は膝からお腹あたりまでの深さであった。その他の水は井戸を使った。つるべ井戸が以前からあり、お宮にも最近まであった。水道が来たのは昭和三十六〜四十年頃、ぼくらが中学生ぐらいの頃のこと、それまでは手押しポンプで水を汲んだ。

夏休みは、川で泳いで遊んだ。どんど（深い所、どんどん水が流れるから「どんど」と呼ぶ、川の合流点である）で遊んで上達したら、上級生が海へ連れて行ってくれた。だいたい五、六年生の頃。「川の泳ぎが一人前になったら海で泳いでかまわんぞ」と言われた。上級生はそういうことをきちんとしよった。また、学校から帰るとスズメ貝（シジミ貝）やウナギを獲った。ウナギはヒゴあるいはモジロウとかが餌だった。モジは、竹の太いのと細いのを入口にして組

み合わせて作る。先端の入口（仕掛け）の部分は竹の場合もあるが、昭和三十年頃はセルロイドを使うこともあった。切った竹は川に沈めて、水がしみて浮かないようにしてから作り、使う時は重しも使った。ウナギはふかりんぼ（深い所）は通らないので、浅瀬（ちよろちよる）流れるくらいの所、ゴンゴン流れる所にウナギはいない）に勘を頼りに十本くらい仕掛け、朝とお（早く）から取ってきてあげていく。シジミはそのような場所で採った。ウナギは専門の人が買いに来てくれていた。大人の中には仕事でやる人もいて、そういう人はモジを三十本くらい使っていた。竹の先を削ってつかめるようにした専門の道具を使っていた。また、魚を釣るには大雨のあと、クミジに釣りに行きよった。

前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）は、川の流れば二回変わったと言う。最初は南へ西へグニャグニャ曲がっていた。今の県道くらいまで曲がっていた。橋の場所も今とは異なり、今より東、東側の道との中間くらい。橋の上流にも下流にも泳ぐ所があった。普通はセがオウ所で泳ぐ稽古をするが、次は曲がった深だまりになった所（ヒノあるいはヒドーと言った）で上級生に習って泳ぐ練習をした。中組だと今の大きな道路の西に深だまりがあった。泳ぎにも得手があつて、最初は平泳ぎで達者になつたらセのアワン所で泳ぐように段階を踏んだ。海では波が打った時に中へ突っ込んで巻き込まれたら一〇〇mも沖へ行く。海は塩で浮く。オカが細う見えるばあ泳いだこともある。海は底がでこぼこしていて深い所と浅い所があつた。小さい子は裸だが、上級生は水泳パンツを使っていた。海から戻ると、畑にやるための水道で塩を流した。モートルから水がどんどん出ていてタンクに水をためていた。それ以前はタゴで畑に水をかけていた。昔は洗濯も川でしたが、西山家は養蚕をしてい

たので、エビラを洗いにいきよった。中組のクミジは、今の橋の所と東側に二ヶ所あり、洗いや洗濯をしていた。飲料水は北村に一ヶ所井戸があり、釣瓶からポンプ式に変わった。

前浜中組の高木貞夫さん（昭和二十四年生）も、川にはシジミ貝やカラス貝がいっぱいおつたと言う。貧乏やったき手でもつてつかみ取りした。シラスウナギもいっぱいおつて灯りに寄ってくるのをブツタイで取って玉子とじにして食べた。石の間にはウナギがいた。

前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）によると、昔の川は水がきれいで食器や野菜を洗っていた。家には池があつて羽釜をつけておくと鯉がきれいに食べてくれた。田村川には物部川の水が流れてくる。夏には泳いでいた。川船は入ってこない。ホタルもいっぱい飛んでいて、家に入ってくるくらいいた。秋は落ちアユが下がってくる。フナやボラ、タニシを食べた。兵隊に行く時の送別会（養成所を出て農事試験場の農業技術員になったが、徴兵で普通寺師団で訓練し、近衛騎兵になって東京で戦車に乗っていた）はタニシとナスを煮たもので、魚は出なかった。タニシは臼でついて殻を流して調理した。中組に深い淵があつた。そこにカワウソがいたのでそれがエンコウのイメージ。カワウソは秋田川にも泳いでいた。エンコウ（カワウソ）に石を投げて大熱が出た。淵のことを明治初年生まれのおんちゃん（ヒノ）と言っていた。ヒノで水遊びをした。

久枝西組の下司順一さん（昭和十五年生）は、久枝集落の北を流れる現在の後川をかつては前川と呼んでおり、前浜集落の北を流れる川が後川だったのではないかと言う。二つの川は両集落の間のキレトウで合流し海にそそいでいたが、その後の河川改修で、後川から前川につながって海にそそぐように変わり、名前が後川になったのだと言う。川は清流だったので、小学校にあがるまで泳いだりし

ていた。よく泳ぐところが普段から藻は生えないが、他の所は藻が生えるので、エンコウ祭では、鎌で藻をのけてきれいに掃除した。藻は鎌で切つて下流へ流した。エンコウを祭る菖蒲小屋を作るあたりが遊び場だった。前川橋からは飛び降りて遊んだので、そこは橋台と呼んでいた。多くの家は漁師で貧しく、川で洗濯し、風呂がわりに石鹼を持って川へ行ったりしていた（銭湯は一ヶ所あったくらい）。田んぼには後川の水を踏込水車で入れていた。川ではカラス貝（黒い二枚貝でシジミより大きい）も採った。泥にもぐっているの、泥を吐かせておいてゆでて食べる。昔はタニシも食べた。集落から川へ降りるためのなだらかな土の道があった。川岸には平らな場所があり、杭を打って船をつないだ。後川の水は農業にも使っており、水車で田に上げて耕作している所もあった。

川に流されていなくなった人を探すには、すぐ海に出るので、木を集めて夜に浜で火を焚いた。この灯りをもとに帰って来いという意味だったのかも知れない。家族や親戚はにぎりめしを作つて振る舞う。上がってくるまで二、三日は焚く。順一さんは体験していないが、長男の雅英さん（昭和三十四年生）が実際にやった時は名前を呼んで「帰つて来いよー！」と叫んだと言う。

以上六人の聞き取り調査からいくつかの共通点が浮かび上がってくる。

①護岸工事をする前の土手だった川岸の風景。楊などの樹木が生え、川に降りていく道があった。

②川に「深りんぼ」と呼ばれる深いところ、「どんど」と呼ばれる流れの速い川の合流点のようなところ、浅くて背が立つようなところなど、地形の変化があり、淵をヒノ（ヒド）と呼ぶなど独

特の方言呼称があった。

③子どもたちは、まず背の立つ浅いところで水に親しみ、次に深いヒノと呼ばれるところで上級生と一緒に練習をする。そこで大丈夫となると上級生に連れられて海へ行く。上級生が下級生を指導する文化があった。

④その川でウナギやシジミ貝、タニシなど魚介類を捕るのが子どもの楽しみになっており、ウナギにモジを使うなど伝統的な漁法もあった。

⑤「クミヂ（汲み地）」と呼ばれる洗い場があり、衣類の洗濯や養蚕用具のエビラを洗った。夏は風呂に入る代わりに川で水浴びする人もいた。

⑥後川は、運搬のための船が通る川では無かった。

などである。かつての川と人々の結びつき、特に子どもが川に親しんでいたことがわかる。エンコウ祭りも、このような川の文化の一環として行なわれていたのである。

## 第三章 南国市後川流域の エンコウ祭の記録と記憶

本章では、後川流域のエンコウおよびエンコウ祭について、文献や聞き取りによる情報を集めて、その具体的な内容を見ていこう。

### (1) 後川流域のエンコウ伝承

エンコウ祭を行なっている前浜・久枝付近の人にとってエンコウとはどのような存在なのだろう。まず、エンコウ祭の伝承地で記録された民話を探してみたところ、二つの話が目に入った。

一つは市原麟一郎編著『山田・南国伝説散歩』（土佐民話の会、一九七七年）に収録されている「逃げ出したエンコウ」である。明治の頃、前浜の久保にいた田中行馬という大男の話となっている。行馬は草相撲のしこ名を「浜千鳥」と言った。田仕事のと、正興寺橋のたもとで水浴びをしている時にエンコウが現れ、水中でどれくらい息が続くかを競う「息の長いやい」をする。浜千鳥は一瞬顔を水につけ、エンコウが顔を出す時を見計らって水中に入り、エンコウを驚かせる。次に相撲を取ろうということになるが、浜千鳥は腹ごしらえしてから、日が暮れてから浜でやるとういうことにして、飲み屋で時間をつぶす。日暮れ頃、浜で浜千鳥とエンコウは組み合うが何番か取る内にエンコウは弱ってきて、頭の皿が乾いてくる。海の水を皿につけたが、塩水の上に浜の砂が熱いため、皿にヒビが入って降参となった。浜千鳥は「ほんならおらが治しちやろう」と皿につばをこすりつけたので、エンコウは痛がって、正興寺の淵に逃げ込んだ。それからエンコウが姿を見せないのは、浜千鳥がいじ

めたため、どこかよその淵へ行ってしまったからかも知れないというところで、この民話は終わっている。筆者は濱田真潮である。

もう一つは『南国市の民話と伝説 第一集』（南国市教育委員会、一九七三年、「河童の肝抜き」に記載）に収録されたもので、前浜とも久枝とも書いていないが、物部川下流というので、ほぼその辺りの話と考えられる。こちらは力自慢の力蔵という男が物部川下流で魚を獲っている最中に河童に引きずり込まれそうになり、逆に左腕をねじ伏せると、右腕がどんどん伸びていく、ねじてもダメで、とうとう河童を許した。翌朝から庇の鉤に魚がいっぱい吊してあるようになった。ある時鉤が折れたので鹿の角に替えると、魚は吊されないようになったという内容である。

この二つの話は現在地元ではあまり知られておらず、エンコウ祭の由来譚に結びついているようなこともないようだ。

それでは、ここからは今回の聞き取り調査から、地域の人がエンコウをどのようなものとして認識していたかを、聞いてみよう。

前浜浜窪の橋田正廣さん（昭和十年生）は、エンコウについての話は聞いていないが、一人で川に行ったらお尻を抜かれるとか、四月の早い時期には川に行かれんとは聞いたことがある。お盆の時期に殺生をせられんとも聞いたが、盆にエンコウが出ると言ったかどうかはわからない。エンコウの姿は河童のイメージでマンガで見ることがあった。シバテンとエンコウは同じようなものだが、シバテンの話も聞いたことがない。

前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）も、「悪いことしとつたら、エンコウに引かれるぞ！」とはよく言われたが、エンコウというものを見たことがないし、引っ張られたという人を聞いたこと

がないと言う。こまいミズスマシみたいな虫をエンコウと言ったりする。エンコウ祭のいわれや、始まった時代も聞いたことがない。エンコウ祭は水難事故が無いようにお祭りしよったんじゃないか。シバテンのことはわからない。エンコウと同じだろうか。盆の時は田芋畑に行かれん、海でも川でも泳がれん、引つ張られるとは聞いたがエンコウのことは言わない。

前浜中組の西山幸雄さん(大正十三年生)も、エンコウとは河童みたいなものと言うが、お盆に川に行ったらエンコウに引かれるという話は聞いたことは無いそうだ。一方、昔中組の高木さんが浜でシバテンと相撲をとって血もつれになって朝帰ったという話は聞いたことがあるそうだ。

久枝の下司順一さん(昭和十五年生)は、子どもの頃はいかんことをしてしかられた時に「エンコウにもつていかれるぞ」と言われた。川は深くなったり浅くなったりする場所があまり無いので、川では言われていない。実際に海でおぼれた子がいた時にその子はエンコウにしっかりお参りしていなかったと言われていた。お盆の時は川や海に行ったらいかんとも言われたが、それはエンコウではなく、死んだ人に連れていかれるからとされた。エンコウは、小さいイメージがあるがよくわからない。あそここの淵にエンコウがおるといった具体的な話は無い。シバテンはエンコウと似たようなイメージだが、「相撲をとろう」と言っ出てくる。色もわからないが、赤ではなく、薄暗い感じ。川の中でおしっこする時、エンコウにあやまるとか、鹿の角が苦手とは聞いたことがない。エンコウ祭を行うのは、久枝は物部川に接しているので、水難事故も多かったからではないか、とのこと。

以上の聞き取りをまとめると、どうやら前浜・久枝では妖怪としてのエンコウの存在感はそれほど強いものではないようだ。子どもが水遊びに行く時に、エンコウにもつていかれると注意されたことはあるが、実際にエンコウが出たとか、エンコウが登場する民話は聞いたことがないと言う。また、県内の他の所で聞かれる、盆に川に行くときエンコウに引かれるという伝承や、エンコウは鹿の角を嫌うという伝承も無いようだ。この地区のエンコウは意外なことに伝承の中では影が薄く、エンコウ祭のみがその存在をアピールする機会のようである。

## (2) エンコウ祭の調査記録

では、後川流域のエンコウ祭の具体的な内容に入りたい。

後川流域のエンコウ祭の最も古い記録は昭和三十七年八月発行の『土佐民俗会報』第二巻第二号に掲載された中村武一氏による「前の浜のエンコウ祭り」だろう。短い文章なので、昭和中期のエンコウ祭の実態を伝える貴重な記録として以下に全文掲載しておく。

前の浜のエンコウ祭り 中村武一

高知県でエンコウ祭りといえば、南国市稲生の下田川畔のものが有名で、エンコウをまつつてある河伯神社でエンコウ祭りが行われ、参詣人がキュウリを持って行くのが、毎年旧六月十七日の夜に行われている。わたしのここで紹介するのは、おなじ南国市でも東南部の前ノ浜下田村を流れる小川のほとりで行われるものである。

祭りは中学三年生の年令のものが大将株で、下は小学生一同。祭りの日は実際は旧六月十七日であるが、現在では子供らの学校の都



合で、年々期日が変わられる。ことしは新暦五月二十六日の土曜日であった。

祭りは、各部落で中学生が大將となり、部落内の各戸へ応分の寄付にまわる。最高は百円程度、以下はさまざま。部落の一軒をお当屋に借り、寄付金で米・魚・調味料を買い、お当屋のおばさんに五目飯をつくってもらう。

また一方では、土用竹を二つ割りにしたものを骨組みとして、川端のシヨウブの葉を刈ってきて、側壁屋根を葺く。部落によってちがうが、間口奥行共に四、五十センチ、高さ一メートル程のお堂を作り、小川が合流して川幅が広く深くなった堤の上に安置して、キュウリやナスの類を祭る。

夕闇せまる頃は、シヨウブのお堂を安置した付近へ部落所有の提灯を二、三十ともす。それがすむと、お当屋で五目飯のご馳走にありつく。酒の代りにミカン水、ジュース等の飲料水を飲んで、子供らしい話に興ずる。

そうしたすきをねらって、他部落の子供がきて、シヨウブで作ったエンコウ堂をこわしたり、川へ投げこんで逃げる。堂をこわされた部落の子供は、その腹いせにこわしにきた部落や他部落へおしかけて、小ぜりあいを演ずる。時には度がすぎると、少しばかり怪我をしたり、川へつき落されたりする場面もある。こうしてその夜はお当屋でざこ寝をする。

翌朝は残りの五目飯で、ザン（あと始末のご馳走）にありつく。食後は年長組で決算支払い、年少組は提灯の始末に当たる。いっさいがすむのは午前十時頃。

日々あわただしい生活に明け暮れるわれわれに、こうした村の子供への素朴な娯楽が残されているのはうれしいことだ。

エンコウ祭の基本的な内容が簡潔に記されている文章だろう。子どもがお当屋で飲むのがミカン水というあたりが時代を感じさせ、花火や相撲にはふれていないが、おおむね平成期のエンコウ祭と変わらないようだ。エンコウを祭る小屋がエンコウ堂と呼ばれているが、今回の聞き取り調査では「お堂」という表現は聞かれず、小屋やオヤシロと呼ぶことが多い。

エンコウ祭についてのもっとも詳細な調査は、『高知の研究』第六巻 方言・民俗編に掲載された佐藤文哉氏の「土佐東部における宗教儀式と社会組織」の「三 南国市の猿猴祭り」と子供組」であろう。佐藤氏がその論文の調査を行ったのは、昭和五十三年から同五十六年までとあり、中村報告のおよそ二十年後の実態が記録されている。ここからは、佐藤氏の報告を引用しながら、今回の聞き取り調査や平成時代の実地調査の結果を対比させて、昭和く平成期のエンコウ祭りの実態を記述していきたい。なお、聞き取り調査の記録は、複数の方のお話をひとつにまとめることをせず、一人一人の話のまま収録した。エンコウ祭は組ごとの子どもによって行なわれる祭りで、組による違いと共通点を知るために、重複をいとわずそのまま掲載した。

### (3) 祭りの概要

「南国市の猿猴祭り」と子供組」の冒頭は次の文章で始まる。

猿猴祭り。これは香長平野を流れる物部川下流の南国市久枝、下島、前浜各地区（旧香美郡日章村、前ノ浜村）で六月第一土曜

日（旧六月十五日）、中学三年生以下小学一年生以上の男子（一番年長者が大将とよばれ組の中心になる）によって行われる祭りで、十ヶ所の区域別の伝統的子供組が猿猴、つまり河童を一夜、それぞれの菖蒲や桜の葉等で作った川辺の仮小屋でおまつりする行事である。

佐藤論文はさらに、各組の名称と参加人数を詳述する。

猿猴祭りの準備は約三週間ぐらい前から始まる。久枝地区では東（二十人）、中（十五人）、西（十七人）と三区に分かれて、子供組の最年長の大将の家が当家となつて、下島地区（七人）では集会所で、前浜地区は東組区域（十人）、浜窪区域（十三人）、久保区域（五人）、寺家区域（二十一人）、中組区域（十一人）、西組区域（十五人）と分かれてそれぞれの公民館を中心にして、十五歳の年長者を大将とし（中学三年生がいなければ中学二年生が二ヶ年にわたつて大将をつとめたり、中学三年生が二人いれば二人とも大将となつて）子供組を結成して役割の分担と打ち合わせを行う。

平成十二年の時点で私たちが把握していた組がだいたい列記されているが、前浜里が抜けている。

では、聞き取り調査から、エンコウ祭の主催者である子ども組の実態を見ていこう。

前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）のお話では、昭和初期には尋常小学校は六年、高等小学校は二年だったが、エンコウ祭に参加したのは小学校六年までで、高等になったら引いた。よっ

て大将は六年生だったと言う。高木さんは大将はやらなかった。前浜では、東、久保、寺家、中、西組があった。高木さんの時に高等小学校に行ったのは男子十四人、女子六人。上の学年は倍いた。小学校に行っていた子はもう少しいた。エンコウ祭に参加するのは全員ではなく、参加しない子もいた。ぼくらの時は木を打つことから全部自分でやったが、ようやらん時は大人が手伝った。

前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）は、今は中学生だが、自分たちの頃は小学六年生が総大将で、自身も昭和十年頃に総大将をつとめたと語る。中組は今六〇軒くらいの家があるが、昔は人口が少なかった。ただ子どもは今より多く、男子が十五人くらいいた。昔は橋のたもと、東手前に小屋を置いていた。昭和三十三年生まれの西山さんの子供は中学三年生の時大将をつとめた。幸雄さんの同級生は五人ぐらいいたが、家が川に近いということで西山さんが大将になった。花火の数は昔と比べ増えた。提灯も家から電気を引く張るようになった。

前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）の話では、下田村はもとひとつの組でやっていたが、近藤さんの時は道を境に二つに分かれてやっていた。場所は今の四号掩体の所の田村川のほとりでやっていたが、宿が変わればその近くの川でやったので、定位置はない。牛馬を連れて足を洗う坂を降りた所や、東の地区はヒエジリ川でやった。明治三十五年生まれの父の時代にはエンコウ祭は盛大にやっていたが、満州事変（昭和六、八年）とともに自粛して、しばらくやらない時代があったのではないかと、言う。女の子はまったく関わらず、六月の何日と日が決まっていた。エンコウ祭は小学生から中学二年生までと決まっていた、小学校に入るまでは入れてもみならず、早く入りたいと思った。自分は小学二、三年の時に宿をやっ

たが、これは今だと中学二年の男が担当する大将とは別。近藤さんの頃は小学五、六年まででは着物を着ていた。同級生は小学の時は男が三〇人いたが、今残っているのは自分だけ。中三以上は寺(宝生寺)の観音祭りに入る。これは青年団が中心になってやるもので、お坊さんに祈ってもらった後、宝生寺の境内で相撲をとった。翌日は「シデアゲ」と言つて、落語家(噺家、山田の近くに住んでいた刈谷(司亭) 升楽さんとか)を呼んで話を聞いたりした。青年団は徴兵検査のある二〇歳までで、リーダーは腕つぷしの強い人がなる傾向があり、やはり大将と呼ばれていた。他に荒神祭りがあり、これは家ごと農地反あたりいくらかで計算してお金を集めていた。戦争が始まると廢れた。エンコウ祭も戦争中数年はやっていない。

前浜濱窪の橋田正廣さん(昭和十年生)も、戦時中はエンコウ祭はやっていなかったのではないかと尋ねる。小学校一年生の時に戦争が始まり、エンコウ祭りの記憶が無い。復活したのは小学校六年生か中学一年生の頃だろうかとのこと。間があいたせいか提灯が無かったので、ロウソクといっしょに赤岡まで買いに行った記憶がある(後述)。エンコウ祭は男の子が二、三〇人集まってやった。浜窪の戸数が二〇戸ぐらいで、子どもの数は一軒に四人程度。橋田さんの同級生は男三人、女四人だった。大将は小学校六年生から中学二年生の頃、二、三年やった。

久枝西組の下司順一さん(昭和十五年生)は、生まれは三島村天皇だが、一歳の時海軍航空隊の飛行場を作るために立ち退きになって久枝へ移転した。昭和一桁生まれのツネオさんに聞いたところでは、三島村でもエンコウ祭りを行っていたと言う。下司さんの記憶では、久枝は東・中・西の三つの組で行うのは今と変わらない。菖蒲小屋を作る場所は決まっております、東組は前川橋の東一〇〇mのあ

たり。今は人家があるが、昔は湿地帯で家は無く、橋も無かった。現在橋の北側に地蔵があるが、これは下田村から物部川のつきあたりにあったもので、現在の春野赤岡線が出来るまでは前川橋の北へあつて、道路ができるまで現在地へ移転してきた。中組は前川橋が昔からあり、そこで行っていた。西組は宮前橋の90m東の人家辺りから川に向かって提灯を飾り、堤防の上に菖蒲小屋を作った。小屋を作るあたりが遊び場で、洗濯の場でもあつた。それぞれの組に橋が出来ると、各組が橋のたもとでやるようになった。下司さんの頃は、同学年の子が久枝でも十四、五人いた(男七人、女七人)。男子も西組だけで十人以上いた。戦前は高等小学校までだったが、戦後は中学生までになった。中学生はリーダーで小さい子が手伝い。昭和三十四年生まれの子は男の時は男だけで十人。昭和四十四、四十五年生まれもまだ女子を入れてやっていなかったと思う。女子が入るようになったのは二十年くらい前からはないか。二、三年前まで東組はまだ女の子を入れていなかった。

以上の話から、戦前は小学校六年生が大将で、戦後中学生が大将になるように変化したことがわかる。前浜里組では、中三以上になるとエンコウ祭を卒業して、青年団に入り宝生寺の観音祭りを担当するようになったという興味深い話があつた。

#### (4) 寄付金集めと材料購入

次にエンコウ祭の準備に進もう。まずは佐藤論文から昭和五十六年頃の様子を見てみたい。

子供たちの仕事は公民館にある道具箱から昨年つかった提灯な

ど一つ一つ取り出して張り替えたり、新しく購入したり、またそれに必要な少し長めのローソクを四十本ぐらい購入したり、提灯を吊る二〇メートルぐらいの針金と、またそれを釣橋状に高く吊すための竹竿三本、その竹竿を立てるための杭六本、その杭を打つための大槌一つ。菖蒲小屋をつくるための棒杭四本と爆竹六本、祭り当日の花火などを購入したりすることである。また子供組がその区域を一軒一軒回って各家庭より寄付を集める。この寄付金が先に記した物を購入する費用にあてられる。この頃になると子供達はそわそわして落ち着かなくなると、母親は笑いながらこぼしていた。

提灯の準備や寄付金集めも子どもの仕事だった。続いて聞き取り調査の内容を列記しよう。

前浜寺家の高木春美さん（大正十一年生）は、寄付のことをあまり覚えていない。昭和三十年代には集めていた記憶はあるので昔も集めていたのだろうが、と言う。小学六年の子供がいる家は会費のようにお金を持っていた。花火は近所の店には置いていないので高知まで買いに行った。

前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）は、寄付集めは五、六年生の担当で、中組の家を全部回ったと言う。金額に決まりは無い。一銭で御菓子が買えた時代で、五銭から十銭、十銭だと多い方だった。「金持ちでもめっそうくれん」「あこはいつも気前良うくれる」などと言いながら集めた。多く寄付をくれない家には、洗濯でもしよったら、「カミ（上流）で泳いで（水を）にごすぞ」などと話した記憶がある。もらった金額はノートに付けて、祭りが終わると翌年中心になる五年生に渡した。濱田商店で買い物をしたが、提灯は

高知で買い、ロウソクは近くの店で買った。二、三日前に、子供が鎌でヤシロを作る辺りを草刈りしていた。鎌は家の鎌を持つてくる。

前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）は、寄付金は基本五厘だが、地主の家や多いところは一銭の寄付をもらったと言う。自分たちの頃は寄付集めが一番の楽しみだった。昭和六、七年頃で一銭を全戸回って集めた。農家でお金にふれる機会が無かったので、お金を集めて経済を覚えた。家を訪ねる時は「エンコウ様やお金ちょうだい」と言う。くれない大人には「この前川に入っていたからお金ちょうだい」と言ってもらった。「川に入っていた」とは、川に入つて掃除をしたのでという意味である。寄付金集めは四、五日前からやり、提灯等も買って置く。出納帳のようなものは書いた記憶が無い。提灯とロウソクを買ったら寄付金はほとんど無くなる。少しケンピを買ったこともある。

前浜濱窪の橋田正廣さん（昭和十年生）は、上級生が連れて寄付金集めをした。いくら集めたかは覚えていない。自分の子供の頃には花火を買いに行った記憶は無い。やった記憶も無い。戦時中は記憶に無いので、祭りをやっていなかったと思う。戦後、小6の頃に提灯が無いので、ロウソクといっしょに吉川を越えて赤岡まで買いに行った記憶がある。先輩二人と同級生あわせて六人で一時間くらいかけて歩いて行った。これも戦時中に中断して提灯が無かったからではないか。

久枝の下司順一さん（昭和十五年生）は、寄付金集めはしたが、いくらかは忘れた。今が千円だから当時は百円ぐらいだろうか。一戸ずつ「エンコウ祭のお金ちょうだい」と言ってもらいに行った。中学の時に後免か田村あたりに花火を買いに行った。この辺りでは売っていなかったが高知までは行っていない。自転車で行った。種

類は少なかったが、シュービンはあったと思う。人数も多く、寄付集め、川掃除をして、花火にどれくらいお金を使うか計算した。寄付をもらった所にはお札の御菓子を配る。お返しの御菓子は前浜中組の「さかん」や、立田の野村で買った。大袋で買って来てまぜて紙袋に入れる。

上級生に連れられての寄付金集めや、祭りに使う花火やローソクの買い出しが子どもたちに鮮烈な印象だったことがわかる。買い出し先は、濱田商店、「さかん」（中組）、立田の野村、赤岡などであった。

#### (5) 菖蒲小屋

エンコウ祭りを目を引くのは、組ごとに形が異なるエンコウを祭る小屋だろう。名称は「菖蒲小屋」が多いようだが「オヤシロ」「ホコラ」「お堂」などとも呼ばれ、一定しない。

小屋ができると、組の者が思い思いに参拝に来るが、神主やお坊さんが拝むことはないようだ。浜窪の橋田正廣さんも、お坊さんや神主さんに来てもらったことはないという。

まずは佐藤氏の文章の引用から始めよう。

さて祭りの二、三日前になると大将と何人かの上級生は海岸に行って小石をバケツに四・五杯取って来て、菖蒲の仮小屋を作るあたりに敷き詰めておく。多いところでは十杯ぐらいとってくるようだ。これは簡単なようだが波の静かな日を選んで大きな堤防を越え、太平洋の荒波をやわらげるためのテトラポットの隙間を通りぬけて波打ち際の奇麗な小石を運ぶ力仕事である。それが済

めば近くの秋田川へ菖蒲の茎をとりに行く。むろん後川の菖蒲を使うこともあるが、一メートル半位の長さで根元が赤く真直ぐ伸び、しかも或る程度の太さがあり細工しやすいものは、稲の肥料が流れ出て雑草の繁茂していない小川によく生えるそうだ。中学生が腰まで水に漬かりながら刈りとったのを小学校の上級生などがリヤカーなどに乗せて菖蒲の仮小屋をつくる場所近くの後川に運び、流れたり、枯れたりしないように紐で結んで川に浸しておく。(菖蒲の仮小屋は橋の近くに作られる)

祭りの当日になると、小中学校から急いで帰りついた子供達は、米一合持ち子供組単位に各公民館前に集合し、大将と上級生の来るのを待つ。全員集合すれば前もって定められた役割分担にしたがってよいよ祭りの設営が始まる。本年の大将と中学生は後川の川辺に海岸の小石を敷いてある場所に、木の棒杭と竹と先日から用意してある菖蒲で、四角錐や三角錐や四角形(七〇センチ四方)の菖蒲小屋の制作を始める。杭を槌で打ち、杭に二本の横竹を結わえ、その間にたくみに菖蒲を挟んでゆく。小学生は夜おこなわれる御客をするため(御馳走を全員で食べる)に公民館の掃除、ゴザ敷、御膳の整理などをする。常日頃母の手伝いをしたことのない子供達も、この日ばかりは共同してこの役割を自発的に行っている。

聞き取り調査の報告を列記しよう。

前浜寺家組の高木春美さん(大正十一年生)は、エンコウを祭るものを「小屋」と呼んでいた。「お堂」とは言わない。形は四角で昭和三十年代は今のものよりもっと大きくて、子供の背丈ぐらいはあった。御札を祭ることはない。菖蒲は上級生が鎌を持っていつて

刈る。菖蒲は飛行場の西の川というこちら（南）へ流れている川や秋田川に取りに行った。取った菖蒲はリヤカーに乗せて運んだ。シヨウコウジ（天神様の北にあった寺。今も井戸がある。当時既に建物は無く、その跡があった）の竹藪で竹や木を伐ってきた。小屋は杭を打って作った。お供えはキュウリの酢の物、お酒一合瓶二本ほど。盃も置いて参拝の大人たちの中には飲む者もいた。

前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）は、カヤと菖蒲で小屋を作った。どちらも前の川で採った。一、二、三日前に、子どもがヤシ口を作る所や周囲を鎌で草刈りした。普段から通る所は草を刈ってあった。小屋は木で作った枠があり、普段は伊都多神社の御通夜堂に入れていた。菖蒲は棚に並べ、周囲はカヤを使った。まっすぐに切って形を整え、屋根の上はカヤも折りたたんで平らにしていた。角いようなヤシ口に作った。小屋にキュウリのもみゆりとお酒を供えた。キュウリを作っている者は持ってきていた。昔も橋のたもと、東手前に小屋を置いていた。

前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）は、棚の作り方は代々伝わっていたと言う。棚は青竹で菖蒲を挟んで作る。菖蒲はいたる所に生えていた。学校が終わってから昼二時か三時くらいに低学年だけで菖蒲を刈る。菖蒲は新しいほど良いので直前に刈る。刈った菖蒲は宿にまとめておく。近くの竹藪に行つて今年の新竹を鎌で刈ってくる。ここで高学年が合流して小屋作りをする。柱になる部分は古い竹で作る。針金で止めてくみ上げていく。作る場所は特に決まりは無く、坂をおりた牛馬を連れて足を洗う所に飾った。

東の地区はヒエジリ川でやっていた。提灯を灯し、小屋にキュウリやナスを供える。参拝者はキュウリを二本くらい持って来て菖蒲小屋に供えた。酢もみは作っていない。ナスもあれば供えた。だが、

男の子どもだけで、大人は小屋にお参りもしなかったと言う。お供えしたキュウリは食べないで、菖蒲小屋といっしょに川に流す。なぜ菖蒲かはわからない。小屋には提灯はつるさない。その他絵金の芝居絵のような古い幟があった。1mちよつとくらいの小さい手織りのもので、今はどこにあるかわからない。西と東でその幟の争奪戦だった。取られた幟を夜取り返したりしていた。西は穏やかな子ばかりだったので、なかなか手に入らなかった。

前浜浜窪の橋田正廣さん（昭和十年生）も、川に菖蒲を切りに行った。近くの川には藻は生えていたが菖蒲は無かったので、現在空港の公園になっている場所に三角池があり、その近くの実盛神社のあたりでとった。とった菖蒲は二、三束にくくつて藁縄でくくり筏に組んで久枝の川（ヒサエダガワ？）を曳いて持ってきた。菖蒲をとる場所には縄張りがあった。小屋は枠は無く、土台から木や竹で作った。場所は川沿いの道の北で、四角形で屋根は斜めになっていた。ナスやフロ（豆）を縄に吊つたような気がする。提灯を吊つたかどうかは分からない。名前は「シヨウブゴヤ」と呼んでいたと思う。酒は供えたが、キュウリの酢もみを供えた記憶は無い。小さい頃



菖蒲小屋を作る  
久枝東組



菖蒲を運ぶ  
久枝東組



菖蒲を  
水路で洗う



川に入って菖蒲を刈る  
前浜西組の子ども

は久枝が盛んにやっていた。キュウリやナスを吊った記憶があるというが、これは七夕の記憶が交じったものかも知れない。

久枝西組の下司順一さん（昭和十五年生）は、エンコウ祭の時は一週間くらい前から男の子が集まって川の掃除をしていたと言う。川の藻を鎌でのけてきれいに掃除をした。よく泳ぐ所は藻も生えないが、そうでない所は生える。藻は鎌で切って下流に流す。菖蒲小屋の材料になる菖蒲は目の前の川で採った。久枝では根元の赤いのを本菖蒲と言って使うが、前浜では花が咲く花菖蒲を使った。場所によってはカヤを使う所もあった。昭和四十年代は本菖蒲が少なくなっていたので、自分たちはこだわって物部川を渡って吉川までとりに行ったことがある。河川改修によって菖蒲が減ったようだ。小屋は堤防の上に作った。角い木をカケヤで四隅に打ち込んで、木を挟むように竹を結わえつけて、間に菖蒲をさす。屋根を折って作り、真ん中に竹を渡して、菖蒲を敷き並べて棚を作る。昔は棚にヒノキの葉は敷いていなかったが、中組が格好良いからと近年やり始めたのを真似した。棚に提灯をひとつぶら下げる。キュウリもみはエンコウさんの好物で、お酒も供えていた。子どもだけの祭りなので、棚に御札をはったりはしない。初盆の家では、竹を組んで、ヒノキの枝を挟んで水棚を作った。材料のヒノキは香我美町の自分の山でとってきた。

菖蒲については五月の節供でも用いた。寺家組の高木春美さんの奥さんの話では、五月節供には菖蒲をお風呂に入れていた。いわれは知らないがおじいさんがやっていたので習慣になっていた。昔は家の上に菖蒲を投げたりもしていたらしい。菖蒲は花が咲かず、葉ばっかりだ。奥さんがお嫁入りしてきたのが昭和二十四年頃なので、

その頃は菖蒲の風呂はやっていたのだろう。

エンコウを祭る所は「小屋」「菖蒲小屋」と呼ぶのが大半で「オヤシロ」と言う人もいる。菖蒲は近くにあった組もあるが、多くは離れた所にとりに行っていた。

菖蒲小屋の形は、地区によって、また同じ地区でも年によって異なる。かつては土に柱を打ち込んで、それを基に小屋を作っていたが、ここ二十年ほどは、木などで作られた枠に切ってきた菖蒲を飾る方法に変わった。久枝東では、菖蒲を枠に挟み込めるようにして、切った菖蒲を差し込めば壁ができるように工夫していた。出来上がった菖蒲小屋は、大きく二つのパターンに分かれる。菖蒲を折り曲げて屋根を平らにして全体が四角形になったものと、菖蒲を折り曲げずに、括って束ねて全体が円錐形に見えるものである。次頁に平成十四年の写真を掲げたが、後者は前浜中、東、浜窪の3ヶ所で、四角形の物が多い。供物を乗せる棚は前浜は地面に近い低い所に設けるため全体が箱形に作られるが、久枝は地面から離れた中央付近に棚を設けている。その他特徴としては、提灯あるいは電球を棚の外か内側に下げることである。提灯は一つの場合も二つのこともあるが、ほの赤い色のついたもの、紅白のもの、白いもの、盆提灯を使ったものなど、これも組や年によって異なる。特殊な形態は下島里と、前浜里で、平成十四年は、前者は三角形、後者は柱を立てた箱状の棚だった。

小屋の中に御札は祭らなかつたという声が多いが、筆者は平成初めに実際に見ている。どの地区かは忘れたが、次のような文字が記されていた。

平成十四年（二〇〇二）の地区ごとの菖蒲小屋



久枝西組



久枝中組



久枝東組



前浜里



下島里



下島浜



前浜久保組



前浜東組



前浜湾



前浜西組



前浜中組



前浜寺家



2013年



2011年



2001年



2000年

前浜中組



2001年



2000年

菖蒲小屋の変化  
前浜東組



速 崇諸障病除

奉齋伊都多大神祈白水難除守護

水 大神 悪気悪天退散

昭和六十三年の見聞と思われる岡崎花子さんのエッセーにもお社の「中には魔よけのお札が安置され、一合のお酒と、棚には胡瓜もみか供へてあった」と記されているので、この頃お札を小屋の中に入れていたのは間違いない（久武盛真編『昭和六十三年度 泉文芸作品集』、泉文芸同好会、一九八八年）

参拝は思い思いだが、親や年寄りが子どもを伴い、大きな皿などに載ったキュウリの酢もみを箸で取って、手のひらに載せて口に入れる風景が各組で見られる。

#### (6) 提灯と花火

エンコウを祭る菖蒲小屋のまわりには提灯を飾り、夕食後の花火が子供たちの楽しみである。まずは、佐藤論文から引用しよう。

菖蒲小屋の制作や公民館の掃除が終ると、今度は提灯を吊る番である。中学生は長い竹竿二本を橋の両側にたてる。小学生が提灯ちようちんを入れてある箱を何箱かもってくる。橋の上で小学生は箱の中から提灯を出しながら皺をのびし、中学生に手渡す。中学生はそれをほぼ一定間隔で長い針金に行列状に吊してゆき、全部つけ終ると二本の竹竿の先の滑車によつて橋の上に高く吊橋状に掲げておく。むろん菖蒲の仮小屋にも一個ないし二個の提灯がつけられる。場所は毎年ほぼ同じ所であり、久枝地区の東は東橋（竜宮橋）、中は久枝橋、西は宮前橋、下島地区は下島橋、前浜地区は

東組区域は新田橋、浜窪区域は切戸橋、久保区域は正興寺橋、寺家区域は前浜橋、中組区域は伊都多橋、西組区域は境目橋とそれぞれ橋の袂につくられる。ただ中学生や小学生の年長者がいなくて幼少の者が大将になっている下島地区と久保区域は、父親とか世話人さんが祭りの準備すべてを行っていた。

祭りの設営が一応終われば夕日が沈み始めるまで小休止である。周囲の光景が朱に染まりだすと、公民館前ですでに用意されている花火が大将によつてわけられる。小学生には安全な花火を、中学生には飛んでいく花火を分ける。これを「花火わけ」という。家々から浴衣に下駄ばきの老若男女が、幼児は母親に手をひかれ、三々五々橋の近くに集まってくる。猿猴祭りの実行係である子供組は人々の集まり具合を見計らって菖蒲小屋に吊してある提灯とか橋の上高く吊してある提灯を低く下して、その中のローソクに火を付け、これをまた元のように橋の上に高く掲げるのだが、これが一騒動で、ゆらゆらして掲げれば提灯が燃えてしまう。ここは大将が大声を出して子供組の連中を指導し慎重に協力させねばならない腕のみせどころである。

無事橋の上に高く明るく掲げられると提灯のローソクが消えるまでが猿猴祭りである。薄明りの初夏の夕空に花火が散る。隣組に負けじと打上げ花火が始まる。菖蒲小屋とは見れば、胡瓜モミと箸、酒が供えられており、老若男女が次々とお参りをして一口ずつ胡瓜モミをいただいている。川面に映った提灯の明かりが美しい。花火を見ながら古老達が、昔、物資のなかつた頃チョウチンは自分達で作ったとか、隣組に攻めていって竹竿をゆさぶり提灯を燃やしてしまったとか、花火はこんなに多くなかつたとか、昔の大将はもつと威張っていたとか話してくれた。

聞き取り調査の内容を列記する。

前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）によると、提灯は今では電気じゃけんど昔はロウソクで、風で揺れてよく燃えよった。燃えたら買い足したが、どこに買いに行ったらか覚えていない。提灯は汲み地までの道を照らすようにも吊した。寺家の橋には欄干のようなものは無かったので、杭を打ってそれに吊した。三十個つけて一斉に上げるのは大変だった。エンコウ祭の時間はロウソク一本燃えてすんだら終わりというくらい。一時間くらいだろうか。「提灯を取って来るぞ」とよその組に行くには行きよったというのは聞いたことがあったが、向こうも準備している。わしらの時代は取りに行ったりは無かった。石を放り投げたりというのは昭和三十年代くらいからかも知れん。花火はあまり無かった。種類はよく覚えていないが、ロケット花火とか飛ぶやつは無かった。暗くなって（七時半くらいか）から、三〇分くらいか。今のような派手な感じではないし、数が無いので長時間もたない。花火は近所の店には置いていないので高知まで買いに行った。提灯は雨に弱いし、燃えてもいかんからその日の内に片付けた。小屋の片付けは翌日で、菖蒲などは川に捨てると、東に流れていった。

前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）の話。提灯は部落の人に寄付してもらって、二十個ばあはあった。提灯は焼けたりして減ったら買う。提灯は高知で、ロウソクはこの辺の店、濱田商店などで買った。橋のたもとなどにカケヤで杭を打ち、竹の柱をくくる。真ん中は高くした。そこからヤマを引つ張って提灯を吊る。寺家は道が広いので提灯はよけいつけよった。橋のたもとに杭を打って柱を立てる。橋の部分は欄干に柱を立てた。マッチで提灯のロウソクに火をつけた。上級生は「寺家組に提灯をゆすくってくる」と言って

いたが、自分が行っていない。また争いをしたとも聞いていない。よそから来たらいかんけに番せにやいかん、とは言っていた。花火は、手持ちの花火をしたくらいで、打ち上げ花火はしていない。

前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）は、提灯を壊し合っていたと言う。菖蒲小屋は壊さない。火薬は兵隊が使うものだから、花火は戦後になってからだと言う。

久枝西組の下司順一さん（昭和十五年生）によると、昔は提灯はあまり多くなく、全部で十〜十五個くらいだった。小屋の道沿いに竹を立てて、縄を張って提灯をぶら下げるが、提灯をゆわえてから立てた。滑車を使うことは無かった。子供にとつては高い位置に下げているように感じた。他の組の提灯を石を放ったり消しに行った。對抗意識もあったように思う。昭和三十四年生まれの長男の頃も、前の晩に中組に攻めに行ったり、花火を打ちに行ったりした。中組はどちらからも攻められていた。小さい頃はドンドン打つような花火は記憶に無い。中学の時に花火を買いに行った。此の辺には店が無かったので車に積んでもらって後免か田村のイノという店まで買いに行った。高知市までは行っていない。長男は自転車で買いに行っていた。派手な花火をし始めたのは昭和三十年代頃だろうか。長男の頃は最後は大筒の花火を打って終わりだった。

#### (7) 相撲

浜窪では最近まで子供による相撲が行われていた。浜窪の橋田正廣さん（昭和十年生）は、相撲は浜窪だけで他ではやっていなかったようだという。浜窪の子がやったが、東組から来ていたかも知れない。普段の格好でとつたが、同じ年齢や力が同じような子と組んだ。行司は大人で、親が必死になってわいわいやっていた記憶があ

る。橋田さんの弟は強かった。鉛筆やノートなどの景品があったよ  
うだが、子どもで買いに行った覚えはない。相撲の時は提灯に火を  
ともしていたが、真っ暗ではなかったので日が暮れるまでの薄暗い  
時間帯にやったのではないか。伊都多神社でも（祭りの時？）相撲  
をしていた。

一方、前浜里組の近藤貢さんによると、エンコウ祭では相撲はし  
ない。小学生は観音祭りで相撲をとった。また、十七、八歳の時、  
稲生に相撲をとりに行った。県内各地から力自慢が集まった。他に  
は船岡山の相撲も有名だった。強い人が来る前に仲間と示して五人  
抜きし、五円もらって後免で飲んだ。寺家組の高木春美さんや中組  
の西山幸雄さんもエンコウ祭で相撲はやっていない。

久枝の下司さんもエンコウ祭では相撲をとらなかつたと言う。七  
月十九日の三島神社の夏祭りでは最近まで小中学生が相撲をとり、  
文房具などの景品を渡していた。

相撲はエンコウ祭には必須ではなかつたが、前浜里組では観音祭  
り、久枝では三島神社の夏祭りなど別の機会には行われていたこと  
がわかる。

### (8) 食事

エンコウ祭の楽しみのひとつが子ども達が集まって行う食事会で  
ある。最初に佐藤論文を引用しておこう。

ローソクが消えると、菖蒲小屋だけを残して提燈や竹竿などま  
たたく間に子供組が片付けて公民館に向かう。そこには胡瓜モミ  
をはじめ御馳走が母親の手によって用意されている。大将は上座  
に坐り、年下の者の面倒を見たり、あれこれと指示をするが、こ

れもまた楽しみである。（猿猴祭りの翌日より川で水遊びをして  
もよいことになっていた）

現在では、夕食後にもエンコウ祭が続き、花火を延々と楽しむ傾  
向にあるが、どうやらかつての食事は片付けが終わった後、一番最  
後に行っていたらしい。聞き取り調査を見てみよう。

前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）は、食事は祭りがす  
んだら各自でとり、共同では食べていなかったと言いながら、後で  
は各自が持つて行ったお米一合でおぼさんが五目寿司を作ってくれ  
ていて、公民館でお客をするのが楽しみだったとも言われた。記憶  
違いか、時代による変化だろうか。

前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）は、六年の総大将の家  
を宿にして提灯をつけてから宿で「おきやく」をしたと言う。寄付  
は「おきやく」の料理に使う。キュウリのみみゆり、ゴモク（五目  
寿司）、みかん水など。ミカン水屋が下田村にあった。

前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）によると、宿は日程が近  
くなつてくると子どもたちで決める。宿と大将は別で、大将の家が  
宿になるというわけでもない。宿の家がそうめんを作ってくれるこ  
ともあった。そうめんにみそだれをかけたものが出てきたらごちそ  
うだった。だが大人はそうめんを作るくらいで、一切口出しはしな  
かった。子どもたちは宿に泊まるわけではない。

久枝西組の下司順一さん（昭和十五年生）によると、公民館は無  
いので、大将の家に集まってキュウリのみみや五目寿司などの料理を  
食べた。漁師の家は狭いが、西の島村家、中の西村家、東は山本家  
など網元の家は広がった。大将の家が広くない場合は網小屋を使い、  
農家は納屋を使った。

## (9) エンコウの川流れ

久枝地区では、行事の終わりに「エンコウの川流れ」をおこなう。久枝西組の下司順一さんによると、大将が大筒の花火を打ち上げたら花火終了。それから提灯の蓋でエンコウの川流れをする。蓋にロウソクを立てて火を灯し川に流し「エンコウの川流れ」と皆で歌う。ロウソクが見えなくなるまで歌う。ロウソクが引つかかると良くないので、掃除の時川の草を刈っておく。自分たちの時は、木の橋に金魚藻がたくさん付いていたので流したが、下流の中組の橋に引つかかろうが関係ないと思っていた。災い無いようにという意味だろうか。水難防止の意味だろうか。橋の近くに地蔵を祭っているのもそういう事故があったからかも知れない。

前浜寺家組の高木春美さんや中組の西山幸雄さん、浜窪の橋田正廣さん、里組の近藤貢さんは、やっていかなかったと言う。

## (10) 後片付け

祭りが終わると、供物を下げて小屋を片付けるが、小屋は当日片付ける所と翌日にする所がある。

寺家組の高木春美さんは、提灯は雨が降ったらいかんで、その日の内に片付けたが、小屋は翌日になってやっていたのではないかという。

中組の西山幸雄さんは、菖蒲やカヤをどうしたかは覚えていないが、キウウリは川へあました。小屋の枠や提灯は当日の内に片付ける。宿へ持ち帰ってから来年の宿をやる家を持って行く。夜の内にはほとんど片付けて翌朝は少し掃除をするくらいだったと言う。昔は花火が今のようになかったので掃除も簡単だったと言う。

佐藤氏の論文を引用しておこう。

一夜明けこの前浜地区に行ってみると菖蒲の仮小屋はもう壊され後川に流されていた。通りがかりの六十五歳ぐらいの男性浜田さんに聞けば、昔から早朝大将が流しにくるとのこと。朝遅くれば隣組の大将や子供に菖蒲小屋をもっていかれてしまい、恥をかいたそうだ。

## (11) 浜改田東場

以上で、久枝・前浜地区のエンコウ祭についての記述を終わるが、実は前浜の西に隣接する浜改田東場でもエンコウ祭が見られた。現在には行われていないが、小屋を作らず、地藏堂境内の川仏と称する石仏を対象とし、やはり子供達が祭りを行っていた。佐藤氏の詳しい報告を引用しておこう。

東場地区の猿猴祭りは六月十五日に一番近い土曜日（元旧暦六月十五日）、東場地区（旧三和地域浜改田東場）の中学生と小学生の男子（中学三年生が大将となる）の子供組が、東場地区より北の後川寄りに下った所にある。浜口一族の氏神社とチンチロ様（女の神様）の祠の間にある広さ十畳位の地藏堂を中心に行うものであり、一週間前より寄付集めや地藏堂の掃除、道掃除、相撲場の整地などを行う。祭りの当日になれば、中学生が後川と川幅三メートル位の鏑野川が合流したフタマタという渚の近くの川辺に榎と一石五輪塔がある所（地藏堂より七〇メートル下ったあたり）に竹で供養棚を設け、供物（胡瓜と茄子を賽の目に切ったものと、洗い米を混ぜたもの）を祀り、提燈をつけてくる。水死者

の供養だという。

夕方になれば人家から地藏堂までの提燈の電球が点され、供養棚の提燈のローソクに大将等によって点火される。供養の提燈は薄明かりに美しい。早めの夕食を終えた老若男女が集まってくる。水銀灯に照らされた相撲場では男子女子混合の勝ち抜き戦が行われ、それがすめば花火大会で、花火大会が終わりそうになれば、母親から幼少児に御菓子配られる。そのころには供養棚の明かりが消える。人々は名残惜しそうに家路につくが、風呂に入り終えた小学校四年生以上の七人の男子は、父母によって布団が運びこまれた地藏堂の中で一夜すごす。早朝大将等が供養棚を川に流し、他の子供達は布団を抱え持って各家に帰り祭りは終る。

筆者は平成十二年（二〇〇〇）と十三年（二〇〇一）に東場地区のエンコウ祭を実現することができた。地藏堂の境内にある首の無い仏像がエンコウ様であるとされ（台座に「文化七年／當村氏子／安全□□／六月廿四日」などの銘あり）、七人ほどの子供が集まって相撲をとったが、佐藤氏の調査した供養棚は確認できなかった。



浜改田東場  
僧侶が地藏堂で祈った後、夕暮れに地藏堂前で相撲



浜改田東場  
夜が更けると花火を行った



浜改田東場  
エンコウ様（首の無い仏像）

## 第四章 平成二十六年のエンコウ祭

平成二十六年の第一土曜日である六月七日にエンコウ祭が実施され、高知県立大学学生および調査委員会委員等で手分けして調査を行った。前浜地区は里組、西組、中組、寺家、浜窪、久枝地区は西組、中組、東組の八カ所に分かれて準備から片付けについて各地区ごとの調査を行った。この章では、この調査によって得られた情報をもとに調査した学生がまとめた成果を地区ごとに紹介する。

### 前浜里組（前浜里組の水路の上）

#### エンコウ祭準備

五月十二日

「えんこう祭りのご案内」のプリントを配布。プリントは大湊小学校で里組に住む子どもにも配布してもらった。寄付金とは別に参加費もある。参加申込書も一緒になっている。

五月十七日

大将2人（竹村翼・上月颯太郎）と父親（竹村守・上月英真）の4人で寄付を集めにまわる。60軒ほどから寄付を貰い、六万円ほど集まった。（昨年の二万円に比べるとかなり多



オヤシロを作る様子

い。）

五月二十六日

「えんこう祭りのお知らせ」のプリントを参加者に配布。プリントには日程の他、注意事項が記載。

五月三十一日

花火、お菓子、ビンゴゲームの景品の買い出し。上月さんの母親と大将と一緒に買い出しに行き、花火は大将が好きなものを選んだ。（矢野玩具卸販売で購入。）

六月五日〜六日

上月さんの母親がキュウリの酢もみ・カレーの材料、お供え用のお酒と鯛、飲み物、アイス、スイカ、着火マンの買い出し。

六月七日（エンコウ祭当日）

九時頃

竹村守さんと上月英真さんが池さんのお宅にショウブを刈りに行く。ショウブを2本の本で挟み、底面と側面2つを組み合わせて上を針金で縛ったのちショウブを巻きつける。

十時頃

ショウブ小屋を水路に架かる橋に設置。小屋のことはオヤシロと呼んでいる。小屋の



祭りに使う花火



オヤシロ



オヤシロを作る様子



子ども達が花火とお菓子を分ける様子

大きさは幅47センチ、奥行42.5センチ、高さ115センチである。

十三時

公民館に子ども達と母親達が集まる。子どもたちは花火とお菓子の配分をする。用意された袋に名前を記入し、花火とお菓子をに入れていく。花火の種類は学年によって異なり、大将には大きめの花火、保育園の子の分は小さくて数も少ない。

母親達はカレーとキュウリの酢もみ作り。竹村さん、上月さんの他に2名おり、竹村さんがキュウリの酢もみを作る。



提灯



カレー・酢もみの調理風景

十四時頃

母親達が公民館の倉庫から提灯を出す。里組の提灯はろうそくで灯すものだが、古くなってきており、また危ないことから来年は電気のものにしたいと言っていた。

十五時頃

父親達（3名）が集まり、提灯を外に運び出す。中心は大将の父親の竹村守さん。津波避難タワーの前にて提灯の準備。ツルハシで地面に穴を掘り、竹棒を立てて固定。針金を巻いて竹棒の間に垂らすように伸ばす。雨の恐れがあったため、この時点では提灯はかけていない。

竹村さん・上月さんの母親の2人が午前中にオヤシロを置いていた所から別の場所に移動させる。一旦解散する。

十八時

公民館に子ども達と母親達が集合し、カレーを食べる。夕食から中学2年生の竹村大輔くんが参加。（本当は大輔くんが大将であるが、部活動により夜からの参加のため小学6年生の竹村翼くんと上月颯太郎くんが大将代理のような形をとっていた。）



夕食



オヤシロの設置場所



提灯の支柱設置作業



提灯を設置した様子

二十時  
 花火が終了。大将（竹村大輔くん）と父親達はそのまま残ってオヤシロと提灯を片付ける。他の子ども達と母親達は公民館に戻る。母親達がスイカを切り分け、子ども達が食べる。  
 母親達は提灯についての口ウを取り、倉庫に片付ける。



提灯の設置作業

お参りの後、花火が開始。花火は2か所に分かれて行われ、津波避難タワーの前では手持ち花火、道路をはさんだ畑ではロケット花火や打ち上げ花火が行われる。



ビンゴゲーム

十八時二十分  
 子ども達がビンゴゲームを始める。  
 十九時頃  
 父親達が提灯をかけ、灯りを灯す。



花火をする様子

【その他】  
 ・大将を決める時期は特に決まっておらず、自然に年長の男の子が大将に決



オヤシロにお参り

二十時三十五分  
 大将の竹村大輔くんが取り仕切り、エンコウ祭が終了。  
 解散。母親達がゴミの回収や掃除などの後片付けをする。



お供え



花火をする様子

六月八日（翌日の片付け）  
 六時

大将と大将代理2人、大将の父親2人、竹村さんの母親、他2人の計8人でごみ拾いなどの清掃。





終了式

- ・昔は女の子は祭りに参加すらしなかった。
- ・大将の父親、竹村守さんが子ども頃には他の地区と戦争ごっこをして、シヨウブ

- ・エンコウ祭は学校の行事のようなものとしてあり、保険もかけてくれている。
- ・花火の際は危ないので低学年は基本的に保護者が同伴する。

- ・里組は、草刈り等を行わない。空港の近くのため、昔は空港の人が草刈りをしてくれていた。



提灯を片付ける様子

- ・シヨウブは毎年池さんのお宅で刈らせてもらっている。

- ・去年は無かった津波避難タワーができたため、今年からはシヨウブ小屋の設置場所と花火をする場所が変わった。



花火後にスイカを食べる

- ・お金の管理は今年の大將（代理）の母親の上月さんが行っていた。エンコウ祭用の台帳があり、毎年の領収書やお知らせのプリントが貼り付けられている。

- ・昨年までは四角い形だったが、刃物を使わない方が良いというアドバイスがあり変更した。

まる。



翌日の清掃の様子

- ・小屋を壊したり、花火等で襲撃をしたりしていた。
- ・里組は、寄付を貰った家にお礼の品を配ることは特にしない。寄付を貰いに行った際にお礼を言うほか、道で会ったらお礼を言うくらい。

（調査者：吉廣真紀）

前浜西組（境目橋のもと）

当日までの準備

◎集金について（五月）

- ・集金は子どもが回る。
- ・ノートに名前と金額をつける。そのノートは古いものも含めて大將の家で保管する。

- ・エンコウ祭の参加費として、女の子千円、小学男子二千円、中学男子三千円を集めている。この参加費から花火代や食事代を出す。
- ・佐藤さんは3年間大將をしているが、寄付金は3年前は五万と少し、去年は五万六、七千円、今年は六万五千円ほど集まった。

◎花火（シュービンなど）買い出し

- ・花火を買いに行ったのは五月二十八日か五月二十九日。
- ・行き先は菜園場の矢野玩具店。
- ・買いに行ったのは、大將の両親（佐藤武士さんと浩美さん）

六月七日

九時

- ・境目橋にて、3人で提灯の準備は始まっていた。後に6人に増える。

- ・橋の上でコードの配置。
- ・ソケットに電球を付ける。提灯をその外側に付ける。



エンコウ祭の寄付金ノート



提灯立ち上げ



花火用竹筒の取り付け。



提灯支柱を紐で固定

- ・提灯を付ける頃には子どもは3人集まっていた。
- 九時二十分

- ・橋西側の竹の柱に提灯の紐を取り付け、立ち上げる。提灯は25個。
- ・ガムテープで竹の柱を固定。その上を紐で縛る。
- ・花火の発射台（竹筒）を橋の東側に7本、ガムテープでくくりつけ、取り付ける。
- ・提灯の電源は、橋のすぐ近くの松下のぶゆきさん宅の納屋から延長コードで取らせてもらっていた。
- 十時

- ・ショウブが近くで取れないので、十市の方面に軽トラックに乗って取りに行く。
- 十時十五分
- ・安原さん宅の倉庫でショウブ小屋作り。



シヨウブの水洗い



シヨウブを刈り取る

・ 十七時  
・ 西組公民館に行くと、花火・お

・ 完成したら、子ども達がシヨウブ小屋を運ぶ。シヨウブの先までの高さは115センチである。  
・ お供え物(なす1本、トマト1個、キュウリ1本、土佐鶴小瓶)を供える。  
・ 以上が終わったら大人達はビールとお弁当で一休み、子ども達は水遊び。

・ 上の方をビニール紐で縛ってその上をシヨウブで巻く。  
・ シヨウブ小屋の台になる部分にシヨウブを乗せ、適度な長さに切る。

・ シヨウブの根元をはさみで切つて、水洗いをして、葉を分ける。  
・ 鉄工所に勤めている浜田みつきさん(かつての父兄)が作った鉄の枠に切ったシヨウブをはめ込む。枠の大きさは幅42.5センチ、奥行32センチ、高さ55.5センチの円筒形を半分に割った形である。



台の部分にシヨウブを乗せる



シヨウブの上を紐で縛る



鉄枠にシヨウブをはめる



公民館に用意した花火等



お供え物



シュービン



ショウブ小屋にお参り



キュウリモみ

菓子・飲み物等が用意されていた。  
食事の準備

・子ども達の食事は、大将の家が中心になつてする。

・今まではちらし寿司やカレーだったが、子ども達があまり食べないので、サニークラスのマクドナルドで18人分(調査員含む)を買った。

●キュウリの酢もみ(お供え物)

・キュウリを切つて塩を混ぜてもむ。

・タコを切つて塩を混ぜて砂糖と酢で味を付ける。

・今年は大將の祖母(昭和十年生)がつかつた。

エピソード

・タコは贅沢なので、昔は魚やカツオを湯がいたものを使つたりもした。

・キュウリはエンコウの好物。

十七時四十八分

・大將(佐藤涼太・中3)が「西組でエンコウ祭をする人は、西組公民館に集まってください」と放送する。

十八時二分

・2回目の放送。

十八時五分

・夕食開始。今年はマクドナルド。(女

子はバスケットの試合でまだ来ていない)

十八時三十分頃

・エンコウ祭開始。

①ショウブ小屋へのお参り

・ショウブ小屋に向かつてまず手を合わせる。

・キュウリの酢もみをお箸で一口分取り、手のひらに乗せて食べる。

②花火

・花火の発射台にシュービン(ロケット花火)を数十本設置する。

・ドラゴンと呼ばれる花火に火をつけ、それでシュービンに火をつける。

・女子や小さい男の子は橋より少し離れた場所で手持ち花火をする。

二十時二十八分

・提灯消灯。

・子ども達は神社で肝試し。お墓の辺りで子ども達がお宮を1周する。

・大人たちは公民館でご飯。

六月八日

五時三十分頃

・片づけ開始。子どもも大人も一緒に片づけをする。

・ショウブ小屋のショウブを鉄の枠からはずし、川に流す。

・花火の発射台に使つた竹筒は橋の下に置く。

・竹の柱を降ろして提灯を取り外す。

・ごみを1箇所を集めて燃やす。



提灯を取り外す



ショウブを川に流す



手持ち花火

地元の方のお話

①昔のエンコウ祭の準備について

- ・最低1ヶ月前からは学校終わりにみんなが集まって草刈り等をしていた。草刈りはその地区一帯分。
- ・寄付してくれた家には便所の消毒（液を入れる）をしていた。

- ・提灯は高知市内の矢野玩具に子どもだけで自転車に乗って買いに行っていた。高知に行けるといっただけで苦にならなかった。

- ・提灯等の準備は子どもだけでしていた。
- ・シュービンは二、三十箱買っていた。

②昔のエンコウ祭

- ・中組対西組で陣地争いをしていた。
- ・隣に攻めていって、かんしゃく玉をぶつけて提灯を落としたり、シュービンのくらしあいをしたりした。

- ・どこが一番きれいなショウブ小屋を作れるか競い合っていた。

③昔の言い伝え

- ・後川はフタマタから流れが早い。そのカミに丸太の一本橋があつて地蔵も祭っていた（今は無い）。そのあたりで、火



ごみを燃やす



橋の下に竹筒を置く

の玉が飛んだり、タヌキに化かされたりした。

④エンコウ祭に対するイメージ

- ・川が増水する前に、事故が無いようにエンコウ祭をした。

- ・今も昔もエンコウに対するイメージは特になく、一大イベントの花火が楽しみであった。

- ・大将は花火も自分が好きだけ取る。皆を仕切って文句は言わさん。社長と社員みたいなもんで、早う大将をやりたいとあこがれた。

〔安原弘倫さん（昭和47年生）、松下タケシさん、佐藤武士さん（昭和40年生）、浜田清仁さん（昭和44年生）〕

（調査者…吉本晴香・梅野光興）

前浜中組（伊都多橋のたもと）

六月七日

十二時

まず常会のメンバーの人達が伊都多橋に提灯をかける作業を開始した。子どもがお祭りに関係しているかどうかは関係なく集まっている人達で、普段は自主防災会として活動をしているそうだ。まず柱をガードレールに括り付ける。そしてコードと紐をつなげて、その柱につなげる。ちよつとだけ上にあげ、提灯をつけてからコードを完全に上にあげる。最後に近くの家から電気を引っ張り、明かりがつくかを確認した。

十二時三十分提灯をかける作業終了。次にテントを組み立て始めた。そして十二時四十四分頃に出来上がると、休憩をする。この段階ですでに橋のたもとにはショウブ小屋の骨組が用意されていた。

同じ時間帯に公民館では放送で子ども達を集めて、花火の分配作業を行っていた。子どもは、小学1年生が1人、3年生、5年生、6年生が2人ずつ、そして中学3年生の大将。男子2人、女子6人の合計8人。段ボールを8箱用意してそれぞれに分ける。危険な花火は上級生が持つ。大将は末政高志さん（中3）。大将の段ボールが一番大きい。

大将の母親によるとこれらの花火は1〜2週間前に大将と大将の母親が買い出しに行つて買ったもの。寄付と会費（大将のときは二千元）で集めた予算は五万円程度。この予算で花火を買った。高



提灯準備



提灯準備



提灯支柱の固定

木さん（65歳男性）によると、昔は川をきれいにしないと寄付金がもらえないこともあったらしい。また10年くらい前から女子もお祭りに参加するようになったそうだ。花火については、昔はシュービンと呼ばれるロケット花火もあったそうだが、問題が起つたので、危ないということで今は使っていない。このシュービンをビンの中に入れて火をつけて飛ばしていたとのことだ。

十三時十分

次に予定より遅れて常会の方たちがショウブを刈りに行く。そして前川橋の少し西側のところでショウブを刈り取る。

車に乗せてくれた男性によると、数年前はショウブ刈りに大将を連れて

ウブを折って奥の板に乗せていたらしいが今年は切ってみることにしたらしい。高さが不ぞろいだと見栄えがよくないので、見栄えよくするためにきれいに高さを切りそろえていた。そして、お供え物に乗せる板をはめて、そこに合わせて切ったショウブを乗せる。最後に枠の上に飛び出たショウブを緑色の針金のようなもので束ねる。そして小屋から前に伸びている木部に提灯を吊るした。提灯をかけやすいように切れ込みを入れたそうだ。また小屋の骨組も今年ではないが、緑色に塗り替えたらしい。年々ショウブ小屋の改良を



花火の仕分け



花火の仕分け

きていたそうだ。  
 十三時四十分  
 刈り取ったショウブでショウブ小屋を作り始めた。小屋の枠は木製で幅47.5センチ、奥行き45センチ、高さ79センチである。作業を行っていたのは常会の方達だった。小屋づくりに関して意見を出していた常会の男性は、ほかの地区のショウブ小屋を見たらしくそれを真似して今年からは小屋の上でギユッと束ねる形のように指示していた。  
 まず刈ったショウブを川の水で洗い、それを小屋に向けて右側から順に奥、左の枠に差し込んでいた。そして正面の、板の下側の部分の枠に、大きさを合わせて切ったショウブを差し込んでいった。去年まではそのままショ



ショウブ小屋作り



刈り取ったショウブ



作成途中の小屋



ショウブを洗った後



ショウブ小屋のお供え物



子どもたちの夕食



完成したショウブ小屋

行っているようだった。

十四時四十分頃

ショウブ小屋は完成し、いったん常会のメンバーは解散となった。小屋の高さは173センチである。小屋の呼び方は「ショウブゴヤ」と呼んでいる。

十七時

大将とその母親がショウブ小屋にお供え物を置いた。お供え物はキュウリモみと土佐鶴の小瓶二本だった。大将の母親によると、キュウリモみは作ったものではなく、買ってきたものだということ。

十七時四十五分

子ども達が公民館に集まって、夕食をとる。大将と大将の母親が机を並べたり、ジュース、お弁当を並べたりと準備をした。大将が、いただきますと言うのを合図に夕食を食べ始める。大将の母親によると、昔の夕食ではトウヤに行つて五目御飯を食べていたそうだが、高木さんによると、昔は夕食のために米一合を持っていくことが決まりだったらしい。またイオメシというごはんを食べたりしたそうだ。

今年はレストラングドラックで頼んだお弁当だった。

十八時五分

夕食は終了。その後、前浜地区の集金に協力してくれた地域の人们たちに向けて感謝の言葉を大将ではなく、小学校6年生の女子が、公民館にある放送マイクを使って放送していた。その後花火の使い





花火の風景

子ども達が花火を持って橋に来た時には、すでに常会の人たちは提灯に明かりをつけていた。そして橋では花火が行われている中、テントの中でお酒やご飯を楽しみながら会話をしていた。



お参り

お参り  
友達同士で花火を楽しんでいた。また、小さい子も大人と一緒に来ていて、火をつけてもらったりして親子で、またはおじいちゃんやおばあちゃんたちと花火を楽しんでいた。花火を持っていない子のために、集金した中から花火をあらかじめ用意していて、持っていない子に渡したりしていた。



お参り

十八時二十分

方などの確認をした後、待機。

花火開始に合わせて、子ども達は自分の花火が入った段ボール箱を持って公民館を出る。橋につくとまず箱を置いて、小屋にお参りをした。その時は、キュウリもみは食わず、ただ手を合わせるだけだった。そして大将の合図で花火開始。



翌朝の片付け



翌朝の片付け



翌朝の片付け  
(ショウブ小屋解体)

ショウブ小屋へのお参りでは、水難事故防止のためにお参りをしてきた橋の近くに住む高齢の女性のほか、親子や二人組の人など合わせて五組しか確認できなかったが、キュウリもみを食べていたのは二家族だけで、それ以外の人たちはキュウリもみを食べてはいなかった。エンコウについて子どもたちに質問したところ大将と小学校5年生、6年生の女子はエンコウについて知っているかと答えてくれた。

六月八日

七時十五分

常会の方たちと大将がゴミを拾ってお祭りの片付けをした。

(調査者…下村亮太)

前浜寺家（前浜橋のたもとの大湊公園）

六月七日

十二時二十分 大湊公園

☆保護者の方々がシヨウブ小屋を作り終え、お昼休憩

シヨウブ小屋

- ・ 枠は木製で四角形（横64cm、奥63cm、高さ86cm）。
- ・ シヨウブの全長1m60cm。
- ・ シヨウブを小屋の枠に刺し、右↓左↓後ろの順にたたむ。
- ・ 隙間の部分は適当に埋め、下にもシヨウブを敷き詰める。
- ・ 呼び方は「シヨウブゴヤ」と呼んでいる。

十三時三十分（提灯設置の準備）

子ども4名の父親が丸太をロープで前浜橋に括りつける。

（浜田真輔（大将父親）、松田隆富、濱田雅也、石川誠）

子どもは大将を中心に提灯や電球をロープに括りつける。

全ての電球がきちんと光るか1度スイッチを入れ確認をする。

十四時（調査の聞き取り開始）

・ 大将の役割（浜田愛梨、11歳、女性）

周りの子ども達に指示を出す。

花火を購入する。

・ お供えの種類はキュウリの酢物とお酒。

・ シヨウブ刈り

昔は子どもを中心にシヨウブを刈っていたが、現在は昔より水深が



シヨウブ小屋正面



シヨウブ小屋側面

深いため保護者が刈る。（松田隆富さん、40歳、男性）

・ 天候

基本的に大雨が降れば中止になる。

※以前にシヨウブ小屋も提灯も全て作り終え、食事をしていたら大雨になり中止になったことがあったという。（石川誠さん、47歳）

・ エンコウ祭の声かけ

↓昔は祭りに参加する家庭が多かったため、寺家公民館から町内放送をしていました。

↓現在では3家庭ほどしか参加せず、電話や家に行って呼びかけをしている。

・ 寄付金

↓毎年、参加する各家庭と地域の方々からの寄付により五〜六万ほど集まる。

↓花火や食事代として寄付金を使っても余れば、古い豆球や提灯を購入する。

※毎年、ノートに寄付金



提灯設置を手伝っている様子



大将が後輩に教えて  
提灯に電球をつける様子



提灯支柱の固定

や購入品を記載している。

十七時三十分

☆料理の準備

・メニューはちらし寿司、から揚げ、ポテトサラダ、そうめん、ゼリー。各家庭で作ったものを持ち寄る。

・料理をする人は参加している子ども達の母親。(今年

は浜田有希さん、松田真弓子さん、石川裕子さん)

・キュウリモみを作る人は毎年バラバラで、今年は石川裕子さんが作った。

十七時四十分

☆食事開始

↓それぞれが好き

かには浴衣を着ている人もいた。

・毎年、大湊公園に近い地域の人々や観光等で訪れた人々で賑わう  
・お参りはショウブ小屋の中に入っているキュウリモみを一人ずつ食べ、お祈りする。

十九時四十分

☆祭開始とともに花火の打ち上げ

・花火は毎年、寄付金の四〜五万円を花火代として使う。花火が余ると来年、再来年と使い回しをする。

(今年も去年の花火をいくつか使ったと言っていた)

お祭りに来ていた人は誰でも花火をすることができた。昔は橋や浜でも花火をしていた。

二十時

ある程度の時間が過ぎると徐々に人々が減っていく。近くの教員の方々が見回りになる。



大湊小学校の生徒が  
エンコウをイメージした絵

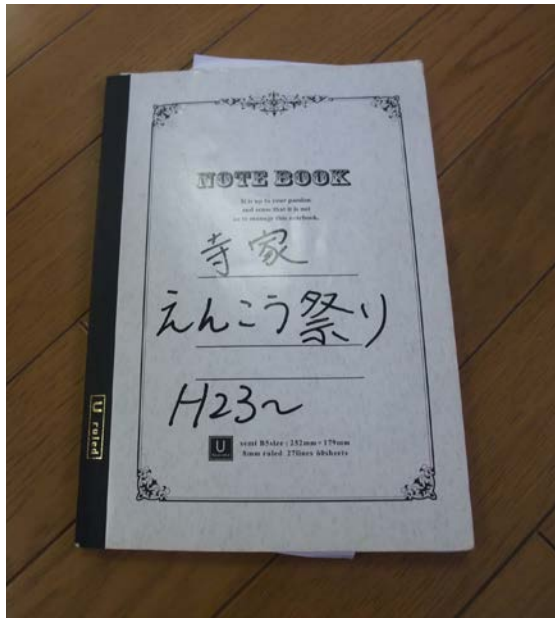
なものをお皿に取り分け食べる。

基本的に子ども同士、親同士で話しながら食べている。

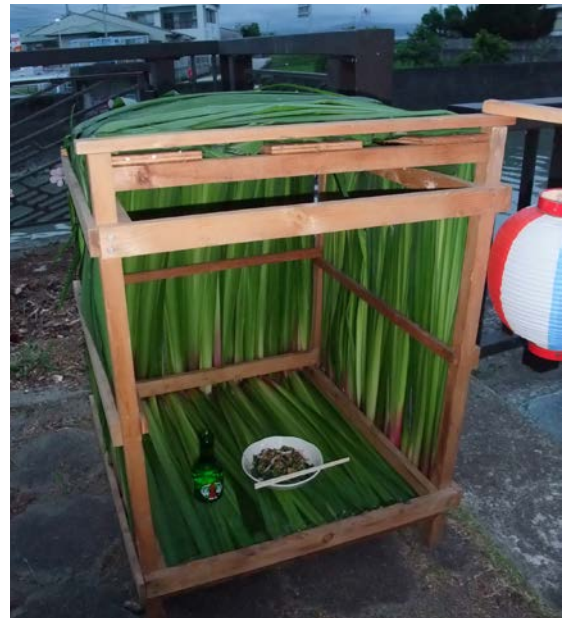
十八時五十分

☆大湊公園に再び集まり、提灯点灯の最終確認。

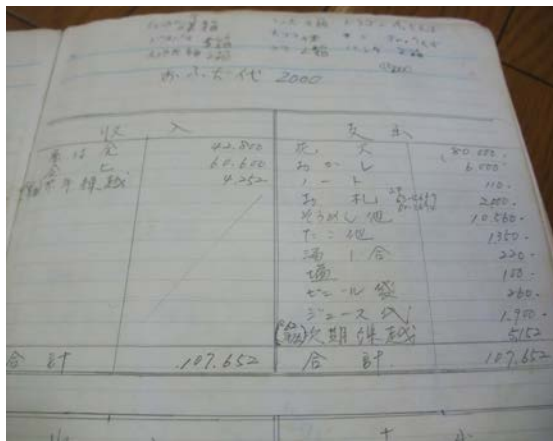
・衣装は子ども達のみ



エンコウ祭の寄付金ノート



ショウブ小屋



ノートに寄付金の用途を細かく記載している



お供えのキュウリの酢物とお酒



子どもたちや保護者の方々が楽しく話しながら食事をしている様子



お参りする人がキュウリもみを食べる

二十時三十分  
☆片付け  
子ども達がシヨウブ小屋を解体する。  
参加していた保護者の方が協力し合い、シヨウブを川に流す。



エンコウ祭に来た人々が花火を楽しんでいる様子



夕食のキュウリモみ



エンコウ祭に参加した子どもたち



寄付金で大将が購入した花火の品々



シヨウブ小屋を解体した後の木枠



翌朝のゴミ拾い

翌朝、公園のゴミ拾いを行う。

・エンコウに対するイメージ

保護者の方々は自分が子どもの頃にエンコウについて考えたことがなかったという（現在では小学校等でエンコウについて授業で学ぶ）。

子ども達は『カップ』『キュウリ』と言っていた。（浜田柚妃、9歳、女性・松田弥夕、9歳、女性・石川まなみ、7歳、女性）

（調査者：吉村祐依）

前浜浜窪（切戸橋のたもと）

六月七日（土）

十三時三十分 ショウブ刈り（里改田丸池）

・弘光一憲さん、ヤマモトさん（男性）、ヤマモトヒロトくん（ヤマモトさんの息子、13歳）、オカザキミユウさん（7歳）の4人で浜窪集会所前から軽トラックで移動。丸池へショウブを狩りに行くが、すでに綺麗なショウブは刈られており下島橋へ場所を変える。

十三時五十分 ショウブ刈り（下島橋）

・自転車でやってきた女の子5人と男の子1人が加わり、下島橋の下で鎌を使いショウブ刈りをする。ショウブを刈るのはヤマモトさんとヤマモトヒロトくんで、他の子どもが運ぶ。

・綺麗で長さのあるショウブを選んで刈る。刈ったショウブは長さ190センチほど。

・弘光さんによると、丸池のショウブは綺麗だが、下島橋のところは水の流れが少なくショウブがあまり綺麗ではない。このショウブ刈りは、元は川の掃除を兼ねたものであり、川を綺麗にして水難事故を防ぐためのものであるという。また、昔はほとんど子どもだけで祭りの準備をしており、大人が手伝うのは料理と小屋の仕上げだけ。女の子が祭りに参加するようになったのは10年か20年ほど前であるとのこと。

十四時二十分 ショウブ洗い（子どものみ、大人はこのとき土俵作り）



ショウブ刈り（下島橋）

・市立南児童館に移動し、子ども8人でショウブをホースで洗う。  
 ・ヤマモトヒロトくんが指示をしているが、大将ではない。中学3年生のスギモトリョウガくんが大将のような役割になっていたが、当日は風邪で休みだった。  
 ・去年はヤマモトヒロトくんが一人でショウブ洗いをしていたため、今年は電話で呼びかけて人を集めた。  
 ・洗い終わったらショウブを切戸橋付近に運ぶ。



ショウブ洗い

十四時四十五分 土俵作りに合流（前浜児童遊園地）  
 ・まず大人3人が土俵に土を入れ、子ども達が土を均す。そして土俵周りに藁を置き所々紐で縛る。縛り終えたら溝を作り、そこに藁を入れて土俵の完成である。  
 ・藁はビニール紐でしっかりと結ぶ（固結び）。大人が子どもに教えながら作業していた。  
 ・土俵の砂や藁は黒潮生コンの方が持つてくる。（地元の会社なので前から手伝っている）  
 ・十五時十五分に土俵が完成すると、子ども達が土俵周りのゴミを拾う。

十五時二十分 ショウブ小屋作り（切戸橋付近）  
 ・切戸橋に移動しショウブ小屋作りに取り掛かる。（大人2人、男

の子6人、女の子9人)

- ・ 枠は大人が持つてくる。大きさは幅73センチ、奥行き69センチ、高さ66センチで銅板の屋根がついた木製である。昨年まで下島浜で使われていた枠で、今年は合同で開催するため、それを利用した。枠の屋根と床の部分にショウブを乗せ、はみ出た部分を鎌やハサミで切り落とす。ショウブは固定せず、ただ載せるだけ。この作業はほとんど子どもがしていた。

- ・ 正確な作り方は分からなかったようで、子ども達は悩みながらショウブ小屋を作っていた。完成したらショウブに軽く水をかけ、汚れを落とす。小屋の呼び方は「ショウブゴヤ」と呼ぶ。
- ・ 弘光さんによると昔はショウブ小屋全体にショウブを使っていたため、使用するショウブはもっと多かったという。

十六時 提灯設置 (切戸橋の横のガードレール)

・ 危ないので子どもは帰し、大人3人で作業する。

十六時二十分 保護者3人 (PTA役員)、子どもが集まり花火分



土俵の藁縛り



土俵の溝堀り



提灯設置

けなどをする (浜窪集会所)

- ・ 地域によっては大将の家がおきやくのような感じで皆をもてなすが、浜窪は住宅地で新しくやってきた人が多く、大将の家庭の負担を減らすために大将制度をやめようとなった。(PTA役員談)

- ・ 花火を配る際はビニール袋に子どもの名前を書いたものを一人ずつ持たせ、その中に花火を入れる。花火は男の子10人と女の子9人の計19人分。配られる花火の数は大体皆同じ。一人当たりの量は35本セットの袋に入った手持ち花火と手持ち花火15本、置き花火3個ほど。全体にロケット花火(144本セット)が6箱ほどと置き花火が5個ほどある。この花火の買い出しをしたのはPTAの役員の方であり、高知市内の矢野玩具で購



ショウブ小屋



ショウブ小屋作り



お参りをする子ども達



花火分け



夕食



花火（小さい子ども）

入した。予算は五万円。

十七時十分 ショウブ小屋にキュウリとタコの酢もみ、酒を供えに行く

- ・PTA役員の方が子どもを引率し、キュウリとタコの酢もみと日本酒（土佐鶴）をお供えに行く。
- ・キュウリとタコの酢もみはPTA役員の方（ヤマシタさん、女性）が作ったもので、毎年PTA役員の方が作っているという。
- ・保護者の方が酢もみとお酒を供えた後、子どもが「泳ぎが上手になりますように」などと願い事をする。

十七時二十分 夕食（浜窪集会所）

- ・食事は近所の喫茶店の六百円ほどのお弁当。一緒にキュウリの酢もみも配られる。

十八時五分 花火（切戸橋西側）

- ・雨が降る恐れがあったので早目に始めた。
- ・上級生はロケット花火などを楽しみ、割と派手であった。花火をする場所は上級生と小さい子どもで少し離れていた。
- ・時間が経つにつれ子どもが増えていき、25人ほど集まっていた。子どもだけでなく大人も増えていき、「○○さん久しぶり」と近況を報告し合い、このエンコウ祭がいわば同窓会のような役割を果たしていた。

- ・十九時頃に提灯が点灯。
- ・十九時四十分頃に花火が終わる。最後は打ち上げ花火を打つ。

十九時五十分 相撲

- ・小さい子どもから相撲を取る。対戦相手は特に決まっておらず、何回でも好きな相手と対戦する。1対1だけでなく2対2や男女混合格での対戦もあった。



【その他】  
・中学生はクラブ活動の大会のためほとんどの人が夜だけ参加する。  
・花火をしているときに何人かの方がショウブ小屋にお参りをしていた。そのときの手順は、まずショウブ小屋の前に屈んで手を合わせ、そのあと割り箸でキュウリの酢もみを手に取り食べる、という風であった。

- ・PTA役員の方によってお菓子や文房具などの景品が用意されており、くじを引いて選ぶ。
- ・二十時四十分頃終了。
- ・その日の内に電気のコードや片付け、周辺のゴミ拾いを軽く行う。相撲をしている時間帯にショウブ小屋のショウブも川に流し、梓だけの状態にする。
- ・子どもは集会所でお菓子が配られる。
- ・次の日は八時に男親が集まり、花火の燃えカスなどを掃除する。



花火（上級生）



相撲の景品



相撲



祭り後のショウブ小屋枠

- ・エンコウ祭に際してかかるお金は、地区会費千五百円と寄付金と繰越金で賄われる。その内訳は花火に五万円と夕食のお弁当が一人六百円ほどであり、残りは相撲の景品とお菓子に使われる。寄付金を集める際は子ども何人かに大人一人がついて家を回る。これは、浜窪にはエンコウ祭のことを知らない人が多く、大人が説明するためである。寄付をもらえる家は大体決まっており、今回は五万円ほど集まった。一口千円であり、寄付をした家には翌日の夕方に小さい花火をお礼として配ったという。
- ・夕食は昔、婦人会の方が集会所の湯沸室で作っていた。
- ・エンコウのイメージについて子どもに聞くと、「悪さするカップ」
- ・「怖いカップ」「相撲が強い」という回答があった。
- ・PTA役員の女性の方にエンコウ祭について話を聞くと、祭りをを行うに際して保護者の負担が大きく、このまま無くなるのではないかと、とのことだった。

（調査者：田村莉歩・橋本達広）

### 久枝西組（宮前橋のたもと）

六月六日

・エンコウ祭前日にシヨウブを大人が刈り、泥をとるために、川につけておく。

六月七日

十三時頃〜 シヨウブ刈り

・シヨウブはできるだけ太いものを約150本刈る。今年は前日に刈った分が足りなかったため、当日50本ほど刈っていた。

・シヨウブは約三十年前には近くになかったため、近くの川に植え、今はそこから刈っている。

・準備する大人は5〜6人で毎年決まっている。基本的に男の子の親が中心で準備を進める。少なかつたら、近所のおじさんも手伝う。



シヨウブ刈り作業



シヨウブを川につける

・約五十年前は橋がなく、約一カ月前から雑草を刈っていた。

十三時三十分頃〜

シヨウブ小屋作り・提灯の飾り付け

・シヨウブ小屋は作り出すのが早すぎるとシヨウブがしおれるため、十九時からの花火までに間に合うように仕上げればよい。

・シヨウブ小屋は「オヤシロ」ともいうが、「シヨウブゴヤ」と呼ぶことが多い。

・約三十年前にはお互いに花火を打ち合う、シヨウブ小屋を壊すなどの戦争と呼ばれるものがあつた。花火の打ち合いは学校からやめるようにいわれてからなくなった。

・基本的に準備した人とシヨウブ小屋を作る人は同じで、5〜6人で行う。枠は木製で、幅と奥行きが57センチの正方形で、高さ75センチである。

・宮前橋の南西でシヨウブ小屋を建てる場所を掃除し、下に浜からとってきた砂利を敷いて枠を置く。刈ってきたシヨウブを根が下になるように、左側、後ろ側、右側の順にそれぞれ約30本ずつ入れていく。

次に上にはみ出た分を左、右、後ろの順で折って、枠からはみ出た分を切る。中の柵に根を手前にしてシヨウブを並べ、その上にヒノキの葉を敷く。ヒノキの葉は当日近所からとってきたもので、取りに行くのはだれでもよい。

屋根に竹を×型に置く。竹は当日の十四時頃に取りに行ったもので、



「シヨウブ小屋作り」



ショウブ小屋（屋根）



ショウブ小屋作り



提灯



ショウブ小屋

取りに行くのはだれでもよい。更に屋根の左右の端に屋根から飛び出すように竹を置き、その竹に提灯を吊るす。

・提灯の底に砂利を入れ、ろうそくを立てて、紐に吊るして橋に飾る。ろうそくに火はまだ付けない。提灯を橋に飾る際に、それぞれの場所が決まっていらないが提灯の色が隣の色と重ならないように色違いで並べる。

・ショウブ小屋作りと提灯の飾り付けが終われば一度解散し、うす暗くなってきたらもう一度集まる。時間は決まっていらないが、だいたい十九時頃になると集まりだす。

・昨年は雨が降り出したので早めに集まり、花火は十五分ほどで終わった。

十四時頃〜 料理を作る

・公民館で料理を作り始める。作り始める時間やメニューはタイショウの家を中心に決める。時間は毎年十四時から始めている。

・今年のメニューはキュウリの酢物、そうめん、手巻き寿司。

・メニューは毎年違っており、寄付金の額によって決めている。焼き肉をやったこともあるが（いつやったかは忘れた）現在は寄付金が少ないためできない。（下司アヤさん、タイショウの母親）

・ショウブ小屋に供えるためのキュウリの酢物を作る人は決まっていらない。中に入れるタコ、キュウリの量はだいたい決まっているが、味は作る人の家庭の味である。

・キュウリの酢物は夕飯で食べる分とお供えの分の皿を分けて置いておく。

・料理が完成すれば一度解散し十七時頃に集まる。

十七時四十五分頃〜 夕飯  
 ・十七時頃から公民館に集まり始める。全員が集まれば夕飯を食べる。  
 ・花火が始まるまでは公民館で過ごす。

十八時四十分頃〜  
 提灯を灯す・お供え

・公民館からそれぞれ橋に移動する。  
 ・橋につくと提灯に火をつける。  
 ・花火を始める少し前にキュウリの酢物、酒（土佐鶴）、串に刺したイカをシヨウブ小屋に供える。今年はお菓子も供えた。酒の種類は決まっていない。

十九時頃〜 花火、お参り

・花火の種類は決まっておらず、タイショウが決める。  
 ・花火が始まると音で人が集まってくる。

・昔はタイショウが花火を打ち始め、中ごろに一度大きい花火を打ち、終わりにもう一度大きい花火を打っていた。今は、特に決まっていない。  
 ・約四十年前は花火が済んでから、



夕飯の様子



料理作り

夕食をとっていた。タイショウの家で飲み食いし、そのまま泊まりこみ、隣の集会所にガラスを割るなどのいたずらをしたこともあった。  
 ・約四十年前は高知市まで自転車で乗って花火を購入しに行っていた。  
 ・約四十年前、エンコウ祭は子どもにとつて一大イベントだったため、隣の地区に対するライバル意識が強かった。

・現在では昔経験した大人が花火を仕切つてやっているが本来は子どもが中心。

・昔は花火は男の子のみ参加できたが現在は女の子も参加している。女の子は基本的に手持ち花火のみ。  
 ・今年の花火の種類はドラゴン、シュービン、打ち上げ花火、八連発、手持ち花火であった。  
 ・花火をしているとき、タイショウは他の地区にいつてはいけない。  
 ・県外等に出て、エンコウ祭のときに帰ってきた家族に手持ち花火を一袋分けることもある。  
 ・水の事故にあわなかったためにお参りをして、キュウリの酢物を食べる。



キュウリの酢物とそうめん



夕飯分（左）とお供え分（右）のキュウリの酢物



提灯へ火をつける様子



花火 (シュウビン)

他の供え物は取らなくてもよい。取る量は決まっていない。

・お参りは1度だけで、2回はしない。

・お参りの順番は決まっていない。昔は子どもが先にお参りをし、キウウリの酢物を食べて、残ったものを大人が食べていた。

・お供え物は好きな時に取って食べてよい。紙コップや割り箸が置いてあり、自由に使って食べる。

二十時頃、エンコウの川流れ

・花火が終わるとすぐに始める。

・提灯にろうそくをたて、火をつけたものを流す。提灯は破れたものを使用する。3、4個流す時もあるが、今年は1個だった。

・川流れが終わると、飾っていた提灯の火を消して解散する。

### 翌日

・片づけはだいたい六時からだが、五時三十分から集まりだす。シヨ



お参りの様子



ショウブ小屋

ウブ小屋のショウブを抜いて川に流す。提灯と支柱、花火発射台を片付ける。ゴミを拾う。

### 【その他】

#### 寄付金

・寄付金は約八万円で、タイショウウが西組地区のすべての家を集めに行く。

・主に花火に四万円強使う。他に夕飯、寄付金をくれた方に配るお菓子に使われる。

・大将の母親によると、昔は寄付金だけで足りていたが、現在は足りないため、参加する子どもは会費制になっている。

#### 公民館

・昔は西組、東組、中組で使っていた。

・昨年は他の地区が使っていたため、漁業組合を借りて夕飯を作った。今年は西組のみが使用した。

- エンコウに対する子どもたちのイメージ
- ・あまりわからない
- ・かっぱ
- ・キュウリ
- ・花火

(調査者：松田優香・角田昌陽)



ショウブ小屋のお供え物



川流れ用の提灯



川を流れるショウブ



ショウブ小屋解体の片付け



提灯支柱の片付け



ショウブを川に流す

### 久枝中組（前川橋のたもと）

六月七日

十三時五十分頃 ショウブ小屋と提灯の準備

前川橋のたもとでショウブ小屋作りを始める。男性5名がショウブ小屋の枠を組立てる。枠は木製で幅53センチ、奥行き68センチ、高さ79センチである。

十四時〜 砂利を敷いている上に枠を設置し、ショウブをさし始める。

十四時十分には大将（小学一年生の男子）も参加。

十四時十五分〜 橋に提灯（29個。赤と緑）をかけ始める（男性3名）。十四時四十分頃 橋に提灯をかけ終わる。準備が終った人たちは思い思いに過ごす、家に帰る、カメラを持ってショウブ小屋を撮影する人もいた。ショウブ小屋作りや提灯など祭りの準備に携わっていた男性たちはすぐに帰らず、話をしたりしていた。

十七時十分〜 ショウブ小屋にお供え（キュウリとタコの酢の物、日本酒）

十七時三十分〜 食事  
大将宅に料理を準備し、子ども達が集まってくる。

十七時三十五分〜 食事（メニュー：スシローの寿司、キュウリとタコの酢の物、フライドポテト、サラダ、チョコレートケーキ）。



ショウブを船から取り出す

参加者：大将、小学3年生女子、中学1年生女子、中学2年生女子。

十八時十分〜 お参り

キュウリとタコの酢の物を食べる↓お神酒を飲む↓手を合わせる、と人によって手順が異なることもある。キュウリとタコの酢の物だけを食べて手は合わせない人も多かった。他地区からの参加者が多く、久枝西地区の大将とその友達が遊びに来ていた。また、北のほうの地区からの参加者も多かった。他地区の人々も手持ち花火でお祭りを楽しんだ。

十八時五十分〜 花火

高校生以上の男性がドラゴン、シュービン（ロケット花火）をする。ほかの子ども達はみんな



ショウブ小屋作り（大将参加）



ショウブ小屋（枠組み）



お供え



ショウブ小屋作り 1



お参り



ショウブ小屋作り 2



お参り



ショウブ小屋作り 3



お参り



ショウブ小屋作り 4





花火発射台設置

お供えの種類・数  
皿鉢のキュウリモみ（キュウリとタコの酢の物で、エンコウのキュウリモみと呼ぶ。仕出し屋の岸鮮魚店で購入）



提灯設置完成

大将の役割  
シヨウブ小屋作り  
大将の年齢が幼かったため、ほぼ大人が祭りを準備、進行了た。



提灯設置作業

手持ち花火。  
二十時十分〜 エンコウの川流れ  
提灯を二重にして、その中にろうそくを立てて一つ船に乗って流した。風が強かったため消えてしまった。  
二十時十七分〜 片付け  
シヨウブ小屋を残してお供えを取り出し、提灯や花火等を片付ける。  
二十時三十分 祭り終了



打ち上げ花火

【その他】  
・シヨウブ小屋のシヨウブの余りは、川に流す。  
・エンコウの川流れ…提灯を二つ重ねてろうそくを中に入れ、川に流す。  
・お返し…寄付金のお返しに、一週間以内にお菓子の詰め合わせを大将の家が各家を回って配る。大体百円程度



手持ち花火

実施場所…橋の手すり、岸のシヨウブ小屋と反対の場所  
寄付金の額・支出用途  
寄付金の額…五万八千円（45軒）  
支出用途…提灯の買い替え、お酒、花火、お供え物の皿鉢（寄付金のお礼）



食事風景

お酒（土佐鶴）、シヨウブ小屋の横に置かれたクーラーボックスの中に烏龍茶・缶コーヒー・カルピス等があり、割りばし、紙コップがシヨウブ小屋の中に置かれていた。  
花火の種類・数・実施場所  
種類…ドラゴン、シュービン（ロケット花火）、手持ち花火のセット（小さい子が使う）  
数…18種類で278個購入。価格は五万五十六円



打ち上げ花火



花火（シュービン）

・センサー（戦争）…昔（四十年くらい前）は、隣の地区のショウブ小屋を壊しに行くことがあった。壊す程度は、全壊するくらい。地区同士で壊しあいをする。

・会計  
 予算…五万円  
 寄付金…五万八千円  
 会費…四千五百円  
 キュウリモみ…三千円  
 お酒…千九百円

電気を借りている家にお礼をする  
 繰り越し…前年度の繰越金は花火を  
 買うお金に回されることが多い。  
 祭り始まりの準備のお礼…ジュース  
 祭り終わりの片付けのお礼…ジュース

帳簿は毎年手書きのものが大将家に渡される。食事はマクドナルドの商品が出ることもあれば、手巻き寿司やからあげ、オードブル等の豪華な食事が出された年もある。

※食事に来ていた中学生の姉妹は、ほかの地区のお祭りの参加者なので、実質久枝中組で参加した子どもは、大将家の姉弟だけ。



エンコウの絵



提灯外し

・一昨年は男の子がほとんどの8人くらいでお祭りをしていた。  
 ・お参りは、花火の時に平行して行う。  
 ・花火は食事が終わって次第行う。  
 ・寄付金の集め方…一昨年は子どもがみんなで集めて回ったが、今年度は大将の家が集めた。  
 ・花火の購入場所…矢野玩具店  
 ・大将役の決め方…昔は中学3年生男子が自動的に大将となったが（複数いる場合はじゃんけん）、今年は子どもの数も少ないので小学1年生男子が大将になった。  
 ・余った花火（手持ちの花火セットは余りやすいので今年は控えた）は持ち帰ってもらう。  
 ・食事に来ていた中学生の姉妹は、ショウブ小屋作りをみたことはない。  
 ・昔は祭りの寄付金が2万円〜5万円だったこともある。  
 ・川幅が護岸工事のせいで狭くなって、川に入ることが危険になり川遊びが減った。  
 ・準備、後片付けともに、OBの方々が率先してやる。

【エンコウのイメージ・エンコウ祭に対する思い】  
 学校でエンコウ新聞を書く授業（小学3年生の時）があるが、皆同

じイメージの絵を書く。

どの子に聞いてもエンコウのイメージは  
 かつば（甲羅がついている、皿がある、  
 相撲している、キュウリが好き）、普通  
 に毎年同じ感じ、という答えであった。

・大将の母：人間のようなかつば（黄桜  
 酒造のCMのかつば）／お祭りのおかけ  
 で知らないことが発見できたりする、地  
 域の方たちの支え、地域とのふれあいの  
 きっかけ、昔から住んでいる人の祭り継  
 続の思いが強い

・男性（52歳）：皿のついたかつば／川  
 をきれいにする

・男性（75歳）：皿と甲羅がついているかつ  
 ば／水難事故のための祭り、伝統

女性（70歳）：同じ

・男性（20歳）：外見はかつばと一緒だが、  
 何かが違う／楽しい、小さいころからの  
 慣習であり、寄付金集めなどが勉強にな  
 る。

・女性（30代）：人間に近い足を引つ張  
 るかつば／小さいころからの慣習、水難  
 事故、地域支援で成り立っている

・女性（年齢記述なし・参加者）：かつ  
 ば／地域の人との交流、守っていくべき、  
 婦人会でも伝統的なお祭り、水難事故に



川を流れるショウブ



ショウブを川に流す



ショウブ小屋解体

あわないように願ひ、花火で攻め合ひ

・男性（中2・参加者）：かつば／守っていくべき

・男性（中2・参加者）：かつば／花火がすごい

・男性（80代）：エンコウさん／川遊びを思い出す。昔、エンコウ  
 の川流れをしており、自分が川流れをするのは久しぶり（二十二  
 三年ぶり）だそう。昔は2〜3個流したらしいが、今年は1個ろ  
 そくを立てた提灯を流した。また、昔はキュウリを放り込んでから  
 川流れを行つたらしい。来年はキュウリも流すとのこと。

【他参加者の意見】

・かつば（子どものころ）／一年に一度の行事、続けてもらいたい、  
 エンコウの川流れ（皿にろうそくを載せて流す）、地域の人々の助  
 け

・水難事故の守り神（見守ってくれる）、イメージは薄い／継続し  
 ていけたら地域のふれあひ、地域活性化

（調査者：福田真有・橋尾直和）

久枝東組（東橋のたもと）

六月七日（土）

十四時～ ショウブ刈り

東橋周辺でショウブ刈りを行う。参加者は久枝東組の子ども4名と大人2名。ショウブの刈り方は、後で形を整えるために、根元はできる限り長めで、来年のために根っこは残して刈る。ショウブを刈る時間帯は、干潮時が好ましい。

ショウブを洗う

ショウブの根元や葉の部分についている泥を洗い、綺麗に削ぐ。ショウブを洗う作業も子ども4名を中心に、保護者の方も少しずつ参加し始めて、大人が5名ほどになった。地域の方が自前のカメラを持って立ち寄りしていた。

十五時十分～ ショウブ小屋作り

橋の近くで小屋作りを行う。小屋作りには基礎となる枠組みを使用するが、昔は使用していなかった。見栄えを良くするために砂利を少し盛って、その上に枠組みを置いて、左右の側面と後ろの面にショウブを差し込んでいく。枠組みの作りがショウブを差し込めるようになってくる。ショウブを差し込む作業は危険な作業ではないため、小学校低学年の子や、



中学生によるショウブ刈り

保育園に通う小さい子どもも参加した。

側面に差し込んだショウブを屋根となる部分に折込み、浮いてこないように竹の棒のようなもので×字で固定し、針金で木と小屋の枠組みを留める。枠組みからはみ出た部分は、はさみでカットする。

お供え物を置く棚の部分には、葉先を切り長さを揃えたショウブを置く。ショウブの根元を前にして置いて、その上にヒノキの葉を敷き詰める。

十六時四十五分～ 提灯設置

ショウブ小屋のサイドに棒を差し込んで提灯を吊るし、ろうそくを立てる。紙なので少しの風でも揺れて火が提灯に移ることもある。対策として、提灯の底に砂を入れる。橋に飾る提灯は、まず欄干に3本の柱を立てる。それに針金を渡し30個くくりつける。この提灯も燃えたりするために、毎年



中学生と保護者によるショウブ洗い



ショウブ小屋の基礎作り



お供えを置く棚に敷くヒノキ



ショウブ小屋の側面にショウブをさす



完成したショウブ小屋



ショウブ小屋の屋根作り



提灯底に重りの砂を入れる



ショウブの切り取り作業



提灯の設置作業



お供え物を置く棚作り

何個かは買い換えている。提灯をくくりつけたワイヤーを上上げるときは、ゆっくり作業する。

十七時〜 食事

食事は組によって形態が様々だが、東組はお弁当が注文されていてそれを頂いた。その手配は大将宅が行う。集まった寄付金の一部でお弁当とドリンクを購入する。橋の北側にある広場で食べる。

お供え

キュウリとタコの酢物と、土佐鶴が供えられていた。参拝方法としては特に決まりはないが、手を合わせてから酢物を口にすることが多かった。

十八時三十分〜 花火



夕食のお弁当を食べる様子



お供えのキュウリとタコの酢物

もともとの開始予定時刻からだいぶ早めてのスタート。花火は寄付金から食事代などを引いて、残った金額で購入する。橋の欄干の中ほどにロケット花火用の設置に使う缶の箱のようなものをいくつか置く。中学生や高学年の子は橋の上で打ち上げ系をしている。小さな子どもや女の子は橋の横の拓けた場所で手持ち花火などをする。花火の種類は、ロケット・打ち上げ・噴出し・手持ちなどと様々。

エンコウの川流れ

提灯の中のをそくに火をつけて、川の端から流す。子どもが4人だからか、4つ流していた。子ども達を中心に地域の人達も一緒になって、みんなで「エンコウの川流れ」と歌う。

六月八日(日)

翌日片付け 六時〜六時三十分

祭りの終了後、全員で協力してごみを拾うなどだいたい当日終わりますが、暗くて見えづらく、花火の残骸が残っていたりするため、翌朝にごみを拾ったりする。

参加者 大人6名

中学生3名

小学生1名

(調査者・味元有里江

・角森美佳子)



お参りの様子



ショウブ小屋と橋に設置した提灯



ロケット花火発射台の箱



花火の様子



花火



翌朝の橋周辺のごみ拾い



ショウブ小屋

## 第五章 高知県のエンコウ伝承

本章では、後川流域のエンコウ祭からいったん離れて、高知県においてエンコウがどのような妖怪と考えられてきたかを概観してみたい。二節では主として江戸時代の史料から、まだ今のようにイメージが固定していない土佐の河童系妖怪の姿をかいま見る。三節ではエンコウやシバテンの姿を描いた「土佐化物絵本」などを紹介する。四節では大正時代以降の調査記録から、県内のエンコウ伝承の全体像を俯瞰する。

### 一・高知県のエンコウのイメージ

とは言え、実在する生きものと違って想像上の存在であるエンコウは、人々の頭の中に現れては消えるイメージに過ぎない。「高知県の」と表題に付けても、地域や時代によって、いや個々人の頭の中でも違うのが当然だという前提で話を進めたい。

そう言うてしまうと茫漠としてしまうので、最初に郷土史家の橋詰延寿氏がまとめたエンコウの定義を紹介してみたい。一九六二年（昭和三七）に刊行した『えんこうの話』と題するエンコウの入門書の冒頭の一文である。

えんこうは土佐の妖怪の一つである。

えんこうは河、沼、海、池に住むもので、山に住むシバテンとともに土佐を代表する妖怪である。大きさは猿位い、皮ふはヌラヌラしている。茶褐色か黒か、青味がかっている。頭に皿があつ

て水が無くなるとヒイヒイと泣く。

手は左右に貫通する。伸縮自在である。子供の肛門から手を入れて肝を抜く特技をもっている。

指は長く、指と指の間には水かきがある。

えんこうは恩義を忘れない。

えんこうはよく人のことばがわかる。

えんこうはキリキズの妙薬を知っている。

えんこうは魚をとるのが天才的である。

えんこうはキュウリやナスがすぎである。

えんこうは水の妖精であり、水神であるので灌漑農耕の神である。

えんこうは鹿の角が大きらいである。

えんこうの中には酒をのむもの、女に化けるもの、ものすごい臭気をもったものなどもある。

えんこうは牛や馬の力にはかなわない。

えんこうは性質はまことにおとなしい。

高知県のエンコウについてうまくまとめた説明でわかりやすい。中にはそこまで言い切つて良いの？というものもあるが、エンコウの特徴はここに集約されていると言つて良いだろう。次に、その約四〇年前の一九二五年にやはり高知を代表する郷土史家の寺石正路氏が『土佐風俗と伝説』（『日本民俗大系』第3巻四国、角川書店、一九七四年、二二四、二二五頁）に書いたエンコウの説明を見てみよう。



### 猿猴

土佐の国では、河童（又河児）を猿猴（えんこう）と称する。これは猿（さる）ということでない。水中に棲み頭に水皿があり、手に水蹴（さく）があり、小児など取って食うものである。即ち他国の河童である。高知城下の鏡川にて、ある時猿猴が人を捕らえんとして捕らえられ、天神（潮江天満宮で高知市街半分の氏神）の氏子ならば、向後は捕らえぬという条件で赦された。（後略）

『土佐風俗と伝説』は、柳田国男もかかわった炉辺叢書の一冊で、本書によって土佐の猿猴は全国区になっていったのではないかと推察される。橋詰延寿が「子供の肛門から手を入れて肝を抜く」と書きながら「えんこうは性質はまことにおとなしい」と書いているのに対し、寺石は「小児などを取って食うものである」と、猿猴の恐ろしさを率直に記している。

土佐の民俗学者・桂井和雄が一九四二年に『旅と伝説』第十五巻六号に発表した「土佐の山村の『妖物と怪異』」でも、エンコー（猿猴）は次のようにまとめられている。

猿猴の怪異は水のある土佐の到る處で言はれて来たものである。他の地方で言はれる河童で、手の長い者を猿猴のやうなど言ふのから推しても、此の怪物の姿はどうやら想像がつきさうである。昔は夏の水泳ぎの子供を深みに引きこんで、いど（肛門）をぬくと行って怖れ、その呪禁として輪切にした鹿の角を紐に通して肌につける風があったが、此の頃では珍しい事になって来た。

三人の郷土史家、民俗学者のエンコウ像をまとめると、

①水中に棲み、人や馬を害する。

②姿は猿をベースにしながら、頭に皿がある、手足に水かきがある、手が長いなどの特徴がある。左右の手は貫通しており伸縮自在である。

③キュウリが好物で、嫌いな物は鹿の角である。

などになるだろうか、他県で言う相撲好きという河童の性格は高知ではシバテンの役割になっているので、ここには出てこない。そういう差異はあるものの、エンコウとは全国で言う河童のことである、と言うのがこれらの文章の共通見解である。

以上の文献を見ると、昭和時代には土佐における河童系の妖怪はすっかりエンコウと呼ばれるようになっていたようだ（河童の相撲好きの性格を受け継いだ土佐のシバテンについては後述したい）。だが、江戸時代の文献を見ると、必ずしも土佐では河童＝エンコウでは無かった。

一七七五年に越谷吾山が編んだ『物類称呼』（岩波文庫、二〇一一年）には、「土佐國の土民は、ぐはたらう又かだらう又えんこうともいふ、其手の肱よく左右に通りぬけて滑なり、浚猴に似たるが故に、河太郎をもえんこうといふ」と記されている。

一八〇二年刊の小野蘭山による『本草綱目啓蒙』には、水虎の項目に、古河江戸奥州はカツパ、畿内九州はガハタラウなどといくつもの方言を記しており、土州（土佐）は「カダラウ」と河太郎系の異称を掲げている。その後には「ガハタラウ」とエンコウは「共同上予州大洲防州石州備後」とあるので、伊予などとともに土佐にもエンコウ呼称があったということらしい。エンコは「予州松山」とあり、エンコウ系の名前は愛媛県南部や中国地方、エンコは愛媛県松山地方に分布していることがわかる（小松和彦「河童 解説」、

二〇〇〇『怪異の民俗学3 河童』、河出書房新社、四二一頁。『物類称呼』にも、「周防及石見又四國にてえんこうといふ」とあり、江戸時代の土佐では、猿猴系と河太郎系の呼称があったことがわかる。おそらく、いつの間にか河太郎系の呼称が衰退し、猿猴が広がっていったのであろう。

本章では便宜上、江戸時代の記録と大正・昭和以降の記録を区別して紹介するが、いずれも当時語られていた話や情報の何らかの記録である点に変わりはない。筆者は、妖怪伝承は語りのレベルから①知識、②経験談、③世間話、④伝説、⑤昔話の5つに分類できると考えている（梅野光興「妖怪」をかたちづくるもの―幻覚の解釈学―小松和彦選歴記念論文集刊行会編、『日本文化の人類学／異文化の民俗学』、法蔵館、二〇〇八年）。

①知識は、どこそに〇〇が出る、〇〇とはこんなものだ、という情報で、エンコウ測にはエンコウが棲むと言われているとか、あの測に行くときエンコウに引き込まれるとか、盆に泳ぎに行くとエンコウに引き込まれるとかいう類の情報である。エンコウは鹿の角を嫌うという情報もここに含まれるだろう。

②経験談は語り手自身が体験した話、話者が自分はエンコウの姿を見たとか、泳いでいてエンコウに引き込まれたことがあるというように、調査者（記録者）が直接本人から聞いた話である。

③世間話は同時代の誰かの身の上起こった話で、話のリアリティは②の経験談と似ているが、話が間接的で、同じ村の某が先日こんな目にあつたとか、某所でエンコウに引き込まれて死んだ人がいるというレベルの語りはここに入る。世間話は「うわさ話」と思ってもらっても良い。

①伝説と⑤昔話は、②③が同時代の話であるのに対し、過去の話である。その中でも⑤昔話は「昔々あるところ」という語り口からわかるように、時間も場所も特定しない、おとぎ話、空想上の話として語られる話である。それに対し、④伝説は、村の実際の場所や家に結びついて語られる半リアルな話で、時代も限定できる場合も多い。③世間話が関係者がまだ生きている場合も多いのに対し、④伝説は既に経験者はおらず、検証できない過去の話である。これまで記録された河童や猿猴の話や記述はこのいずれかに分類されるはずである。

昔エンコウが馬を引きずり込もうとして失敗したという話でも、架空のこととして語られれば⑤の昔話になり、あの葉屋がとかあの寺の和尚がとか、具体的な場所や家に結びついた話は④伝説となる。以上の区分を念頭におきながら、次節では江戸時代の河童系妖怪の史料を見てみたい。

## 二、江戸時代の土佐の河童系妖怪

広江清編による『近世土佐妖怪資料』は、江戸時代から近代にいたる高知県の妖怪文献を概観するのに極めて便利な文献である（広江清編、一九六九、谷川健一編『日本民俗文化資料集成』第八巻妖怪 一九八八年、三二書房に収録）。同書には「河童」の項目があり、十五のエピソードが収録されている（次頁表参照）。

十五編を、先述した五つの項目に分類してみると、④伝説が四、③世間話が十一ある。④伝説のうち3つはエンコウ祭の由来譚なので、本章四節で検討することとして、本節ではそれ以外の③世間話に分類できる河童譚を見ていきたい。ちなみに、十五編の中で最も

近世土佐妖怪資料「河童」一覧表（表題は適宜付した）

1	河童が家中で妖をなす事	寛延元年	土陽陰見記談	③世間話	事例1
2	下田村で河童が馬を引く事	元禄年中	土陽淵岳志	④伝説	六章事例1
3	幡多郡藤ノ川で河童が馬を引く事	昔	白頭雑談	④伝説	六章事例10
4	幡多郡間崎で網に河童がかかる事	文政中	白頭雑談	③世間話	事例5
5	薊野村の郷土が薊野で河童に会う事	天保の初め	白頭雑談	③世間話	
6	猿猴祭／吸江の漁師、法師崎で川太郎を取る事		白頭雑談	③世間話	事例6
7	吾川郡仁ノ村の溺死者の墓に河太郎が泥を塗る事	宝暦6年8月18日	皆山集 (芳森日抄)	③世間話	事例2
8	幡多郡鍋島村の庄屋が四万十川大島でとらえた怪物	文政3年9月12日	三安漫筆	③世間話	—
9	千屋氏の人（現藻洲瀨）が水虎を助けて皿をもらう		三安漫筆	③、④	
10	伊与木郷の川太郎に似た人	天保辛丑 24才	三安漫筆	③世間話	事例7
11	猿猴祭は五台山の満慶和尚の修法起源	明和6年	皆山集	④伝説	六章事例7
12	松野尾安助の親友田内氏、介良で妖怪に憑かれる		皆山集	③世間話	
13	農人町の野村紋之丞、小さき坊主と相撲をとる	寛政文化頃	皆山集	③世間話	
14	幡多郡間崎辺で猿猴をとらえる	元文3年	大海集	③世間話	事例4
15	川登本村で猿猴にさそわれ二人溺死	安永5年7月16日	大海集	③世間話	事例3

古いのは、一七四六年の「土陽淵岳志」に収録された河童駒引譚である（第六章事例1）。登場する水の妖怪はエンコウではなく、「河童」と記されている。

次に古い一七五三年の「土陽陰見記談」（事例1）は、まず全国における河童の紹介に始まり、土佐の事例に言及している。当時、全国の河童情報が土佐に入ってきていたことがわかる事例として興味深い。以下いくつかの事例を引用するが、表題が無いものは筆者が仮につけた。

事例1 「河童が家中で妖をなす事」

狐狸の妖をなす事せ  
い人の知る所也。又河  
童の妖をなすハ狐狸よ  
りも甚しといへり。肥

筑の國中河童多しと云。又江州同し。人家に婚儀あること以前に日限相談するとき、是を知て河童先達而婚儀をなし人を迷ハす故に、蜜談ハ弓の弦をならして談す。然る時ハ河童野狐の類近付かすと云。又河童さゝけを嫌ふと云。村の童江州にてハ、さゝけを袋にしてさけると云。河童来て角力をせんと云時、我ハさゝけ飯を喰たり、いさ組んといへハ逃る也と、谷村藤馬物語也 近江出也

当国にもたま／＼河童有て、童部の命を取こと有。又家中にても家内に妖をなす事あり。先年末松務左衛門宅にて妖をなす事人知れり。委しき説をきかず。寛延元戊辰の年片岡佐八郎宅にて、父助太夫病死空中に、河童あれて礫をうち播鉢茶碗の類をくたく。夜一ト間を立きり四五人守り居るに、目前に石なくなる。其鉢臂の方より石出、或ハ膝の先より出る。爛鍋に酒を入れて置に、少の間に酒なくなる也。たしかなる事也。

（「土陽陰見記談」『土佐国群書類従』一四七）

事例1の河童は狐狸に近いもので、人間を迷わす（馬鹿す）存在と考えられている。近江では角力を好むとあるが、水中に引きずり込む性格は明記されていない。土佐で童の命を取ることがあると書いてあるが具体的になく、家の中の怪異現象が記されている。寛延元年（一七四八）の片岡佐八郎家で、父の助太夫が病死した際、その忌中に河童が石を投げて播鉢や茶碗などの割れ物を割ったという話である。単なるポルターガイストではなく、何らかの姿が見えたようで、臂や膝から石が出たと書いている。また、いつの間にか酒が少なくなつたともあり、一般的な河童のイメージとは異なっている。どうやら一七五〇年頃の土佐で、河童は新たな怪異として国外

から入り始めたようで、ポルターガイスト現象をその河童のしわざと解釈したのである。

次は宝暦六年（一七五六）に仁淀川で起きた溺死事件である。

### 事例2 吾川村仁ノ村の溺死者の墓に河太郎が泥を塗る事

吉本虫雄か芳森日抄云、宝暦六年八月十八日吾川郡仁ノ村百姓文作と云者家僕、二十六歳新居村人、馬の草刈二舟にて行しか、艫をしはつし溺死す。これにつれて色々不思議の事あり。（中略）河太郎二取られし事と沙汰也。河太郎二とられたる者の墓ハ、泥にてぬると云伝ふ也。果して右の者の墓を泥にて毎夜ぬりし也。去年西畑の松本十左衛門殿家来此河にて溺死候。此ものゝ墓をもぬりしと云。若き者とも大勢番をして居たれとも、いつの間二ぬるともしらさるよし也。（『皆山集』六二）

事例2では河童ではなく、「河太郎」と呼んでいる。『物類称呼』『本草綱目啓蒙』の「ダハタラウ」「カダラウ」に近い。水中で人命を取るの現在の河童と同じであるが、溺死させた人の墓を泥で塗るといのは他の文献に見ない。見張りをしているもいつの間にか塗るといふから、河太郎の仕業と考えていたのだろう。仁ノ（に）や西畑（さいばた）はいずれも仁淀川河口付近の集落である。

仁淀川で河太郎が活動していた一八世紀の半ば、幡多の四万十川中流域では猿猴の活動が見られた。一七七五〜一七七七年にかけて著されたと考えられる『大海集』には、安永五年（一七七六）頃のこととして次のようなエピソードが記されている（原文要約）。

### 事例3 川登本村で猿猴にさそわれて二人溺死

世の中に不思議な話は色々あるが、直接聞かないと誠のようでない。川登本村は私の在所だが、安永五年七月十六日に、紺屋の益右衛門が長男・平蔵と次男の伴蔵の三人で藍を刈りに行った。藍を担って帰る途中、ヨバという川で伴蔵が藍を降ろし、大川へ水浴びに行った。向いはひじり山の淵という魔所だった。十尋ばかりの深い逆渦があつて、その渦に巻かれた。「助けてくれ」と呼ぶや否や兄の平蔵は飛び込み助けようとしたが、たぶさを取って三度引いたが上がらない。後から父の益右衛門が（泳いで）来て「伴蔵は？」と問うと、「沈んでしまった」と（平蔵は）答えた。益右衛門は力を落としてすぐに沈んでしまった。平蔵は力なく、ようやく泳ぎ上がって助かった。益右衛門と伴蔵は死んでしまった。益右衛門はその日死骸が上がったが、伴蔵は二日後の十八日明六つに向こうのひじり淵に浮き上がった。腰から上に立ったように、大きな水音がして上がったところを取り上げた。不思議なのは十六日の昼四ツ時に二人は死んだのだが、同じ時、近くの利岡村井上七右衛門の姉が病死した。その時姉が言うのは「はや参そ少まちてくれ」と戯言に行った。側にいた人が、「何を言っているんだ、人は来ていないよ」と言ったのに対し、姉は「そのの椽（たるき？）んに川登の人二人来りさそひしよ」と言った。姉が亡くなった時刻は、益右衛門親子が水に入った時刻と平時ばかりも違わず、姉は後に死んだ。世に信州善光寺へ行くといふのも本当だ。川登より利岡は、子より丑刁に当たる。信濃国に連れ立つて行ったものだろう。「ただし、益右衛門伴蔵は猿猴のさそひなる由也」。（『大海集』『南路志』一一六）

『大海集』は、続けて、益右衛門が亡くなった後、ひじり山で毎夜太鼓を打つ音が聞こえたこと、特に雨の夜に打つこと。その場所が昔、ひじりを殺して聖神として祭った場所であることなどと記している。

事例3は益右衛門親子の水難事故のレポートである。誰もエンコウが益右衛門を引きずり込む様子を見たわけではない。ただ「益右衛門伴蔵ハ猿猴のさそひなる由也」の一文があることで、この不幸な出来事がエンコウの仕業と解釈されることがわかる。溺死という現実の事故を河童や猿猴のしわざと解釈することは事例2と同様である。

また、この事故が起きたのが七月十六日であることにも注目したい。後述するように盆の十六日は山や川に行つてはならないという日であり、一部の地域ではそれをエンコウに引かれるからだと言っている。文章では明言されていないが、同じ俗信があったのかも知れない。

次は、深夜何か得体の知れないモノに出会い、河童の仕業とされた話を紹介しよう。

#### 事例4 薊野村の郷土が陽貴山の近くで河童に遭つ事

薊野村ニ西田喜右衛門と云郷土有。比島村ニ講会と云事有りて、暗夜深更ニ及歸るに、陽貴山前橋の前後にて、行先ニ何やら立塞る者有。いかなる者にて往來を防(妨)るそと声を掛けとも、答せずしていよく狼藉甚しけれハ。刀抜払ひ振りく行ハ、後へ廻り何やら冷やかなる物を肩や首筋ニ打懸りけれハ、刀を納め酒力旁にて右の品を奪取、家に帰り火にてミれハ、杉櫨の生皮なる

が、幾年か淵ニや沈ミけん、泥噓き事いふ計なし。されハ河童が陸揚して、かゝる業セしものそとて、其品今も家ニ所持して、所望すれハ人ニ配分しけり。天保の初つかたの事にて、予もミたりし。  
〔白頭雑談〕『皆山集』(六一)

夜道で怪しい物に出会ったという話で、単なる水の事故に比べればこれこそ怪異というべきだろうが、これとて相手ははっきり姿を見せているわけではない。河童の仕業というのはあくまで推測に過ぎないが、それだけに江戸時代の人々の怪異体験がリアルに記述されているのではないかと思う。

『近世土佐妖怪資料』には、実際に怪物と格闘したり相撲をとつたりする話も記されている。だが、目撃者の話では相手の妖怪は見え、一人で暴れているのである。そうになると、妖怪の体験談といつても個人の幻覚である可能性が大きいのかも知れない。

だが次の場合はどうだろう。事例5の7は、猿猴(あるいはそれらしき怪物)を実際に捕まえたという記事である。記述は詳細で、ある意味リアリティがある。最初に事例3より四十年ほど昔、元文三年(一七三三)頃の話をご紹介しよう。

#### 事例5 幡多郡間崎村周辺で猿猴をとらえる

元文三年の頃とや、幡多郡間崎辺にて猿猴を捕て、中村郡奉行谷嶋十四郎殿先遣藤本佐左衛門勤の刻、御役所へ持出是を見る者予か親類也。承るに大サ三才計の童子にて、身のうちハなまづのやうにぬめる。手はたたいきぬけ也。眼面形ハ猿の如く、手は猿の如にして長キ爪あり。両足ハ人の足の如くなれとも、前の方に爪三ツあり。きひすに爪壱ツ有。顔ニしやくまのやうに見して、

尤面目猿のやうに赤くハなく、なまづはたなり。ゑじきには鯛を遣候処、引さき喰ふ也。猿猴は川童子とひとしく、川太郎ハ獺の年を経て成と聞。川などにてわさをする事度々也。

〔大海集〕『南路志』一一六

事例3の益左衛門親子の溺死事件における猿猴が姿も見せないのとは真逆で、猿猴という生き物自体を捕まえたという驚くべき内容である。その記述は詳細で、『大海集』の著者の親類が目撃したという点もリアリティを高めている。大きさは3歳の子どもぐらゐで、体はナマズのようにぬめぬめしている、だが額や手などは猿に似ており、足は人間のようだが前に爪が3本、後ろに1本とある。手が「行き抜け」とあるのは、河童の手が左と右がつながつており一本だということだろうか。だが頭の皿は記されていない。この文章の著者は、エンコウ（猿猴）と川童子は同じものだが、川太郎はカワウソの年を経た物で、川太郎と猿猴（川童子）は別の生き物としている。河童（のような怪物）を捕まえたという話は文政年間にもあった。

一つは岡本真古（一七八〇～一八五六）の筆録（『三安漫筆』）で、文政三年（一八二〇）秋九月十二日九ツ半時、幡多郡鍋島村庄屋兼松多助が、四万十川大島六町島ノエゴという所で、ぼら網にかかつて捕まえたという怪物の特徴を事細かに記録している。それによると、背丈は約二尺五寸、頭は約五寸、手足は約一尺五寸で亀の首のように伸び縮みする、指はカエルの手足に似ている、顔は猿に似て色は白い、体全体や手足に毛がはえているが、顔には毛が無い、頭上に少しはげたようになっていて、たいへん生臭く、網を干していたらその臭いを人が怪しむくらいだ、などかなり具体的に記している。そして川へ戻したが、急に飛び入らないので抱いて川へ入れ

た。三間ほど向こうに浮き上がり、顔だけ出して四方を見て沈み、もう浮かび上がることは無かった。察するに助命のお礼ということだろうか、とある。

河童を実際に捕まえた話は、稲毛実（一七八六～一八六九）の「白頭雑談」にも記されている。場所が間崎で事例5と同じ話かと思うと、年代は文政年間（一八一八～一八三〇）で百年近く後のことである。

#### 事例6 幡多郡間崎で河童が投網にかかる事

文政中にや、幡多郡中村に南間崎と云所にて、投網にて河童を得たり。庄屋か坪に繋ぎ諸人に見す。色青く毛もなく只迂りくつてサイの固りたる者のことくにて、四足共二水かき有。眼底にてギロくくと光り、陸にてハ至てドン成る也。終日さらし、是も又以来人間二害をすましき由を云付、川二放ちやりしと。其日官遊したる谷田斧八語れり。

〔白頭雑談〕『皆山集』六二

事例6は文政年中で、「三安漫筆」の文政三年と年代は重なるものの、地名や特徴は微妙に異なる。どうも、これらの話もリアリティはあるが、やはり世間話の類だったようである。江戸時代の土佐では、エンコウを捕まえた話は一つの定番だったようで、高知から遠く離れた四万十川河口だけではなく、現在の高知市街からも報告されている。

#### 事例7 吸江の漁師、法師崎で川太郎を獲る事

又一年吸江の漁師某、法師崎にて夜網二川太郎を打込、引あげし二生グサキ噫気堪かたく、且ネハリ甚敷て、水獣を放やりて、

投網は翌日より谷川にてさらし、日を経て漸くネハリも悪唳も去ありとぞ。樽見の住山崎氏語りし。  
〔白頭雑談〕

これらの話に共通するのは、事例5では郡奉行、事例6では庄屋、事例7では「樽見の住山崎氏語りし」といったように、政治的な權威や具体的な人名が登場し、信憑性を高めようとしていることである。河童を捕まえた話は、河童なんているのだろうかと思う当時の土佐の人々に対し、やっぱりいたのか、と認識に揺さぶりをかけたに違いない。

もう一つ、この水の妖怪のリアリティを感じられる話を紹介しよう。

#### 事例8 川太郎の子ども

伊与木郷に女性が川太郎と交わって生まれたという男子がいて、川太郎に似ていると評判だった。大庄屋安沢義三郎の子ども次太郎は、天保辛丑年には二十四歳だったが、顔は猿に似て、体には毛が無く、頭に髪の毛がなかった。向齒は5、6片あって錐のように尖っていた。水にもぐると息がたいへん長く、淵に引つかかった釣り針を約二〇メートルもある水底に潜って取って来たり、川の上流から二町ばかり下流まで潜って泳いだというエピソードが記されている。義三郎の妻は他郷の生まれで、故あって離別したと聞く。義三郎自身もとは田ノ川から来た者で、昨年また別の所へ遷ったと言う。(要約) (岡本真古「三安漫筆」)

事例8は、端的に言うとも川太郎に似た人がいたというだけの話で

ある。猿に似て、頭や体に毛が無く、しかも水潜りが得意なので、きつと川太郎の子どもだろうとされたわけである。その背景には、四節で述べるように、幡多地方のエンコウが女性と交わり、子を産ませるといった考え方があったことも関わっている。

以上見てきた『近世土佐妖怪資料』に収録された世間話的な話は、いずれも不思議なリアリティをもっている。益右衛門親子の溺死事件では猿は最後まで姿を見せない。間崎で見つかった猿は、人間と会話するわけでもなく、いかにも実在の動物めいた姿を見せる。そして伊与木の川太郎に似た人も、親の川太郎が姿を見せるわけでもない。江戸時代の土佐の人々の現実には、想像上の存在である河童、猿、川太郎は入り込んでいったのである。そして、エンコウという名前や特徴が現代ほど確定・固定化していないことが断片的な資料からもうかがえる。

### 三. 「土佐化物絵本」に見る

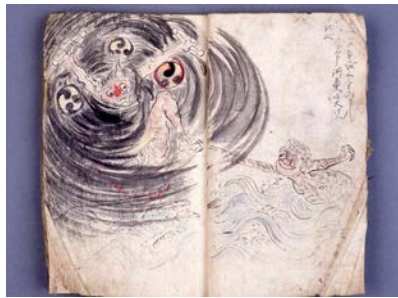
#### エンコウとシバテンの姿

本節では、江戸末期から明治初期の土佐人がエンコウやシバテンの姿をどのような姿にイメージしていたかという一つの例として、高知県立文学館が所蔵している「土佐化物絵本」(仮称、上下2冊)「絵本集艸」「新先生一代記」の四冊の冊子を取りあげてみたい。

これらの冊子は高知市在住の個人が所蔵していた物で、二冊は無題、残りの二冊は「絵本集艸」「新先生一代記」と題されている。いずれも彩色された絵と文章で構成されている。「新先生一代記」は新先生という奇人の一代記という設定で新先生の奇行や冒険



「土佐化物絵本上」19話



「絵本集艸」7話



「絵本集艸」4話



「土佐化物絵本」下47話



「土佐化物絵本」下7話



「土佐化物絵本上」31話



「新先生一代記」9話



「土佐化物絵本」下47話

画像：高知県立文学館提供

の数々が描かれているが、他の三冊は歴史的出来事や奇怪な話を集めたもので、必ずしも妖怪譚だけではないが、多くの妖怪が登場することから無題の二冊を「土佐化物絵本」と仮称し、便宜上「上」「下」とした。製作年代は不明だが、「新先生一代記」には「嘉永三年（一八五〇）」、「土佐化物絵本」上の巻末に「明治己酉年十一月吉日」「維時□□拾三辰菊月上旬」、下には「維時□□年九月吉祥出来穂」などの年号が見える。「明治己酉年」は十二年、「十三辰」は明治十三年とすると、制作は江戸時代末から明治前期と見て良いだろう。この四冊はちょうど近世と近代をつなぐ資料とも言える。

同資料に見える河童系妖怪の話は次の七話である。

「絵本集艸」4話 天保七年、新改のくれが淵で子どもがエンコウに襲われる

「絵本集艸」7話 安政二年、雷と河童の大けんか

「土佐化物絵本」上19話 入野村大釜の淵に落ちた雷とエンコウのけんか

「土佐化物絵本」上31話 大黒隼人、河童から骨接ぎの妙薬を聞く

「土佐化物絵本」下7話 久次村の山伏、ビシャモン滝で雨乞い

「土佐化物絵本」下47話 山田野地町の大黒屋友右衛門、ウワ野の辻でシバテンと角力をとる

「新先生一代記」9話 ひらい山で芝天狗と相撲

「集艸」4話 は、子どもがエンコウに引き込まれそうにな



るが何とか助かったという話。だから子どもは一人ではその淵へは水浴びに行かないし、あやまって一人で行くと河童に「いとす」（いどす・肛門のこと、『高知県方言辞典』による）を引き抜かれると警告する。物語性が無く、時代や固有名詞も書かれていないので、①知識に相当する。エンコウと河童と両方の名前が併用され、手やお腹以外の全身にマダラ模様があり、右手が長く伸び、頭には文字通り皿を載せた姿で描かれている。

「集艸」7話と「絵本」上19話は、同じ出来事を取りあげている。「集艸」7話は安政二年と時代が、「絵本」上19話は入野村の大釜の淵と場所が特定されている。これも片や「河童」、片や「エンコウ」で、河童とエンコウの名前が交錯する。絵の構図は異なるが、「集艸」7話の河童は、同じ「集艸」4話のエンコウ（河童）と同じ頭に皿が載ったデザインで描かれているのに対し、「絵本」上19話のエンコウは雷との戦いで起こる風や水の表現で頭の部分が見えなくなっている。

「絵本」上31話は、河童駒引譚である。お礼に菓の製法を教えるタイプである。主役はエンコウではなく河童で、その顔立ちは「集艸」のエンコウ（河童）と同じだが、マダラ模様はお腹も含めて全身に描かれ、腰蓑を着けた人間のような体型に描かれている。頭の皿は、直接的に皿を載せた表現ではなく、頭頂部に髪が無い姿に描かれており、髪は赤毛である。

河童あるいはエンコウの名前が明記されるのは実は以上の4話で、「絵本」下7話は、河童（エンコウ）のような怪物が描かれているが名前は記されていない。内容は、久次村の山伏が甫喜山郷ビシャモン滝で懸命に雨乞いの祈りをして、怪物に首筋をつかまれたという話である。山伏は、何とか雨を降らしてくれないか、と頼む

と、三日三晩の大雨になったとある。怪物は、頭頂部に円形に髪が無く、滝の中から長い手を伸ばしており、どう見ても河童（エンコウ）である。

「絵本」下47話と「新先生一代記」9話には、シバテン（芝天狗）が登場する。顔立ちはエンコウ（河童）と異なるものの、全身にマダラ模様があり、腰蓑らしきものを着け、頭に皿（「新先生」9話では皿らしきもの）を載せる描き方はエンコウに準じている。

そして「新先生一代記」に何と登場人物である新先生からの絵についてのダメだしまで書かれている。作者が描いたシバテンの絵に、新先生はこれはエンコウというもので、シバテンではない、と文句を言っているのである。

新先生、ひらい山において、芝天狗に角力を望まれ、智計鯉ふしを吹き掛、危難をのがるる

（芝天狗）「おんしわなまくさい、もふ角力わよしにしよふ」

（新先生）「おゝなまくさいとも、鯉ふしをしかとかんておかけに、其上赤岡の長木屋の上酒を二・三升ひつかけておるぞ。アプウ、アツプウくくく」

此画を新先一見し、難していふ、「此画わ、片手長く、片足も亦長し。そして、あたまに皿をかつく」「非す、えんこふといふ者也。我、角力」「に非ス、背長キ三尺に不過」「なる者成し、此画」「一笑」「」

絵は、ふんどし姿の新先生が顔を真っ赤にしてツバを吹き付けている左側に、左手と左足を縮め、右手と右足を伸ばした芝天狗が描かれている。腰まわりに蓑を付け、頭には皿のようなものが乗って

いる。確かに「絵本集艸」のエンコウに似ている。この絵に対し、新先生は、「このシバテンは、片手片足が長く、頭に皿が載っている。これはエンコウというものでシバテンではないぞ」と非難している。だが、この絵本の作者は基本的にエンコウとシバテンは同じものとして描いている。

「新先生一代記」の製作は嘉永三年頃と考えられるが、この頃芝天狗という妖怪が存在したこと、そのイメージはエンコウと似たようにとらえる者とエンコウとは違う姿でとらえる者がいたことがわかる興味深い資料である。

本来妖怪は語りを聞いた各人が想像するもので、現代のような明確なビジュアルイメージは無かった。姿の無いものを絵にする時、どのような齟齬が生じるかを記録したという点でも面白い資料だ。

なお、「土佐化物絵本」では「シバテン」と表記されている。幕末年号のある「新先生一代記」では「芝天狗」だったのが、明治十二、十三年頃の年号の「土佐化物絵本」では「シバテン」となっているのは、「芝天狗」が「シバテン」に変わる変化も物語っているのかも知れない。

#### 四・民俗伝承のなかのエンコウ

本節では主に明治時代以降に記録された高知県のエンコウ(河童)伝承を紹介したい。本章の始めに述べたように、昭和時代になると「土佐では河童はエンコウと呼ばれる」と郷土史家や民俗学者が明言していく。だが二節で見たように、江戸時代の土佐では河童とエンコウは入り乱れており、統一されている感じはない。一体いつ頃土佐の河童はエンコウ呼称に一元化していったのだろう。

明治時代前期のエンコウの話が寺田寅彦の随筆「重兵衛さんの一家」に書かれている。寅彦は明治十四年(一八八一)、四歳の冬、高知市小津に転居しており、隣に住んでいた重兵衛から、北山の法経堂の怪火(けちび)や、荒倉山の狸が三つ目入道に化したのを武士が退治した話や、しばてんと相撲をとる話、えんこうを釣る話などを聞いたと書いている。高知市にいた重兵衛さんの語るエンコウの話は次のようなものであった。

夕涼みに江ノ口川の橋の欄干に腰をかけているとこの怪物が水中から手を延ばして肛門を抜きに来る。そこで腰に鉄鍋を当てて待構えていて、腰に触る怪物の手首をつかまえてぎゅうぎゅう捻じ上げたが、いくら捻じつても捻じつても際限なく捻じられるのであった。その時刻にそこから十町も下流の河口を船で通りかかった人が、何かしら水面でぼちゃぼちゃ音がしていると思つてよく見ると、一匹の「えんこう」が、しきりにぐるぐると廻転運動をしているのであった。つまり「えんこう」の手は自由自在に伸長されるもので、こんなにも長くなり得るものだという事が、この「事実」で説明されるというのであった。

(寺田寅彦「重兵衛さんの一家」千葉俊二・細川光洋編『寺田寅彦随筆選集 怪異考／化物の進化』、中公文庫、二〇一二年、四八頁)

この話は江ノ口川が登場するものの、どこの橋かとか、時代や人名は明らかではなく、④伝説というより⑤昔話的な話である。手が長く伸びるという特徴とともに、「えんこう」の名前は既に定着しているようだ。

「重兵衛さんの一家」は昭和八年（一九三三）に『婦人公論』に掲載されているが、寺石正路の『土佐風俗と伝説』が一九二五年、桂井和雄の「土佐の山村の『妖物と怪異』」が一九四二年なので、この頃から、活字媒体によってエンコウの名前が定着していったことが分かる。そして戦後になると、民俗学者の報告や市原麟一郎率いる土佐民話の会、市町村の民話集などによってエンコウの記述は増大していく。本節では、それら膨大なエンコウ話の中から代表的な物をいくつかのテーマに分けて紹介したい。エンコウ伝承は実に多様だが、やはり、①知識、②体験談、③世間話、④伝説、⑤昔話の5つに分類できる。

まず、④伝説として語られるエンコウ話の代表である駒引伝説を見てみよう。

(1) エンコウ駒引伝説

駒引型は、エンコウ（河童）が馬を水中に引き込もうとして失敗し、命乞いをし、お礼をするという話で、河童が何をお礼にするかでバリエーションが生まれる。高知県内では代表的なお礼として、a. 村人に危害を加えないことを約束する、b. 川魚を届けるようになるが、鉤を鹿の角に替えたら来なくなる、c. 傷薬の作り方を教える、の3パターンがあげられる。ちなみに命乞いのかいもなく殺されてしまうという話もある。代表的な事例を『日本伝説大系』（第十二巻 四国編、福田晃編、下川清・福田晃・松本孝三、みずうみ書房、一九八二年）の要約で紹介してみよう。最初は、a. 村人に危害を加えないことを約束するパターンである。

事例1 大門のえんこう（香美郡土佐山田町）

旧蚊居田村の善勝寺の大門の前に新改川が流れており、そこに大きな淵があつて猿猴が住んでいた。ある日、隣の陶村の百姓が、この新改川で馬を洗っていたところ、大門の猿猴が馬の手綱を体に括って深みに引き込もうとしたが、逆に馬に引き上げられてしまった。百姓は猿猴を善勝寺の和尚に引き渡すと、和尚は川筋で悪さをしないことを阿弥陀さまに誓わせて帰した。それ以来、大門の猿猴は悪さはしなくなった。

（はなし 岡林華伝、採集 宮地寛）

『日本伝説大系12 四国』二五一頁による要約。原典は、土佐山田町史編纂委員会『土佐山田町史』、土佐山田町教育委員会、一九七九年、一〇三五〜一〇三七頁）

このパターンの県下の代表例は、河童（猿猴）を祀る神社として有名な稲生の河伯神社の由来譚であろう（第六章で紹介する）。ここでもお寺の和尚が河童を助命することになっている。『日本伝説大系』によると他に、芸西村和食、大豊町穴内、佐賀町に類話がある。次は、b. 川魚を届けるようになるが、鉤を鹿の角に替えたら来なくなるパターンで、『日本伝説大系12 四国』を見るかぎり、このパターンが最も多いようだ。

事例2 檮原の猿猴（高岡郡檮原村）

庄屋の下男が、小川のそばの柳樹に馬を繫いでおいたら、猿猴が出て来て、馬の綱を自分の体に巻き付け、馬を川中に引き込もうとした。馬がはね回って、猿猴を引きずって庄屋の家まで来たので、庄屋は猿猴を刀で殺そうとした。猿猴は平あやまりにあや

まったので、詫び証文を書かせて帰したところ、翌朝から門の鉤にたくさんの川魚をかけるようになる。そのうち鉤が腐つて来たので、鹿の角に替えたら、それからは川魚を吊さなくなった。（『日本伝説大系12 四国』二五二頁、二五三頁による要約。原典は、寺石正路『土佐風俗と伝説』、『日本民俗誌大系 第三巻 中国・四国』、角川書店、一九七四年、一三四頁所収）

この事例は「庄屋」がどこの誰か曖昧で、どちらかと言えば⑤昔話に近い。類話として香北町、大豊町豊永、南国市、大川村川崎、日高村宇井、佐川町松ノ木、檜原村、土佐清水市小方、同貝ノ川の事例が『伝説大系』に掲げられている。

三番目は、c. 傷薬の作り方を教えるパターンである。このタイプは実際に薬を販売している店の由来譚として語られる場合が多い。高知市や佐川町などにも伝わっているが、県内では四万十町（旧窪川町）川角かわつのが有名だった。現在も子孫が薬局を経営している。

### 事例3 金草の由来（高岡郡窪川町）

天文の頃、武田家の先祖長井対馬守という者が厨で馬と猿猴が争っているのを見て、猿猴の腕を切り落した。猿猴は切られた腕を乞い、六月土用の丑の日に河瀬でお目にかかってお礼をすると言うので、それを返してやる。約束の日、猿猴は腕を元通りに継いでやって来て、金草という河瀬に生ずるものによる傷継ぎの秘伝を教えた。これが武田家伝の猿猴流傷薬のはじまりである。（『日本伝説大系12 四国』二四二頁による要約。原典は廣田瑞山編『窪川郷土史談』、一九六二年、一四一、一四二頁）

以上で河童駒引譚の代表的な三つのパターンを紹介した。同様の伝説は高知県はもとより日本全国に分布しており、各地で実際に起きた出来事として伝承されている。しかしながら、河童が馬を引き込んだり、和尚に人間の言葉で詫びを入れて泣いたなどという出来事が現実には起きたとは考えられない。同じ話が全国各地に広がっているのも奇妙である。

柳田国男は同じ伝説が日本各地に分布する理由のひとつとして、旅の宗教・芸能者が運んだものではないかという仮説を立てた（柳田国男『伝説』、『柳田国男全集7』、ちくま文庫、一九九〇年）。小松和彦は地域の宗教者が託宣によって物語が事実として地域に定着するプロセスを論じている（小松和彦「悪霊憑きから悪霊物語へ憑霊信仰の一側面」『悪霊譚』一九九七年、ちくま文庫）。これらのエンコウ（河童）伝説では寺や薬屋の存在が注目される。

河童と仏教の組み合わせは意外だが、実は河童と寺院は関わりが深い。土佐でも、五台山（竹林寺）の満慶和尚が井上某の内室の怪病を水虎のしわざと見破った（『皆山集』第六章事例7）り、赤岡町の与楽寺の住職が、馬に手を出した河童を論じたり（芸西村和食の伝承、寺石正路『土佐郷土民俗譚』）と少なくない。香美市土佐山田町の善勝寺（事例1）や南国市稲生の延福寺（第六章一）も同様である。全国的に言う御仏飯を食べると河童に引かれられないという俗信も、仏教と河童の関わりを感じさせる。

これらの寺では、河童の害を鎮めたことが良い宣伝になったことだろう。河伯神社では祭りのたびに、河童駒引の伝説が僧侶や地域の人々によって繰り返し語られたに違いない。また、これらの河童たちが、漂須部や河伯や水虎のような小難しい名前をつけられているのも知識人の僧侶の関与を前提とすれば納得できる気もする。

河童駒引譚を宣伝に利用したのは寺院だけではない。事例3は、四万十町（旧窪川町）川角の薬屋で、今でもエンコウから習った薬の製法を伝えている。河童から習った薬は全国各地に分布している（立石尚之「河童伝承に由来する家伝薬」、国立歴史民俗博物館＋常光徹編『河童とはなにか』、岩田書院、二〇一四年）。事例2の庄屋は、地域の有力者が水界を司る者と関係をもっていたことを語る伝説のバリエーションの一つと考えられる。

河童伝説を宣伝に利用する際都合が良いのは、この話が検証しよ  
うのない過去の出来事だと言うことである。ちよつと信じられない  
ような話でも、昔ならそんなこともあったかも知れないという過去  
に対するイメージが、同じ物語がいろんな場所で語られることを助  
けている。

ただ河童駒引譚が必ずしも宣伝にだけ使われているわけではない  
こともふれておこう。事例4はエンコウを殺してしまうパターンで  
ある。

事例4 馬に蹴上げられたエンコウの話（土佐市永野）

石田の下の深淵に猿猴がいて、夜など、時おり娘たちにいたず  
らする。あるとき、村の百姓が洩で馬を洗っていると、猿猴が出  
て馬の尻尾をつかんで深みに引き込もうとする。馬が飛びあがる  
と、猿猴も陸にはね上げられて、ウイゾノウウイゾノウと呼んだ  
ので、村人はこれを叩き殺した。それからこれを有為ヶ淵と呼ん  
だ。

〔『日本伝説大系12 四国』二五二頁による要約。原典は『戸波  
村誌』、桂井和雄『土佐の伝説』第二巻、高知県福祉事業財団、

一六四、一六五頁）

事例4では、猿猴は殺されてしまい、人間に何も残していないよ  
うに見える。だが、ここでは猿猴がウイゾノウと言ったことがポイ  
ントで、有為ヶ淵の地名起源伝説になっているわけである。同様の  
話は第六章で紹介する日高村のえんこう地蔵の里にもあり、そこ  
では集落名が「宇井」となっている。

では、殺されてしまう場合は宣伝に使えないかと言えばそうでも  
ない。事例5を見てみよう。

事例5 馬を盗み損ねた猿猴（吾川郡伊野町柳瀬）

柳瀬川中流で、庄田の百姓が馬を洗っていると、近くの深淵の  
猿猴が馬の手綱を取って深淵に引き込もうとする。馬は驚いて川  
岸にはね上がると、猿猴が河原に引き上げられた。百姓は棍棒で  
なぐり殺したが、八幡寺で供養して猿猴の墓を建てた。（『日本伝  
説大系12 四国』二五二頁による要約。原典は明神健太郎『高吾  
北文化史』第二巻 伝説と実話篇、一九六三年、三六八〜三六九頁）  
殺された猿猴の墓はしっかり八幡寺で祀られている。伝説の筋書  
きはかくも自在なのである。

(2) キュウリを好むエンコウ

エンコウの好物と言えばキュウリと相場が決まっている。高知県  
内のエンコウ譚の中には、馬を引き込む代わりにキュウリを盗む話  
があるので、紹介しよう。四国山地の奥地・大川村の話である。

## 事例6 「えんこうとキュウリ」(大川村川崎)

昔、川崎のいの谷で、キュウリが食べられてしまうという出来事があった。見張りをしていたが、どうも人間ではないようだ。キュウリが無くなった朝には、軒にかけていたカゴに魚が一杯入っていた。ある晩畑を見てみると、子供のような影がちよろちよろして、走り寄ると川に飛び込んで逃げた。どうもキュウリ泥棒はエンコウだったらしい。魚はキュウリのお札だった。ところがある日カゴを吊り下げたカギがくさって折れたので、鹿の角を代わりにした。すると、それから魚が来なくなった。エンコウは鹿の角が嫌いだっただ。昔は、子供が水泳に行く時は、エンコウに水の中に引っ張り込まれて肝を抜かれんように、禪に鹿の角を付けた。(はなし 近藤清子)

(要約)

(大川村民話等収録編纂委員会『大川村民話集』、大川村教育委員会、一九九四年)

魚をお礼に持って来て鹿の角に代えたらそれが止むという部分は、河童駒引譚のbパターンと同じだが、この話には馬を川へ引くくだりは無く、捕らえられて助命を乞う展開も無い。伝承地の川崎村は寛保三年の郷村帳で、家数17、人数95の村だが、牛馬はいない(『角川日本地名大辞典』)。牛馬の飼育が無かった山深い地域なので、馬を川に引き込むのではなく、キュウリ盗みを選ばれたのかとも思ったが、瓜を盗むエンコウは平地の佐川町でも伝承されているので、これは当たらない。他に、仁淀川町(旧吾川村)名野川、そして愛媛県久万高原町(旧柳谷村)などの仁淀川流域にキュウリや瓜を盗むエンコウ(エンコ)がいる(『日本伝説大系』十二巻、『日本昔話通観』第二二巻 愛媛・高知、同朋舎、一九七九年)ので、地

域性かも知れない。

石川純一郎の『新版 河童の世界』(時事通信社、一九八五年)によるとキュウリを盗む河童の話は、県外では岩手県、新潟県、熊本県などに分布している。

## (3) 相撲をとるシバテンとエンコウ

河童の特徴として全国的に共通するのは相撲好きである。夜道に現れて相撲を挑むのである。だが、高知県では相撲を好む妖怪にシバテンがいる。県中部では、水中にいて人馬を引き込むエンコウと陸上のシバテンは別物だとされ、分業体制になっている。しかしながらシバテンは県内全域にまんべんなく広がるわけではなく、地域的な偏りがある。シバテンがない所ではやはりエンコウや他の妖怪が相撲を挑むことになっている。また一部の地域では、エンコウとシバテンは同じもので、季節によって冬はシバテン、夏はエンコウと入れ替わるのだというから、さらに混乱していく。本節では、シバテンもエンコウを考える上で重要な妖怪と位置づけ、その伝承を探りたい。

まず、シバテンの活動地帯である高知市や南国市などの香長平野、芸西村などの実態を見てみよう。

高知市郊外の旧大津村の伝承が、橋詰延寿「田辺島のエンコウとシバテン」(『大津村史』、大津村役場、一九五八年)に記されている。まず、エンコウについては、「田辺島の川にはエンコウがいた」とあるが、一般的な説明の後、国分川岩ヶ淵でエンコウ祭りをして、出合ったという話はない。それに対し、シバテンについては具体的

な場所に出現したとの話が記されている。『大津村史』の記述を『わたしたちの大津』とあわせて紹介しよう。

#### 事例7 高知市大津田辺島のシバテン

田辺島の南方の長場ながばえ江堤防の出分の水門と堤防へあがる遍路道のあたりにシバテンが出る。シバテンは、木の葉天狗のことである。シバは木の葉のこと、テンはテングの略である。小天狗といつてもいい。身体に木の葉をつけている。身体は子供位いで相撲が大すきで、夕暮時通行人にいどみかゝって相撲をとる。女、子供は悲鳴をあげてにげるが、腕におぼえのある大人は、「こんな子供が何をいうか。ひねりつぶしてやるぞ。」と、相手になる。すると、なげつけてもなげつけてもいくらでも飛びついて来て、最後には大人がへとへとになって負ける。大津のシバテンもなかなか相撲すきで、行人人が、堤防下の池へ投げ込まれてホウホウのていで逃げ帰ったと伝えている。なおこのシバテンは、なかなかの清潔すきで相撲の時、手にツバをつけると大変きらったということである。シバテンは、長場江堤防の二カ所ばかりでない。水張堤防の中ほどの「底ゆる」にもいた。高須村（今の高知市高須）島からモミスリ仕事で、田辺島に転住していた松村松太郎さんが、このシバテンと相撲をとった。今から四十年ほど前のことである。松太郎さんが、夕方、堤防を通っていると、子供のようなシバテンが相撲をとりに来る。相手になって投げつけると「底ゆる」の方へ投げこんだ。松太郎さんはそれを追って、底ゆるにもぐり込み、ぎつちり相撲をとった。或る、おぼあきんは、「身体が一只ばあの小男が、私の前をチョコチョコ歩きよつてのーし、ありゃシバテンちゃということではびっくりしました。」

という話もある。

（橋詰延寿「田辺島のエンコウとシバテン」『大津村史』、大津村役場、一九五八年、三九六―三九八頁）

エンコウやシバテンが出たという田辺島の岩が淵は、食べ島、おたべ島とも言い、太いムクの木と地蔵があり、よく人が溺れ死んだと言う。また、野島清子さんの話では、北浦から田辺島に続く今土居堤防のあたりでもシバテンが出たという話を聞いたと言ひ、舟入川も戦後の改修前は、大きな曲がりや、楊、草木の茂った淋しい所がたくさんあり、沼もいくつもあつた。現在の児童公園になつていゝるあたりも「渦ヶ跳」と呼んでエンコウの巣があると大人に言われ、子供たちは恐れられたものだった。舟入川には昼夜舟の往来があつたが、薄暗い夜に「渦ヶ跳」を舟で通ると、岸边から「舟にのせてくれ、舟にのせてくれ」という声が聞こえたり、暗闇に大入道が立つていた話があると言ひ。「大津のシバテンとエンコウ」『わたしたちの大津 大津小学校創立百周年記念誌』、大津小学校創立百周年記念事業実行委員会、一九八一年、一五六頁）

高知市大津ではエンコウ以上にシバテンが活き活きと活動している。大津の隣村の介良でも、エンコウとシバテンの両方の伝承があつた。

#### 事例8 えんこうとしばてん（高知市介良）

えんこう

右の手がちんだら左手がシュウーとのびる。泳いでおる人水の中に引っぱりこんで、肛門から手をつこんで肝をぬく。

ところが、えんこうは鹿の角が大きらい。そこで下田川で泳ぐ時には、子供は鹿の角の小ギレを禪につけちよった。

藤本作治（明治二八年生）他

しばてん

しばてんは、まあ小坊主みたいなものよ。しばてんは誰彼かまわず、「すもとろ、すもやっちゃる」ときそいをかける。大人でも「このコビンスが」と思うて相手になると、おおごとよ。しばてんはすばしこい。なかなか勝てん。夜通しとる。そうしてつまりは人間がへとへとになって負けらあよ。

鍋島亀清（明治二七年生）他

（橋詰延寿『介良風土記』、高知県文教協会、一九七三年、三三〇頁）

シバテン話の特徴は③世間話として流布することが多いということだ。世間話とは遠い過去ではなく、現在のうわさから、同時代の人が体験した話として語られ、リアリティは④伝説より高い。エンコウ祭が行なわれている久枝付近もシバテンがよく出た所で、『久枝夜話』（佐竹秋陽、筆山協会、一九六四年）には六話も収録されている。

驚くべきことに、シバテン話には、実際に現場に立ち会った当事者の話、すなわち②体験談が存在する。しかも、新聞にその記事が記録されているのである。

#### 事例9 芝天（高知市九反田）

文明の今日にはチト怪しけれど、市九反田の或る人が、去る十九日午後五時頃、通行稀なる東雑喉場の道路に出で、東方を見

たる処、一人の五十前後の木綿縞の半纏と白莫大小（引用者注…めりやす）のズボン下を着け、直履の下駄を穿き、頻りに東船着雁岸の上道路にて、双手に唾しまるで敵手に向ふ様をなし、双手を振り間もなく引組みたる如くに、胸上に腕を組みしかと見れば、直に横に倒れ暫く臥て居て、立ち上つては息を切らしつゝ、復前の如くなすこと数回にして、疲れ切つて臥て居る処へ、附近の甲乙オー芝天と相撲を取つて居ると云いつゝ集り来り、其中の一人大工某が、お前は一体何をして居るぞと、数回問ひたれども、初めの内は何の返答もなかりしが、後には気が廻りたるにやようく判りました。「どういふわけで此所へ来たろう。」といふにぞ、そこで大工は、復たお前は何所ぞと尋ぬれば、農人町の者で掛川町へ行き帰りがけである、何故此所へ来たであらう。此所へ来ると坊主の児がやつて来て、相撲とらんか〜と頻りにいふにより、何糞小坊主ござんなれ、前の川へ一投げ投げこんで、一泡々を吹かし遣らんと引組んでみたが、なかなか思ふ通りに行かず、何番もとつて大疲れに疲れたり云ひ、タラ〜謝辞を述べ我家をさして帰りたるが、此男は何といふものであるかは、姓名を聞き漏したるは残念と、実地を目撃したる人の直話なり。（「土陽新聞」明治45・2・22）（『近世土佐妖怪資料』からの引用）

この事例が興味深いのは、シバテンと相撲を取っているところを、大勢の人が目撃している点である。男の話はこうだ。「坊主の子に相撲を取ろうと挑まれ、一泡吹かせてやろうと取り始めたがなかなか勝つことができず疲れ果てた」。ここだけを切り取ればまさに典型的なシバテン話だが、回りの人の目にはシバテンの姿は見えず、男が一人相撲を取っているとしか映らない。つまり「小坊主と相撲



を取る幻覚」こそがシバテンの正体なのだ。

同様の目撃談は、仁淀川町（旧池川町）中山にもあって、『高吾北文化史 第2巻 伝説実話篇』（明神健太郎、佐川町誌編纂会、一九六三年、三八一、三八二頁）に紹介されている。同書は同じ話が（佐川町）斗賀野虚空蔵山などにもあるとする。

シバテンと相撲を取る話は数え切れないくらい各地に伝わっているが、それらの中には同様の幻覚体験があったようだ。それだけ多くの人が、どうして判を押したように小坊主と相撲を取る幻を体験するのだろうか。幻も夢も個人的なものである。もっと別の怪異と遭遇しても良さそうではないか。

これはおそらく当時の人々の「相撲」体験と結びついているのだろう。

柳田国男は、聞こえるはずのない音やあるはずのない場所での火や光り物を多くの人々が体験する場合、このような幻を「共同幻覚」と呼んだ。木を切り倒す音が夜中聞こえるフルソマや、タヌキが汽車の音を真似て聞かせる音の妖怪は、昼間耳にした印象的な音が幻聴になるのだろうかと言ふ（柳田国男「山人考」『柳田国男全集』四、ちくま文庫、一九八九年）。相撲は音ではないが、土佐でも非常に盛んだった（近藤勝『土佐の学生相撲』、高知県相撲研究会、一九六六年）。シバテンと相撲を取るのはほぼ百パーセント男性である。男達は日頃から相撲に親しんでいた。香北町では、土州山という相撲取りが小男のシバテンを投げ飛ばしたという話がある（松本実『葦生雑記 むかしまつこ』、自刊、一九七八年、四五、四六頁）が、四股名をもつ相撲取りがシバテンと対決した話も多い。おそらくシバテンとの相撲は、肉体が日頃体験していた相撲という体

の動きが幻としてよみがえるという性質のものではなかったかと考えられる。そして、相撲を取る妖怪の知識や伝承が、逆に幻覚の内容を規定することもあっただろう。河童の歴史を多角的に研究した中村禎里は、九州の河童が相撲を好む事例について、「草相撲が盛んなこの地方の農民の文化特性が、幻触を相撲妄想に展開させた」と述べている（『河童の日本史』、日本エディタースクール出版部、一九九六年、二二〇頁）。シバテンについてもまったく同じことが言えるだろう。

だが、どうして他県で河童のしわざになっている相撲が高知県の一部の地域ではシバテンのしわざになったのだろうか。

実は江戸時代の史料にはシバテンの名はほとんど見えない。

土佐の一大歴史資料集『皆山集』には、編纂者の松野尾章行あきつらが父の安助から聞いた話として、寛政文化の頃、農人町の大工頭野村紋之丞という者が小坊主と相撲を取った話が記されている（『近世土佐妖怪資料』に収録）。明治大正期の香長平野なら間違いなくシバテンだ、と言いたいのだが、文中にはシバテンの名前は出てこない。

もともとシバテンとは呼ばれていなかった相撲をとる怪異が、シバテンの呼称が定着してくるとシバテンになってしまう、そのような事例が芸西村にある。

明治二十六（二十七年）（一八九三～一八九四）にかけて芸西村馬上村の水野晴雄（一八三一～一九一一）が記した「指さし並なみ笑わら種たね袋ぶくろ」には約十三年ほど昔のこととして、赤野村の尾木永藏が馬上村で酒を飲んで帰る途中、小坊主と相撲を取った話が記されている（吉村淑甫編「芸西風俗譚」、芸西村史編纂委員会、『芸西村史』、芸西村、一九八〇年、六五二頁）が、シバテンとは言わず、老狸のしわ

ざとされている。ところが、昭和三年（一九二八）出版の『土佐郷土民俗譚』でこの話を紹介した寺石正路は、老狸の部分をカットし、「是れ明かに芝天狗の所為なり」とシバテンの所業と決めつけ、タイトルも「赤野のシバテン」とうたっている（『高知県史 民俗資料編』、一九七七年、六二一、六二二頁に収録）。寺石は慶応四年（二八六八）生まれで、相撲を取る怪といえればシバテンしか考えられなかったのだろう。明治五年（一八七二）生まれの武市佐市郎は、「昔土佐に芝天狗が居つたと云ふことは屢々耳にすることであつた。しかも私は少年時代母から卒直にこれを聞いて居る」と大正十四年（一九二五）に書いている（『武市佐市郎集』第五卷、風俗・事物編、高知市民図書館、一九九五年、一五四～一五五頁。初出は『土佐史壇』の「傳説界」。明治十一年（一八七八）生まれの寺田寅彦も、幼い頃から「芝天狗」「しばてん」を耳にして育っている。同じ明治時代初頭でも、高知市付近ではシバテンは一般的だが、現在の芸西村にはまだシバテンはおらず、同様の怪異は小坊主と呼ばれ、老狸の仕業とされていたのである。

総合すると、江戸時代には存在しなかつた芝天狗という妖怪は、高知市中心部で明治前期には定着し、周辺部に拡がっていったという流れが予想される。先述したように嘉永五年（一八五〇）の「新先生一代記」が「芝天狗」なのに対し、明治十二、十三年（二八七九、一八八〇）の「土佐化物絵本」が「シバテン」なのも、芝天狗が次第にシバテンと短くなつていったのであろう。

それにしても、シバテンはどこから現れたのだろうか。

その来歴を知ることが難しいが、徳島県祖谷地方（武田明『祖谷山民俗誌』）、大豊町（香月洋一郎『山に棲む』）、本川村（現いの町）、愛媛県柳谷村（現久万高原町）（北九州大学民俗研究会『柳谷の民俗』）

などでは山中で大きな音をたてるシバテングという妖怪が報告されている。柳谷村や本川村のシバテングは相撲もとるようだ。名前からいってシバテングは天狗の仲間だろう。石鎚山や剣山に近い山間部に山の妖怪であるシバテングの伝承が見られるのは何となく理解できる。シバテングは実際天狗と同様ナマガサを嫌う習性をもっており、水中の怪であるエンコウとは相容れない。嘉永三年（一八五〇）の年号をもつ「新先生一代記」には、新先生が「ひらい山において、芝天狗に角力を望まれ」たが、生臭い鯉節を吹きかけ危難を逃れたというエピソードが記されている（本章第三節）。エンコウは川魚をお礼に持つてくるのだから、シバテンとは正反対だ。この部分でシバテンとエンコウは決定的に別物なのである。

山の芝天狗がどうして高知平野の堤や夜道に現れて相撲を挑む怪異の名前になったかは不明だが、小坊主としか呼ばれていなかった正体不明の妖怪がいつの間にか芝天狗と呼ばれ、「シバテン」となったという流れは見えてきた。名前を獲得することで、相撲幻覚がシバテンのしわざであるとの話のパターンが出来、この妖怪の流行や定着に拍車をかけたのは間違いないだろう。土佐における相撲の流行が他国に比べてどうだったかはわからないが、とにかく相撲は大人気だったようだ。そのような相撲に対する熱狂や愛好ぶりがシバテンのような相撲に特化した怪異を育てていったのかも知れない。

また、二次的な伝承とは思われるが、エンコウとシバテンは実は同一であるという伝承も各地で聞かれる。

#### 事例10 猿猴とシバテンの交替

「土佐郡土佐山村では、芝天は旧六月六日の祇園様の日から川へ

行き猿猴になると言はれ、此の日川に胡瓜を流すのは是に食べさせず為であると言っている」

(桂井和雄「土佐の山村の『妖物と怪異』」、前掲)  
「シバテンは春の社日から山を降り、川にはいつて猿猴になるといふ。その時には山いっぽいに音がして、激しい風が吹くといふ」

(土佐郡本川村桑瀬・土佐郡土佐町田井)  
「猿猴は春の社日から川に降り、秋の社日から山へ上るといふ。猿猴が山から降りる時は、ドーンと音がする。これに会うのを恐れて、その日は外に出ない。」  
(土佐郡本川村桑瀬)

「シバテンが川に降りる時は、異様な風が吹くといふ」(長岡郡本山町)  
(桂井和雄『俗信の民俗』、岩崎美術社、一九七三年)

また、高知県内にはシバテンが存在しない地域もある。そして、そういう所ではエンコウや、別の存在が相撲をとることになる。

例えば黒潮町(旧大方町) 加持田村の昼間坊主は、五、六才くらいの素裸の男の子で、四股を踏んで両手を広げて現れたと言ふ(秋田寿美子「昼間坊主の話」、『大方よもやまばなし』、大方町老人クラブ連合会、一九八六年、四〇二、四〇三頁)。

四万十町(旧大正町) 江師の小石の下の榑谷ぐちの水車小屋の歩危(ほき)には、「角力をとろう、角力をとろうちや」という得体のわからんもんが出るという噂があった。力持ちの男が相手をしたところ、十五、六回投げ飛ばしたが参ったと言わない。ありたけの力で遠くへ投げ飛ばし、そのひょうしに家まで逃げ帰った。その後小僧に出会って角力をとらされる者が続き、夜は歩危を一人で通るのを嫌った、という話がある。この怪異は渕に住む「えんこう」ということになったとある。(多賀一造編『大正のむかし話』、大正

町教育委員会、一九八九年、三四〜三六頁)。

同じ話が伊与木定氏の『上山郷(昔の大正邑)のいろいろかいり掻き暑めの記』上(一九八四年)にも「えんこうとの角力」の表題で記されている。だが、本文には角力をとろうという怪異を「えんこう」とは書いていない。「角力をとろうという小僧」とだけである。ということは、大正町では角力をとる怪をシバテンと呼ばないのももちろんだが、エンコウのしわざと決めつけていなかったということだろう。

相撲をとる怪異は県内各地にいたようだ。その怪異の名前は地域によって小坊主とか昼間坊主と呼ばれていたが、県中部ではシバテンに一元化されていたようである。

#### (4) エンコウの子

エンコウの属性として女性と交わり子供を産ませるといふものがある。

##### 事例11 旧十和村のエンコウの子

部落の女の人たちがあちこちでエンコウの子(鍋ぶたの取手のないような形をしている)を生むとか、ある女の人が男の人と話をしていたのをエンコウが聞いて、その男にまなつて(化けて)女の所に通うてエンコウの子を孕ませておさまりがつかなくなったなどということが再々あったので、エンコウを鎮めて祭ったのがエンコウ堂である。昔の吉祥庵の近くに祭つてある。この時五百八拾年切の札を奉納して桶にエンコウを封じたので御神体は桶である。毎年「今から向う五〇〇年鎮める」とお経をそなえて祭る。

祭日は七月五日のお施餓鬼の日である。(津野幸右「俗信」、十和村史編纂委員会編『十和村史』、十和村、一九八四年、一一八六、一一八七頁)

子どもを孕ませるエンコウは、この地域では現実の恐怖であったようだ。「夕方に女の人は川に行かれん、エンコウの子を孕むことがある」「エンコウはヨバイに来る時に逆戸に開けて入ってくる(人間の開けるのは逆の方向に開ける)。ヨバイに来た人をエンコウか人間か見分けるには着物に針を突き刺してみるとよい。痛がる」とエンコウである」「川辺に行くと思議に眠むくることがある。この状態をエンコウが憑きよるといい、そんな時に眠むるとエンコウの子を孕むといわれている。エンコウは鹿の角を嫌うので身に付けているとエンコウが憑かないという。昔は川へ飲み水を汲みに行かねばならなかったので、エンコウに憑かれない呪いに荷負い鉤に鹿角を用いた。」など様々な伝承が『十和村史』(同前、一一八七頁)に記録されている。

隣の大正町でもエンコウは女性を孕ませる怪異であった。『上山郷(昔の大正邑)のいろいろかいる掻き暑めの記』上には「えんこうの子」と題し次の情報が記されている。

#### 事例12 えんこうの子(旧大正町)

「昔つづら川村でえんこうの子が生まれたことがある。つづら川の奥に一軒、口に二軒えんこうの子が生れた内(うち)があった。つづら川の「子こ積みづみの谷」という所は昔えんこうの子を曝した所であると伝えられている。(中平千太郎翁談)」

(伊与木定『上山郷(昔の大正邑)のいろいろかいる掻き暑めの記』)

上、自刊、一九八四年、二五七頁)

佐川町にはエンコウが夫に化けて女性と交わった話が残されている。明治末年頃の実話として、黒岩村寺野から佐川の九反田に嫁いでいたおえん(仮名)が、七月十六日の里の盆踊りに出かけ、迎えに来た主人と庄田川畔を帰っている途中、下山通りのスズキガ淵のほとりで一休みしたが、家に戻ってみると主人はランプの灯りで草履作りの最中で、迎えに行っていないと言う。十ヶ月後、おえんはエンコウの子を産みおとし、殺して裏山に葬ったと言う噂が広まった。その姿は可愛い河童そっくりとも、猫の子に似ていたとも、タライにつけるやいなや飛び出して障子の組子を這い上がって逃れようとするのを捕まえるのに一騒動あったとか、噂が流れた(「猿猴の子を生んだおえんさん」、明神健太郎『高吾北文化史 第二巻 伝説と実話篇』、自刊、一九六三年、三七〇～三七二頁)。

『高吾北文化史 第二巻』には、ほかに須崎市吾桑の桜川でカジ草をさらしていた人妻に猿甲測のエンコウがいたずらし、生まれた子どもをシボリ殺したところ、たたりでその一家は絶え、淵の上にエンコウ供養の小祠と灯明台が残ると言う。また下名野川(現仁淀川町)ではできたエンコウの子を、イナキにつないでおいたところ逃げたという話があり、池川町(現仁淀川町)の用居川では、若嫁が親里に行く途中、川瀬を渡る時、眠たくなっていたはずらされたという説と、美男で有名な土地の相撲取りに化けてきたが、朝起きてみると寝床に砂がいっぱい落ちていたという説がある。他に上分笹野(須崎市)や日下川(日高村)にも同様の話があったようだ(同前、三七二、三七三頁)。

エンコウの子の話は土佐町、禰原町、佐賀町などでも記録されて

いる。川太郎の子供とされた人物が伊与喜にいたという岡本真古（二七八〇～一八五六）の「三安漫筆」については二節の事例8でふれた。

女性と交わって子を作るのは、三輪山神話や蛇婿入りの昔話があるように、元々蛇の役割だった。高知県内では室戸市佐喜浜のおんば様、香美市香北町などに同様の伝説が残されている（「鮎返りの淵の蛇髻」、福田晃編、下川清、福田晃、松本孝三『日本伝説大系』十二巻、みずうみ書房、一九八二年、一七九～一八三頁）。中村禎里は、河童は蛇の水妖としての性格を受け継いでいると指摘しており（『河童の日本史』、日本エディタースクール出版部、一九九六年）、エンコウが女性を孕ませるのも、蛇から受け継いだ性格の一つだったと言う。だが、エンコウの子どもの話は、高知県全域ではなく、県中西部の山間地に多く分布しているようだ。このような地域性があるのには何か理由があるのかも知れない。

(5) 盆とエンコウ

盆の十六日に川に行くと言くとエンコウに引き込まれるという言い伝えが県内に残されている。だが、全域ではなく、吉野川上流の本山町、本川村、四万十川流域の十和村など一部の地域に限られるようだ。エンコウ祭の項でも述べるが、エンコウと川に集まる霊はどこか重なるイメージでとらえられる場合もあった。盆の十六日に川や畑に行くと言った霊がいたので行ってはならないという伝承が県下全域に広がっているのだ。

神尾健一の文章を概要として掲げておきたい。

表 高知県の盆の16日の伝承

場所	内容	文献
北川村	十六日には仏さまが田畑を見て回っているので田畑へ行くものではない（加茂、久府付、柏木、和田）、地獄のふたが開いているので山川へ行くものではない（野友、加茂、柏木、和田、宗ノ上、島、小島）。	『北川村史』
北川村 安倉	十六日は仏さまが帰る日であるから団子などを作って川に流しますが、これは仏さまが帰る途中の弁当であるといわれています。この日は川に行く仏さまの水に流されるといっています。	『盆のまつり 安芸郡北川村安倉の盆行事』田中好太郎『土佐民俗』16、1970年
安芸市	盆の十六日には、仏様が家の田畑を見て廻るので、田や畑に入るものでない（上尾川）。十六日は、仏様があの世へ帰る日であるから川で泳ぐものでない（岩戸）。	『安芸市史 民俗編』
香美市 香北町	川遊びや畠に行くことを忌み、特に里芋畠では『仏様が荷をしている』とってはいることをきらう。『地獄の棺のふたがあく日であるから川へ行かれん』という部落もある。	『香北町史』
大豊町	十六日は裏盆ともいい、地獄の釜のふたがあく日といって殺生を嫌い川に泳ぎに行くことも嫌った。	『大豊町史近代現代編』
本山町	16日は「地獄の釜の蓋があく」といって必ず一日中仕事を休んだものという。[晩越]では盆がこの日に終るのだとしている。[寺家]では「お釜の蓋があいてエンコウ（猿猴）にひっぱられるので行かれん」とか「エンコウ（猿猴）がいるので行かれん」[七戸・瓜生野]とかいって川へは行かなかったが、[細野]では「地獄の釜の蓋があくから」、[大石]や[権代]では「シカのあく日」といって山へ行ってはいけない日だった。また[梶屋瀬]では田へ行ってはいけないという。	『土佐本山町の民俗』
本山町	十六日「地獄の釜の蓋があく日」として、一日仕事を休む。「エンコウに引っ張られるので川へ行かれん」し、「シカのあく日だから山に行かれん」し、また田に行くことも忌む。	『本山町史 下』
大川村・ 本川村	十六日〇地獄のカマノフタが開くから山へ行かない。（黒丸）〇正月と盆の十六日に川へゆくと無縁仏に川の中へさそいこまれる。エンコ（川にいる者だ）が角力をとろうといってくるし、山の中にはコウノシバを持った者がうろついていて、これに行き会うと、これ又二度と我が家には帰ってこれない。コウノシバを持っているのは迷い仏である。とても恐ろしい日だ（寺川）	『高知県本川、大川両村探訪報告（後編）』保仙純剛
本川村	十六日は川にエンコがいて相撲をとろうといって川に引き込まれ、山にはコウノシバ（樫）を持った者がいてこれに行き会うと二度と我が家に帰れず、樫を持った者は迷い仏であるともいう。	『本川村史』

場所	内容	文献
南国市	十六日には仏霊が冥府に帰る日で川遊びや、芋畑に入ることを忌みつつしんだ。	『南国市史』
南国市 国分	“盆の十六日に休まぬ人は地獄お釜の蓋となる”の俚謡がある。／十六日は芋畑に入るのを忌む。精霊が山の墓所に帰るに芋畑に入って供物の荷造りをするので、芋畑に入って驚かすと病気になるなどといわれたという。	『国府村史』
高知市 土佐山	盆の十六日は、ウラボンといい、この日は地獄の釜の蓋が開くなどといって川漁や山獵に出るのを忌み、特に芋畑にはいることを禁忌する。	『土佐山村史』
吾北村 長引	〈十六日〉この日は地獄の釜の蓋があいているといい、祭りはないが休み日で、山へも川へも行かれんといった。今はそれほどまではいわないが、川へ行くことは嫌う。また、盆の間は川へ行ったら底がぬけているので川へ行くもんじゃないという話もあった。	『長引の年中行事—吾北郡吾北村長引—』田村三千夫『土佐民俗』51、1988年
土佐市	十六日 此日は古来仏の帰る日なりとて、他所より帰ることを忌み、又水中に入るを忌むの迷習あり	『戸波村誌』
日高村	十六日は仏霊の冥府に帰る日なりとして、仏霊を送って墓参りをし、精霊棚をこわして川に流す。盆うちの海、川遊びや、十六日朝の早戸出は忌みられた	『日高村史』
越知町	盆の十六日は冥府に帰る仏が畑の作りを見て廻るので、畑へ入るものでないとされ、この日は農作業を休んで部落の共同道作りをする部落が多かった。(柴尾など)	『越知町史』
越知町 横島清水	十六日 この日はサク(田や畑)の中へ行ってはいけぬ。祠ってもらえず、カミにもホトケにもなれん人が迷っているので。だから、この日は部落共同でサクミチを作っている。昔から道作りをすることになっている。	『横島清水の年中行事—高岡郡越知町一—』田村三千夫『土佐民俗』50、1988年
越知町 桐見川	十六日は地獄の釜の蓋の開くといい、川に行くのを嫌う。この日に川で溺れた人があったからだという。	『越知町桐見川の年中行事—高岡郡越知町一—』田村三千夫『土佐民俗』47、1986年
吾川村	十六日には、山では山姥が飯を炊きよるきに湯気にあたるといって、山へは入らない伝承がある。	『吾川村史 上』
池川町	一六日はエンコウが出ると言って、仕事にも山や川へも行かずに家に居る(土居・安居)	『伝承文化9』成城大学民俗学研究所
	盆の一六日は『地獄の釜の蓋があく日』として、川に行くとエンコウが引っ張る。山へ行くと魔物がさそうので行かれんといひ、子供たちも家の近くで遊ぶようにいわれた。	『新池川町誌』
仁淀村	十六日には盆飾りを近くの谷川に流して送りますが、この日は厄日とされ、水泳、山仕事などはいましめられます。	『仁淀歳事記(その3)—春から夏へ—』吉岡重忠、『土佐民俗』7、1964年
須崎市	十六日には、精霊送りをするので、この日は地獄の釜のフタがあくといいと恐れられたもので、特に水泳はいけぬといひ伝えられてきた	『須崎市史』
東津野村	十六日は地獄の釜の蓋があくといひので、この日は仕事を休む。山や川にゆくの特に忌む。	『東津野村史』
大野見村	盆の三ヶ日川へ行くのを忌みていた風は次第にうすれたが、今でも十六日だけは川に入らない。	『大野見村史』
十和村	盆の十六日やお施餓鬼の日に川へ行くとエンコウに引かれる(昭和)。	『十和村史』
西土佐村 奥屋内 玖木 口屋内	盆の十六日は「親の墓参りもせずに、仕事などするものではない」といって、親のある人は仕事をしてよいが、親のない物は仕事をするとき必ず怪我をするといひ。十六日は「地獄の釜の開く日だから山にも川にも行ってはいけぬ」といわれた。	『平成二年度民俗探訪』國學院大學民俗学研究会
土佐清水市	16日(佛様の帰る日)今日は佛様の帰る日だから山や海や川へ行かれん、もし怪我をしたり病気になったら治らんと胃って海水浴にも行かなかつた。 十六日は先祖さんがあの世へ帰るとき、はたけを見まわって帰るから、その日ははたけへ行ってはならぬ(貝ノ川、下川口)。ある人が十六日にはたけへいくと、先祖さんに出あったが、こどもがけんかをして、ゆっくり落ちつけなかつたから、こどもをイロリへけりこんできた、といひので、おどろいて帰ってみると、まことその通りだったといひ(貝ノ川)。「先祖さんは、十六日朝卯の刻に帰られるが、朝早いので、見送って行くと、ソーツカのばあさんがいて、それにあうと病気になるので、先祖さんのみやげは、あとから送るといひ、朝は見送らない。夕方送り火をたいて見送る(浜益野)。「盆の十六日の旅立ちを忌むが、それはあの世へ帰るショーライさんにあうからで、あうとショーライさんに荷物をさせられるといひ。	『足摺の年中行事(明治・大正)』田村幸一 『渭南地方の盆行事』沖本樵平『土佐民俗』12・13、1967年
大月町 小才角	十六日の朝は先祖さんが早うにおみやげをにのうて帰るといひことだ	『盆のまつり 幡多郡大月町小才角』新谷福美『土佐民俗』16、1970年

「十六日の晩に焚く火にしても、この日には「仏が川や畑にうろうろしているのです、その中に入ってはいけない」とか「盆の十六日は、無縁仏があちこちにいますので家の外をうろついている」と「イキアイ」に会って病気になる」あるいは「十六日には仏が田芋畑に集まっているので、田芋畑に入るものではない」といった類の言葉をよく耳にする」

（「盆の火」『土佐民俗』四二号、一九八四年）

95・96頁の表は、県内の市町村史などから盆の十六日に山や川へ行つてはならないという記述を抜き書きしたものである。表を見ると、川に行つてはならない理由としてエンコウをあげているのは、本山町、大川村、本川村の吉野川上流域と、仁淀川上流の池川町、四万十川中流の十和村である。水の怪としては、エンコウは平野部の河川に多く、山間部は蛇が多い印象があるが、これら山間部で盆の十六日の禁忌にエンコウが使われるのは興味深い。

(6) その他

ここまででは、ステロタイプ化していくエンコウの特徴を見てきた。だが、本章二節の江戸時代の河童（猿猴）の記録で見たように、ポルターガイスト的な現象を河童のしわざとしたり、溺死させた人の墓に泥を塗ったり、型にはまらない河童（エンコウ）の活動も見られた。これは、おそらくまだ河童（エンコウ）が、怪異の原因として生きていた時代に、不思議な現象が起こり、それを河童（エンコウ）を原因と判じることによって生まれた多様性だと思う。同様の、枠にはまらないエンコウの事例を紹介して本章を終わりたい。例えば、本山

町では、私たちの知っているものとは少し違った不思議なエンコウ伝承が聞かれる。

事例13 人形に化けるエンコウ

長岡郡吉野川流域では、夜舟にイサリを点けて川底の鰻やアサガラを突き出ると、猿猴がイチマ（女子の人形）の姿になって流れて来てこれを金突で突きさすと莞爾として流れて行く怪異を傳えている。（桂井和雄「山の妖物と怪異」、『土佐民俗記』、海外引揚者高知県更正連盟、一九四八年、一三二頁）。

川を流れてくるイチマ人形とは不気味だ。頭に皿が有りどこかユーモラスな河童としてのエンコウとは異なる姿がここにある。他にも本山町のエンコウは、さまざまな姿を持っている。『土佐本山町の民俗』から紹介しよう。

事例14 本山町のエンコウ

- a 西谷の村では、にわか雨が降ると、エンコウが洗濯物を取り入れてくれたという。
- b 昔、美しい娘がある家に来て欄間を欲しいと七日七夜通つて来たが、やらなかったたのでその家は絶えてしまった。その娘はエンコウだったという「瓜生野」。
- c ある人が魚を釣っていると蜘蛛が足に糸を掛けるので、その糸を取り株にかけた。しばらくするとその木株が川に沈んでいった。すると何かが笑うので気をつけて見ると、さつき釣つた魚は、すべて木の葉であった。エンコウの悪戯だったという

〔北山東―梶屋瀬〕。（dは省略）

e 大石たつまという人がいた。その人の女房が小川にゴリをすくに行き、たくさんとって来た。その人が子を孕み、生まれた子はエンコウであった。その子は、頭のいただきがまるく、皿をかついだようにひっこみ、目はギョロギョロしており、1枚歯がはえていて、少しも泣かなかった。母親は、子供を生んですぐに死んでしまった。たつまは、その子をたふば（針）で刺殺し、山で焼いてしまった。当時は土葬で、人は死んでも焼くことはなかったので、それを密告する人があって、刑務所に連れて行かれ、そこで死んだ。葬式の日、父親の茂吉が、「敵を討て」といつて刀を埋めてやった。すると密告した人がわずかなことで死んでしまった「古田」。

（大谷大学民俗学研究会編、『土佐本山町の民俗―高知県長岡郡本山町―』、一九七四年、一八九頁）

最後のeのエピソードは、エンコウは女性を孕ませるといふ話で十和村などの伝承とも共通する。だが、aからcは、他では、エンコウ以外の物のしわざとして語られるような内容である。本山では、そのような話もエンコウに付着していくのである。本山町のエンコウが、単に水中で人や馬を引き込むだけの怪異でないことを物語っている。

十和村のエンコウは、前項で述べたように女性を妊娠させる怪異としての性格が強いが、次のような伝承も記録されている。

「エンコウは人間の赤子くらいの大きさで真赤い色をしており、時々川の岩の上に乗って遊んでいるのを見たという話もある（小野）。」



日高村小村神社のエンコウ像  
「雨ごい用えんこう像 日照りつづく  
時雨を招く「えんこう」像」と書いてある。

「夜、舟を使う時には舳先を叩いて舟霊さんをおこしてから乗るものである。舟霊さんをおこさずに乗るとエンコウに棹を取られたり舟の方向を誤って、漕いでも漕いでも岸へつけないことである（井崎）。」（津野幸右「俗信」、十和村史編纂委員会編『十和村史』、十和村、一九八四年、一一八―八頁）

時代がくぐると、エンコウも他の妖怪同様過去の話を記録されるような既に活動を停止した存在になっていった。だがこれらの事例は、エンコウが地域の妖怪として生きていた時代の貴重な記録と言ふべきだろう。



## 第六章 高知県内のエンコウ祭と関連行事

第五章では、高知県内のエンコウ伝承を概観したので、本章ではエンコウ祭について考えてみたい。

最初に、南国市後川流域のエンコウ祭とはどういう祭りなのかを再確認しておこう。その要素を改めて書き出すと、次のような項目に整理できると思われる。

- ① 水の妖怪・エンコウを祭ること
- ② 地区の子ども組が祭ること
- ③ 橋のたもとや川の堤防の上に菖蒲小屋を作ること
- ④ キュウリの酢もみを供えること
- ⑤ 周りに提灯を飾ること
- ⑥ 子ども達が花火で遊ぶこと
- ⑦ 浜窪では相撲をとること
- ⑧ 宿で子ども達が食事をとること
- ⑨ 久枝では提灯の蓋にロウソクを立てて川に流す「エンコウの川流れ」を行なうこと

「南国市後川流域のエンコウ祭」は、右記の要素の複合体である。だがエンコウ祭は、後川流域だけにあるのではない、かつてはあちこちでエンコウ祭が行われていた。後川流域のエンコウ祭と他の地域のエンコウ祭を比べると、共通点もあるが違うことも多い。例えば「子ども組が祭る」という特徴は、他のエンコウ祭にはあまり見られない。右に掲げたポイントはあくまで「後川流域」のエンコウ祭の特徴であって、他のエンコウ祭も同じとは限らないのだ。

では、後川流域のエンコウ祭は、どのような文化環境のなかで、

今見るような祭になったのだろうか？ 具体的な史料が存在しない中では知るよしもないが、本章では猿猴祭の歴史的史料や周辺部のエンコウ祭や関連する行事を見ながらそれについて考えてみたい。

まず、近代以前の歴史資料に見られるエンコウ祭（猿猴祭）を追ってみたい。「猿猴祭」の史料についても、広江清『近世土佐妖怪資料』に要領よくまとまっているので、本章でも同文献を参照した。

### 一、エンコウ祭の歴史資料

#### （一）稲生の河泊神社

そもそも土佐で猿猴祭が始まったのはいつ頃のことだろう。前章で見たように、江戸時代の土佐では河童のことを河太郎とも呼んでいて、必ずしもエンコウとは限らない。

土佐において河童の祭りが史料に現れる最も古い文献は一七四七年の「土陽淵岳志」である。この史料は、当時の土佐の名物や風俗、伝承などを植木尚斎がまとめたもので、その中巻に「百三十三 河童馬ヲ引」と題して今も祭られている南国市稲生の河泊神社の由来譚が掲げられている。現代の語り（事例2）とあわせて掲げてみよう。

#### 事例1 「百三十三 河童馬ヲ引」（一七四七年）

元禄年中ノコトカトヨ。五台山ノ東下田村二百姓、馬ヲ野牧ヌトテ、三十尋ハカリノ繩ヲ付、川ノ端ニ繫ヲキヌ。折節近ク人モナカリケルヒマヲヤウカダヒケン、カノ川ヨリ河童上リ、馬ヲツナケル繩ヲ己レカカラダニ数廻マトヒテ、馬ノ口ヨリ六尺ハカリニ成シ時、ソロくト馬ヲ川ヘ引込ケル。初ノ程ハ馬モ付テ行ケルカ、次第ニ川水ノ深キニ驚キ、馬ハハネ返リ河原ニカケ上リケ

レハ、河童モ同ク引上ラレタリ。百姓共見付テ大勢来テ、河童ヲサンクニ打擲シ、既ニ打殺ントヒシメクニ、河童泣ククワビテ命ヲ乞ケレハ、村老了見シテ、シカラハ下田村ニ於テ、男女老少ハ云ニ不及、牛馬鶏犬ニ至マテ、害ヲナスマジキ旨誓ヒサセテユルシケル。其後年、六月十五日、河童ノ祭リヲ村中ヨリイタシ遣ストゾ。カヽリシ後ハ当村ニ河童ノ害ヲナス患ナシトイヘリ。

〔土陽淵岳志〕、高知県立図書館、一九七〇年

#### 事例2 下田の河童（南国市稲生）

（一九七八年）

元禄時代、稲生の下田川にいたずら好きの河童がいて、子どもを川の中に引き入れたり、キモを抜いたりした。ある日、下田の百姓が川に馬を入れて洗っていると、突然、馬がはねまわりだした。見ると河童が馬の後ろ足にしがみ付いて、馬を川の中に引き込もうとして、逆に馬にはね上げられてしまっていた。河童は皮膚がぬるぬるとして、頭には皿をいただいている。皆が河童を蹴ったり叩いたりしていると、延福寺の和尚が寺に連れ帰り、庭の木につないだ。河童は手を伸ばして草を引いたが、右手を伸ばすと左手が縮んだ。三日目になると水が乾いて皿が小さくなり啼き出してしまった。今後は村人や牛馬にいたずらしないことを誓わせて帰した。稲生の延福寺には河童の霊を祀った河伯神社がある。明治の初めに延福寺は廃寺になったが、神社は残り、毎年六月十五日には盛大に祭りが行われている。（要約）

（南国市教育委員会『南国市の民話と伝説』第一集、一九七八）

事例1と2の間には二百年以上の間隔があいているが、大筋は変わらない。馬を川に引き込もうとした水の妖怪が逆に馬に引きずら

れ、もう人間や馬を引き込まないことを約束し、以後、祭られるようになったというものである。『土陽淵岳志』（事例1）の冒頭には「これは元禄年中（一六八六〜一七〇四）の出来事だろうか」と記されている。同書が書かれたおよそ五十〜六十年前で、そのくらい昔ならそんな不思議なことがあったのかも知れないという感覚だろうか。

事例1と2で注目されるのは、登場する妖怪の名前は河童であつて、猿猴とは呼ばれていないことだ。第五章で述べたように、土佐の河童名称は、江戸時代には河童、河太郎、猿猴などさまざまだが、近現代にはエンコウに一元化されていく。稲生もエンコウに統一されても良さそうだが、河童を祭っている神社は河泊神社で、今も親しみをもって河泊様（カアクサマ）と呼ばれており、祭りもエンコウ祭とは呼ばれていない（史料には猿猴祭とするものがある）。これは稲生の祭りが猿猴祭に先行するためかも知れない。次に気になるのは、祭日がどちらも現在の六月十二日ではなく、十五日になっていることだ。

そして重要なことに、事例1と2は大筋は同じだが、実は大きな違いがある。それは「土陽淵岳志」では、河童を助けるのが「村老」なのに対し、事例2では「延福寺の和尚」になっている点だ。

事例1（江戸中期）と事例2（昭和時代）の間の記録は無いのだろうか。稲毛実（一七八六〜一八六九）の著した「白頭雑談」を見てみよう。

#### 事例3 「白頭雑談」の下田村円福寺標須部明神の記述

下田村の里談を聞に、上二もいへる猿猴祭今猶為す事ニて他村よりも来客も夥しとぞ。小祠は下田橋の南円福寺の境内ニ標須部

明神とて水神を祭る。六月十三日也。胡瓜二果を供物とす。又他村の者も氏子となりて信すれハ、水中ニて災害有る事、其村ハ勿論一人もなしと也。  
 (「白頭雑談」)

冒頭に「上二もいへる猿猴祭」とあるのは、その前に幡多郡藤ノ川の駒引譚を紹介し、それが高知の猿猴祭の起源だと書いている文章を指す。「猿猴祭は高知だけでなく、下田村(現在の稲生)にもある」というのだが、当時稲生の祭りを猿猴祭と言っていたかどうかは保留にしておいた方が良さだろう。事例3で重要なのは、円福寺の境内で水神を標須部明神として祭っているという部分である。ヒョウスベは、九州地方における河童の別名のひとつである。祭日は六月十三日でもた異なり、伝説も記されていないが、おそらく江戸時代後期には、河童を助けたのは円福寺だという伝承があったものと思われる。

延福寺は円福寺とも書き、現在の南国市稲生の河泊神社の所にあった真言宗の寺院である。廃仏毀釈で退転したが、一八一五年の土佐国の地誌『南路誌』にも長岡郡下田村の項に「圓福寺 壇之坊 真言宗／本尊／漂須部明神 境内／弁才天 境内」と記され、境内に「漂須部明神」が祭られていたことがわかる。河泊神社の所在地が「字寺屋敷」である(『稲生村史』、稲生村、一九五五年、三九頁)のもその名残だろう。

だが稲生の河童伝説の初見である一七四六年の『土陽淵岳志』(事例1)には円福寺はまったく登場しない。そして「河童の社を建てた」とも書いていない。『土陽淵岳志』の少し前、宝永年間(一七〇四～一七一一)に編纂された土佐国の地誌『土佐州郡志』の下田村の項にもそれらしき名前は見当たらない。となると漂須部明神は、「土

陽淵岳志」の書かれた一七四六年と「南路誌」の一八一五年の間の百年ぐらゐの間に祭られ始めた可能性が高い。

それを裏付ける史料が濱田眞尚氏によって発見されている。宝暦十三年(一七六三)六月十二日の「奉新造立漂須部明神社地中繁栄如意攸」と書いた棟札である。「新造立」とあるので、漂須部明神が円福寺境内に祭られたしたのは、一七六三年ということになる。現在も旧六月二日が祭日なので、当時からその日が祭日だった可能性が高い。『土陽淵岳志』の六月十五日は、社を建てた時に六月十二日に変更されたのかも知れない。河童を助けたのが村老ではなく、円福寺の和尚に改変されたのも当然その時だろう。おそらく円福寺は河童伝説を自分の寺の宣伝に利用したのである。社殿をもたない臨時の棚による各地のエンコウ祭が衰退する一方、稲生の河泊神社の祭りが今もにぎわっているのを見ると円福寺の思惑はまんまとうまくいったと言えるだろう。ただ、肝心の円福寺は廃仏毀釈で廃寺になってしまったのだが、逆に言えば円福寺が無くなっても維持されている河泊神社の祭礼に信仰の強さが読み取れるとも言えるだろう。

明治時代に編集された史料集『皆山集』には、標須部明神は河泊神社と名を変えて登場する。

#### 事例4 河泊神社

一・河泊神社 祭神神名勸請未詳

六月十二日祭 南山岸二鎮坐

右河泊神ハ土俗猿猴様と称して、毎年六月十二日祭る。則猿猴祭と云。此社の神ハ、古此里二住者山内家二仕へて江戸通ひの節、道中ニて大井川涉洪水なるに、渡り難渋しけるに、川虎に扶けら

れし事の有て、其解願に勧請なしけると云。又此里の百姓、夏の比馬を率連田仕事を仕舞、此川にて馬の四下を洗足しけるに、其馬俄に嘶て、岡の方二沛芥しけるにより、百姓続て馬の跡追付かねて慕ひ行。ミレハ馬の脚下二何やらん猿の如きもの取り附きし二、蹄にて踏留居けるよし。其うち辺の者かけ集り。右の化生を押捕ミるに、川虎のよしにて打擲くの所、右化生物云して大二詫、再此川にて害をなすましきと誓して打払捨、其社を建立して年々祭ると云々。両説とも年月未詳。 (『皆山集』三)

事例4では、河伯神は地元では「猿猴様」と呼ばれ、祭りも「猿猴祭」と言っていると明言している。現在は「カアクサマ」と言うことが多いが、エンコウ祭の呼称もあったのだろう。

この史料では、それまで漂須部明神だった名称が河伯神社に変わっている。濱田眞尚氏の棟札調査によると、河伯神社関係の棟札は、宝暦十三年から始まり、天明七年(一七八七)、寛政九年(二七九七)、天保十二年(一八四一)、文久三年(一八六三)と五枚あるが、天明七年には「河伯社」、寛政九年以降は「河伯大明神」と変化しており、江戸時代からのものである。

興味深いのは、記されている伝説の中に円福寺の関与が一切記されていないことだろう。そして新たに由来として、大井川で川虎に助けられたという別の話が記され、その後河童駒引譚が記されている。妖怪の名前は河童ではなく、川虎と表記され、もちろん円福寺の僧侶が助命するくだりは無い。おそらく、この記事は廃仏毀釈以後のもので、寺院の関与を抹消した改変作業の結果なのだと考えられる。

ちなみに『稲生村史』にも駒引譚とともに大井川の話が記されて

いる。駒引譚では延福寺の和尚が登場しており、昭和になってそこまで寺院の存在を排除する必要が無くなったものと思われる。そして大井川の伝承もやくわしくなっている。山内家に仕えた「此里二住者」の素性が、山内候に仕えた足軽で、中谷の松岡静男氏の祖であると書かれており、その者が飛脚として土佐に戻る途中の出来事だと具体的である。足軽が(大井川を?)増水で渡れずに困っている所に川中に僧が現れ、足軽を背負って渡した。その僧は、延福寺のエンコウと名乗り、足軽の忠をめでて助けに現れたのだと言った。足軽は戻ってから延福寺のそばに祠を立てて祭ったとある(稲生村史編集委員会『稲生村史』、稲生村、一九五〇年、四〇頁)。松岡家が河伯神社と特別な関係にあることを説く必要があったものと思われるがその理由は不明である。

整理すると、一七四七年頃、下田村には河童駒引譚が伝えられ、村人が河童の祭りをしていたが、一七六三年には円福寺が境内に漂須部明神として河童を祭るようになり、一七八七年には名前を河伯と変えている。明治になって寺が廃寺になると、再び村人が祭るようになった。中谷の松岡家の話がいつ頃語られ始めたかはわからないが、もしかすると寺院が退転したあと、河伯大明神を存続させる



河泊神社とお供えのキュウリ



河泊祭での子ども相撲と絵馬台

時に中心となった家なのかも知れない。

現在の河伯神社は、今は河泊神社と表記を統一し、伝説も主に下田川の河童駒引き譚を採用し、旧暦六月十二日を祭日に祭りが続いている。稲生の通りには出店が並び、参道を提灯が照らし、参拝者はキュウリを持つて神社に詣でる。絵金派の絵が絵馬台と称する台に飾られ、海洋堂製作のカハクサマのフィギュア2体がその前に並ぶ（近年絵馬台は解体された）。そして子どもたちの相撲奉納がある。

以上が稲生の河泊神社の誕生と変遷の現時点で推測されるアウトラインである。

## (2) 高知城下町のエンコウ祭

南国市稲生の河伯神社の祭りは有名で、後川からも比較的近い。では後川流域のエンコウ祭りのルーツは稲生なのだろうか。

これまで見たように、稲生は江戸中期の一七六三年に漂須部明神の社殿が作られており、毎年菖蒲小屋を作る前浜や久枝とは異なる。後で見ると、高須や介良では「河伯大明神」の幟を立てるが、後川流域には「河伯」の名は見られない。どうやら、後川流域の祀り方は稲生の直輸入とは言えないようである。

後川流域のエンコウ祭と近いのは、毎年仮設の棚を作る所である。高知市中心部から東の農村地帯にそのようなエンコウ祭が散在



カハクサマのフィギュア

していた。しかしながら、江戸時代の記録に祭り方まで記したものは見つからない。近代以降になると、郷土史家による猿猴祭の記述があらわれる。しかも、農村部ではなく、高知市街地でエンコウ祭が行われていたようである。郷土史家の寺石正路が大正十四年（一九二五）刊行の著書で自分の思い出も含めてくわしく記述している。

### 事例5 猿猴祭りの胡瓜流し

当国昔は毎年旧暦六月十六日に猿猴祭りということがあった。猿猴とは猿のことではない。他国にいう河中のカツパ（河童）の事で、水中に住み遊泳する小供など捕らうるといわ（れ欠力）るものである。明和六年、井上某という土人の内室が怪病にかかり、五台山竹林寺の満慶和尚というを請じ祈禱したところ、猿猴の祟りということ、六月十六日に鏡川で胡瓜を供え祭ったところ、たちまち全癒した。それより人々聞き伝え同月同日に胡瓜を川へ流し猿猴を祭ることとなった。昔は盛んなもので、祭りの日は子ども連は河上に竹を立て縄を張り、紅燈を釣り祭壇に胡瓜を供え、太鼓など叩いて、夏祭りの気分を漾ただよわせる。又市人は胡瓜へ墨で辰歳男とか丑歳女とか各その年の干支えとを記し、家内五人なれば胡瓜五本河へ投じ、猿猴（カツパ）に供し、今歳の災難除けを祈ったものである。その日は郡部の農民ら、みな胡瓜を担いで市中を売り廻り、猿猴様の胡瓜はいらぬかというて呼び歩いたことを、著者などはなお幼時目撃記憶している。

（寺石正路『土佐風俗と伝説』、『日本民俗誌大系』第三巻、中国・四国、角川書店、一九七四年、二一四頁）

寺石はこのエンコウ祭りが行なわれていた場所を明記していないが、寺石が慶応四年（一八六八）に九反田（現高知市）に生まれ、明治七年から上京する十七年まで近くの第二十六番小学校（後の南街小学校）などに通っているのが、『高知県人名事典 新版』、高知新聞社）、これは現在の高知市街のことである。

ここで記されたエンコウ祭の特徴を列記すると、

○旧暦六月十六日が祭日

○子ども達がエンコウ祭に関わっている

○河上に竹を立て縄を張り、紅燈を釣り祭壇にキュウリを供える  
○人々はキュウリに自分の干支と性別を書いて川に投じると、災

難除けになる

○太鼓を叩く、夏祭りである。

というように、子ども達主体、臨時の祭壇、提灯、キュウリの供物などは後川流域のエンコウ祭と重なっている。だが、その由来譚にもあるようにエンコウ祭の目的は水難除けではなく、災難除け、厄除けになっている。キュウリに自分の干支と性別を書いて川に投じるとするのは、後川流域のエンコウ祭には見られない。

昭和初期の『土佐史談』五五号（一九三六年）の「土佐民間年中行事に関する調査」（高知県女子師範学校郷土室）にも「えんこう様」の記述がある。

事例6 「土佐民間年中行事に関する調査」のえんこう様

えんこう様（六月）十一日、河原に祭壇を作り種々の供物をし、えんこう様を祀る。夜は提灯をつけ、子ども等は参拝する。そして胡瓜に家内一同の名前と年齢を書いて川に流す。（市）  
○河原に柵を作り胡瓜を供へてまつる。（長、五台山。介良）

○えんこう様へ胡瓜をもつて参詣に行く。（長、高須）

○十五日を、えんこう様と称し、「えんこう様に瓜をあげます」とて瓜を川へ流す。この日は水泳はせぬ。（高、佐川）

厄祓いにキュウリを流すことは、同報告の「瓜封じ」の項目にも見られる。「土用丑の日に寺々にては瓜封じの祈禱がある。人々は胡瓜、茄をもつて参詣し諸病封じの祈禱をして貰ひ、胡瓜茄を戴いて帰り、身体を撫て、翌日川に流す。（各地）」とある。まさにヒトガタの代わりにキュウリを使うもので、これが寺院の行事として各地にあったことがわかる。高知市街地のエンコウ祭で、キュウリに干支や性別、名前など書いて川に流す方法とよく似ている。下田村円福寺の標須部明神もそうだが、エンコウと寺院はどこかつながっているようだ。事例5でも、猿猴祭の由来譚として、駒引き伝説でも大井川の川虎でもなく、五台山竹林寺の満慶和尚による祈禱の話が採用されている。同じ話が「皆山集」にも記録されているので掲げてみよう。

事例7 五台山満慶和尚の修法と猿猴祭り（一七六九年）

猿猴祭りとて水虎を祭ることは、明和六年己丑井上某の内室怪病二苦しみ、五台山満慶和尚を招請して修法せしに、水虎の所為なること顕れ、六月十六日の夜南川原にて祭をなし、其病いゆ。是より恒例となると云々。（「皆山集」一六三）

この事例7は、事例5とほぼ同じで、寺石は事例7をもとに文章をまとめたのではないかとさえ考えられる。ただ両者が異なるのは、事例7には、キュウリの記述が無いことである。事例5ではキュウ

リを供え祭ったら全癒したとあり、キュウリを川に流す習俗の由来譚になっている。高知市街地の人々にとつて猿猴祭りは単に水遊びの子どもの水難除けというだけではなく、災難除けの行事になっており、そのことで、あらゆる年代の人に関わる普遍性を獲得したと言えるだろう。

そして祭り方は記されていないが、高知市街地の猿猴祭りについては江戸時代に遡る記述もある。

#### 事例8 「詒謀記事後篇抄」の淵猴祭

又五十年斗以前は今の如く神佛へ提灯を過分掛ると云ふ事なし江ノ口などの神事ハ暗夜故たま／＼ちやうちん掛て往来の為に能と申たりしに今八十五日六日の月夜にも盛二掛様二成たる也是ハ上方の真似と覚えたり 近年又淵猴祭など云事始りたり淫祠共云へしヶ様に昔有りし事は止り昔無き事ハ出来世の興廢古今如此し(『皆山集』6 社会・民俗(1) 篇、高知県立図書館、一九七三年、三二二頁)

「詒謀記事後篇抄」の成立年代が不明だが、「詒謀記事」が一七七三年頃なので、その後の一八世紀の後半ぐらいだろうか。「近年又淵猴祭など云事始りたり」の一文は、エンコウ祭が江戸時代中期に始まった新興の祭りであることの証拠の一つになる。

それから二、三〇年後の「森勘左衛門芳材 日録」には、実際に猿猴祭を見に行ったことが記録されている。

#### 事例9 「森勘左衛門芳材 日録」の猿猴祭

文化三年(一八〇六)六月十六日

夜猿猴祭故橋へ見物ニ参る。十式三年振ニ見物ニ参ル処殊外にきく敷事也。前廉ハ灯燈五六之事なりしか、橋の上散田百程もふつきちよふちん有之。上筑地ニも沢山ニ有之。下掛川町越戸の向ハ殊ニ沢山ニ而川原一面ニ有之。式参百も可有と思われ、男女之見物も又大勢なり。夫方掛川町越戸へ参り見る。雑咽(喉)場より丸山ニも一面にちよふちん掛り居ると見へる。拾年の内ニヶ様違物かと思ふ。

(高知県『高知県史民俗資料編』一九七七年、八二頁)

一八〇六年六月、森勘左衛門が猿猴祭を十二、三年ぶりに見に行つたところ、以前は橋の所に提灯が五つか六つしかなかったのが、百ほどに増えていた。勘左衛門はさらに足を伸ばしており、上筑地にもたくさんさんの提灯があり、下掛川町越戸の向こうは特に多く、川原一面の提灯なので二、三百もあるのではないか、男女の見物も大勢いると記している。雑魚場から丸山までも一面に提灯が掛かっているようだ、十年ぐらいでこのように違うものかと思いを書いている。その様子はかつて昭和後期に行われていた鏡川祭りのような雰囲気を感じる。

事例8を見ると、十八世紀の前半頃は神仏に提灯を飾ること自体が無かったようなので、十九世紀初めの高知城下町で提灯を飾ることが大流行したことがわかる。提灯の明るさにぎやかさ、飾ることへの喜びや見る楽しみがその動機だろうが、猿猴祭はその格好の機会になったのであろう。そしてここからは想像になるが、おそらく猿猴祭は提灯とセットで都市部から農村部へ広がったのではないだ

ろうか。前浜や久枝で橋の上などにぎぎしく提灯を飾るのも、そのルーツは江戸時代の高知城下町にあったと思えば、納得がいく。事例8・9から見えてくるのは、エンコウ祭が農村の祭りにとどまらず、江戸時代の高知城下町で発展・変容していった姿である。そして後川流域のエンコウ祭も、その影響下にあった可能性がある。事例7のような由来譚も、そのように急激に発展していった猿猴祭を説明するために、語られるようになったのかも知れない。

江戸時代に始まり、急速に拡大していった猿猴祭も近代に入ると衰退していったようだ。事例5で、寺石正路は幼少時の記憶も含めて記述しているが、その最初の文章は「当国昔は(略)猿猴祭りということがあった」と過去形である。近代化の中で高知市街の猿猴祭は急速に消滅していったのであろうか。

市原麟一郎氏は、高知市街地の小祠を訪ね歩き、その痕跡を記録している。

上町三丁目の月の瀬橋のたもとに水天宮という小さな社がある。近くのおじいさんは、「なんでも京都から落ちのびてきたお姫さまをお祀りしたものと聞きました。だから女の神さまだそうです。また「えんこうさま」ともいって、お祭りは旧暦の六月十六日で、その日にはキュウリをお供えしたり、川へ流したりもして、水難防止をお祈りしたものでした。お祭りには花台をこしらえ、夜店もずらりと並んでなかなかぎやかでした。」と語っている(市原麟一郎『高知ごりやく散歩』、高知新聞社、一九九八年、一三四、一三五頁)。

また役知町の水神宮は、元は旭の鏡川上流にあったものが川の流れが変わり、下の方へ流れてきたので現在の所に祀ったと伝え、水神宮の祭りの前日に「えんこうさま」の祭りもやっていたと言う。「河

原にいろんなものをお祭りしますが、特にキュウリに家族の名前を書いて、水難に遭わんようにと祈って川に流します。／えんこうは、キュウリが好きですき、キュウリを流すわけです。／それからお祭りの晩は、エンマ(絵馬)をこしらえ、夜店も出て、そりやにぎやかなもんでしたよ。」しかし堤防ができ、河原も無くなると、えんこうさまの祭りは消滅してしまっただけと言う。(同前、『高知ごりやく散歩』、九六、九七頁)

キュウリ流しの習俗は、後川流域では見られないが南国市里改田や高知市高須などでは見られた。提灯飾りが後川流域に見られるように、高知城下町で行われていた猿猴祭の要素は各地に伝えられていたようである。

## 二 高知県内のエンコウ祭と関連行事の文献資料

第一節では、高知県におけるエンコウ祭の歴史について近世や近代の資料をもとに記してきた。ここからは、後川流域以外のエンコウ祭と関連行事の事例を現代の調査報告などから紹介したい。

後川流域も含め、それ以外の県内のエンコウ祭については、田辺寿男氏の「猿猴話」(『土佐民俗』第六六号、一九九六年)が最もまとまった研究で、前浜・久枝や稲生以外に、吹井や新木、田辺島の事例があげられている。その後、『高知県の祭り・行事―高知県祭り・行事調査報告書―』(高知県教育委員会、二〇〇六年)の「基礎調査一覧表」にも、高知市高須本町、舟入川河原(中断中)、南国市浜改田東場集落地蔵、南国市前浜後川河原、野市町上岡河原にえんこう祭りがあることが記されている。簡単な記述だが、エンコウ祭の広がりや現存状況がわかる。エンコウ祭は香長平野を中心に分



布しており、一部を除いて消滅の途上にあった。

その一方で気になることがある。エンコウ祭の無い地域で、水辺の祭りはどうなっているだろうか？ということだ。

『南国市史』や『土佐山田町史』を調べてみると、「川祭り」と呼ばれる行事があることがわかった。南国市の川祭りは川辺の地蔵を祭るもので、土佐山田町神母ノ木の木の大川祭りは、川辺に水棚を設けるものであった。現地調査の過程で、香南市香我美町にも「川施餓鬼」などと言って、水辺に水棚を設ける盆行事があることを知った。野市町上岡のエンコウ祭でも、水棚を作るので、両者の方法はよく似ている。関連を考えるためにも調査することにした。

また、水辺の祭りではないが、後川流域のエンコウ祭と共通する特徴をもつ行事を「その他」として二ヶ所調査した。子どもが主役の高知市布師田のおさばいさまと、提灯飾りが後川流域のエンコウ祭と似ている高知市春野町仁ノの龍のお不動様である。

本節では、以上を次の4系統に分けて主に文献から紹介する。

- (1) 後川流域以外のエンコウ祭
- (2) 南国市北部の川祭り、地蔵祭り
- (3) 香美市土佐山田町・香我美町の川施餓鬼
- (4) その他

実地調査の結果については本章第三節で報告する。

(1) 後川流域以外のエンコウ祭り

高知県内にエンコウ祭と称するもの（およびそれに類するもの）はどのくらいあるのだろうか。これまでの文献や実地調査で得られた情報から列記すると、香南市野市町（上岡）、南国市（里改田、篠原、稲生）、高知市（介良、大津、五台山、吹井、高須・新木、役知町、

上町）、日高村（宇井）、佐川町などに分布している。

日高村や佐川町など西に無いことは無いが、圧倒的に高知市中心部から東に多い。いずれも香長平野と呼ばれる県下最大の平野部に分布している。

事例10 エンコウ様（香南市野市町上岡）

二〇一一年七月十六日と二〇一三年七月十九日のエンコウ様の日に取材した。祭りの様子は、次節「周辺の関連行事」に記されているが、簡単に述べておこう。

ここでは物部川の川岸に盆のものと同じ水棚をつくり、地域の人々がキュウリをもってお参りする。かつては、その棚の前で飲み食いしたそうだが、今は地区の公民館に移動して行なわれた。その場で聞いた話では、エンコウ様は河童で、引つ張られる、ケツを抜かれると言った。盆の時は泳がれんと言ったが、盆があけると仏様が墓へ戻る、田芋の葉で荷造りするなどと言った。

ここには、エンコウ祭りの規約を書いた縦一・五センチ、横五四・二センチの木の板が残されていた。この板には「川祭」「えんこうさま」と書かれており、エンコウ祭りが川祭であったことがわかる。明治時代のエンコウ祭の記録は少なく、貴重な資料なので人名を含めて掲げておく。旧六月十二日に行なうこと、提灯を掲げ、葉のついた竹二本に注連縄を張るとあるが、棚の記述は無いこと（現在は盆の水棚のような棚を作る）、お供えに御神酒はあるが、キュウリのことは書いていないこと、時間は午後三時から日が暮れるまでであったことなどがわかる。一人七銭（昭和十二年から十五銭）集めて酒魚を振る舞うとあるように、宴会が行なわれるのは今も変わらないが、ここではその頃から大人の祭りであって、子ども主体

ではなかったらしい。

(表) 規約

毎年旧六月十二日施行／スルモノトス

一挑灯ヲ掲ゲ葉竹ノ式本ニ注連繩ヲ張りノ神酒錫式個ヲ献スルノ定メ

一壹人前ニ付金七銭宛ノ集金シ酒魚料ニ宛テ一同へ振舞之筈

一組中集□時間ハ当日午后三時ヨリノ日没限リノ以上

明治四十四年ノ旧六月十二日 改正 ノ上岡南組中ノ千秋万歳

昭和拾貳年度ヨリノ一人前金拾五銭宛ノトス

(裏) 川祭人名簿

一番 島内立夫ノ全穎治ノ全伸子ノ全幸子ノ全澄子ノ中野正幸

二番 重森勝彦ノ中野正幸、別役建男、千恵子ノ窪田寿雄ノ伊藤貞吉ノ下元象二郎恒石美喜、豊永安秀、坂本光男

三番 公十 島内克之、小松正繁、島内穎治島内公一、石川栄、高橋正郎、喜代島内康幸、島内数彦

四番 吉川均、島内幸次、島内伸夫 茂、絢子 山本初実、島内功光、浩喬島内幸、西藤伸之、西村福治

旧六月十二日

えんこうさま

香長平野を流れ、後免付近や里改田、稲生を通り、五台山の南で浦戸湾にそそぐ下田川流域を見てみよう。

前浜から北西に位置する里改田にもエンコウ祭があった。だが川ではなく池が祭場となっている。

事例11 えんこう祭り(南国市里改田)

「蚊居田村の中ほどに丸池という広さ五反ほどの自然池がある。年中地下水がこんこんとわき出て、子どもたちの格好の遊泳場になり、藩政時代は、家老桐島家専用の釣場として禁漁のおとめ池であった。この丸池で、旧暦七月上旬の日に「えんこう祭り」が行われる。部落代表の「年行事さん」が高さ一メートルほどの竹製の水棚(たな)を作り、各戸それぞれウリとおふまを供えてえんこうさんに豊作を祈る。とくに病気で苦しむ者は、ウリに己の疾病を封じ平ゆを祈願しておく。祭りが終わると、年行事さんが水たなと一緒にウリを川へ流し、病気もなおると信ずる習俗が最近まで続けられてきた。」(『蚊居田村風土記』宇賀和彦、土佐出版社、一九八八年、一三九頁)

「えんこう様行きのキュウリ 旧暦七月十二日のえんこう様に、キュウリをお供えする風習が伝承されてきた。丁度この時分のキュウリは収穫期をすぎた端境いものばかりで、黄色にうれて、曲がった小形のものが多い。かように、他の役にも立たなくなったものをえんこう様行きのキュウリと呼ぶ。キュウリは即黄瓜である。」

(同前、『蚊居田村風土記』、一四、一五頁)

祭日が旧暦七月上旬の日になったり、七月十二日になったり一定しないが、エンコウを祭るのが「年行事さん」で子どもではなかったり、棚は水棚で菖蒲小屋とは異なるなど、後川流域とはいろいろ違いがある。供えたキュウリ(ウリ?)を川に流すことで、病氣治癒を願う習俗は高知市街地と共通する。

下田川の支流に面した高知市介良には「かわたるさま」という行事がある。



かわたろさま (高知市介良白水)



かわたろさまのチラシ (同上)

事例12 かわたろさま (高知市介良)

「かわたろさま／えんこう祭り」で旧の六月十二日には、お当屋が川の中に竹を立てて、柵をつくって、えんこうのすきなキュウリを供える。／これは白水、岩松、長崎では、いまでも年中行事の一つになつちよる。／白水のノボリには、奉寄進 河伯大明神と書いてある。絵馬は二十ほど、子ども相撲、花火の催しがある。 鍋島俊男 (明治三三年生) 他」 (『介良風土記』橋詰延寿 昭和四八年五月)

「えんこう祭り」と言いながら、表題が「かわたろさま」になっているのが注目される。「かわたろさま」は祭りの呼称であり、令和のチラシ (写真) でもその名前が大きく書かれている。第五章で述べたとおり、江戸時代の土佐の河童呼称は、猿猴とともに河太郎系呼称があったが、時代とともにエンコウが優勢になっていた。その古い「かわたろさま」の呼称が今でも使われていることには驚かされる。それとともに考えさせられるのは、猿猴祭という名前で提灯飾りなどの都市的な方法が広がる以前にも、河太郎系の名前で河童を祭る行事があったのではないか、ということである。これにつ

いては証拠も無いが、各地のエンコウ祭の多様性を理解するには、そのような可能性も考慮した方が良いと思われる。

ちなみに、二〇二二年の祭りは、川辺の堤防に設けられた柵に「河伯大明神」と書いた幟をつけ、近所の人がキュウリをもって参拝するというものであった。

下田川の河童信仰の中心地というべき、稲生の河泊神社については前節で述べたので、下流の事例に移ろう。

事例13 猿猴祭り (高知市旧三里村、旧五台山村)

「稲生集落を上流とした下田川河岸集落でも、河伯神社祭日に順じて、ささやかな猿猴祭りが昭和五〇年ごろまで行われていた。旧三里村に属する吹井・唐谷の下田川南岸集落と、北岸には旧五台山村東崎・和泉・倉谷・鳴谷と下流に続く集落が並ぶ。祭日にはそれぞれ集落単位に、一年竹を使って水棚を川岸に作る。柵にはきゅうり・なすを供える。夕方になると、家族中が揃って川岸に来て、猿猴の神棚を拝み川の安全を祈願する。なかで東崎集落は少し戸数が多いので、二つか三つの猿猴さまの柵を作っていたという。／また、介良川が下田川に流れこむ交流地点に「水天宮尼御前」と称する小祠がある。ひとは猿猴の神さんと呼び、お詣りすると、産が軽くなると伝えて、静かに婦人たちの参拝がある。更に、この介良川を北に向かつて二百メートルくらい遡行した所に「おもんさん」と呼ばれている小祠がある。ここにも猿猴が腰をかけたという石が祀られている。このように川筋の小祠が、不思議に猿猴と関っているのである。」

(田辺寿男「猿猴話」、『土佐民俗』第六六号、一九九六年、三、四頁)

田辺寿男氏撮影の吹井のエンコウ祭の写真が残されている。川岸に竹を組んで作る簡素な棚で、盆の水棚とも、菖蒲小屋とも異なる。このタイプのエンコウ祭の貴重な記録である。



五台山吹井のエンコウ祭り  
棚作り (田辺寿男資料)

事例14 猿こう様祭り (高知市五台山)

「猿こう様祭り (五台山) (略) 夏は水に接する機会が多くその為に溺死する者も多かった。之は川に住む「猿こう」と云うものが災いするものであると云う畏敬の念を持ち、之を祈願する事によって危害を無くすると云う信仰へと発展して、水の季節の旧六月十二日に、五台山の南側地区では「えんこう様」のお祭りをするようになったものと考えられる。之の祭りには前日に地区の自家のものが直径二糶位の青竹、長さ一・六米のものを四本建て、高さ一米位の所に割った竹を並べて供え棚をつくり周囲には締め縄を張り、其れに「ふる」(長くなる豆)、茄子、里芋の葉に水を入れたものを縄に吊るし供え物とした。夕闇が迫る頃から胡



五台山吹井のエンコウ祭り  
お参りの様子 (田辺寿男資料)

瓜と「おふま」(洗米)をもつて、水泳等安全の祈願をする。之の際棚の側では世話人が、御神酒を一人一人に飲ませ共に安全を願った。／翌日之の棚や、供え物等は川へ「あます」(流す) 又材料などは川の中に立て「えんこう様」の行事は終わりとなる。／又地区に依れば、二米位の船を、わら又は、麦わらでつくり、供え翌日川へあます所もあり。(大野康雄「五台山の民俗のいろいろ(三)」、『土佐民俗』第七八号、土佐民俗学会、二〇〇一年、十七、十八頁)

事例13と14は、旧五台山村の情報としては重なっているが、事例14の棚は人の背丈ほどあり、田辺氏撮影の吹井の棚より大きい。周囲に張った注連縄に供物をつるすのが七夕風である。個人が持って来たキュウリは棚に供えたのだろう。地区によってワラ船を作り、翌日川に流すというのが注目される。麦藁舟を流す作法は事例15の高知市新木にも見られる。

下田川の北方、舟入川下流の高須付近の事例に移ろう。舟入川は、香美市土佐山田町の山田堰で物部川から取水され、後免を抜けて、大津から高須で国分川と合流する。江戸時代に野中兼山によって作られた川で、物部川と城下町を結ぶ交通の大動脈であった。

事例15 猿猴さん (高知市新木)

「新木は高須の東に当り、同じ舟入川に添った集落である。同じ日(旧六月十二日)を猿猴さんの祭日とし、それぞれ各戸で麦藁舟を作る。舟は長さ約五〇センチのアヒル型に編み、なるべく永い間浮かせようとして、同じ麦藁で浮かせ台を舟の下に取り付ける。中心部にローソクを立て、きゅうり・ご飯・煮物・芝餅などを供えて

前の川に流す。夕方になって流されるので、戸数七〇戸の祈り火が川面に映えて美しい風景を見せる。浦戸湾に近い舟入川の河口である。潮の満ち干にも遊ばれて、緩慢な流れに乗って、二三日は川を上り下りする。(後略) (田辺寿男「猿猴話」、前掲、五頁)

事例15と16は舟入川流域の集落である。新木でも旧五台山のように藁舟を作ったというのが興味深い。注目されるのは、舟の中心にローソクを立てる点で、提灯の底にローソクを立てて即席の舟代わりにして川に流す久枝の「エンコウの川流れ」も、これらの事例との関連を考えざるを得ないだろう。

事例16 河伯神社 (高知市高須)

「高須は舟入川の南岸に添った集落である。ここにも大岩があり、その下は猿猴淵と呼ぶ深い淵であった。いまは堤防構築作業によって淵がなくなり、大岩の下に高さ四〇センチくらいの小祠があり、「河伯神社」の神札と鏡がご神体として祀られている。／祭礼日は旧暦六月一二日である。(略)／旧暦六月一二日が来ると、若衆組が手分けして、六〇軒くらいの氏子中を回り、相撲などへの寄付金を集める。一等賞の柱時計・二等賞の浴衣・その他団扇などを山側に並べて飾りたてて力士の到来を待つ。力士は、電柱の張り紙や口伝によって祭りを知るのである。氏子は、一人が一本のきゅうりを持って詣りに来る。それらのきゅうりは、祭りが終わると一部を川に流し、あとは酒・肴の接待を行った当番が持ち帰るといふ。／ちなみに、子ども相撲と大人相撲を分けて、大人相撲を大相撲と呼ぶ。大相撲の力士はこのような祭りを楽しんで、郡下各地から集まって来る。高須で夕方まで相撲をとった力士は、その足で、南東に見え

る稲生の河伯神社の夜相撲へ向かったという。夜相撲は稲作民にとって大切な神事でもある。

(田辺寿男「猿猴話」、前掲、四、五頁)

高須のエンコウ祭りは、毎年臨時の棚を設けるのではなく、「河伯神社」という常設の祠がある点は稲生と同じである。祭日も稲生の河泊神社と同じなので、稲生の分かれなのではないかとも想像される。キュウリを供え、終わると(一部を)川に流すのは高知城下町や里改田と共通する。

舟入川の北を流れる国分川にもエンコウ祭があった。川に面した高知市大津の田辺島の事例である。

事例17 エンコウ祭り (高知市田辺島)

「毎年旧六月十二日には国分川岩ヶ淵で、このエンコウ祭りをし余興に子供相撲が行われる。」「田辺島では、キュウリ、茄子をあげてお祭りする」(橋詰延寿「田辺島のエンコウとシバテン」、『大津村史』、大津村役場、一九五八年、三九六頁)

「田辺島西組に岩淵という地名の淵があった。日常人びとの集う憩いの場所でもあり、主婦は洗濯に集まり、稲刈りの男は汗を流しにやって来て、どぼんとこの淵に飛びこんで汚れを落とした。また渡し場でもあり、集落で集めた米を給料代わりにもらって暮らす人好しの船頭がいて、いつもここに待機していた。／ここでは子供組が祭事を司どる。祭日には子供等が氏子の家々を回って、相撲の商品代を集める。商品は子供相撲であるから鉛筆や帳面であった。大人はどうかと聞くと、「好き」が来て、竹を割って、一辺三〇センチの棚を作って、きゅうりを供えるだけの手伝いであったとい

う。／＼参拝者は、家族中うち揃ってきゅうりを柵に供えに来ては、昼の子供相撲を見て楽しむ。一人ひとり持ち寄るきゅうりは柵からあふれる。祭礼が終わると、柵ときゅうりは川に流して猿猴様に供える。／＼子供相撲はいつも早く終わるので、祭りが済んで高須の方を見ると、猿猴淵と呼ばれる大岩の附近は、大相撲を見物する大人たちの扇子が白く光って波打っている最中であつたという。」

〔田辺寿男「猿猴話」、前掲、四頁〕

〔エンコウ祭りは〕 大津でもやっていたが、消滅してしまつた。田辺島はオサバイ様の所でエンコウ様を祭り、鹿兒ではエンコウ様はやつていなかった。田辺島ではお地藏さんのある近くの川のふちに青竹を切つてきて四つ立てて柵を作つて屋根や壁もヒノキの枝で作つて、キユウリや米、ナス、お酒などエンコウの好きなものを供えて、エンコウ祭りをした。昭和三、四十年ころまでやつた。エンコウ様のときは子ども相撲もあつたりして、方々のエンコウ様に相撲を取りに行つた。鹿兒の浦さんは北浦や高須へ行つたことがある。〔高知県立歴史民俗資料館、『昔のくらしと道具』—高知市大津民具館の資料から—、一九九九年、一〇二、一〇三頁〕

田辺島でも祭日は稲生や高須と同じ六月十二日だ。相撲を行うのも稲生や高須と共通し、相互の影響を感じる。だが、田辺島は後川流域と同じ子ども組の主催で、柵は竹で組んでいたが、屋根や壁をヒノキの枝葉で作る点は盆の水棚型のようなだ。

ここまで香長平野のエンコウ祭の事例を見てきた。田辺島、高須、五台山は、浦戸湾にそぐ河川の下流の集落であり、国分川や舟入川ではそこから上流ではエンコウ祭の報告が無い。

ここからは、高知市から西に車で四〇分から一時間ほど離れた日高村と佐川町の事例を見てみよう。

#### 事例18 猿猴相撲（日高村本郷宇井）

「宇井の猿猴相撲

本郷宇井部落に毎年旧七月十日の恒例地下相撲ぢげがあり、迎も人気で黒岩、佐川、尾川、斗賀野、越知辺の力士が押し寄せ技を競つた。今は無いが毎年恒例で赤はげ小丘の尾根の地藏堂前には土俵の跡がのこっている。この由来が大変面白い。／＼部落入口の宇井橋たもとに昔は大きな深淵があつた。宇井部落の柏井忠男さんの先祖が淵添へ馬をつないであつた所、水底から猿猴がのそのそ出て来て、其の馬の手綱を自分の五体に巻き着け、ごそごと馬を淵中へ引つ張り込んで行つた。馬はおとなしくついて行つたが、腹が水につかり出すと大あわてで、我が馬舎指してまっしぐらに駆け帰つた。猿猴は手綱を解く間もなく、道々引きずられて、皮は剥げ、血だらけで只ウーウーとうなり乍ら、泣き叫ぶ。馬主は驚き繩からげにしたが暴れ狂うので、始末に困り終に追つ払つた。翌朝家の軒下に鮮魚が掛けられてあつて皆驚いた。然もそれは久しく続いた。年過ぎて木鉤も古びたので、もつと丈夫なものにと鹿の角に換えてやつた所、不思議や、翌朝から魚を持つて来なくなつた。／＼そこで人々はこの淵を怖じ恐れて、淵の上の山蔭に石地藏を建てた。立派なお堂の地藏台右側には「文化四丁卯歳七月十日」と刻まれ左側には「安政三十九年七月百年祭」と刻印されてゐる。此の事から其の人氣は想像されるが、旧七月十日の相撲はこの地藏菩薩への報謝の行事で、宇井の部落名は猿猴のウーウー唸つたのが訛つて地名化し「赤はげ」の地

名も生れ、鹿の角が子ども水泳には猿猴よけのお守りとして掛けられるようになった由来だと云う。／又馬の手綱に引きずられて、赤はだかとなった猿猴が「憂いぞ、辛いぞ赤ハゲで」と泣き叫んだ声が、宇井と赤ハゲの地名となつて残つたという話もある。／ともあれ、五十年忌、百年忌の遠い供養の亡き主は何者だろう。」  
 (日高村史編纂委員会編『日高村史』、日高村、一九七六年、六二五～六二六頁)

文化四年は一八〇七年、安政三年は一八五六年、明治三十九年は一九〇六年なので、五十年忌、百年忌は、文化四年が出発点であることがわかる。この年がなぜ重視されたのかは『日高村史』も記述しているようにわからない。

事例19 エンコウ祭り (佐川町)

現在の役場前辺は昔、ひっこみの淵といって大きな岩が有り淵をなして恐ろしい程の光景ぢやったげなが道路にする事になつて潰したという。又此処は傘屋の水と言つて冷たい清水がわいていたげな。私の生まれた松崎の家の前に水神様が有つたが山の崖に元有つたものを県が道路を作る時下に降し山をけづつて道路にしたげな。そして出来た道路の角にお宮を建ててお祭りをするようになった。／盆の十六日エンコウ祭りが有り水神様の廻りに提灯を吊し夜灯をともしたが美しかったねエ、いがみのうりを供え、子ども達が川で泳ぐのにエンコウに取られんよう川へうりを流し水神様へ願掛けしよつた。お参りもたくさん来ていたがいつのまにかお宮もなくなつてなんとなく心淋しい気がします。(後略)

(『続佐川の昔ばなし』、佐川民話の会、一九八六年)

以上、前浜や久枝以外の県内のエンコウ祭の記述を転載・列記してみた。

これらの事例を総合してみたところ、県内のエンコウ祭に共通する要素は、①祠や社殿のある場合はそこで祭りをを行うが、無い場合は川辺に特別な柵を作つてエンコウを祭ること、②キュウリを供えることの2点ぐらいである。前浜や久枝など後川流域のエンコウ祭の特徴である、子ども組が主体となつて行うこと、提灯を飾ること、花火、相撲などは、各地で見られるものの、必ずあるとは限らない。そして共通しているように見える柵も他の地域では草蒲小屋は見当たらず、より簡素な柵だったり、盆の水柵だったりの違いがある。キュウリの供え方も後川流域以外では各人がまるごと一本を供える所が多く、キュウリの酢もみが主な後川流域とは違いがある。これらの点は、本章の最後に改めてまとめてみたい。

(2) 南国市北部の川祭り、地藏祭り

南国市の後川流域や里改田、篠原のように太平洋に近い所では「エンコウ祭」が見られるが、香長平野の北部の領石や久礼田付近では「川祭り」「地藏祭り」などと呼ばれ、川辺の地藏に対し、近くの寺院の僧侶が読経し、人々が参拝するという行事が行われている。調査報告は第三節に譲り、ここでは市町村史に記載されている情報を転載しよう。

事例20 川祭 (南国市)

(「夏祭」) 氏神をはじめ村の神社の夏の例祭に提灯をつける風習があった。絵馬提灯をつけるところでは子ども達が数日も前から絵馬

絵を描いたものである。／この頃川祭というのがあった。「エンコウ」を祭って、この夏の子どもの水難除けの祈りをこめたもので、仕掛花火や相撲などで賑ったものである。南国市では領石・門立・比江崎・下田・前浜などの川祭が知られている。」

(南国市史編纂委員会編『南国市史』下、一九八二年、一一〇〇頁)

事例20は、前浜付近のエンコウ祭と、領石など北部の川祭りをまとめて記述しているため両者の特徴が錯綜している。改めて地域を限った記述を引用したい。

事例21 川祭(南国市比江・国分)

〔六月〕廿五日、比江の川祭を国府渠附近で行なう。相撲、狂灯籠(人形を回転)など行なわれ、納涼のためのローカル行事であった。〔七月〕六日、国分の川祭で国分寺南の地藏ノ本で行なう。〔竹内英省『国府村史』、国府村史編纂委員会編、一九六一年、三九八頁〕

事例22 お地藏さま、川祭(南国市久礼田地区)

「久礼田地区のお地藏さま お地藏さまは、川のそばにお堂(像)が建てられ、水難の事故等より地域の人々を守っている。

植田【洞(どう)ヶ淵のお地藏さま】 植田の沖合の国分川支流(通称 洞ヶ淵)の堤防沿いにある、文化十五 戊寅 年五月二十四日 建立

久礼田【大井川のお地藏さま】 久礼田西部沖合の領石川(通称 大井「おおゆの堰」の堤防添いにある。大正九年 久礼田西組 建立)

植野【植野のお地藏さま】 領石橋の下流50メートル余りの東岸

に座す。行路・河川の安全を守る。昔は夏の植野川祭として大いにぎわった。現在も小規模ではあるが続けられている。

領石【牛月地藏】 左右山川(牛月川)の東にあるが、自動車道の建設に伴い今の位置に移転したものである。新しいお地藏さまは昭和になつて寄進されたもの。古い方は建立の時期は不明であるが、大正15年の大水の時に流され、そのときに首がなくなつたと伝えられる。「見渡」と彫られている。〔『植田・久礼田・植野・領石ガイドブック 久礼田の昔と会おう』、久礼田地区史談会、二〇一二年)〕

国分川上流の一带には夏に川辺の地藏を祭る行事が今も行われている。本章三節では南国市領石の牛月地藏の祭り、久礼田西の地藏祈願祭、植田洞ヶ淵のお地藏さんの祭りの三ヶ所の調査報告を収録しているが、二〇二三年に国府のお地藏さんの祭りも見ることができたので、写真を掲載しておく。

文献にはその目的は明記されていないが、この度の調査で、久礼田西では「大井川に堰を作る工事で亡くなった人の供養と水難事故防止祈願」、領石では「不幸があつたのでその供養と地区の安全を祈つて」などと伝えられていることがわかった。領石の牛月地藏の台座には「見渡」の字が見えるというから、川の渡し場等の安全祈願の可能性もある(第三節)。川辺に置かれていることから、水難事故が無いように祈つて祭られたのは間違いなさそうだ。水難除けというのはエンコウ祭と同じだが、対象が水の妖怪エンコウではなく地藏であることや、近くの寺の僧侶が祭りを行うこと、子ども組による祭りではないこと、など多くの点で後川流域とは異なっている。

国府地区の地藏祭りについては、令和五年七月八日に、高知城歴



史博物館主催の国府地区総合調査の一環で調査した。国分川北岸の堤防の道の脇に地蔵が祭られており、道をはさんで川岸には竹で棚が作られている。夕方当番に当たっている人々が集まり、棚の上方に縄を張り提灯を飾り、棚には一对のローソクと、キュウリ、ナス、トマト、カボチャなどを供えた。国分寺の住職が、まずは地蔵、続いて棚に向かつて祈り、参加者が参拝すると、スイカなどを皆で食べて、棚はすぐに片付けられた。棚は何を祭っているか聞いてみたところ、施餓鬼の棚であるとの回答だったが、『国府村史』にある「川祭」がこの行事と思われ、かつては水神あるいはエンコウを祭る意味合いもあったのかも知れない。棚の上部に縄を張って提灯を吊すのも、後川流域のエンコウ祭の提灯飾りを簡単にしたもののように見える。

このように南国市の北部では、地域の寺院が関与して川沿いの地蔵を祭る川祭が水難除けの行事として行われているのである。国府では地蔵と別に川辺に棚を作っており、エンコウ祭の作法が入り込んでいる可能性がある。地蔵を祭るといふ点では、浜改田東場で首の無い石仏（地蔵？）を「えんこう様」と呼んでおり、川辺に地蔵を祀り



国分の地蔵祭り  
国分寺住職が地蔵にお経をあげる



国分の地蔵祭りの棚と提灯

水難除けを祈る信仰は興味深い。

(3) 香美市土佐山田町、香南市香我美町の川施餓鬼

一方、物部川の東岸の香美市や香南市には、七夕や盆に水辺に水棚を立てる「川施餓鬼」「ウラボン」という行事が見られる。岩鍋では行き倒れの霊や祭り手のいない霊を供養するものと言うようにエンコウではなく餓鬼を供養する行事である。今回は香美市土佐山田町神母ノ木の川施餓鬼（大川祭り）、香南市香我美町稗地の盂蘭盆、同町堀ノ内の施餓鬼、同町岩鍋の施餓鬼供養、同町中山川の川供養の5ヶ所を調査した。これらの行事は文献にはあまり記載がなく、現地調査によって行き当たった事例なので、事例の引用は無い。

先述したように、香南市野市町上岡のエンコウ祭では、エンコウを祭る棚は盆の水棚と同じものである。高知県中東部では、初盆の家は庭や軒下に、竹や檜で水棚を作る習俗があり、十六日に壊し、焼くなどする。それと同じ物を、上岡のエンコウ祭ではエンコウの棚として作り、川施餓鬼では施餓鬼のために水辺に作るのである。初盆の霊と餓鬼、エンコウが同類と見なされているように感じる。これは伝承も同様で、第五章で述べたように高知県内では、盆に川（あるいは海）に行くといふに引き込まれるという所が多いが、中にはエンコウに引き込まれるという所もある。これも、エンコウと霊が近い存在であることを物語っているようだ。香美市神母ノ木や香南市香我美町は、「盆に川に行くとエンコウに引かれる」という地域とは離れているが、両者には通じるものを感じる。

そして、後川流域のエンコウ祭と違って、これらの行事は宗教者が祭祀を行う。香美市土佐山田町神母ノ木では神職と僧侶が、香南市香我美町の稗地、堀ノ内、岩鍋、中山川では、寺院の住職が祈る

か、祈禱した卒塔婆を水棚の後ろに立てる。南国市北部の地蔵の祭りも近くの寺院の僧侶が来ており、江戸時代の円福寺の漂須部明神や五台山の満慶和尚の川虎祈禱も含めて、エンコウや水辺の死霊の祭りと寺院の関係は今後考えるべき課題かと思われる。

#### (4) その他関連行事

最後に、川辺の祭りではないが、後川流域のエンコウ祭と共通点をもつ祭りを二つ紹介しよう。

一つ目は、高知市布師田のおいげさんの祭りである。この祭りは、岩井信子著『土佐の冠婚葬祭』（高知新聞社、一九八三年）に「おいげさん 子供の手で営まれる祭事」として紹介されており、後川流域のエンコウ祭と同じ子ども主体の行事として気になっていたものだ。おいげさんは、神母と書き、水に関係する神との説もあるが、布師田のおいげさんは、集落の幹線道路横の山側に祭られている神社で、特に川や水の神としての雰囲気は無い。だが、子ども中心の夏祭りという点で後川流域のエンコウ祭と共通する。

県内には、子どもが主体となつて行う祭りが各地に伝えられてきた。ほぼ絶滅した正月のカイツリ、大月町などで行われていたイノコ、高知市春野町新川の行者さまなどである。一方、エンコウ祭も、後川流域のように子ども主体の所もあるが、組や各家庭で行う場合もあり、必ずしも子ども組の祭りではなかった。どうやら各地で子どもによる祭りはあるが、どの祭りを子どもに任せるかは、集落によって異なるというのが実態のようだ。

二つ目は、高知市春野町仁ノの龍の不動さんの祭りである。これは、柱を立て綱を張り提灯をつるし、その近くで火花をして遊ぶ行事で、前浜・久枝のエンコウ祭の提灯の風景にそっくりである。高

知新聞の「土佐・民の営み」131（二〇一四年七月二日）に「おちようちん」の題で紹介されて知ったもので、写真を見た時は、その様子がエンコウ祭と似ていることに驚いた。

だが、この行事もエンコウを祭るものではない。「お不動様のお提灯」と呼ばれるように、土佐市宇佐の龍地区の青龍寺の本尊・不動明王に対し献灯するため提灯を飾るものである。エンコウ祭の特徴と私たちが考えていた提灯を飾る風習もエンコウ祭独自のものではない、ということはこの行事によって認識することができる。前節で述べたように、江戸時代に流行した提灯を飾って祭りを賑やかにするというスタイルが、高知城下町や後川流域ではエンコウ祭に取り込まれ、仁ノでは龍のお不動さんに捧げるという文脈で取り込まれたであろう。

そして仁ノの行事も子ども主体で、リーダーは大将、サブは副将と呼ばれている。お金を集めたり、竹を伐ったり、提灯を買いに行くのも子どもの仕事で、このあたりも後川流域のエンコウ祭そっくりである（新階恒秋「仁ノ子ども祭り」へ春野町文化財友の会『春野風土記』第十七集、春野町教育委員会、一九九八年）に詳しく紹介されている。

子どもが主催することや、提灯飾りなどの要素が「エンコウ祭」独自の要素ではないことがこれら周辺地域の他の祭りを見ることで明らかになった。だが、子ども中心や提灯飾りが、「後川流域のエンコウ祭」を理解する上で重要な要素であることは間違いない。そういった要素の高知県全域にわたる調査はまだなされていない。全容が明らかになれば、後川流域のエンコウ祭の意義や特徴はさらに浮かび上がってくるものと思われる。

### 三. 高知県内のエンコウ祭と関連行事の現地調査

この節では、南国市後川を中心とした周辺地域で行われている関連行事について現地での調査内容について報告し、当該行事との比較材料とするとともに、周辺地域を含めた特徴を示すことを目的とする。

今回の調査にあたって、高知市、南国市、香南市、香美市、日高村域で関連する要素を有する行事を抽出して下記の16カ所の行事の調査を行った。次ページより、1つずつ行事の内容や聞き取りの成果を紹介する。

周辺のエンコウ祭関連行事調査一覧表

No	名称	場所	実施日	備考
1	高須市高須 「エンコウ祭」	高知市高須本町 舟入川南河伯神社	舟入川一斉清掃の日	キュウリを供えてお参り。 鹿兒神社宮司の祝詞
2	日高村宇井 「えんこうまつり」	日高村本郷宇井えんこう 地蔵	8月第4日曜	水棚を川辺にたてる 神宮寺住職の祭事、相撲
3	南国市稲生 「河泊祭」	南国市稲生	旧暦6月12日	子ども相撲 絵金展示
4	南国市領石 「牛月地蔵の祭り」	南国市領石牛月川	旧暦7月7日	地蔵にお参り
5	南国市久礼田西 「地蔵祈願祭」	南国市久礼田西	7月10～20日の土曜	永源寺住職読経、地蔵にお参り 提灯飾り。大井川夏祭りとも
6	南国市植田「洞ヶ淵の お地蔵様の祭り」	南国市植田	旧暦7月16日	地蔵にお参り
7	香南市香我美町稗地 「盂蘭盆」	香南市香我美町稗地	旧暦7月16日	川岸に水棚設置。お参り。
8	香南市香我美町堀ノ内 「施餓鬼」	香南市香我美町堀ノ内	旧暦7月16日	川岸に施餓鬼作り・お参り
9	香南市香我美町岩鍋 「施餓鬼供養」	香南市香我美町岩鍋	旧暦7月13～15日	水屋を設置。宝鏡寺住職読経。 お供えを川へ流す
10	香南市香我美町中山川 「川供養」	香南市香我美町中山川	旧暦7月15日	川岸に水棚作り お参り
11	香美市土佐山田町神母ノ 木「川施餓鬼」	香美市土佐山田町神母ノ 木 聖観音堂	8月第一日曜	精霊棚を作る。予岳寺住職による法要、八 王子宮神主の神事。神母ノ木川祭りとも
12	香南市野市町上岡 「エンコウ祭」	香南市野市町上岡	旧暦6月12日	川岸に水棚設置。キュウリを供えてお参り。 公民館でお客。
13	高知市布師田 「おいげ祭り」	高知市布師田	旧暦6月12日	元は子ども主体。寄付集め。提灯、花火
14	高知市春野町仁ノ 「龍の不動祭」	高知市春野町仁ノ	旧暦6月19日	元は子ども主体。提灯、花火
15	香南市香我美町山北 「岩淵の祭り」	香南市山北	7月22日	子ども主体。カッパの塚
16	南国市篠原西 「エンコウ祭」	南国市篠原	旧盆の頃 8月第3土日頃	子どもが寄付を集めて準備。 水棚はヒノキで作り、キュウリを供える 子ども相撲、花火をする。



周辺の関連行事位置図 (S=1/100,000)

## 高知市高須「エンコウ祭」

平成二十六年七月六日と平成二十七年七月十九日に取材

平成二十六年七月六日、高知市高須の高須山の麓にある河伯神社で「エンコウ祭」が行われた。この祭りは、年に一回高知市七河川一斉清掃の日に、水の神様に対して水害・水難事故の防止を祈願するために行われるもので、八時三十分から始まり十一時三十分を終了する。参加者は例年十人から二十人程度である。

祭りの前日の五日に草刈りなどの準備をし、当日は高知市大津の鹿兒神社の神主が祝詞を捧げた後、地区の方が一人一人お参りをした（この祭りに鹿兒神社が関わるのは、当地区の氏神様が鹿兒神社であることによる）。お参りの際にはキュウリを一本お供えした。キュウリの他には、酒、水、塩、米、鏡餅、キュウリの酢もみ、なす、ピーマン、ししとう、鯛などがお供えされた。お参りの後は、境内で子どもは輪投げなどのレクレーションで遊び、大人は食事をとった。料理にはキュウリの酢もみも用意された。また、舟入川沿いには「奉寄進河伯神社 昭和五十二年六月吉日 高須氏子総中」と書かれた幟を立てる。

この祭りは、平成二十年までは西組・中組・東組の当番制で行われていた。地区の四、五人で掃除をしお参りをしていたが、高齢化にともない高須公民館の青年部が引き取り、公民館の行事として行うようになった。公民館の行事としては、この祭りと「万土さま」(年



河伯神社幟

に一回十一月最後の日曜日に、高須山に鎮座する「万土さま」の祠を掃除しお参りする行事」とがある。

昔はこの祭りのときには柵をつくっていた。名称は特になく、高さは人の背丈ほどで、四本の竹を四隅に建て、屋根や側面を木の葉で飾り付けた。できあがった柵を、河伯様が鎮座する小祠に登る階段下に設置し、参拝者は、柵にキュウリをお供えしてから河伯様にお参りをした。

昔は地区の人がごぞつて参加し盛大に行われていたが、高齢化にともない参加者が減少し、祭り自体も拝むだけとなっていた。今は青年部が引き取り、往年の如く賑やかに催されている。

昭和五十九年までは、この祭りは旧暦の六月十二日に子どもが主体で行われていた。今は七月の高知市七河川一斉清掃の日に行うと決めている。仕事をしている人にも配慮して、雨天などでも順延せず、場所を高須公民館に移して行うようにしている。また、片付けがあるので、終了時刻も十一時三十分と決めている。

### 柵の設置場所の変遷

(現在は設置していない)

- ①河伯様が鎮座する小祠の辺りまで舟入川が流入していたため、小祠のすぐ下の水際に設置した。
- ②河川改修や開発により、小祠周辺の宅地化が進んだため、舟入川の川中に設置した。(水に浸かってお参りをした。)
- ③河伯様が鎮座する小祠に登る階段下に設置した。

この祭りに関する昔の記録(参加者の氏名と寄付の金額などを記したもの)が残っている。それによると、昭和四十一年から一軒につき十円、四十三年から二十円、四十七年から百円を会費として集めていたことが知られる。しかし、平成二十一年からは公民館の事業費の一部を祭りの運営に充てているため、各家から集金はしていない。

この祭りでは、露店が出店し

たり提灯を飾ったりすることはなかったが、昔は境内で相撲を取っていた。特に娯楽の少ない時代であったため、相撲を楽しみに近くの介良地区からも子ども達が集まった。いつから行われていたかは不明だが、昭和三十年頃には取られていたようである。子どもの中



境内での宴会の様子 (平成 26 年)



河伯神社へのお参りの様子 (平成 26 年)



境内で子供が輪投げをして楽しむ様子 (平成 26 年)



河伯神社へのお参りの様子 (平成 26 年)



公民館で子供が輪投げをして楽しむ様子 (平成 27 年)



公民館でのお参りの様子 (平成 27 年)

うようだが、「げんじ」の謂われに

の年長者が土俵をつくり、その土俵で相撲を取った。鉛筆やノートなど文房具類が景品として用意され、これらを目当てに参加する子どもも多かった(以前はダンスが景品として用意されたとのこと)。勝っても負けても鉛筆をもらえたが、勝てばノートがもらえたとのことである。

昔は、近くを流れる舟入川に現在のような堤防がなかったため、相撲をとる広場の近くまで水が流れ込んでいた。この辺りに住宅が建ちだしたのは昭和四十年代である。今はその面影が残っていないが、昔はこの辺りで泳いだり、大きな木から飛び込んだりしたようである。

地元の方によると、「泳いではダメと言われたことはないし、エンコウに引きずり込まれたということも聞いたことがない。実際に高須では水難事故がなく、エンコウさまが守ってくれている」とのことであった。

因みに、河伯様が鎮座する小祠周辺の地名を「たかすのげんじ」と言う



公民館での宴会の様子（平成 27 年）

については地元の方も分からないとのことであった。

翌年の平成二十七年七月十九日も、河伯神社で「エンコウ祭」が行われることになっていったが、雨天のため、河伯神社の御神体（鏡と木のお札）を高須公民館に移して実施した。

地元の方は、「この祭りの呼び名を『エンコウさん』と言った記憶もある。ただし『河伯神社のおまつり』とは言わなかった。河伯神社には、エンコウが祭られていると思っていたが、親からは水の神様を祭っていると聞いていた。高須地区の氏神は鹿児神社であるが、そこで遊んだことはなく、エンコウさま（河伯神社）が身近な存在であった」と話されていた。

高須公民館の館長は、「この祭りを通して地域のつながりが以前よりも強くなってきた。次代へ引き継いでいきたい」と思いを述べられていた。

## 日高村宇井「えんこうまつり」

平成二十七年八月二十三日に取材

吾川郡日高村本郷宇井で「えんこうまつり」が行われた。この祭りは、旧暦の七月十日にえんこうの霊を慰めるため、赤あかはげ兀橋より約五十メートル南の小山に鎮座する「えんこう地蔵」にお参りをするというものである。昔は、この辺りの川には淵が多く柳が繁殖し、まさにエンコウがいるような景観であったが、今は河川改修などによりその景観は失われている。

この祭りは文政三年（一八二〇）頃には始まっていたと推測され（当屋が代々持ち回りで保管し祭りの際に使用する文机に「文政三年」との書き入れがある）、また、祭りの際にえんこう地蔵が安

### 祭りの流れ

（前日）

草刈り、土俵づくりなど、祭りの準備を行う。  
・土俵はケガを防ぐため土でなくおが屑でつくる。また、神聖な区域とするため周囲をロープで囲う。

（当日）

15:00 頃

①えんこう地蔵にお参りをする。  
・高岡郡日高村神宮寺（本山修験宗）住職による読経。地区の方もお参りをする。  
・なす、キュウリ、菓子、水、酒、稲などをお供えする。

②水棚にお参りをする。

・同じく神宮寺住職による読経。地区の方もお参りをする。  
・水棚の高さは 2m。竹で骨組みをつくり、下部は藁、上部は檜や笹の葉で飾り付ける。  
・なす、キュウリ、菓子、水、花などをお供えする。

15:30 頃

③子どものえんこう相撲を行う。  
・初め総当たり戦、続いて勝ち抜き戦。  
・女子も参加可。  
・行事は大人が務める。  
・取組前と取組後にはえんこう地蔵に一礼する。  
・勝っても負けても賞金が貰える。（勝った者は 200 円。）



えんこう地蔵へのお参りの様子

高岡郡日高村神宮寺住職によりえんこう地蔵へお経が唱えられた。因みに、えんこう地蔵の台石の右側には「文化四丁卯歳七月十日」、左側には「安政三辰七月五十年忌吊本郷中」と刻まれている。



えんこうまつりのときに代々用いられる文机裏に「文政三庚辰年 八月十日氏子中」と書き入れがある。



水棚

置される小祠に幣を飾るなど、明治以前の日本によく見られた神仏混合の形式を残している。

「宇井」の地名は、この辺りにあった淵にえんこうが馬を引つ張り込もうとしたが、逆に引つ張られ、真つ赤になつて「ウイウイ」と鳴いたことから名付けられたといわれている。

この祭りでは、昨年までは水棚を川岸に設置していたが、祭り終了後に水棚を燃やした際の残り火が問題となり、今年はいんこう地蔵が鎮座する小山の麓に設



日高朗読クラブによる日下のえんこうの朗読の様子



境内でのえんこう相撲の様子

置した。来年以降どこに設置するか未定とのことであった。

この祭りでは、昔は境内で「えんこうの夜相撲」と呼ばれる奉納相撲が行われていた。佐川や越知辺りからも賞金稼ぎの力士が集まるなど賑わっていた。参加者はえんこう地蔵にお参りをしてから相撲を取ったが、参加者が多く夜が更けてからも取り組みは行われた。大相撲の元力士荒瀬氏も一度参加したことがあるとのことであった。しかし、参加する若者が少なくなり、二十年ほど前に夜相撲は行われなくなった。その後、当屋が中心となり、子どもの「えんこう相撲」として行うようになり現在まで続いている。今回の祭りでは十二人の子どもが相撲を取った。

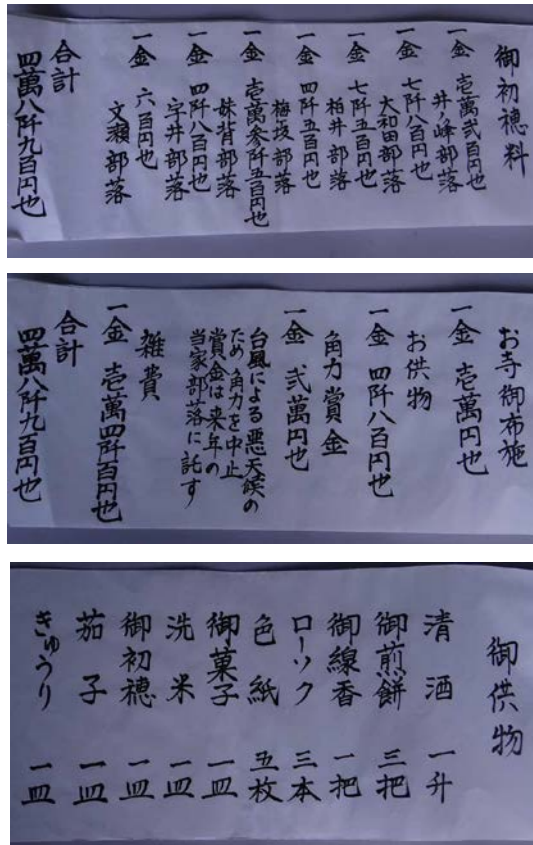
宇井地区には井ノ峰、大和田、柏



えんこう祭りに用いられる幟



平成二十六年の「当人」であった「梅ヶ坂部落」の中山保氏が記した「平成式拾六年八月五日（旧七月十日） 赤禿地藏尊御当帳」の一部。



えんこうまつりのチラシ  
同日に「村の駅ひだか」でも「えんこうまつり」が行われた。催し物の一つとして、「日高朗読クラブ」による「日下のえんこう」の朗読が行われた。

井、梅ヶ坂、妹背、宇井、文瀬の七つの部落があり、今年妹背部落が当屋であった。

当屋は一年ごとの持ち回りで、祭りには当屋の部落のみが参加する。また、祭りにかかる費用（住職への謝金、相撲の景品代など）を賄うため、一軒から五百円を徴収している。

この祭りでは、えんこう地蔵に、なす、キュウリ、菓子、水などと一緒に稲もお供えする。これはえんこうの霊を慰め、水難者への慰霊や水難事故防止の祈願だけでなく、豊作も祈願するためである。人々の願いにより、宇井地区ではえんこうが人にいたずらをしたとの言い伝えは残っていない。また、水難事故にあった子どももいないとのことである。

今では、「日下のえんこう」と題して日高村朗読クラブが朗読発表をするなど、えんこうは地区の人々の身近な存在となっている。

## 南国市稲生<sup>いなぶ</sup>「河泊祭」

平成二十七年七月二十七日に取材

平成二十七年七月二十七日、南国市稲生にある河泊神社で「河泊祭」が行われた。この祭りは、旧暦の六月十二日に河泊神社（元禄時代の頃に下田川に住みついていた河童の霊を祀る）の例祭として、子どもの水難よけ、無病息災を祈願して行われるものである。

この祭りでは境内で「子ども相撲」が行われるため、祭りの約二週間前から土俵づくりを行う。土俵に用いる縄は普段はお堂の中で保管している。その他祭りの準備としては、絵金の絵を境内の絵馬台や公民館に飾ったりする。

祭りは十三時三十分から始まった。まず河泊神社で神事を行い、キュウリ、なす、さつまいも、みかん、梨などをお供えした。参拝者は拝殿にキュウリをお供えしてからお参りをした。その後、開会式が行われ、この祭りが稲生地区全体の祭りであることが宣言さ



河泊神社へのお参りの様子  
右下に積まれたキュウリは参拝者によってお供えされたもの。



公民館に飾られた絵金の絵



子ども相撲の様子2



子ども相撲の様子1

れ、河泊神社が所蔵する絵金の絵の紹介などがあった。絵金の芝居絵は土俵脇の絵馬台に飾られていた。現在は絵馬台は壊されて、公民館に飾られている。そして祭りのメインである相撲が始まった。一歳の子どもから取り組みを始め順々に年齢が上がり、小学校高学年の取り組みは、大人顔負けの迫力のあるものであった。小学六年生までの全ての取り組みが終わり、二十時頃終了となった。

地元の方によると、「この相撲は百年以上は続いているのではない。昔は大人の参加も認めており、賞金が五万円頃は、社会人や学生が賞金を稼ぐために取りにきていた」とのことであった。また、見物人も含め、あまりの人の多さに土俵が見えなくなったこともあったように、トイレを複数箇所設置し対応したなど往事の盛況ぶりが窺われるお話も聞くことができた。

現在は、稲生地区の子どもの数が減少したため、南国市十市など他の地区の子どもの参加できるようにしている。今年は、勝った子どもには



参道の様子



子ども相撲の景品



付近の稲生橋のレリーフ



付近の稲生橋のレリーフ

豪華な玩具などの賞品が用意され、また、負けた子どもや相撲を取らない子どもにも参加賞としてお菓子が用意された。今年の寄付金は四十万円ほど集まり、その内の十万円を相撲の景品代に充てたことであった。

公民館の館長や地元の方は、「この祭りを次の世代に受け継いでもらいたい。また、この祭りを通して地域の活性化につなげていきたい」と思いを述べられていた。

また、参道には多くの夜店が軒を連ねており、周辺の沿道には、提灯が飾られていた。



牛月地蔵

現在の牛月地蔵は、南国市岡豊町笠ノ川の方が昭和になって寄進したもので、牛月川岸の江戸時代につくられた台座の上に据えられている。昔は、大雨の被害を受けやすい上流の川岸に鎮座していたため、何度も流されたようである。牛月川は笠ノ川の支流の小河川である左右山川の通称である。

地蔵菩薩の頭部は大正十五年の大水の際に所在不明となったが、その頭部で近所の子も達が遊んだとの話も伝わる。台座も同じように流されたが、それは戻ってきたようで、流された先でこの台座が行う。

南国市領石「牛月地蔵の祭り」

平成二十七年八月二十日に取材

平成二十七年八月二十日、南国市領石において「牛月地蔵の祭り」(「お地蔵さんの祭り」とも)が行われた。この祭りは、旧暦の七月七日に牛月地蔵にお参りをするというもので、掃除やお供えは当番が行う。

を台として使っていたところ、家が「鳴る」ので戻しにきたとの話も伝わる。

牛月地蔵が現在の場所に鎮座するようになったのは、昭和六十一年頃の自動車道建設に伴う河川改修工事以降で、それまでは、前述の場所に鎮座しており、そこで祭りも行われていた。

今年の祭りは二人の当番で執り行われた。八時頃から牛月地蔵や周辺を掃除しお供えをした後、五名の方がお参りをした（いつもは当番だけでお参りをすること）。この祭りでは、僧侶を呼んでお経を上げてもらうことはしない。また、祭りの開始時刻はその年の当番によって異なるが、費用は千円と決まっている。

今は宗教や信仰の自由が求められる時代であるが、当地区ではそれらの理由により、祭りに参加しない人はいないとのことである。祭りの参加者に地蔵の謂われを聞いたところ、「昔この辺りで不



牛月地蔵へのお参りの様子



お供えの品

幸なことがあり、その供養と地区の安全を守るために祭られたのではないか」とのことであった。また、台座に彫られてある銘に「見渡」とあることから、川の渡し場や道中の安全のために祭られたとも考えられる。この辺りには江戸時代に参勤交代で使用された北山街道が通っており、この牛月地蔵も旅人の道中の安全を守っていた（安全を「見渡」していた）ものと考えられる。

別の参加者からは、「牛月川にはエンコウがいる。盆の時には引張られるので川に行つてはいけなと言われたことがあるが、この川で不幸があつたとは聞いていない」との話も聞くことができた。

地元の方は、「今は地区の人の数が少なくなり、毎年何らかの当番が回ってくるので、この祭りも簡略化しているが、やめてはいけないとの気持ちでやり続けている」と思いを述べられていた。

因みに、左右山公民館には、昭和二年度から七年度までの領石地区における種々の祭りの実施日や担当者名、予算などについて記した「領石総代場」記録が残されており、その中に、牛月地蔵の祭りの担当者名や予算なども記されている。それによると、昭和三、四年における牛月地蔵の祭りの予算は十八銭となっている。

## 南国市久礼田西「地蔵祈願祭」

平成二十七年七月十八日に取材

平成二十七年七月十八日に、南国市久礼田西で「地蔵祈願祭」が行われた。この祭りは、大井川に堰を造る工事で亡くなられた方の供養と水難事故防止祈願のために行われるもので、同地区の「吉川かねやく」という人物が、大正九年に久礼田西落合の領石川堤防沿いに地蔵菩薩を鎮座させて始めたものである。祭りには大人も子どもも参加する。

昔は今の場所よりも低い位置に地蔵菩薩が鎮座していたため、二度流されたようである。約五十年前に流された際に首から上がなくなり、その状態で何年か安置されていたが、石屋に依頼し修理してもらったとのことである。

祭り当日は、九時三十分頃に南国市永源寺（曹洞宗）の住職島崎氏が読経した後、参加者が一人一人お参りをして霊を慰めた。



大井川のお地蔵さま  
大正九年建立。石工の「川田泉」によって造られた。

地蔵祈願祭の後に、以前は「大井川まつり」（「おおゆまつり」とも）が行われていた。地蔵菩薩にお参りをした後、子どもが遊べるようにと始まったものである。初めは地蔵菩薩の周辺で子どもが相撲を取ったり、川原で花火をしたりして楽しん



大井川のお地蔵さまへのお参りの様子



お供えの品

だ。その後、場所が旧道沿いにあった農協に移り、演芸大会や「ひやっこい」（氷の上で冷やした飲み物）を売ったりした。約三十年前には、J A南国市Aコープくれだ近くにあったゲートボール場で、十一トン車を舞台にカラオケ大会や本山町バンドの生演奏を披露したりした。

旧道沿いの農協やゲートボール場で開催しているときは、そこから地蔵菩薩のところまで縄を張りたくさんの提灯を吊した。無数に連なった提灯の灯りを橋から眺めると、特に美しかったとのことである。子どもは提灯を運んだり、ロウソクの火が消えていないか見回ったりする手伝いをしたが、これらを通して大人に近づけたようであれしかったとのことである。

オイルショック後に一時中断したが、景気回復後に再開した。費用は、花火や提灯の購入代として当時五十五万円ほど必要であったが、その頃はこのような祭りをするとところが他になかったこともあ

り、比較的集めやすかった。また、見物客も露天商もたくさん集まりとても賑わった。地元の方は、「今日はおらんくの川まつりぞ」と友達によく自慢したとのことであった。

しかし、約十年前から運営資金が集まらなくなったため、会場をゲートボール場から現在の公民館に変更し、子どものための夕涼み会として行うようになった。

地元の方によると、「昔の領石川は、護岸をコンクリートで固めておらず、ウナギや鯰がたくさん生息する自然豊かな川であった。大井川のお地藏さまが鎮座する辺りには中州があり、そこでソフトボールなどをして遊んだ」とのことであった。今ではその面影もなくなってしまうが、次代を担う子どもにも地域の文化を伝えるため、約三十五年前に地元の有志が集まり「地藏保存会」という組織を立ち上げ、地藏祈願祭を守り続ける活動を行っている。

祭り当日の十七時三十分からは、久礼田西部落公民館桜広場で「第9回久礼田西部落夕涼みの集い」が行われた。久礼田小の児童と久礼田保育園の園児によるよさこい鳴子踊りやよさこいソーランなどが行われた。また、地元の方が運営する屋台が十数店も並ぶなど、「この地区一番の祭り」（地元の方）として、子どもと大人が一緒に楽しんだ。



桜広場での夕涼みの集いの準備の様子



夕涼みの集いの様子



夕涼みの集いの様子



清めの様子

（曹洞宗永源寺住職島崎氏の話）  
「地藏祈願祭」では、大井川の工事で亡くなられた方やその他成仏できない霊の供養と、今後水難事故が起こらないようにお参りをしている。その際、地藏菩薩の周辺に塩をまくが、これは清めのためである。仏教に清めの精神はないが、参列者の気持ちの浄化も願い、陀羅尼経を唱えながらまいている。

## 南国市植田 「洞ヶ渚のお地藏様の祭り」

平成二十七年八月二十九日に取材

平成二十七年八月二十九日に国分川の上流である新改川しんがい近くにある洞ヶ渚のお地藏様の祭りを取材した。現在は地藏はなく、「文化十五年」の銘のある台座と瓦質の祠が残されている。昔は新改川に洞ヶ渚という渚があつて子供の川遊びの場であつた。

毎年旧暦七月十六日に実施している。

例年朝八時か九時頃の早い時間に行つてお参りするのみの行事であり、米と水、果物、お菓子をお供える。

昔の地元の人に詳しい方に話を聞くと、昔は渚は深く、3年に1度は大水があり、死んだ人も多いとのことである。地藏も大水で流されるが、土台は必ず見つかる(4〜5回は流された)。神社の氏子は三畠や陣山にもいるため、見つけて戻してくれることもあつた。流された台石を野地の人々が家で台に使つていたら家が鳴るので元に戻したら治まったという話もある。そのうち触るのは恐ろしいと誰もつかなくなつた

川のほとりの現在ダム放流の注意看板が立つ場所に昔地藏があつた。70から80年前にはそこに木が生えていた。

この方が小学生の時は台石の上に赤いエプロンをした地藏があつた記憶がある。

エンコウが出たという話は聞いたことがあり、それは目が1つだけだつたらしい。

植田神社総代によると、当夜は神社でくじ引きで決めており、当日は当夜の2名が行つてお参りするのみである。

お供えと線香とシキビを持っていく。



文化十五年銘の石造物



草刈り

もともとは地藏も植田橋の北詰にあつたが移動しており、祭りも形式だけになった。

地元では「お地藏様の祭り」と呼んでいる。2軒で当屋にあたる(ホントウ)。秋祭りは準備が大変なので、アイトウも含めて準備にあたる。

植田地区にある祠堂は、阿弥陀堂、香美神社(若宮様)、おイゲ様、荒神様、山の神様(ほこら)がある。年中行事は全部で十二、三回の祭りがあり、神祭の時にくじ引きで当屋を決める。

植田神社の秋の大祭は十月三十一日、荒神鎮めは十一月一日と新暦でやるが、他は旧暦でやっている。

あと、虫送りに六月に部落の境の四方のため池など7カ所に札を立てる。

洞ヶ渚は植田の子どもの遊び場だったので、昔は橋から飛び込んで遊んでいた。

ここより下流にある「はかり場」

は三畠の子たちの遊び場で、縄張りが決まっていた。



お供えの準備



お参りの様子



山南川の川岸に鎮座する水棚（右手前）と地蔵菩薩（左奥）

香南市香我美町<sup>ひえし</sup>稗地「盂蘭盆」  
平成二十七年八月二十九日に取材

平成二十七年八月二十九日、香南市香我美町稗地で「盂蘭盆」が行われた。この祭りは、旧暦の七月十六日に供養のため、山南川の川岸に水棚を設置しお参りをするというものである。水棚の製作、設置、お参りは当屋だけで行う。

今年は、祭りの前日の八時頃に水棚をつくり、山南川の支流の川岸に夕方に設置した。今年の水棚は、地元の白石さん夫妻がつくったもので、筋交いを入れた丈夫なつくりとなっていた。

祭り当日は、九時三十分に当屋の三人でお参りをした。ぶどう・ピーマン・ゴーヤ・なすを細かく切ったもの・洗米などを、たいもの葉の器にのせてお供えした。何をお供えするか特に決まっていないが、例年、なすとキュウリは



お供えするとのことであった。祭りに用いる卒塔婆は、前日に香南市香我美町岸本の宝幢院（真言宗）で書きあげ祈祷してもらい、当日水棚の後ろに立てた。

現在、稗地の集落は約二十軒である。三軒を一組として当屋を回しているが、高齢や仕事のため務めることができな人は当屋から外しており、以前は七、八年で回ってきたのが、今は四、五年で回ってくるとのことであった。当屋となっても水棚をつくることができな人は、白石さん夫妻に製作を依頼する。白石さん夫妻は約十年



水棚背面の卒塔婆

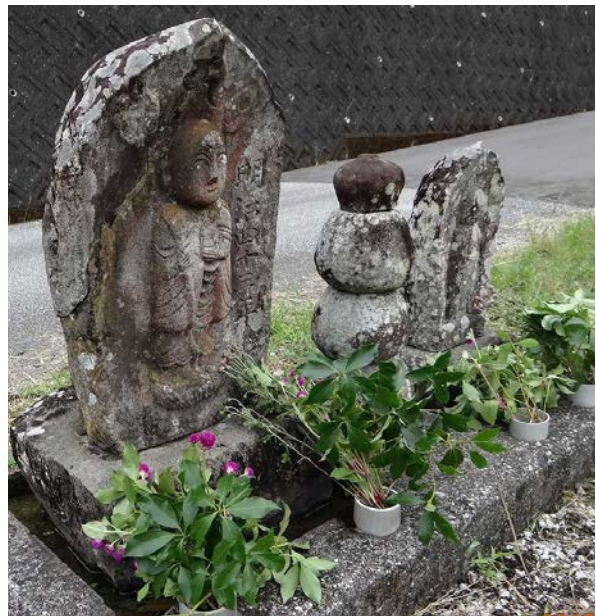


水棚  
背部にたっているのは卒塔婆

前から依頼を受けて水棚をつくるようになった。

盂蘭盆の祭りやその他同地区で行われる祭りに関して、お供えの品や使用する材料、費用などを記した帳面が存在する。これは、春ごとに次の当屋に渡していくもので、今年も当屋がこの帳面をもとに、盂蘭盆に必要な品の手配や会計を行った。

白石さん夫妻によれば、「地区に住む若い人や農家の減少により、この祭りの維持が今後ますます難しくなる」とのことであった。祭りの継続について心配されていたが、「自分たちが元気なうちは毎年水棚をつくり続ける」と思いを述べられていた。



水棚の側に鎮座する地藏菩薩  
盂蘭盆の祭りの際に、檜や花、菓子や果物がお供えされる。

## 香南市香我美町堀ノ内「施餓鬼」

平成二十七年八月二十八日と二十九日に取材

平成二十七年八月二十九日に、香南市香我美町堀ノ内の山南川支流の安養寺橋の袂で「施餓鬼」が行われた。この祭りは、旧暦の七月十六日に堀ノ内川で亡くなられた方を供養するために行うもので、昔から安養寺橋の袂で行われている。

柵は「施餓鬼」と呼ぶ。施餓鬼はお参りをした後も、翌年までその場所に設置しておく。毎年つくり手が変わるため年によって形が多少変化する。堀ノ内地区には四十五世帯あり、その内の五人（五世帯）が一組となり毎年当番を回しているが、この祭り以外にも地区内にある神社や寺の祭りも同じ当番が執り行うため、地区内の高齢化の影響で年々負担が増えているとのことである。

今年は祭りの前日に、施餓鬼づくりに必要な檜の葉を採りに行ったり、卒塔婆を香南市香我美町岸本の宝幢院（真言宗）で書きあげ祈禱してもらったりした。



完成した施餓鬼  
最後に檜の葉を適当な長さに切り、形づくりを行う。背部に立っているのは卒塔婆

当日は、八時から施餓鬼づくりを始めた。まず、コンクリートの土台にある五つの穴にそれぞれ竹を差し込み骨組みをつくった。その後、屋根を檜の葉で覆い、側面も檜の葉を隙間なく差し込み飾り付けた。

完成した施餓鬼に、キュウリ、なす、米、菓子など（年によってはスイカも）をお供えしお参りをした。

施餓鬼づくりと平行して、卒塔婆を宝幢院に取りに行き、施餓鬼の後部に立てた。古い卒塔婆はこの場所ですやすこともある。

地元の方によると、「安養寺橋の袂で子どもが泳ぐところを見たことはないし、エンコウやカップパの話も聞いたことがない」とのことであった。

この祭りに関する古い記録が残っており、毎年当番が引き継いでいるが、地元の方の中には、この祭りの実施手順、施餓鬼のつくり方が分からない方もいるようで、「分からないながらも地区の大切な祭りとして続けている」とのこと

であった。



お供えの品  
精霊馬など

三. 高知県内のエンコウ祭と関連行事の現地調査



施餓鬼づくりの手順2  
竹で棚をつくり側面を檜の葉で覆う。



施餓鬼づくりの手順1  
5本の竹で骨組みをつくる。



施餓鬼づくりの手順4  
檜の葉で屋根を飾り付ける。



施餓鬼づくりの手順3  
檜の葉で屋根をつくる。



水屋



お供えの品  
下に敷いてあるのは、たいもの葉。

続いて、香南市野市町宝鏡寺（天台宗）の谷村住職による読経が行われた。谷村住職によれば、「この供養は岩鍋地区全体の供養として行っているが、同じような依頼を他の地区から受けたことはな

落費として貯金することであった。また、現金もお供えされており、これは部  
番として祭りを執り行う。  
二十六日は十三時から準備を始めた。水屋をつくり柱の上部にお  
札をつけ、米、なす、キュウリ、花、野菜がお供えされた。何をお  
供えするか特に決まっていないが、野菜、果物、菓子などをお供え  
することであった。また、現金もお供えされており、これは部

平成二十七年八月二十六日と二十八日に取材  
平成二十七年八月二十六日から二十八日にかけて、香南市香我美  
町の岩鍋公民館の敷地内において「施餓鬼供養」（「盂蘭盆会」とも）  
が行われた。この祭りは、旧暦の七月十三日から十五日にかけて、  
岩鍋地区全体の施餓鬼供養として行われるもので、地区の役員が当

香南市香我美町岩鍋「施餓鬼供養」



川流しの様子

二十六日から二十八日まで、地区の方が三々五々お参りをする。二十八日十八時頃から、川流しなどの行事が行われた。まず、水屋に三日間お供えしていた品を近くの川へ流しに行った。昔から同じ川に流しているが、流した後は、帰り道で後ろを振り向いてはいけないと言われており、みな振り向かず集会所へ戻ってきた。集会所へ戻ると翌年も使用するため水屋の木枠を集会場



水屋へのお参りの様子

「この祭りについて当番の方は、「自分が子どもの頃から行われており、歴史が古いと思われる。おそらく明治や大正の頃からではないか。道路拡張により若干の場所の移動はあるが、ほぼこの辺りでやっている。親から、行き倒れた人の霊や祭りをしてもらえない霊を慰撫するため部落で祭りだしたと聞いた」と話されていた。

で全てを燃やし、三日間の施餓鬼供養は終了となった。



檜の葉や灯籠を焼く様子

裏に片付けた（以前は毎年水屋を枠からつくっていたとのこと）。続いて、祭りしていたお札、水屋を彩っていた檜の葉、個人の家で盆に用いた灯籠や花などを焼き始めた。灯籠は公民館の敷地内にある木に吊した後に焼かれた。卒塔婆はここでは焼かず、一月末に行われる西川のどんと焼き（西川公民館で行う行事）で焼くとのことであった。大きな炎

## 香南市香我美町中山川「川供養」

平成二十七年八月二十八日と二十九日に取材

平成二十七年八月二十九日に、香南市香我美町中山川で祭りが行われた。この祭りは、旧暦の七月十五日に川供養のために行われるもので、前日までに男性が水棚をつくり香宗川の川原に設置し、当日女性がお供えをし、地元の方がお参りするというものである。水棚をつくるために必要な木材や竹などは前日又は当日に準備する。今年は、木材は当日の朝、竹は前日の晩に準備した。また、お供えの品は、キュウリ、なす、菓子、栞などである。

前日の二十八日は、八時頃から周辺の草刈りをした後に水棚をつくり始めた。水棚は、足が長い形状で、四隅だけでなく中心にも竹を立てて骨組みをつくった。このつくり方は昔から変わらないとのことであった。屋根を檜の葉で覆い、側面も檜の葉を隙間なく差し込み飾り付けた。水棚が完成すると、川岸に鎮座する石の地藏菩薩を、汚れをとって川原へ降ろし、水棚の下に据えた（祭りが終わった後また元の場所に戻す）。この地藏菩薩は、香宗川の増水によって流された際に破損してしまい、今はワイヤーで固定している。いつからその場所にあるか不明であるが、地元の方の幼少期には既にあったとのことである。

完成した水棚は、そのまま設置しておき、明日の祭りに用いられる。また、祭り終了後は放置し、翌年まで残っていれば片付け、新たに製作したものを設置する。

二十九日は、同日に行われる阿弥陀様の祭りの法要が九時頃から執り行われ、その後川原へ移動し千体流しを行った。続いて水棚へ移動し、水棚にお参りをした。

地元の方によると、「この祭りは、過去に女性が亡くなったことと関連があるのではないか。エンコウとの関連は分からない」とのことであった。また、「四、五十年以上前に途切れた時期があったため、謂れなど伝わっていないが、地区の祭りとして大切に守り続けている」と思いを述べられていた。



水棚づくりの手順3  
檜の葉で屋根と側面を飾り付ける。竹で玉垣をつくる。



水棚づくりの手順1  
5本の竹で骨組みをつくる。



水棚づくりの手順4  
杉の葉で屋根の上部を飾り付ける。



水棚づくりの手順2  
竹で屋根枠と台をつくる。



阿弥陀様



水棚づくりの手順5  
水棚の下に地藏菩薩を据える。



水棚にお坊さんがお祈りする



千体流し



お供え



完成した水棚  
地藏菩薩の横の竹筒には櫛をさす。

## 香美市土佐山田町神母ノ木「川施餓鬼」

平成二十七年八月二日に取材

平成二十七年八月二日、香美市土佐山田町神母ノ木で「川施餓鬼」が行われた。この祭りは、八月の第一日曜日に物部川で亡くなられた方の供養と水難事故防止祈願のために、神仏両方の形式で行われるものである。

祭り当日は、六時頃から当番により準備が行われた。精霊棚をつくり（毎年決まった人が作製する）、できあがった棚を物部川の川原に設置した。棚の高さは約二メートル。木材で枠をつくり、屋根や側面を檜の葉で飾り付け、内部の天井に電球が取り付けられている。完成した棚に、キュウリ、なす、にんじん、酒、果物、花、菓子などをお供えした。

十二時三十分から、精霊棚の前で香美市土佐山田町予岳寺（曹洞宗）の住職により法要が執り行われた。続いて、神母ノ木集会所裏の観音堂（本尊は聖観音菩薩。江戸時代以前に安置されたといわれる）でも法要が執り行われた。十四時から、神母神社（境内には香美市天然記念物の楠の大木〈樹齢五百年以上〉がある）で同町八王子宮の神主による神事が執り行われた。これら法要・神事には当番も参列しお参りをした。

もともとこの祭りは八月十八日に行われていた。精霊棚をつくり、物部川合同堰（伊気神社から約六百メートル上流にある）の辺りから灯籠流しをするなど、川供養の意味合いが強かった。精霊棚は現在も設置しているが、灯籠流しは山田堰を取り壊してから行われなくなった。

現在は、川施餓鬼の後に「神母ノ木大川祭」が行われている。神

母ノ木大川祭は、十八時頃から神母神社南の物部川緑地公園左岸にて、花火大会などの各種イベントや、多くの露店が出店するなど賑やかに行われるもので、今年も大いに盛り上がった。

神母ノ木地区の世帯数は約百六十、その内の六十世帯で祭りの準備を行っている。運営資金は町内会費と寄付金で賄っているが、世帯数の減少で二、三年に一度当番が回ってくるため地区の方の負担が大きくなってきている。ただし、今年に関しては、「高校生や社会人が準備を手伝ってくれたり、国交省・香美市が祭りに合わせて草刈りをしてくれたので助かった」とのことであった。



精霊棚  
高さ 210cm. 50cm 四方



精霊棚へのお供えの品



大川祭のチラシ



神母神社へのお祭りの様子  
お供えの品は、酒・水・米・塩・鯛・みかん・バナナ・リンゴ・菓子など



観音堂へのお祈りの様子



大川祭の打上げ花火



精霊棚へのお祈りの様子

### 香南市野市町上岡<sup>かみおか</sup>「エンコウ祭」

平成二十六年七月五日と平成二十七年七月二十七日に取材

平成二十六年七月五日と平成二十七年七月二十七日に、物部川東岸に位置する香南市野市町上岡で「エンコウ祭」（「エンコウさま」とも）が行われた。この祭りは旧暦の六月十二日に、エンコウの霊を慰め水難事故防止を祈願するため（一説に、子どもが溺死しその供養のためとも）に上岡地区の南組が行っているもので、実施日は旧暦の六月十二日であるが、変更して実施する場合もある。（平成二十六年の旧暦六月十二日は七月八日〈火〉であったが、五日〈土〉に変更して実施した）。

南組を三班（以前は四班）に分け、毎年各班で当番を回している。平成二十七年は一班、翌年は二班が当番とのことである。

祭りでは水棚（「エンコウさまの水棚」とも）をつくり、物部川左岸堤防の「平松」（小字。以前に「上岡の平松」と呼ばれた大きな松があったため名付けられた）の川岸に設置する。水棚は、竹で枠をつくり、屋根を檜の葉で覆い側面も檜の葉で飾る。高さなどは決まっていないが、水棚の下に必ず石を置き提灯を飾り付ける。

平成二十七年は、祭りの前日に水棚をつくり設置しようとしたが、台風接近のため当日に変更した。水棚は、毎年作製する班が変わるため形も変わるようで、平成二十七年のものは例年に比べてシンプルとのことであった。

十七時頃から参拝者が訪れるようになり、キュウリをお供えし、エンコウに水難事故に遭わないよう祈願した。お参りには当番の班のみ参加する。

昔は、露天商が店を連ね、お化け屋敷や芝居もあるなど賑やかな



祭りであった。子ども達は小遣いで紙鉄砲や花火を買った。子どもの相撲も行われていた。また、水棚の近くの川原に筵を敷き宴会も行われた。現在も宴会は続けられているが、場所は公民館に移動している。

平成二十七年の宴会は十八時頃から始まり、二十名以上が参加した。開始前に、放送を通じて参加を呼びかけた。宴会の会費として南組の全世帯から千円ずつ徴収するが、これは一人分の金額であるので、追加の参加者がいる場合、大人千円、子ども五百円を支払わなければならない。いつから千円となったか不明であるが、昔は会費としてお米を集めていた時期もあったとのことである。料理は、例年と同様にキュウリの酢もみ、ちらし寿司、ソーメンが用意された。

因みに、当地区にある上岡神社の夏祭り（毎年七月十七日に開催）は、小学六年生が「大将」となり寄付金を集めるなど、子どもが中心となって行うが、この祭りと同様に、久枝地区の「エンコウ祭」とは類似する点が見られる。



水棚（平成 26 年）  
高さ約 150cm。約 35cm 四方。



水棚へのお参りの様子（平成 27 年）



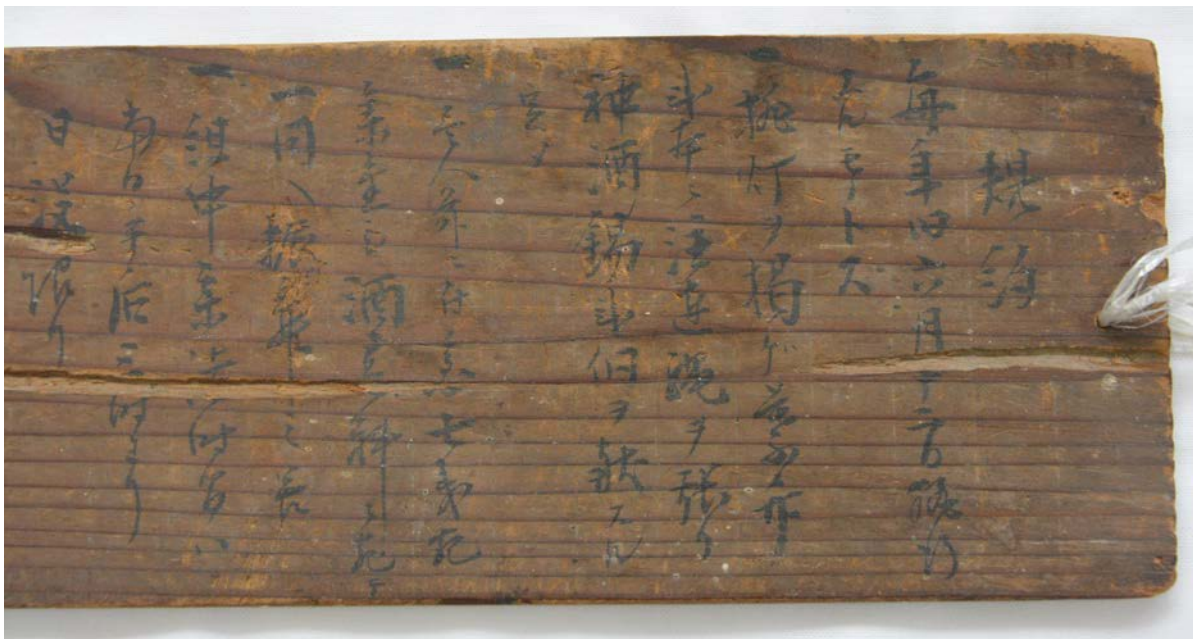
水棚へのお参りの様子（平成 27 年）



水棚（平成 27 年）  
高さ約 170cm。約 50cm 四方。



公民館での宴会の様子（平成 26 年）



エンコウさまの規約が書かれた木札板（上：全体、下：拡大）  
 作製年は不明。縦 11.5cm、横 54.2cm、厚さ 0.5cm の杉材の一枚板で、その年の当番が保管する。判読しにくい文字もあるが、「明治四十四年 旧六月十二日 改正」と記されている。

- 規約
- 毎年旧六月十二日施行
- スルモノトス
- 一 挑灯ヲ掲ゲ葉竹
- 式本ニ注連繩ヲ張り
- 神酒錫式個ヲ献スル
- 定メ
- 一 一人前ニ付金七銭宛
- 集金シ酒魚料ニ宛テ
- 一同へ振舞之筈
- 一 組中集□時間ハ
- 当日午后三時ヨリ
- 日没限リ
- 以上
- 明治四十四年
- 旧六月十二日 改正
- 上岡南組中
- 千秋万歳
- 昭和拾貳年度ヨリ
- 一人前金拾五銭宛
- トス

## 高知市布師田<sup>ぬのしだ</sup>「おいげ祭り」

平成二十九年八月三日に取材

平成二十九年八月三日、高知市布師田の神母神社で「おいげ祭り」が行われた。この祭りは、旧暦の六月十二日に小学六年生までの子どもが主体となつて行うもので、現在は子どもの数が少ない（平成二十九年は小学四年生を年長に小学一年生までの七人）ため、大人も協力して行っている。

当日は、昼頃から子どもと大人が協力して境内の清掃が行われた。境内や周辺の草刈りは高知市七河川一斉清掃の日に大人だけで行った。

清掃が終わった後、境内に提灯を飾り付け、辺りが暗くなると火を灯した。昔は道沿いにも提灯を吊るしていたが、危険とのこととで境内だけとなった。地区の大人や子どもが神母神社へお参りした後、子どもは袋に入った菓子や花火を受け取り、今年のレクレーションである輪投げに興じた。大人は寿司や菓子を食べながら会話を楽しんだ。途中にわか雨により一時中断したが、参加者は大いに楽しんでた。

この祭りは、八十年以上前から行われているとのこととで、昔は小学六年生が責任者となり取り仕切っていた。今は子どもが少ないので、中学生・高校生でもお参りにくればお土産を渡すとのことである。

祭りの費用は二、三万円かかる（お菓子・花火・提灯代など）が、地区の方からの寄付で賄っている。子どもが地区内の約三十軒をまわり、一軒あたり五百円から千円を集めているが、子どもがいけない方も寄付に協力してくれる。



準備の様子

この祭りでは、数年前まで肝だめしを行っていたが、危険とのことで行われなくなった。また、田んぼから花火を打ち上げていたが、これも危険とのことと取り止めとなった。肝だめしは、神母神社から布師田保育園の辺りまでの道沿いで行われ、参加した方によると、「とても怖かったが盛り上がった」とのことである。

この祭りは、雨天時はお土産を配って終了となり、順延はしない。しかし、地元の方によると、「幸にも今まで雨により中止となったことはなく、お神母さまの祭りは絶対に雨が降らないと言われている」とのことであった。

この祭りは一時寂れていたが、地区の方の努力で再び活況を呈するようになった。昔は子どもだけで行っていたが、今は子どもと大人が協力し、地区の人の心が一つになる祭りとして続けられている。



子どもに渡す菓子類



準備の様子



輪投げの景品



神母神社へのお参りの様子



おいげ祭りの様子



おいげ祭りの様子



おいげ祭りの様子

## 高知市春野町仁ノ「龍の不動祭」

平成二十九年七月二十日に取材

平成二十九年七月二十日に、高知市春野町仁ノ仁崎で「龍の不動祭」(「お不動さま」とも)が行われた。この祭りは、旧暦の六月十九日に地元の自主防災組織と子どもが一緒になって、提灯を吊るしたり花火をしたりするもので、提灯の灯りが消えるまでの間(約二時間)行われる。仁ノ地区の地区ごとに執り行われる祭りで、仁崎以外でも浜・北・中・南などで行われている。祭りはこの日に実施できなければ、延期をせず中止となる。

十年前までは男の子だけで行っていたが、子どもの数が減少し、子どもだけでは実施困難となったため、自主防災組織が引き受けて子どもと一緒に行うようになった。昔は中学二年生が大将、一年生が中將と呼ばれ、大将が責任者となり祭りの準備から実施、片付けまでを取り仕切った。年下の子どもは、大将や中將、上級生の指示に従い行動した。上下関係が厳しく指示系統が整っていた。

高知の町には、複数人で提灯やロウソク、菓子、花火などを買い出しに行った。その際、大将が下級生に美味しい食べ物をご馳走したこともあった。

昔は女の子は参加できず、大人も手伝うことがなかった。男の子だけで寄付集めも行い、この家は五百円、この家は百円などと集める金額を決めて集金した。もらえるまでその家の庭で待ち続けたこともあった。

提灯は、竹を一本一本立て、それに一つずつ吊っていた。百個の提灯を吊したこともあった。竹は山から百本、二百本と切り出し、海まで運び海水で清めた。



提灯準備の様子

浜部落と一緒に行った時期があり、そのときは南にある堤防で提灯を飾りつけ、浜・仁崎両方の部落から見えるように三角形につくり、今よりも高く吊り上げた。提灯の灯りが、遠く土佐市宇佐の龍岬からも確認できたとのことである。

現在は、竹は、海水でなく塩を振って清め、形は台形にし高さ五・五メートルまで吊り上げている。また、提灯代、「えんま」(絵馬)代を各家庭から集金している。

当日は、十九時から準備を開始した。開始する前に放送を通じて、龍の不動祭の実施を地区の人に知らせた。現在でも「大将」の呼び名は受け継がれており、今年も六年生が務めた。六人の男の子と女の子、そして大人が協力して作業を行った。提灯の一つ一つに火を灯し、道路沿いに飾り付けていった。一昨年から簡略化のため、竹と竹との間に針金を張り、それに提灯を吊っていく形に変えた。

また、道路をまたぐように組まれた竹に提灯を等間隔に吊り下げ、その竹を滑車で吊り上げ高く美しく飾り付けた。提灯がより美しく見えるように、吊り上げた竹が地面と平行になっているか子どもたちが確認し、大きな声で大人に修正の指示を出していた。

提灯はロウソクの炎で燃えることがあるため、「はたやま提灯店」(高知市鴨部上町)で定期的に購入し補充しているとのことである(一個四百五十円)。

提灯を飾り付けた後、子ども達は菓



花火の様子



提灯準備の様子

子を食べたり、花火をしたりして楽しんだ。仁崎地区は、南海地震による津波被害想定区域内に位置し、新たに住む人もなく人口減少に見舞われている。その中で、地区の人によってこの祭りを後世に伝えていくための努力が続けられている。



提灯の下で花火を楽しむ様子



提灯を飾った様子



橋を横断してかける提灯



提灯を飾った様子

### 香南市香我美町山北「岩淵の祭り」

平成二十九年七月二十二日に取材

平成二十九年七月二十二日に、山北川沿いの香南市香我美町山北（前田地区）で「岩淵の祭り」（「岩淵さま」とも）が行われる予定であったが中止となった。祭りを準備する大人の負担が大きいという理由による。

この祭りは、七月二十二日（山北浅上王子宫夏祭りの次の日）に、中学生までの子どもが主体となつて行うものである。

戦前から行われていたようで、子どもが草刈りや掃除、提灯の飾り付けなどを行い、大人が関わることはなかった。岩淵橋の欄干に子どもたちで切り出した竹をくくりつけ、針金を張り提灯を吊した。ロウソクの提灯なので風が吹くと燃えたりした。相撲を取ったこともあった（景品は鉛筆など）が、危険とのことでスイカ割りや花火、金魚すくいなどに変更して楽しんだ。

毎年男子中学生が寄付金を集めに家々をまわり、そのお金で提灯や花火、スイカなどを購入した。自転車で野市や赤岡に買い出しに行つたこともあった。



お塚さま

最近では、子どもの数の減少と部活で忙しいなどの理由で大人が手伝つており、大人の負担が大きくなつてきた。また、祭り自体も子どもの数の減少で以前のような活気がなく

なつていた。

岩淵川の改修以前は、岩淵橋の辺りには淵があり、薄暗く怖い場所であった。淵の底から冷たい水が湧き出しており、気味の悪いところでもあった。「この淵で泳いではいけない。カッパがいるので引つ張られないように」などと大人に注意されたが、まさにカッパがいそうな風景であった。実際、同地区にはカッパにまつわる伝承が残っている。それは、この淵に入った馬を引つ張り込もうとしたカッパが逆に引つ張られ、陸上を引きずられてひからびてしまったところに塚を築いたというものである。この塚は現在も前田地区の近森家の敷地内に鎮座しており、「お塚さま」と呼ばれている。

近森さんも小さい頃は、祭りに参加したことがあり、「祭りがなくなるのは寂しいが仕方がない。やるにもやれる大人も子どももない。しかし、以前にも一度やめたことがあったが復活したので、またやれるようになればいい」と思いを述べられていた。

なお、寺石正路『土佐郷土民俗譚』（日新館、一九二八年、『高知県史民俗資料編』に収録、六一九頁）には「河伯の祟」と題し、天保五、六年頃岩淵の巖穴を砕き神社の建石としたため祟りがあつたとの話を紹介している。



以前に淵のあつた辺り（岩淵橋より臨む）

## 南国市篠原 「エンコウ祭」

平成二十三年八月二十三日に取材

毎年八月二十日頃にやっていた篠原西のエンコウ祭だが、平成二十五年から実施されていないため、以前の取材・写真および聞き取りの内容を掲載する。

午前十一時頃に大人達が薬師堂の夏祭りをを行い、夕方からお堂の前で子ども達が相撲をとるなど「エンコウ祭」を行う。昔は中学生が小学生に教える形でやっていたが、ここ二、三年は親が子どもに教えるような形に変えてやっていた。

竹を組んでヒノキの葉で屋根と壁を葺いた水棚を作り、近くの水路沿いに置く。水棚にはキュウリをお供えしてお参りする。境内ではゲームや子供相撲・福引きなどを行う。子どもが寄付を集めたり、飾り付けをする、などの準備をしていた。



薬師堂前の祭りの準備

しかし、最近は一パーの子どものばかりが多くなって、つながりが薄れたこともあり、存続がかなり危うくなってきた。

また、篠原北分でも住吉通南の神社でエンコウ祭を実施している。

例年六月初めに行い、

平成二十八年は六月五日(日)に実施したとのこと。(聞き取りのみで現地取材をしていないため写真は無い)

菖蒲は使わず、ヒノキの葉を使用したお社を作成する。(梓組みは公民館にある。葉は北の山の篠原管理分の土地から取ってくる。)キュウリとナスをそのまま供える。

お社は神社付近の市道横水路沿いに設置する。

祭りの内容はお祈りをして、お菓子をもらう。若宮八幡宮にてゲームをしている。昔は相撲をしていたが、敷地が狭くなり相撲もなくなった。花火はしてない。祭りの際に集まって、祭りの由来を話していたこともあったが、話し手がいなくなりそれもなくなった。

昔は中学生も参加していたが、現在は小学生まで。

地区の子ども会が主催しており、子ども会には中学生は入っていないので、現在の参加形態になったらしい。子ども対象の祭りだが、段取り等は子ども会の大人が仕切っている。



水棚を設置した様子

祭りの費用のために集金はしておらず、子ども会の予算(自治会の子ども会への割り当て、子ども会自体が集金している会費)で開催している。昔は大将を決めて集金していた。

7月中旬に行っている夏祭りの際は子どもが神輿を担いで地区を回り集金している。昔は氏子・青年団で回っていて神輿もなかった。



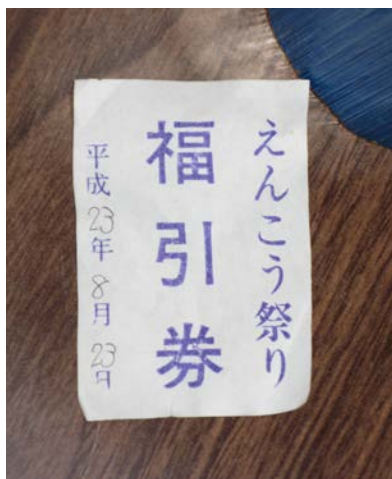
三. 高知県内のエンコウ祭と関連行事の現地調査



水棚にキュウリを供える



水棚



福引券



ゲームの景品



子ども相撲

#### 四・後川流域のエンコウ祭の特徴

高知県内の後川流域以外のエンコウ祭と関連行事を詳しく見てきた。事例が多いので、改めて後川流域のエンコウ祭の特徴とそれ以外の祭りを比較するために、次頁の表を作成してみた。

後川流域とそれ以外の県内のエンコウ祭（カハクサマ、かわたるさんを含む）とを比べてみると、エンコウを祭ることはもちろん、エンコウが好むキュウリを供えること、祠や社をもたない場合は仮設の棚を設けることなどは共通する。その一方で、子ども組による祭り、提灯を飾る、相撲、花火など後川流域のエンコウ祭を特徴づけるさまざまな要素は、必ずしも他のエンコウ祭の全てにあるわけではないことがわかった。では、そのような要素は後川流域で加わったオリジナルかと言えば、そう単純でもない。

例えば提灯である。後川流域ほど提灯飾りを盛大に行うエンコウ祭は無いが、本章二節で見たように、提灯を数多く飾るのは江戸時代の高知城下町の猿猴祭の特徴だった。後川流域のエンコウ祭の提灯飾りも、猿猴祭の構成要素として城下から入ってきた可能性もある。ただし、高知市春野町仁ノの籠の不動祭でも提灯が主役になるので、後川流域の提灯も、独自に加わった可能性も同時に勘案するべきだろう。いずれにせよ、後川流域のエンコウ祭の提灯が、江戸時代後半に広まったたくさんの提灯を飾りつけ見て驚くような視覚的な仕掛け（スペクタクル）の流行の末裔であるのは間違いないことだろう。

子ども主体で祭りを運営するという後川流域の特徴も、他では高知市田辺島や近代の高知市街で見られる程度なのでエンコウ祭に必須の要素ではないが、水神や水の妖怪を子ども主体で祭るのは他県

でも見られ、結びつきやすい要素と言えるだろう。それは、川遊びによる水難事故が子どもに起こりやすいこともあるし、大人が村の氏神の祭りを主催するのに対し、地区内の妖怪の祭りを子どもが担うという年齢階梯的な分担が生じやすいということもあるだろう。エンコウ祭に限らず、子ども主体で祭りをを行う習俗はおそらく高知県内各地にあるが、高知市布師田のおいげさんを紹介したように、相手の神仏に何を選ぶかは、地域の立地や神仏などさまざまな条件によるものと思われる。だが、エンコウを選んだ地域は川に面しており、ふだんから川とのつきあいが多い所だとは言えそうだ。エンコウ祭を行なう所は、まずその土地の自然環境が大きいのである。

後川流域のエンコウ祭の特徴としては、菖蒲小屋（おやしる、お堂）が他のエンコウ祭でも同様のものが見られないユニークなものだ。田辺寿男氏が撮影した高知市吹井の棚は、実に簡単なものであるし、各地の報告によると、四本竹を立て棚を作るような形だったらしい。一方、野市町上岡の棚は初盆の水棚の形そのままであり、菖蒲ではなくヒノキの葉で覆われている。南国市篠原でも、ヒノキを使っており、菖蒲による小屋は後川流域以外では見られないのである。どうして後川流域のエンコウ祭の棚は菖蒲小屋になったのだろうか。菖蒲と言えば土佐では五月節句に屋根に投げ上げる習俗があるが、それと関係あるかどうかもわからない。山に行かねば入手できないヒノキではなく、すぐ側の後川や水路に生えていて入手しやすい菖蒲が選ばれたということだろうか。

前浜と久枝でも違いがある。供物を置く棚が前浜が低い傾向にあるのに対し、久枝は中程に位置し、ヒノキの葉を棚に置く。そして、大きな違いは久枝で行事の終わりに「エンコウの川流れ」と歌いながら、提灯の底にローソクを立てたものを川に流すことである。まっ

高知県のエンコウ祭および関連行事対比表

場所	名称	祭日	棚	キュウリ	主体	提灯飾り	花火	相撲	備考
香南市野市町上岡	えんこう祭	旧暦6月12日	水棚型	胡瓜を供える	南組	—	△	△	上岡神社の夏祭りは子供主体、小学校6年生が大將
南国市前浜・久枝	エンコウ祭	6月第1土曜	ショウブ小屋	胡瓜の酢もみ	子供(中学生以下)	○	○	浜窪のみ	
南国市浜改田東場		旧暦6月15日	竹の供養棚	胡瓜と茄子をさいの目に切ったものと洗い米を混ぜたもの	子供組	○	○	○	地藏堂
南国市里改田	エンコウ祭	旧暦7月12日	高さ1メートルの竹製の水棚	胡瓜を供える	年行事	—	—	—	瓜に己れの疾病を封じる
南国市篠原西	エンコウ祭	旧盆の頃、8月第3土日くらい	ヒノキの小屋	胡瓜を供える	子供	薬師堂前に提灯	○	○	
南国市稲生	河泊祭	旧暦6月12日	社殿がある	胡瓜を供える	河泊祭実行委員会	参道に提灯	×	○	
高知市介良(白水・岩松・長崎)	かわたろさま	旧暦6月12日	川の中に竹で棚をつくる	胡瓜を供える	白水公民館	絵馬提灯	○	△	
高知市天津田辺島	エンコウ祭	旧暦6月12日	川のふちに竹の棚。屋根や壁はヒノキの枝	胡瓜、米、茄子、お酒を供える	子供組	—	—	○	
高知市新木		旧暦6月12日	—	胡瓜、ご飯、煮物、芝餅を舟に乗せる	各戸	—	—	—	麦藁舟にローソクを立て、供物を乗せて河に流す
高知市高須	エンコウ祭	旧暦6月12日 →舟入川一斉清掃の日	河泊神社の小祠。棚もあった。	胡瓜を供える	子供・若衆組 →高須公民館青年部	—	—	○	水害・水難事故防止 鹿兒神社宮司の祝詞
高知市五台山	エンコウさま	旧暦6月12日	竹の供え棚	胡瓜とおふまで参拜	当座	—	—	—	
日高村宇井	エンコウ祭	旧暦7月10日	水棚/えんこう地藏	茄子・胡瓜・お菓子・水・花		—	—	えんこうの夜相撲	日高村神宮寺(修験宗)による読経
佐川町	エンコウ祭	盆の16日	水神様のお宮	いがみのうり		○			
香南市香我美町岩鍋	施餓鬼供養	旧暦7月13～15日	水屋	野菜、果物、お菓子	地区の役員	—	—	—	野市町宝鏡寺(天台宗)の住職による読経。行き倒れの霊や祭られない霊の供養。
香南市香我美町中山川	川供養	旧暦7月15日	水棚			—	—	—	阿弥陀様の祭りの後香宗川で
香南市香我美町堀ノ内	施餓鬼	旧暦7月16日	「施餓鬼」(水棚)	胡瓜、茄子、米、お菓子	当番	—	—	—	香我美町宝幢院に祈禱してもらった卒塔婆を棚の後ろに立てる
香南市香我美町稗地	盂蘭盆	旧暦7月16日	水棚	ぶどう、ピーマン、ゴーヤ、胡瓜、茄子を細かく切ったもの、洗った米を田芋の葉にのせる	当屋	—	—	—	水棚は山南川の川岸に立てる。香我美町宝幢院に祈禱してもらった卒塔婆を棚の後ろに立てる
香美市土佐山田町 神母ノ木 聖観音堂	川施餓鬼(神母ノ木川祭り)	8月第1日曜	水棚	—	大人	—	本格的な花火	—	神職と僧侶
南国市植田	お地藏様の祭り	旧暦7月16日	地藏の台座	—	当屋	—	—	—	
南国市久礼田西	地藏祈願祭/大井川夏祭り	7月10～20日の土曜日	地藏	—	地藏保存会	かつて農協から地藏まで提灯を飾る	△	△	大井川に堰を作る工事で亡くなった人の供養と水難事故防止祈願。大正9年に始まる。地藏祈願祭。南国市永源寺(曹洞宗)の僧侶が読経。
南国市植野	植野川祭	7月20日前後の土日		—	—	—	—	—	
南国市領石	牛月川祭り	旧暦7月7日	牛月地藏	—	当番	—	—	—	牛月地藏の祭り。牛月川にはエンコウがいる。盆の時期には引っ張られるので川に行つてはならない。
高知市布師田	おいげ祭	旧暦6月12日	神母神社社殿	—	子供	○	△	—	
高知市春野町仁ノ(浜・北・中・南・仁崎)	龍の不動祭	旧暦5月28日?	—	—	元は男の子、中学2年生が大將、1年生が中將	○	○	—	

たく同じ作法は周辺部にも無いが、高須や五台山で舟を作り、供物を川に流す。高須新木では舟の中央にローソクを立てるといふから、おそらく久枝の作法もこれらと関連するものである。

エンコウ祭が、かつては県内全域に分布していたポピュラーな祭りというより、ある限られた地域で広がった習俗ではないか、という予測も得られた。同じ国分川流域でも下流の田辺島ではエンコウ祭で水難除けを祈るのに対し、上流の国分や久礼田付近では川祭りなどと称し、地蔵に水難除けなどを祈願する。国分ではエンコウ祭のような棚を作り、提灯飾りも見られるが、それより上流の地域には仮設の棚は見られない。これも、エンコウ祭の流行が下流へは来たが、上流までは届かなかったということの結果なのかも知れない。

盆に祭る死霊とエンコウの交錯も興味深い。上岡でエンコウを祭る装置は盆の水棚だが、物部川東岸には、水棚を川辺に作り、川施餓鬼などと言って、お盆の期間に餓鬼を供養する所がある。上岡の水棚もその影響を受けたことは間違いないさそうだが、田辺島の棚もヒノキで飾るのが水棚を思わせるし、久枝の棚にヒノキを敷くのも気にかかる。どちらも水辺で人間に災いをなす雑霊を祀るのは同じで、その対象がエンコウか死霊かの違いによって供物などの作法（キュウリを供えるかどうかなど）も変化するが、両者の共通点にも目を向けることがエンコウを考えることになるだろう。エンコウ祭だけを取り出して考えるのでは無く、水辺の霊の祭祀全体に視野を広げ、そこからエンコウをどのように祭ってきたかをとらえなおす必要がありそうだ。

分布としては、今のところエンコウ祭の存在が知られているのは、浦戸湾から東の集落に多い。そして浦戸湾に注ぐ河川（国分川、舟

入川、下田川）の下流の村々である。江戸時代後期に高知城下町で猿猴祭が流行したという記録から推測すれば、エンコウ祭を育んだのは、浦戸湾とそこに流入する河川を使って舟で往来する人々だったと思われる。だが、高知城下町の猿猴祭が川を介して周辺農村部に広まったと簡単に言えないのは、猿猴祭とは言わない、稲生の河泊様や、介良のかわたろさんのような独自の呼び名の河童祭祀があるからだ。おそらく、十八世紀の中盤以降、土佐にも河童祭祀が各地で流行しはじめ、城下町で流行したスタイルがさらに周辺に影響を与えた、ということなのだろう。

後川流域は、浦戸湾に注ぐ河川の下流ではないが、上岡など物部川下流域のエンコウ祭とあわせて考えた方が良さそうだ。物部川以东にはエンコウ祭が無いことを考えると、城下町・浦戸湾から広がったエンコウ祭の分布域の外縁部なのだろう。今回は深めることができなかつたが、それぞれの地域の交流や交通などを見渡せば、これらの地域がエンコウ祭分布圏になった事情もよりわかってくるかも知れない。

最後に結論風に述べると、後川流域のエンコウ祭は、川辺の棚にキュウリを供えて祭るといふエンコウ祭の基本特徴にくわえ、子ども達主催で、提灯を飾り、花火を楽しみ、相撲を取るといふさまざまな要素が加わっている。これは県内のエンコウ祭の中でも、最も構成要素が多いもので、国の記録選択に選ばれたのは実に適したものであったと言えるだろう。

## 第七章 総括

### 一、「南国市後川流域のエンコウ祭」の記録調査

まず、「南国市後川流域のエンコウ祭」の記録調査の概要を述べる。

「南国市後川流域のエンコウ祭」は、エンコウと呼ばれる河童によく似た妖怪を祭って、水難防止を祈願する伝統行事で、平成二十三年（二〇一一）三月に国の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。

選択時に十組で行われていた「南国市後川流域のエンコウ祭」であるが、「エンコウ祭」を担う子どもの数が減少してきていることから、行事が成立しないことも懸念されていて、早急に現状記録と多角的な調査が必要とされるようになった。このため、南国市教育委員会は平成二十五年（二〇一三）五月十五日に有識者、地元代表者らによる南国市後川流域のエンコウ祭調査委員会を設置し、検討・協議を行い、民俗学的調査を実施することになった。

一年目の平成二十五年度は、第一回目の委員会をエンコウ祭が開催される六月一日に開催し、全体の調査内容や方針を検討するとともに、実際に祭りを見学し、概要調査を実施した。また、周辺の関連行事を四箇所調査した。

二年目の平成二十六年度（二〇一四）は、第二回委員会にて前年度の調査結果の共有および地区別調査の方法について検討した。委員会の方針を受けて、六月七日に八地区で開催されたエンコウ祭を調査委員、事務局、高知県立大学学生十名の総勢十七名で組ごとに分かれて詳細調査を実施した。具体的には久枝東組・中組・西組、

前浜浜窪・寺家・中組・西組・里組の八地区における「エンコウ祭」の聞き取り・アンケート調査、デジタルカメラ・ビデオによる撮影・映像記録などを行った。調査に当たっては地元住民をはじめ、多くの皆さんにご協力いただき、初めて後川流域の全地区のエンコウ祭の詳細な流れを記録することができた。また、周辺の関連行事調査を二件実施した。

三年目の平成二十七年（二〇一五）は、エンコウ祭当日に第三回委員会を開催し、昨年度の全地区調査の成果を確認し、エンコウ祭の補足調査を行った。また、周辺の関連行事調査を十二件、聞き取り調査を前浜中組の一件実施した。

四年目の平成二十八年（二〇一六）は、再度エンコウ祭の補足調査を行い、聞き取り調査を前浜里組、久枝西組の二件実施した。五年目の平成二十九年（二〇一七）は、第四回委員会にて報告書の執筆方針や内容を確認し、周辺の関連行事調査を三件、聞き取り調査を前浜浜窪の一件実施した。

これらの調査成果が出そろった上で、報告書原稿を事務局、各委員で分担して執筆した。令和五年（二〇二三）に報告書原稿が揃ったことを受けて、報告書編集会議を開催し、編集方針を確認して、本報告書の刊行に至っている。

### 二、研究史と本調査の特徴

まず、本報告書の位置づけを考えるために、後川流域を中心にエンコウ祭を紹介した資料や調査報告を挙げてみたい。

県内のエンコウについて集大成というべき本に橋詰延寿の『えんこうの話』がある（一）。同書にも後川流域のエンコウ祭は紹介され

ていない。一方同じ昭和三十七年（一九六二）には『土佐民俗』第二巻第二号に、中村武一氏による「前の浜のエンコウ祭り」という小文が掲載されており<sup>(三)</sup>、この一文が管見では後川流域のエンコウ祭を紹介した最も古い文章ということになる（第三章に収録）。

地元紙・高知新聞では、昭和四十八年（一九七三）六月十一日に「ふるさとの民俗」というシリーズで「エンコウまつり」が取りあげられたのが古い。場所は前浜で、円錐状に菖蒲を束ねた菖蒲小屋のカラー写真が掲載されている。翌昭和四十九年（一九七四）六月三日にも「にぎやかにエンコウ祭り」「伝統のチビツ子カーニバル／水難防止願って」の見出しで三枚の写真で取りあげられている。昭和五十三年（一九七八）六月五日にも「初夏の風物詩 エンコウ祭り」として前浜、久枝の後川筋で行われると記されている。この時は、まだ「社（やしる）」は川縁に作られている。後川流域のエンコウ祭が一般に知られるようになったのは、一九七〇年代と思われる。

後川流域のエンコウ祭について全体像を詳細に記録したが、佐藤文哉氏の「土佐東部における宗教儀礼と社会組織」の「三 南国市のえんこう祭り」と子供組」（『高知の研究 第六巻 方言・民俗篇』）である<sup>(四)</sup>。刊行は昭和五十七年（一九八二）だが、調査は昭和五十三年（一九七八）以降になされたものである。同年に刊行された『南国市史 下巻』でも「前浜・久枝のエンコウ祭り」として全体の概要が紹介されており、平成六年（一九九四）の『土佐史談』一九四号に浜田重彦氏が「えんこう祭りの由来」を寄稿している<sup>(五)</sup>。そして、民俗写真家の田辺寿男氏が昭和四十九年（一九七四）、昭和五十八年（一九八三）、平成七年（一九九五）にエンコウ祭の調査を行っている。資料編に収録したのはその時のもので、昭和のエンコウ祭の様子を伝える貴重な記録である。田辺氏は平成八年

（一九九六）の「猿猴話」<sup>(六)</sup>で氏のエンコウ研究を集成しており、平成十八年（二〇〇六）の高知県立歴史民俗資料館の企画展「田辺寿男の民俗写真2 いのちの河・くらしの川」では、「えんこう」の見出しで、前浜の写真3点、吹井2点、稲生1点が、平成二十七年（二〇一五）の「田辺寿男の民俗写真4 たましいの四季」では前浜2点が展示され、同展の図録に収録されている<sup>(七)</sup>。これらの展示では写真の年代は一九六五年と表示されている。

平成三年（一九九一）開館の高知県立歴史民俗資料館も、後川流域のエンコウ祭に注目しており、平成十二年（二〇〇〇）、平成十三年（二〇〇一）に調査し、平成十四年（二〇〇二）に祭りの流れを約十五分の映像「えんこう祭り」（制作：RKCプロダクション）にまとめ、館内で上映していた。なお、これらの調査と映像製作に関わった同館学芸員の梅野光興は、「妖怪譚―土佐の河童伝承を事例として―」で、高知県のエンコウやエンコウ祭についてまとめている<sup>(八)</sup>。本報告書の第5章と6章の一部はその内容をもとに発展させたものである。

国立歴史民俗博物館の常光徹氏は平成十三年（二〇〇一）に調査し、同年の企画展示「異界万華鏡―あゝ世・妖怪・占い―」で調査研究活動報告「高知県南国市のエンコウ祭り」としてパネル写真を展示<sup>(九)</sup>、平成二十七年（二〇一五）の調査を、「二〇一五年のエンコウ祭り」<sup>(一〇)</sup>として発表、二〇二三年にリニューアルされた同館の第四展示室（民俗）の河童コーナーでも後川流域のエンコウ祭の写真が展示されている。

高知県教育委員会が平成十八年に刊行した『高知県の祭り・行事 高知県祭り・行事調査報告書』では、「基礎調査一覧表」に4ヶ所が記載されている<sup>(一一)</sup>。

今回は、国の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されたことを受けて、より詳細な記録と範囲を広げた調査研究を行うことにした。そのポイントを五つ掲げたい。

一つは、現在行われている「エンコウ祭」の姿を可能な限り詳細に記録したことである。平成二十六年（二〇一四）六月七日に行われた祭りを、高知県立大学の学生を中心にそれぞれの組に張り付けてもらい、第四章「平成二十六年のエンコウ祭」にまとめた。報告には写真を多く掲載しているが、この他各組ごとにビデオ撮影も行った。従来の調査では一人あるいは数人による調査だったので、同時に進行する祭りの全容を記録したのは今回が初めてである。

二つ目は、過去にエンコウ祭を経験された方々に、祭りの思い出はもちろん、関連する後川流域の暮らしについてお話を聞いたことである。史料に残されていない後川流域のエンコウ祭については、歴史を遡るにはこの方法しかない。かつては菖蒲小屋が水辺に置かれていたことや、ロウソク時代の祭りの時間は短かったこと、花火は戦後盛んになったことなどを聞くことができたが、素朴な祭りだけに基本的なスタイルはそれほど変わっていないとも言えそうだ。聞き取り調査の成果は、第二章「二・前浜・久枝の民俗とエンコウ祭」、第三章「南国市後川流域のエンコウ祭の記録と記憶」に活用しているほか、資料編に本文に入れなかったことも含めて調査結果を収録している。

三つ目は、江戸時代や近現代の文献資料から、高知県におけるエンコウ伝承やエンコウ祭の歴史や広がり把握したことである。これについては、第五章「高知県のエンコウ伝承」および第六章「高知県のエンコウ祭」（二・エンコウ祭の歴史資料）で詳述した。

四つ目は、県内の類似の行事を調査記録、比較したことである。他の地域のエンコウ祭や周辺に関連行事の情報を集め、実地調査を行い、第六章「高知県のエンコウ祭」（二・高知県内のエンコウ祭と関連行事の文献資料）、「三・高知県内のエンコウ祭と関連行事の現地調査」でくわしく報告し、「四・後川流域のエンコウ祭の特徴」で一定のまとめを行った。

五つ目は、エンコウ祭を伝える前浜・下島・久枝の歴史と民俗の概観を不十分ながらまとめたことである。文献や地図、未発表の調査報告を活用しながら、「第二章 調査対象地域（南国市浜改田・前浜・下島・久枝地区）の地理的歴史的環境と民俗」にまとめた。

巻末の「資料編」では、①濱田眞潮・眞尚両氏による昭和五十年（一九七五）の文章、②田辺寿男氏や地元の方が撮影されたエンコウ祭の写真、③田辺寿男氏および今回行った聞き取り調査の記録を掲載している。

なお、第七章「総括」においても、きわめて簡単ではあるが全国の河童・水神祭祀の事例をいくつか掲げ、エンコウ祭の特徴を考えるための方向性を述べている。

これまでの調査報告はエンコウ祭全体を一括して紹介したものであったり、一部の地区の部分的な記録に留まっていた。今回の報告によって、地区ごとの個々の流れを紹介するとともに、エンコウ祭の歴史、周辺地域の行事の分布と特徴を検討・紹介することができた。

## 三・全国の水神・河童祭祀の事例

## 全国の水の神・河童の祭り

本報告書の第三・五・六章において、高知県内の事例に絞って検討してきたので、ここでは「エンコウ祭」の特徴を再確認するために、「水の神」、特に「河童」という切り口から全国各地の行事を見ていきたい。

「水の神」に対する信仰・行事というのは、日本中に様々な形で伝承されており、「海の神・漁の神」や「井戸の神」なども関わってくる。また、祈願内容・行事の目的も、「水難防止」はもちろんであるが、ほかにも農作業と深く関わる「雨乞い」や「豊作祈願」、海の神としての「豊漁祈願」、水に何かを流すことで災いや疫病を避けるといった意味で「厄除け」など実に多様である。

さらに、行事の担い手についても、「エンコウ祭」のように子ども達が中心となっているものだけでなく、村中の大人が総出で行うもの、当番の家が中心となるもの、青年団・若者組が行うもの、いくつかの村が連合して行うものなどがある<sup>(一)</sup>。

ここでは、主に川や沼池を舞台に行われる河童や水神祭祀を北からいくつか挙げておきたい。

## 東北地方

本州最北の青森県の津軽地方では、「水虎様」を祀るといふ行事がある。この水虎は、「水」に「虎」という漢字を書くが、要するに、エンコウと同じく河童に類似した妖怪の親分のことと言われている。

水虎様を祀る行事は、毎年七月半ばにそれぞれの村で行われる。行事の起源は、それほど古いものではなく、明治初めに、木造町の実相寺（日蓮宗）の僧侶が、川で子どもが毎年たくさん亡くなるのを憂いて、水虎を祀ったのが始まりとされている。

この地方では、子どもが溺れて亡くなるのは、メドチ（河童）の仕業であるとされており、河童の親分である水虎に「大明神」の位を与えて「水虎大明神」として神格化し、配下の河童（メドチ）の取り締まりをお願いした。

水虎様を祀る所は、津軽地方の北部に当たる西・北津軽郡に分布し、特に岩木川沿いの村落に多く見られる。この地域は、低湿地帯で、水の災害や水難事故が多かった。そのため、水に関する伝承も生活に密着した形で根強く生きていっていると思われる。

実際の行事内容は単純で、それぞれの村で祭壇を作ってお供え物をして、そこにお寺の和尚さんと呼んできて祈祷してもらおうというものである<sup>(二)</sup>。

また、岩手県や宮城県、秋田県、山形県、福島県にかけての広い地域で、初夏の神社の祭りにキュウリを供えたり、川に流す行事が見られる。秋田県の県南では六月十五日前後に「天王祭り」といつて八坂さんの祭りがあり、キュウリをそなえてお参りする<sup>(三)</sup>。宮城県では、色麻町一ノ関東苗代の磯良神社の祭りを別名「河童祭り」と呼び、神輿が家々を回るが、河童様に供えない前にキュウリを食べてはいけないと、初物のキュウリは川に流す<sup>(四)</sup>。福島県須賀川市や矢吹町、表郷村、大信村などでは「きゅうり天王祭」と呼び、疫病神・牛頭天王に対する信仰が強い。同県表郷村河東田天王の八坂神社の「きゅうり天王様」も、キュウリ2本と餅2個を供え、1本と1個を持ち帰って食べると疫病にかからないと言う<sup>(五)</sup>。宮城



県に河童祭りもあるが、総じて牛頭天王に対する信仰であり、水難除けより疫病除けの性格が強いようだ。

#### 関東地方

関東地方を中心に十二月一日を「川浸り朔日」と言っ、餅を搗いて川に投じる行事が広がっていた。下野芳賀郡ではその餅を「カビタレ餅」と言い、朝川に流して水神を祭り、家の者も食べる。水難を免れ、水泳ぎに行っても河童に取られないと言った<sup>(二六)</sup>。

一方、栃木県から埼玉県、神奈川県にかけて、雨乞いに大きな蛇を作つて祀る行事が今も伝承されている。

例えば、栃木県小山市間々田の「ジャガマイタ(蛇がまいた)」(平成二十三年選択)は、旧暦四月八日の行事で、藁・竹・山野の草木で作った長さ三〇メートルもある模型の蛇体を、元気の良い子どもたちが担ぎ回り、五穀豊穡・疫病退散を八大竜王に祈る<sup>(二七)</sup>。

埼玉県西部の入間郡、比企郡、秩父郡、大里郡では、雨乞いのために龍蛇を作り川や沼に入れ、高い木に懸ける儀礼が行われていた。鶴ヶ島市の「脚折の雨乞」が平成十七年に記録選択に選ばれている<sup>(二八)</sup>。

神奈川県では横浜市の「ジャモカモ」などがよく知られているが、逗子市、藤沢市鶴沼の宮前でも雨乞いに龍を作り海に流した<sup>(二九)</sup>と言う。

栃木のジャガマイタと埼玉の脚折の雨乞いは、国の選択になつており、ジャガマイタは今回、エンコウ祭と同時選択された。

#### 北陸地方

新潟県では、十二月と六、七月の冬と夏に水神祭りをする所が見

られる。上越地方では十二月一日に「川渡り餅」を子供たちが売り歩き、下越地方では十二月十五日に井戸や川へコイやフナを放流し、水神祭りをした。七月一日は中之口村針ヶ曾根では赤飯にキュウリの漬物を添えて川に流し、河童祭を言う<sup>(三〇)</sup>。北蒲原郡の一部では河童は六月一日に天竺から降り、八月の末には又天竺へ還るという<sup>(三一)</sup>。

越中は川が多く、氾濫もよくあり、水の信仰がよく見られる。一方、降雨を願う雨乞いも様々な儀礼が見られた。富山県南砺市城端町簗谷・北野では、毎年七月十五日に山中にあつて大蛇が棲むという「縄が池」に御神酒などを池に供える。縄が池ではかつて雨乞いが行われていたという<sup>(三二)</sup>。

このように水への信仰は、単に水難防止ということだけでなく、雨乞いをはじめとした農耕、特に稲作の豊作を願つて行われるものも多い。

#### 東海地方

東海地方では、愛知県津島市の津島神社を中、心とした「天王信仰」が盛んである。天王信仰は、そもそも夏場に厄払いをする行事なので川や海に何かを流すという点で、水との関わりが深いわけであるが、津島神社の祭礼では、川を舞台に神輿が船に乗って渡御し、神葎流しと称して早朝に葦を川に流して災厄を祓う。津島神社の祭りが国指定に、愛知県蟹江町の祭り(須成祭)が国選択になつている。

海部郡八開村と立田村(現愛西市)の旧輪中地域のいくつかの集落で行なわれる天王祭りは、その構成要素が後川流域のエンコウ祭とよく似ていて驚かされる。七、八月頃、子供ザイレンなどと呼ばれる子ども組主体で行われる。八開村塩田では八月第一土日が祭日

で、小学校五、六年生の男子の親子が中心になって行なう。前日までに地区を回ってお金を集め、朝から材料のマコモを水路で刈って来て、木曾川の堤防上に竹を四本立てて、周囲と屋根を蒲や真菰で覆う仮社殿を作り、それを「オミヨシサン」と呼んでいる。昼は集会所で会食し、夕方から提灯をつけ、近所の人も会食、子ども達は花火で遊ぶ。翌朝、お社と御札を川に流して祭りは終わる。立田村山路のおみよし祭りは、キュウリの酢の物を用意し、かつては子ども相撲を奉納していた。キュウリの酢のみは、愛西市に多く、名古屋市守山区下志段味の天王祭でも欠かせないと言う。

また、東海市では天王祭りの日には河童が尻を抜くので海や川で泳いでほならない、美浜町一色でも「河小僧にイリコを抜かれると言って、津島祭りがすむまで子どもは海で泳がなかったと言うのは、天王信仰が水神祭りとかわめて近いことを物語っている<sup>(二三三)</sup>。

#### 関西地方

関西地方では、夏の一日に川や海へ行く河童に引かれるという伝承が増えてくる。三重県志摩郡鳥羽町国崎では旧六月十四日の天王様の日に泳ぐと、ガボシという海の魔物に尻を抜かれるから海に入っては成らぬと言う。紀伊日高郡あたりでは、旧六月七日から十四日まで祇園様に捧げるためにお使いの河童が必ず一人だけ取るので、この期間の子供の水遊びを戒めると言う。丹波では八月十六日に川に入ると河童が足を引く、尻を引くと言い、この日は川に入らない<sup>(二三四)</sup>。

奈良県吉野山地の川沿いには水神としてガタロ（川太郎）を祀るところがあり、瀬に多い。中にガタロを封じ込めたという所（川上村瀬戸）もあると言う<sup>(二三五)</sup>。

#### 中国地方

中国地方でも年中行事に河童が登場する事例が見られる。広島県賀茂郡の沿海地方では六月一日は伊勢の神様がエンコを一所に集めて置いて下さるから、海で泳いでも大丈夫と言い、誰彼なく夜分に水を浴びると言う。山口県周防大島では六月晦日を牛盆と言い、この日海で泳がせる牛のダニが落ちるのをエンコが食いに來るから危ないと言って子どもを海や川に出さない<sup>(二三六)</sup>。

「エンコ」は土佐の「エンコウ」と同じで、「猿猴」と書くように本来は猿のことと考えられるが、島根県、広島県、愛媛県、高知県では河童の異称を「エンコウ」「エンコ」という地域が広がっている。

「えんこう祭り」という行事も島根県江津市（旧越智郡桜江町）川戸に伝えられている。内容は高知の「エンコウ祭」と異なり、祠から迎えた水神を御輿に乗せ江の川を遡り、水神を祀った祠まで渡御する。川沿いに祠があり、その下の大きな淵にエンコウが住んでいるといわれ、エンコウ花という作り物が供えられる。

この行事には由来譚もあって、馬を川に引きずり込もうとしたエンコウがつかまって、二度と悪戯をしないことを約束して放された。その後、エンコウに水の事故のないように守ってもらうために始められたと言われている<sup>(二三七)</sup>。

このような伝説は、島根県だけではなくて全国に分布しており、また高知県内にもあり、中にはこのときに伝授された薬を「エンコウ流」として販売している店もある（四万十町）。

河童に関わる伝説は全国に分布しているが、河童を祀ることで水難防止を祈願する行事は、先の青森の水虎のような例があるが、どちらかと言えば西日本に比較的多いように思われる。

四国地方

四国地方では、「エンコウ祭」を筆頭に、河童と関わりのある祭りは、高知県内で特によく見られる。川沿いに柵を作ってキュウリを供えたり、川にキュウリを投げ入れたり、エンコウ地蔵というお地蔵様を祀ったりする行事があった。

一方、四国の他県を見ると、徳島県では、那賀川（阿南市）流域に水神社がたくさん祀られていて、毎年夏八月半ばに、神職による祈祷や花火大会が行われている<sup>(二八)</sup>。

水不足になりやすい香川県では、山の上や溜池の脇に水神が祀られていて、そこで松明を焚いたり、踊りをしたり、大きな藁の童を奉納したりして雨乞いを行ってきた<sup>(二九)</sup>。

愛媛県では河童のことを「エンコ」といい、沿岸部では海に棲むという所もあるが、人や馬を水中に引き込むのは同様である<sup>(三〇)</sup>。八幡浜市穴井の「エンコ祭り」は、旧暦五月五日に、子どもや女連中が弁当を持って浜に出掛け、にぎり飯を波打ち際の上や龍王様の祠に供え、水難除けを祈願する<sup>(三一)</sup>。各家ではエンコの嫌がるという筍を食べ、腰に鹿の角を吊った。エンコが鹿の角を嫌うという伝承は、南予地方各地に聞くことができる<sup>(三二)</sup>。宇和地方の川沿いの村々では、旧暦七月頃、川祭りと言って川辺に小祠を設け、提灯を灯しキュウリを供え、エンコを祭る所がある<sup>(三三)</sup>というから、南国市のエンコウ祭と同様の習俗があったものらしい。

九州地方

九州地方は河童伝承も豊富で、河童や水神の祭りも多い。

福岡県では広い範囲で川祭りが行われている。八女郡では初夏の

頃水難除けの祈願を行い、神酒を川に流し、麦藁製の酒樽、藁苞、盃、タコなどの飾りを川辺に立てる。小郡村東福童では八歳から十三歳までの子供が集まり、十三歳を頭と言ってシキをし、宿で炊いてもらった飯を握り飯にし、短冊を飾った男竹を水中に立て、御酒を供える。その後は泳いだり、夕食を食べたりして過ごす<sup>(三四)</sup>。

佐賀県東与賀町田中作出では毎年四月下旬頃に「ひゃあらんさん祭り」（川神さん祭り、川祭りととも）が行われる。佐賀平野は干拓地が多く、クリークという独特の堀が張り巡らされている地域で、このクリークに落ちて亡くなる子どもも多く、そうした事故は河童の仕業とされてきた。藁の船を作り、ロウソクを立て、御神酒など河童への供え物を入れて川に流す。ちなみに「ひゃあらんさん」とは、「入らぬ」の方言で「川や堀に落ち込まないように」という意味である<sup>(三五)</sup>。

長崎の川祭りも五月上旬から下旬にかけて各所で行われ、川に沿った町々では川の側に、海岸近くでは海中に祭壇を作った<sup>(三六)</sup>。

大分県日田地方では、旧六月の初申を「申サマ」と言って水神祭りで、饅頭を竹の先端につけて川端に立てたり、麦藁の苞に入れて川の汲み場に流す。また荻町柏原では、土用の三日目に川に行くとカワノモノ（河童）に引き込まれるので川に行くのを戒めるなど、土用に水神祭りをを行う所も多い<sup>(三七)</sup>。

熊本県八代市宮地妙見町の悟真寺では、新暦六月第二日曜（以前は旧五月五日）に「河童祭り」を行っている。中学生の子どもが参加し、二年生が一番大将、一年が二番大将、三年が隠居である。中宮川のカンゾウ渚で住職が読経したあと、一番大将が裸になって川に入り、向こう岸に泳いで行って、岩に御幣を挿して来る。その後昼座と言って寺で飲食し、夕方にはバンザ（晩座）と言って一番大

将の家で握り飯と煮染めを食べる。悟真寺の住職が便所で尻をなでる河童の手を取って、それを返す代わりに、カンゾウ渚からメグリ渚の間では子どもにいたずらしないと約束したという伝説が残る(三二)。

宮崎県日向市平岩の秋留の「川祭り」は、七月二十日前後に、キュウリ、ナス、ニンジンに経石を載せた舟を川に流す行事である。川供養、川鎮めとも呼ばれる。赤岩川には河童伝承も多く、水難除けの行事でもある(三九)。

鹿児島県でも水神祭りは盛んで、東町川床では、旧五月二十七、二十八日頃、川のほとりに木の棚を作り、稲の虫除けの幟を立てて、シトギ、甘酒、魚を供えて神主に祈ってもらう。この祭り以前に川で泳ぐとガロー(河童)にジゴ(尻ご)を抜かれると言う(四〇)。串木野市では、旧五月十六日をガラツパドンのゴゼムケ(嫁取り)と言って、部落の子供たちは藁苞に入れた団子を川や海に流す。こうすると川や海で泳いでもカワドリ(水難)にあわないうという。この日はガラツパが山から海に下ってくる日だと言う人もいる(四一)。

鹿児島県南さつま市金峰町の「高橋十八度踊り」は、「ガラツパ踊り」「ヨツカブイ」とも呼ばれ、毎年八月二十二日に水難防止を願って踊りや子ども相撲が奉納される。祭りの朝、シユロの仮面をかぶった「大ガラツパ」たちが、鉦の音とともに集落内をまわり、出会った子どもたちを追いかけたり、かますに入れて神社まで運んだりする(四二)。

ここまで東北から九州までの水神・河童祭祀をピックアップして見てきた。次節では、高知のエンコウ祭と対比するという視点から検討してみたい。

#### 四. エンコウ祭と全国の事例との比較

前節の事例からは、全国の水神に対する祭りとしては、日々の暮らしの水や農薬用水などに対して感謝するもの、雨が降らない時の雨乞い、そして水難除けなどの祭祀が行われていることがわかる。

その方法としては、川や沼で御神酒などの供物を捧げるのは基本として、雨乞いのためには草や藁で龍蛇の形を作ることが多く、水難除けには竹や草で簡単な棚を作る事例が九州や四国南部に分布している。そして水難除けの場合は、その犯人を河童とし、河童自体を祭る所も少なくない。これは雨をもたらず存在が龍蛇の巨大な作り物で表現されることがままあることと対照的である。南国市後川流域のエンコウ祭も、雨乞いではなく、水難を水中の妖怪を祭ることとで逃れようというタイプの行事の高知版と考えることができる。

ただ、全国どこでも河童自体を祭る行事があるわけではない。あくまでも祭祀の対象は水神で、水神に何かを供えることで、結果として河童に取られないというものが多い。十二月一日のカビタリ餅も、九州の川祭りもそのような行事である。青森県の水虎様も、河童の親玉である水虎を祭ることで結果として河童による水難を防ぐと考える。祭りの主役が河童やエンコウとされ、名前も河童祭り、エンコウ祭となっている所もあるが、全国的にはそれほど広がりをもっていないようである(近年始まった地域おこしや観光目的の河童祭りは除く)(四三)。それに対し、高知県では、川祭りや水神祭りもあるが、エンコウという水の妖怪を主役にした祭りが香長平野中心に一定の広がりをもって分布している。これは全国的に見てもユニークな点であろう。

ただ、第六章で見たとおり、高知県内でもエンコウ祭の主体や方法は様々である。一方で全国の川祭りや水神祭りの中には、後川流域のエンコウ祭とよく似た方法の所が各地に見られる。竹や草で仮の棚を作ること、子ども組が中心となるのは九州の川祭りに見られる。河童の祭りという点はユニークだが、その方法は全国の水神祭り共通する部分が多いのである。

そして、後川のエンコウ祭と似た方法の水神祭りを行う他県の事例であつても、全ての地区が同じ方法でもない。大人が主体だったり、宗教者が加わったり、さまざまである。これは高知県のエンコウ祭が後川流域は子ども主体だが、上岡では大人の行事で、南国市北部の川祭りが僧侶による祭りであることと同様である。子どもが主役ということは、子どもの水難事故を防ぐ河童の祭りにはふさわしいようだが、必然的な要素ではないということだ。

そして、作法がそっくりだからと言って、目的も同じとは限らない。愛知県旧輪中地域に残る津島信仰の行事は、子ども主体、仮の棚、会食、提灯、花火などその構成要素を見る限り本当に後川流域のエンコウ祭とよく似ているが、この行事は疫病除けを目的としたものであつて、水難除けの行事ではないのである。これは東北地方に多いキュウリを川に流す「キュウリ天王」の行事が、河童祭りを連想させるが、あまり河童が前面に出てこず、目的は病気を祓うこととも重なってくる。その一方、同じ愛知県には、この日に泳ぐと河童に引かれると言う所もあり、両者の信仰には関連するところも多い。

このように、目的、祭祀対象、方法の異同を全国の事例と比較することで、後川流域のエンコウ祭の特徴がよりくつきりと浮かび上がってくるだろう。

## 五. 平成二十二年以降から現在までの「エンコウ祭」の開催状況

エンコウ祭調査委員会では、平成二十二年（二〇一〇）から令和五年の現在まで、「エンコウ祭」の実態把握を試みてきた。その間、少子化が進み対象地域の「組の合併」も行われ、開催箇所数が減少し続けている。平成二十二年において開催箇所数が十件、調査時の平成二十六年は八件であつたが、令和五年現在は、わずか四件に半減している状況である。ここでは、「エンコウ祭」の開催状況とその変遷について見ておきたい。

エンコウ祭開催箇所の変遷を一覧表に示した。調査を始めた平成二十二年以前の状況は、聞き取り調査等から断片的に垣間見えるだけであり、既に休止していた浜改田東場や前浜久保、下島里の状況は不明である。常光徹氏の調査によると、平成十三年（二〇〇一）には、十一の組が実施していたとのことであるから、その当時は前浜久保組や下島里でも開催されていた可能性がある<sup>（四四）</sup>。

平成二十二年は、十地区での開催を確認しており、組ごとに盛大に実施していた。平成二十三年から二十九年にかけては、前浜里組で、実施位置の移動のためか開催確認できなかった年があるものの、若干の合併が見られる以外は、箇所数の大きな変化はなかった。前浜里組は、他の地区と違い、特定の橋のたもとではないため、ショウブ小屋の位置が何度も移動している。用水路の脇に設置することは共通しているが、位置が度々変わっている。平成三十年から、子どもの数の減少に伴って、久枝地区が一箇所にとまり、前浜西組

平成 22 年以降のエンコウ祭開催箇所変遷一覧表

組	前浜里組	前浜西組	前浜中組	前浜寺家	前浜久保 東組と合併	前浜東組	前浜浜窪	下島浜	下島里 H21 から 休止か	久枝西組	久枝中組	久枝東組	開催箇所数	備考
														浜改田東場は聞き取り等でのみ確認
H22	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	10	
H23	?	○	○	○		○	○	○		○	○	○	9or10	前浜里組場所変更のため確認できず
H24	?	○	○	○		○	○	○		○	○	○	9or10	前浜里組場所変更のため確認できず
H25	○	○	○	○			○	○		○	○	○	9	
H26	○	○	○	○			○	○	浜窪に合併	○	○	○	8	下島浜が浜窪に合併
H27	○	○	○	○		○	○	○	浜窪に合併	○	○	○	9	
H28	?	○	○	○		△ 花火のみ	○	○	浜窪に合併	○	○	○	8or9	
H29	○	○	○	○		○	○	○	浜窪に合併	○	○	△棚のみ、 中組と合同	8	久枝東組が中組と合併
H30	○	△ 棚のみ。	○	○			○	○	浜窪に合併	○ 中組で合同開催			5	前浜西組が中組と合併。久枝が中組で合同開催
R1	○	寺家で合同開催			○		○	○		○ 中組で合同開催			5	下島浜は1家族で開催
R2	△ 棚のみ	寺家で合同開催			○								2	コロナにより自主判断
R3													0	コロナにより完全中止
R4	○	寺家で合同開催			○			○					3	コロナにより自主判断
R5	△棚のみ。 花火は配布	寺家で合同開催			○			○		○ 中組で合同開催			4	台風接近(強風)のため縮小開催

も花火等は、前浜中組と合同で開催するなど、大幅に数を減らした。その流れの中で、令和二年からは、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、自粛や中止が相次ぎ、存続の危機となっていた。令和五年には、合同開催により数を減らしたものの、四地区で無事に行事が受け継がれている。

### 六、今後の課題と取り組み

#### 伝承していくこと

平成二十六年には八ヶ所で行われていた後川流域のエンコウ祭は、令和五年には四ヶ所に半減してしまった。コロナウイルス感染防止のための自粛があったこともあるが、少子化が進み、子どもがいなくなってきたことが大きい。このままではエンコウ祭は消滅してしまうのかも知れない。

しかし、第三節で見えてきたように、河童自体を主役にした祭りは全国的に見ても決して多くは無い。一ヶ所だけでなく、一定のエリアに複数のエンコウ祭が伝承されてきた高知県はやはりユニークだ。そして河童をエンコウという地域は、高知県、愛媛県、広島県、島根県など中四国に分布している。後川流域のエンコウ祭は、そのような文化伝統を継承する希有な祭りだと言える。どのような形であれ、伝承が続けばと思う。

新型コロナによって中止になった年のエンコウ祭は印象的だった。OB有志が寺家に集まって棚を作り、「大人のエンコウ祭」を行ったのである。派手な花火の打ち合いこそ無かったが、大人達は夜更けまで酒を呑みながら楽しそうに歓談していた。これはもし子どもがいなくても、大人のコミュニケーションの場としてエンコウ祭が

継続できるという可能性を示した催しだったと言えるだろう。

もうひとつ印象的だったのは令和四年と五年の下島浜で、祖母が幼い孫のために

行った「たった一人のエンコウ祭」である。野菜を運ぶコンテナに菖蒲を飾り、ローソクを立てて即席の棚を作り、他のコンテナにもローソクを立て提灯に見立て、花火を楽しんでいた。子ども組が無くてエンコウ祭は成り立つという、目から鱗のやり方だった。

これら二つの印象的な光景は、これからのエンコウ祭の可能性を示すものだったように思われる。

行事を活用した町づくり

他県を見ると河童は地域おこしに活躍している。河童伝説の多い福岡県久留米市田主丸町では、JR田主丸駅の駅舎が河童の顔で、中では河童グッズが販売されている。同様に伝説が残る地では、河童の像を建てたり、河童祭りなど河童を冠したイベントを行ったり、河童を利用する所は多い(四五)。

前浜でも、前浜橋横の大湊泊地跡公園に「えんこうの里」の石碑とエンコウの石像が平成十六年(二〇〇四)にお目見えしている。それより十四年前の平成二年(一九九〇)十一月に架け替えた稲生の稲生橋の欄干にも酒を呑むエンコウのレリーフがあしらわれている。日高村本郷でも日下川に架かる赤几橋あかはしのたもとにえんこう像が建てられたのは平成四年(一九九二)二月のことだ。そして、平成



下島浜の収穫コンテナを  
利用したショウブ小屋  
(2023年)

二十一年(二〇〇九)には稲生の地区住民有志が、海洋堂に頼んで河泊様のフィギュアを製作している。

このように県内でもエンコウを地域のシンボルにする動きが無いことは無いが、他県に比べると動きは小さい。もちろん必ずしも観光に力を入れることが良いとも思わないし、観光客がどっと押し寄せる、というような状況はこの祭りにはあまりそぐわないが、例えばエンコウの住む町、エンコウと共に生きる町、エンコウが身近に感じられる町というような形で、行事以外の時も含めてここを訪れたときに、何か独特のロマンに浸れるような、そうした町づくりはできるのではないか。

そのためにも、是非この行事を外に向けて、どんどんアピールしていつてもらいたい。今回の報告書や映像記録も活用して欲しいし、南国市や県立歴史民俗資料館や高知龍馬空港なども協力しながら、いろいろな機会に多くの人に知ってもらえればと願っている。

エンコウ祭は、いろいろな魅力を秘めていると思われる。

調査に参加した学生たちからは「シュービン」という打ち上げ花火の音や迫力に圧倒されつつ、「大人がこれまでの伝統を守って、子どもたちに伝えている様子やこの日のために県外から帰って来る若者たちの姿を見て、この地域で本当に大切にされている祭りだと実感した。これからも続けて欲しい」との感想が得られた。

この選択を機会に作られたこの報告書が、地域の人が「エンコウ祭」のことや、これからの町づくりについて考えるきっかけの一つになれば幸いである。

全国的にも希少なエンコウ祭がこれからも地域で伝えられていくことを願っている。

なお、本稿を成すに当たり、元文化庁文化財部伝統文化課文化財調査官・現國學院大學 観光まちづくり学部准教授の石垣 悟氏には、全国の河童・水神祭祀の事例や、これからの課題を執筆するに当たり、講演会の内容を参考にさせて頂くなど大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

## 【注】

- (一) 橋詰延寿(一九六二) 参照。
- (二) 中村武一(一九六二) 参照。
- (三) 佐藤文哉(一九八二) 参照。
- (四) 南州市史編纂委員会(一九八二) 四六一頁、浜田重彦(一九九四) 参照。
- (五) 田辺寿男(一九九六) 参照。
- (六) 高知県立歴史民俗資料館(二〇〇六)(二〇一五) 参照。
- (七) 梅野光興(二〇一五) 参照。
- (八) 国立歴史民俗博物館(二〇〇二) 参照。
- (九) 常光徹(二〇一七) 参照。
- (一〇) 高知県祭り・行事調査委員会編(二〇〇六) 一一二―一二三参照。
- (一一) 石垣 悟(二〇一一)。「三 全国の事例との比較」で取り上げた祭事や信仰は、地元の公民館における講演(およびレジュメ)である石垣(二〇一一)が紹介したものをベースに、筆者が文献を調査し、再構成したものである。
- (一二) 水虎信仰については、河上雄(一九七〇)による。広瀬伸(二〇一七)も参照。
- (一三) 富木隆蔵(一九七三)、二二八頁。石川純一郎「きゅうりを好む河童」参照。
- (一四) 宮城県教育委員会(二〇〇〇)、一一七頁(『報告書集成2』では二五五頁参照)。
- (一五) 福島県教育委員会(二〇〇五)の概説(一四頁)と「基礎調査報告」の「供物や料理に特徴のある祭り・行事」のリスト(一三九、一四〇頁)に

よる(『報告書集成2』では、三〇二、四二七、四二八頁参照)。なお、須賀川市の「きゅうり天王祭」こと岩瀬神社の祭礼については、服部未来子・初澤敏生(二〇二二)が詳しい(四三―四七頁参照)。

(一六) 柳田國男(一九七五)の六二九頁「カビタレモチ」の項参照。

(一七) 尾島利雄(一九七二)一九九、二〇〇頁。小川聖(二〇〇三)「間々田の蛇祭り」(七九―八一頁)も参照。

(一八) 埼玉県立民俗文化センター(一九九七)、五二―五四頁(『報告書集成4』では七八―八〇、八五頁)。また、平沼 浩(二〇一七)は「脚折の雨乞」について詳しくレポートしている(二二―一九頁)参照。

(一九) 和田正洲(一九七三)三三二―三三三頁参照。

(二〇) 新潟県民俗学会編(一九八九)一六四頁参照。寺泊町本山弁才天でも六月十五日に河童祭が行われるとある。

(二一) 柳田國男(一九七五)の四三五頁「カメノコクバリ」の項参照。

(二二) 浦辻一成(二〇〇二)七一―七三頁参照。(『報告書集成5』では一一九―一二二頁参照)。吉浦翔(二〇二二)、一二九―一三三頁にも記述がある。

(二三) 名古屋博物館編(一九九九)「旧輪中地域のムラ」については四四―四七頁参照。名古屋守山区下志段味は五七頁参照。

(二四) 石川純一郎(一九八五)二四一、二四三頁参照。

(二五) 保仙純剛(一九七三)三〇六頁参照。

(二六) 柳田國男(一九七五)四三五、四三九、四四〇頁参照。

(二七) 中田眞治(二〇〇〇)六八―七〇頁(『報告書集成9』は三六三―三六五頁参照)。

(二八) 山本秀樹(二〇二二) 参照。

(二九) 市原輝士(一九七三)八八―九〇頁参照。

(三〇) 愛媛県史編さん委員会編(一九八三)八一―八二頁参照。

(三一) 八幡浜市誌編纂会(一九八七)一〇〇八、一〇〇九頁参照。

(三二) 愛媛県史編さん委員会編(一九八三)八一―八二頁参照。

(三三) 桜井徳太郎(一九六一)二二四、二二五頁参照。



(三四) 篠原正一(一九八九)七〇、七一頁参照。なお福岡県大木町の川祭りに  
ついては、大木町編(二〇一六)があり、県全体の川祭りについても概観  
している。

(三五) 小川徳晃(二〇〇二)一一八―一二二頁参照(『報告書集成11』では

一二二―一二五頁参照)。東与賀町史編纂委員会編(一九八二)一〇三―  
一〇三三頁にも記述がある。

(三六) 深濁久(一九七八)一三〇、一三二頁参照。

(三七) 染矢多喜男(一九七九)一四四、一四五頁参照。

(三八) 牛島盛光・奥野広隆(一九七五)一九五、一九六頁参照。

(三九) 山口保明(一九九二)四八三、四八四頁参照。

(四〇) 小野重朗(一九九二)一四三頁参照。

(四一) 小野重朗(一九八二)一四〇、一四一頁。「ガラッパ」の語源については、

村山七郎(一九七二)五〇頁参照。

(四二) 山中由里子編(二〇一九)一六三頁参照。小野重朗(一九九二)

一五二、一五三頁参照。

(四三) 松村薫子(二〇一〇)参照。

(四四) 常光徹(二〇一七)参照。

(四五) 松村薫子(二〇一〇)参照。

#### 【参考文献】

石垣 悟(二〇二一)「エンコウ祭の選択と今後の伝承へ向けて―水の民俗の  
理解のために―」(前浜公民館ホールでの配付資料)

石川純一郎(一九八五)『新版 河童の世界』時事通信社

石田英一郎(一九九四)『新版河童駒引考―比較民族学的研究―』岩波文庫

市原輝士(一九七三)『香川県』金沢浩・市原輝士・松本隣一・桂井和雄『四

国の民俗信仰』明玄書房

植木惺斎(一九七〇)『土陽淵岳志』高知県立図書館

牛島盛光編著(一九七六)『熊本の民俗―熊本の風土とこころ十二―』熊本日

日新聞社

牛島盛光・奥野広隆(一九七五)「熊本県」佐々木哲哉・佛坂勝男・山口麻太郎・

染矢多喜男・牛島盛光・田中熊雄・小野重朗『九州の歳時習俗』明玄書房

梅野光興(二〇一五)「妖怪譚―土佐の河童伝承を事例として―」斎藤英喜編『神

話・伝承学への招待』思文閣出版

浦辻一成(二〇〇二)「縄が池祭り」富山県教育委員会編『富山県の祭り・行

事―富山県祭り・行事調査報告書―』(二〇一〇)『都道府県別 日本の祭り・

行事調査報告書集成5 中部地方の祭り・行事1 富山・石川』海路書院

に収録)

愛媛県史編さん委員会編(一九八三)『愛媛県史 民俗上』愛媛県

大木町役場編(二〇一六)文化財調査報告書『大木の川まつり』福岡県三潴郡

大木町

大森義憲・向山雅重・望月薫弘・加藤参郎・河上一雄(一九七三)『南中部の

民間信仰』明玄書房

小川聖(二〇〇三)「間々田の蛇祭り」とちぎの小さな文化シリーズ企画編集

会議編『栃木民俗探訪』下野新聞社

小川徳晃(二〇〇二)「川神さん祭り(ひやあらんさん祭り)」佐賀県の祭り・

行事調査事務局編『佐賀の祭り・行事―佐賀の祭り・行事調査事業報

告書』佐賀県立博物館、(二〇〇九)『都道府県別 日本の祭り・行事調査報

告書集成11 九州地方の祭り・行事1 佐賀・長崎』海路書院に収録)

尾島利雄(一九七二)『日本の民俗9 栃木』第一法規出版

小野重朗(一九八二)『民俗神の系譜―南九州を中心に―』法政大学出版局

小野重朗(一九九二)『鹿児島島の民俗暦』(海鳥ブックス二二)海鳥社

折口信夫(一九七五)『河童の話』(全集第3巻『古代研究(民俗学編二)』所収)

中公文庫・中公クラシックス版

河上一雄(一九七〇)『水虎信仰』和歌森太郎編『津軽の民俗』吉川弘文館。

大島建彦編(一九八九)『河童』(双書 フォークロアの視点1)岩崎美術

社にも収録。

倉田正邦・渡辺守順・田中久夫・杉本尚次・地主 喬・保山純剛・長谷六兵衛

(一九七三)『近畿の民間信仰』明玄書房

- 黒田一充(二〇〇九)「津島信仰のお仮屋」『関西大学博物館紀要』第一五号  
 国立歴史民俗博物館・常光 徹編(二〇一四)『河童とはなにか』『歴博フォーラム 民俗展示の新構築』岩田書院
- 小松和彦編(二〇〇〇)『怪異の民俗学三 河童』河出書房新社  
 近藤直也(二〇一六)「土佐ドウロク神考―高知県下とその周辺におけるドウロク神関連の文献資料について―」『紀要・テクニカルレポート』(九州工業大学大学院情報工学研究紀要・人間科学篇)第二九号
- 桂井和雄(一九七三)『俗信の民俗』岩崎美術社
- 高知県祭り・行事調査委員会編(二〇〇六)『高知県の祭り・行事―高知県祭り・行事調査報告書―』高知県教育委員会
- 高知県教育委員会・香川県教育委員会(二〇〇九)『都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成一〇 四国地方の祭り・行事 高知・香川』海路書院(高知県祭り・行事調査委員会編(二〇〇六)『高知県の祭り・行事―高知県祭り・行事調査報告書―』を再掲)
- 高知県立歴史民俗資料館(二〇〇六)企画展「田辺寿男の民俗写真2 いのちの河・くらしの川」
- 高知県立歴史民俗資料館(二〇一五)「田辺寿男の民俗写真4 たましいの四季」  
 国立歴史民俗博物館(二〇〇一)『異界万華鏡―あの世・妖怪・占い―』歴史民俗博物館振興会
- 埼玉県立民俗文化センター(一九九七)『埼玉の祭り・行事 埼玉の祭り・行事調査報告書』埼玉県教育委員会(『都道府県別 日本の祭り・行事調査報告書集成4 関東地方の祭り・行事2 埼玉・千葉』海路書院(二〇〇八)に収録)
- 財団法人 民俗学研究所編(一九五六)『改訂 総合日本民俗語彙』第五巻 平凡社
- 桜井徳太郎(一九六一)「民間信仰の実態―とくに崇り神・憑きもの・妖怪などについて―」和歌森太郎編『宇和地帯の民俗』吉川弘文館
- 佐々木哲哉・宮地武彦・本田二郎・牛島盛光・松岡 実・田中熊雄・小野重郎(一九七三)『九州の民間信仰』明玄書房
- 佐々木正興(一九八三)「民間信仰」愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 民俗上』愛媛県
- 佐藤文哉(一九八二)「土佐東部における宗教儀礼と社会組織」第二三「三 南国市の猿猴祭り」と子供組」山本 大編『高知の研究』第六巻 方言・民俗篇 清文堂
- 椎名慎太郎(二〇一三)「河童の姿を追って―民俗伝承に見る庶民の心―」『大 学改革と生涯学習』第一七号(山梨学院生涯学習センター紀要)
- 篠原正一(一九八九)『新編筑後の年中行事十二月』久留米郷土研究会、染矢多喜男(一九七九)『大分歳時十二月』西日本新聞社
- 高橋秀雄・高木啓夫編(一九九五)『祭礼行事・高知県』おうふう
- 田辺寿男(一九九六)「猿猴話」、『土佐民俗』六六号
- 塚田泰三郎・栃木県教育委員会(一九八四)『栃木県の無形文化財・民俗文化財』栃木県教育委員会
- 常光 徹(二〇一七)「二〇一五年のエンコウ祭り」山田慎也編『国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇五集 民俗儀礼の変容に関する資料論的研究 国立歴史民俗資料館
- 鶴藤鹿忠・藤原寛一・松岡利夫・島田成矩・四宮守正(一九七三)『中国の民間信仰』明玄書房
- 東條 操校訂(一九四二)『物類称呼』岩波文庫
- 富木隆蔵(一九七三)『日本の民俗 秋田』第一法規
- 中田眞治(二〇〇〇)「川戸のえんこう祭り」『島根の祭り・行事』、島根県教育委員会、(二〇〇九)『都道府県別 日本の祭り・行事調査報告書集成9 中国地方の祭り・行事1 鳥取・島根』海路書院に収録)
- 中村武一(一九六二)「前の浜のエンコウ祭り」、『土佐民俗』二巻二号、土佐民俗学会
- 名古屋市博物館編(一九九九)『尾張の天王信仰』名古屋博物館  
 南国市史編纂委員会(一九八二)『南国市史 下巻』、南国市  
 新潟県民俗学会編(一九八九)『図説日本民俗誌 新潟』、岩崎美術社  
 橋尾直和(二〇一五)「5『南国市後川流域のエンコウ祭』の調査」『文化財こ

うち』第一号

橋詰延寿（一九六二）『えんこうの話』高知市観光協会

服部未来子・初澤敏生（二〇二二）「地域における伝統的行事の機能と位置づけに関する一考察―福島県須賀川市のきうり天王を例に―」『福島大学地域創造』第三卷第一号

浜田重彦（一九九四）「えんこう祭りの由来」『土佐史談』一九四号

東与賀町史編纂委員会編（一九八二）『東与賀町史』東与賀町役場企画室

平沼 浩（二〇一七）「地方創生と伝統行事―土地の記憶を行動で共有する―

③「脚折雨乞」（前編）『共済総研レポート二〇一七』四』JA共済総合研究所、二二―二九頁

廣江 清編（一九六九）『近世土佐妖怪資料』土佐民俗学会

広瀬 伸（二〇一七）『水虎様への旅―津軽の水士文化―』津軽書房

深潟久（一九七八）『長崎歳時十二月』、西日本新聞社

福島県教育委員会（二〇〇五）『福島県の祭り・行事―福島県祭り・行事調査報告書―』（二〇〇九）『都道府県別 日本の祭り・行事調査報告書集成2』

北海道・東北地方の祭り・行事2 青森・宮城・福島、海路書院に収録）  
藤本良致・橋本邦契・伊藤曙寛・横山旭三郎（一九七三）『北中部の民間信仰』明玄書房

保仙純剛（一九七三）「奈良県」『近畿の民間信仰』明玄書房

三浦貞栄治・猪狩文治・三崎一夫・石井 彪・江口文四郎・五十嵐勇作（一九九二）『東北の民間信仰』明玄書房

松村薫子（二〇一〇）「河童の現代―創作の中の河童」、飯倉義之編『ニッポンの河童の正体』新人物往来社

宮城県教育委員会（二〇〇〇）『宮城県の祭り・行事 宮城県祭り・行事調査報告書』（二〇〇九）『都道府県別 日本の祭り・行事調査報告書集成2』北

海道・東北地方の祭り・行事2 青森・宮城・福島、海路書院に収録）  
村山七郎（一九七二）新スラヴ・日本語辞典における十八世紀初めの薩摩方言

語彙』九州大学大学院人文科学研究院編『文学研究』第六八号

柳田国男（一九六九）「河童駒引」『増補 山島民譚集（東洋文庫一三七）』平

凡社

柳田国男（一九七五）『歳時習俗語彙』、国書刊行会

柳田国男／小松和彦校注（二〇一三）『新訂 妖怪談義』角川学芸出版

山口保明（一九九二）「伝統の祭り」、宮崎県編『宮崎県史 資料編 民俗2』

山中由里子編『驚異と怪異―想像界の生きものたち―』河出書房新社

山本秀樹（二〇二二）「那賀川堤防の水神社を考える」『会報ライブラリー』第

一二八巻、徳島県技術士会

八幡浜市誌編纂会（一九八七）『八幡浜市誌』八幡浜市

吉浦 翔（二〇二二）「六、神社・伝説・祭りから見る人々の『郷土観』、竹

内潔編『平野の小宇宙 富山県南砺市城端の生活文化』（地域社会の文化人

類学的調査二二）富山大学人文学部文化人類学研究室二一九―一三三頁

和歌森太郎編著（一九六一）『宇和地

帯の民俗』吉川弘文館（和歌森太

郎「第3章 民間信仰の実態―と

くに崇り神・憑きもの・妖怪など

について―）  
和歌森太郎（一九六二）『西石見の民俗』吉川弘文館

和田正洲（一九七三）、日向野徳久・

藤田稔・直田昇・井上善治郎・宮

田登・和田正洲・村崎勇『関東の

民間信仰』明玄書房



平成 26 年エンコウ祭全地区調査 調査員記念写真

## 資料編

## 一・エンコウ祭写真資料

今回の調査にあたり、エンコウ祭の古い写真を収集した。次頁以降掲載している写真は、高知県立歴史民俗資料館所蔵の田辺寿男資料のほか、地元の方から提供を受けたものおよび南国市所蔵資料である。

田辺寿男資料は、田辺寿男氏が民俗写真家として長年にわたって高知県の民俗を撮影した約5万点におよぶ写真資料である。田辺寿男氏は大正十年生まれで昭和三十年に興味で写真をはじめ、昭和三十九年には土佐民俗学会や日本民俗学会に入会し、以後精力的に県内各地の民俗調査をしている。その中で、エンコウ祭については昭和四十九年六月一日、昭和五十八年六月四日、平成七年六月四日に聞き取りをした際のメモが残されており、その内容は「三、聞き取り調査資料」に掲載している。写真は昭和四十年代、平成七年に撮ったとされる白黒写真のネガが残されており、一覧は高知県立歴史民俗資料館刊行の『田辺寿男写真資料目録Ⅰ白黒ネガフィルム編』（二〇〇七年）に掲載されている。そのうち、写真1から26の26点を掲載した。撮影地点は記述がないため、周辺風景等から判断した。昭和四十年代のもは写真1から18までで、前浜寺家、中組、西組のものがあり、平成七年のもは写真19から26までで前浜中組、西組のものがある。昭和四十年代のもはこれまでいくつかの出版物に掲載されているが、書かれている年代はまちまちであり、確定することは難しい。フィルムのメモ書きには昭和四十年五月五日とあるが、その年の六月第一土曜日は六月五日である。

地元の方から提供を受けた写真は写真27から32の6枚を掲載した。前浜寺家の高木正平氏からの提供である。後川は昭和五十七年から六十三年にかけて高知空港周辺整備の一環で全面コンクリート護岸に改修されており、改修前の様子を伝える貴重なカラー写真である。

南国市所蔵資料は写真33から40の8枚である。日付プリントから昭和五十八年六月四日と判断できる。ショウブ小屋は2種類あるが、場所の特定ができない。子ども相撲の写真は前浜浜窪と思われる。他にも南国市刊行物として、『南国市制30周年記念写真集レトロ南国』や「広報なんこく」に掲載された写真がある。

一. エンコウ祭写真資料



写真1 後川の様子(前浜久保から寺家方面 昭和40年代)



写真2 前浜寺家(昭和40年代)



写真3 前浜中組のクミジ(昭和40年代)



写真4 前浜寺家のショウブ小屋(昭和40年代)



写真5 前浜中組(昭和40年代)



写真6 前浜中組(昭和40年代)



写真7 前浜中組(昭和40年代)



写真8 前浜中組(昭和40年代)



写真9 前浜中組(昭和40年代)



写真10 前浜西組  
(昭和40年代)



写真11 前浜西組  
(昭和40年代)



写真12 前浜西組  
(昭和40年代)



写真13 前浜西組 (昭和40年代)



写真14 前浜西組 (昭和40年代)



写真15 前浜西組 (昭和40年代)



写真16 前浜西組 (昭和40年代)



写真17 前浜西組 (昭和40年代)



写真18 前浜西組 (昭和40年代)

一. エンコウ祭写真資料



写真 19 前浜中組 (平成 7 年)



写真 20 前浜中組 (平成 7 年)



写真 21 前浜中組 (平成 7 年)



写真 22 前浜中組 (平成 7 年)



写真 23 前浜西組 (平成 7 年)



写真 24 前浜西組 (平成 7 年)



写真 25 前浜西組 (平成 7 年)



写真 26 前浜西組 (平成 7 年)



写真 27 前浜寺家



写真 28 前浜寺家



写真 29 前浜寺家



写真 30 前浜寺家



写真 31 前浜寺家



写真 32 前浜寺家



一. エンコウ祭写真資料



写真 33 場所不明 (昭和 58 年)



写真 34 場所不明 (昭和 58 年)



写真 35 場所不明 (昭和 58 年)



写真 36 前浜浜窪 (昭和 58 年)



写真 37 前浜浜窪 (昭和 58 年)



写真 38 前浜浜窪 (昭和 58 年)



写真 39 前浜浜窪 (昭和 58 年)



写真 40 前浜浜窪 (昭和 58 年)

## 二・エンコウ祭関連資料

左に掲載する文章は昭和五十年に書かれた前浜久保の濱田眞潮氏およびその子息であり調査委員長の眞尚氏によるエンコウ祭に関する記録文である。調査期間中に発見されたことから本報告に掲載する。

『エンコウの宵 ― 起源、現在、未来 ―』

「猿公 いや、やはりエンコウと片仮名で記すべきでしょう。古来、前浜・久枝地区で行われている川祭りです。初夏、さあこれよりが川遊び、水泳の季節だ！という時期に、小・中学生に自主的な計画、運営のもと、陽の光も西の空にすいこまれ、夕闇のしのび寄る頃、各部落ごと其の部落の川辺の汲路でその幕を開くのです。

起源は？部落の古老に尋ねても、「わしの小供の時にも『昔からやりよった』と聞いちゅう」とのみ返事があり、調べるすべもないわけです。

香長平野の最南端、十市、浜改田、前浜、久枝と伸びる砂丘地帯上に在る各部落ですが、井戸の少ない其れも大変深い井戸ですので、水利用には多大な労力を要したのでしょう。反面、川にはきれいな水が豊富にありましたのでこの「川」というものが大変便利な生活用水だったので。洗濯は勿論のこと、障子、野菜洗、漬物桶、牛馬の類に至るまで、川は大切な生活に密着した存在だったので。各部落より川への道は水の利用の為、大切な生活道であり、これを汲路（クミジ）と申します。亦、汲路とは道を含めて洗場、其のものも、汲路と申します。「汲路へ行ちゅう」と言いますと、洗場へ行っている事になります。

エンコウ祭りは元来、川祭りでありますので御神体は水神様となる筈なのですが、そのところがエンコウ祭りでして、御神体なるものは、白瓜であり胡瓜です。「なぜまた？」と申しますと実はこの瓜の類はエンコウの大の好物だということでありまして、普通神様への御参りには御戴錢亦は御フマを持参致しますが、エンコウ祭には好物の瓜類を各自持参して御参り致します。

五月末の土佐と言えば、若葉の頃ははや過ぎ、青葉の季節、既に夏です。小供たちには刻々とエンコウ祭の迫る頃です。六月の第一土曜日が祭日の不文律になっていまして、其の日に向かって小供達の計画は実行に移されます。

作業の最も労力を要するところは部落にとつても大切な汲路の清掃でしょう。草刈り、草引き、川の中の危険物の取り除き、藻刈りまで行われなくては、後日部落に祭典費を要求する義務を負えませんか。

子供の代表者とも言うべきものは、「大将」と呼ばれ配下の下級生にそれぞれの作業

区分を与え作業の指揮をとります。

この頃学校は決して勉強のみの場に非ず、各部落の作業の進み具合、寄附金の高、花火の数など、情報収集の場でありまして、各部落競い相うのです。

昼間は汲路の作業、夜間は寄附集め、チョウチンの修理などで、やがて当日を迎えることとなるのですが、祭日の前日には「社」作りの為の菖蒲刈りがあります。「社」は鬼菖蒲で作られますが菖蒲がしなびない様に刈り取った菖蒲は川水に浸し当日まで保管致します。

当日は土曜日ですから学校から帰るとまず「社」作りの作業です。上級生の指導の下、杭と竹と針金、菖蒲の材料で作る訳ですが、既に毎年毎年先輩より受け継いだとおりの作業です。下級生は菖蒲の取り継ぎです。「菖蒲を折るなよ」の叱咤が飛びます。「社」作りと併行して提灯を吊るす竹竿を立て針金張りも終わり、三〜四時頃には提灯に火を灯すのみとなる迄の作業を終え、提灯の上げ下げの「リハーサル」とも言うべきものも終えます。鬼菖蒲は葉が濃緑、根茎はピンクを呈した白、と実にみずみずしい夏には相応しい配色です。特に根茎の切り口は美しい色調です。日没のせまる頃、最後に根茎を出した屋根、棚、の二箇所を鎌で切り落とし参拝者を迎えます。いよいよ御祭りの始まりです。

ここでエンコウとは何んぞや？少し考えてみましょう。

昔、その亦昔から前浜後川に居るエンコウ。子供に神様にまで、祭り上げられたエンコウとは？何者ぞ。川より上がってここにおいて願えれば幸い説明の必要ない訳ですが、それが出来ず、いかにも説明に難儀のゆく「しろもの」でご座居ます。推測致しますに、先ず、水の中に居りまして凄く怪力です。手がありまして、伸縮自在、相当長く伸びます。(50mくらい？)

片方が伸びると片方が縮まる性質の様で若干ユーモアがありますが、実は相当癡猛でして、人間、動物の生き血を吸う悪漢なのです。

我々の聞き及びますに、先ず川の深みにはまり子供が水死したのを見よ。顔面蒼白、血の気が失せ、特に唇は紫色ぜよ。これ正にエンコウに深りへ引き込まれ肛門より生血を吸われた証拠ぜよ。「決して水泳(あ)び」には一人で行かれん、深りへは行くな」と部落の老婆の話です。

また、生き血を吸いたさのエンコウは其の腕力にまかせ或曰、橋本の汲路に馬車馬が水浴び、水呑みに下りた所へ長い手を出し馬の後足を引っぱり深りへ引きこもった。馬の泣き声、あばれる音に馬主がかけより、エンコウの手を取り、「今日こそエンコウ見付けたぞ」とばかりエンコウの手を力まかせにねじあげこじんと捻じ上げた。処がいくもんかエンコウは手が長い、はるか川下の中敷の藻の上でエンコウがバツタリバツタリと悠長に手の攪りを戻しよったと。

日本には架空の動物としてカッパが居りますが、土佐にはカッパの他にシバテンが居

ります。その土佐の中でも亦、前浜にはエンコウが居りまして、それぞれに性質が異なるように思います。

カッパは水中が好きで水の中によく居る様ですが頭の皿の乾くのを恐れ水辺を離れる事はあまり無い様でして亦、彼は水中にて息の長い事を自慢にして居りますが絡繰(からくり)は其の「センゴウ」の裏に空気を蓄えて居りまして人間と同じ肺で呼吸して居る様です。

シバテンも皿があるのか水中亦は水辺に居るようです。相撲が好きで人間の唾が嫌い(これは山羊と同じ)で、体も小さいが諧謔に當んで居り、カッパの子供ではないかと思われる節があります。

エンコウは前二者に比べまして、あまり水上に上がらない様でしてユーモアが少なく発育盛るか専ら生血を要求致します。私の想像しますに水中に居て「水棲動物」エラ呼吸ではないかと思えます。このところに至りまして「トンボ」の幼虫が「ヤゴ」の如くエンコウはカッパの幼虫ではないかと想いますがいかがでしょう。しからばカッパは虫か？と反問が有る事は勿論ですが、カッパはどうも爬虫類か両棲類のように考えられませんが、その辺りは永久に？と付す方が將來子供の空想の為に良くはないかと考えまして、エンコウの詮索はこの辺に致しましょう。誠にエンコウとは何ぞや御役に立ちませず恐縮に存じます。

いよいよ夕暮れ、部落の人々が胡瓜の御供物をたずさえて幼児の手を引き浴衣掛けで御参りに来ます。既に用意の整った提灯に皆なが灯を入れます。一つ二つ…と五十個ぐらゐの提灯に灯が灯り部落の橋の上は明るくなります。

一本十五種位のローソクの寿命が川辺の御祭りの時間です。以後は第二ラウンド、部落の公民館に引き上げ、母さん達の料理の「御客」に舌つづみをうつわけです。

ローソクの消えるまでのハイライトは花火です。子供それぞれに分け与えられた花火は自分一人では使いきれない程のもので、親に、妹にと分けて、となりの部落に負けじと花火を焚くわけです。打上花火の音は隣りの部落の競争心を煽り、負けじとばかりに花火の響宴がひとしきり続きます。小さい子供は線香花火を恐る恐るさげて、この部落に育った郷愁を自分の将来の為に作って居ります。汲路一帯を花火の硝煙がふるさとの郷愁やおいとしこめて包みます。そして宴はおわりをつげるのです。

川辺から公民館に引き上げたエンコウ祭りの執行者達はこれから慰労会に移ります。料理は予算に応じて母親達を作り、既に並べられているのです。「御馳走」「舌つづみ」と言つても実に質素なものです。といつてもやはり子供達にとつては、めつたやたらと食べられるものでもないのです、やはり喜ばずにはいられないものでしょう。「散し寿司」「きゅうりもみ」「善哉」があれば最高で、「お菓子、のみ物」などですが特に「もみ瓜」はエンコウの好物ゆえに絶対欠かす事の出来ない御馳走です。満腹の後は、歌を唄い、取っ組み合い…夜が更けて九時頃には家に帰ります。

大変な煩い、大儀な事は明日の川辺の清掃で、昨夜の花火の残骸、大事に作った「社」の取り壊しです。また次の年に備え提灯など道具の仕舞込みも念入りにします。大将は自分の責任の終つたことに、ほつとすると共に喧嘩もなく終へる事が出来た事に満足します。そして次は、青年団員若衆組への組入りが待ち構えているのです。

祭りの宵は更け、大きな余韻を残して

次第に遠ざかり

明日に向かうのです

あとがき

― 執筆によせて ―

以上、エンコウ祭の概要を書きましたが、子供の祭として高知県の片田舎の古い習わし。今日迄受け継がれてきた行事で地区に育つたものの心の奥に、いつまでも残り郷愁そのものとして今日古里の想い出はと聞かれた場合、神祭とエンコウ祭が出て来るのも神祭は大人の祭であり、エンコウ祭は子供の祭でありまして子供の自主的な運営に依る行事であることが大いに起因する事だと思えます。

初夏：川辺：提灯：菖蒲：花火：演出……のすべてが渾然として花火の硝煙に包まれて想い出の奥に宿っている事でしょう。淡いローソクの灯、菖蒲の「社」……遠く東北羽後の国秋田の横手平野にカマクラと言う水神様の行事が有るようですが片や雪国、雪の室。こちらは南国緑の菖蒲と提灯、日本を代表する祭ではないかと思えます。都会の漠としたものを離れたひなびた日本人の心の古郷を今に残した行事ではないかと思えます。

「日本人よ！時には源泉に帰れ」  
東京生まれ、東京育ちの人にとって、心の古郷はあると思つています。

私はこの祭りを全国に宣伝するつもりはありません。細々なりとも何時迄も絶やしてはならないと思えます。また、絶やさずつづけて行きたい行事の一つではないでしょうか。

濱田 眞潮

濱田 眞尚

共著

昭和五十年八月

## 三・聞き取り調査資料

エンコウ祭りに関する聞き取り調査は田辺寿男氏によるものと、今回の調査によるものがある。以下に田辺寿男氏聞き取りメモおよび、今回調査の聞き取り概要を掲載する。

今回の調査で主に聞き取り調査にご協力いただいたのは、次の方々である。

- 前浜寺家組の高木春美さん（大正十一年生）
- 前浜中組の西山幸雄さん（大正十三年生）
- 前浜里組の近藤貢さん（大正十三年生）
- 前浜濱窪の橋田正廣さん（昭和十年生）
- 久枝西組の下司順一さん（昭和十五年生）

## ◎田辺寿男資料1 昭和四十九年六月一日聞き取り

- 南国市前浜寺家 浜田美春八〇歳（明治二十七年生れカ）
- 浜田満恵七十六歳（明治三十一年生カ）

## エンコウ祭

- ・南国市浜改田、前ノ浜、久枝など諸部落を東西に流れる後川流域の諸集落ごとに行われる子供の行事。
- ・久枝東、久枝中、久枝西（以上久枝部落）
- ・切戸（キレド）、浜クボ、東、クボ、寺家（チゲ）、中、西（以上前浜部落）

## 現在

- ・祭りをを行う者 小学1年より中学3年の男児のみ。
- ・どういう訳か女の子は入れない。
- ・費用として集落（組という）の各家庭より平均して400円くらいの寄付を受ける。（尤も、寄付とはいえないもの、最近では便所掃除などをし、その代償として銭を貰う。また戸数の多少などによって集った金額に多少の差があり、そのことが祭りを賑やかにしたり、淋しくしたりする。）
- ・祭りの日は新暦六月の第一土曜日。

・祭りの日の十日くらい前に子供達によって後川の土手の草刈りを行う。また前日には柵を葺くために川辺に生える菖蒲に似た植物（地元では菖蒲、葎、カワブキなどという）を根元から切って川に漬けておく。また柵（お堂という）をつくる附近を掃除する。

うし、その他の祭りの準備から進行もその大将の指揮で行う。

- ・当日午後三〜五時ごろから子供達によって柵が造られる。柵を造る場所は、各集落にある橋の袂か橋の上であるが、橋の袂が多く、その場所は汲み地（クミジ）といって集落の人達が昔は水を汲んだり、物を洗ったりする場所であった。
- ・柵の造り方は、竹か木で高さ二尺位の枠をその場に立てる。枠は二重になっており一方を開ける。（四方形）
- ・川からあげて来た菖蒲を二重の枠の間に通して周囲を囲む。その高さ4尺くらい。

ついで菖蒲の上部を集めて糸で結えると円錐形の柵ができる。

- ・柵の底は菖蒲を縦横に切って並べる。この上に神酒と胡瓜を輪切りにし酢にしたものを皿に盛って箸を添えて供える。また両脇に小さい提灯を吊るし火を点じる（これは濱窪の場合。他の組では胡瓜をそのまま2本くらい供え、提灯の代りにローソクで灯明をあげる）。
- ・また橋の欄干に青竹を取付け、この青竹を中心にして山形にロープを張り、このロープに小提灯を多数取付ける。
- ・やがて日没になるとこの提灯や柵の提灯に火を点じる。
- ・これが終ると花火をうち上げる。

この頃になると各組の提灯に火が入り、また花火がうち上げられる。

- ・花火が終ると児童公園のなかに臨時につくった土俵の上で子供だけの相撲が行われる。（この相撲は現在濱窪組だけがやっているという）昔は相撲はなかったという。
- ・以上の行事が一切終ると、公民館、集会所あるいは大将の家でご馳走が子供達に振舞われる。
- ・提灯に灯が入る頃になると親（母親）の参拝があり参ったものは柵の前で手を合せ輪切の胡瓜をつまんで一口食べる。
- ・昔は大人の行事であった。それが子供の行事に変わったのはいつの頃か、また何故そうなったかは判らない。
- ・昔の後川は綺麗な川で、部落の子供は夏になると皆この川で泳いだ。

・また川の流れは、現在のようではなく曲っているところが多く、曲りのつき当たったところが最も深く、こういところでは子供がよく溺れた。またこのようところは柳などの茂った淋しい藪で、子供が水に流され、エンコウに肛門を引かれるといわれた。寺家にシウコウ寺という真言寺があったが、

これらの作業は、大将と呼ばれる最年長の子供の指揮で行くこの寺の下は土用竹などが茂り、その下は深いところであった。ここは物騒なところで□、手タゴにカワカブ（ここでは河骨の花であろうと思う）の黄色い花をさした綺麗な娘が手招きするので、それについて行って溺れ死んだという話があり、その娘はエンコウの化けたものだといわれた。

- ・大人の祭りであったというのは、子供が溺死しないよう願う親心から出た祭りではなかったか。
- ・エンコウは胡瓜が好物である。また昔は、久枝の方では下田の宝生寺（真言宗、以前は本蔵寺といった）で家の数だけの祈祷札（エンコウ除け）を買って来てエンコウ柵に供えてから戸別に配布し、門口などに貼った（浜田芳春氏は久枝の人で26歳で□恵さんの家へ養子に来た）。
- ・寺家ではこの寺より大きな祈祷札をうけて来てこれを竹に挟んで2ヶ所の汲み地に立ててエンコウ除けにした。

・現在は各組とも祭日を六月の第一土曜日としているが（この六月第一土曜日は相当以前かららしく五〇〜六〇歳年輩の人の幼少時この日であったという）昔は前浜部落では旧暦の五月十三日であった。

- ・以前は提灯を沢山つけることが自慢で各組とも競った。また組と組とが提灯の焼き合いに行ったり、柵を壊しに行った。
- ・また家からの寄付も馬や牛を飼っている家が余計に出すことになっていた。

## ◎田辺寿男資料2 昭和五十八年六月四日（第一土曜日）聞き取り

- ・クボ組の祭場で、世話人の男の人はこういう。
- エンコウ祭はもともと水神様の祭りである。
- 後川は昔はキレイな川が流れていて、この川の水で、洗濯もした。
- 野菜も洗った。米もといだ。もつとも飲料水だけは各組にある共同井戸を使った。ここでも水神様をまつた。
- クボ組の祭場は、北からクボ組の集落に入る、後川の橋の袂にある「汲みち」であり、柵をつくる。汲みちには大きい柳があつて、後川の緩い流に影を落して美しい。
- ・どの組とも祭場は北から組に入る、後川にかかる橋の袂の汲みちか橋の上かである。

・棚はどの組も菖蒲の葉を葺いて造っているが、以前のよう  
な円錐形のものではなく、高さ60〜70センチ、巾40センチ位の  
長方形のものばかりである。

◎田辺寿男資料3 平成七年六月四日聞き取り

南国市前浜中組 高木豊春 昭和六年生まれ  
・子どもたちで行う、後川のえんこう祭は、「おやしる」・「お  
どろ」・「えんこうさま」・ショウブ小屋とも呼ぶ。高さ幅と  
も約60センチくらいの木枠をショウブで囲った祠を作り、こ  
れを川縁に南向きに据えて、中に神酒とキュウリとタコの酢  
もみを大皿に入れて箸をつける。子どもたちはこれを拝んで、  
ひと口箸をとって酢もみを口に入れては、楽しみの花火に打  
ち興じる。今では拝む子供は少ない。

・この行事は総て子どもたちで行うもので、昭和十年頃を話  
者の語りによると、

えんこう祭の子供組には、東から浜久保組、東組、久保組、  
寺家(ジゲ)組、中組、西組があつて、それぞれショウブ小  
屋を作つて、川縁に据えて、えんこうさまをまつる。

昔の川はショウブを川縁に埋めつくしたような土手の低い、  
美しい水の流れる川であった。したがつて大雨が降ると、す  
ぐのそこから一面に増水して田のできない年はたびたびであつ  
た。しかしそれだけに、子供たちの最良の遊び場であり、貝  
がたくさんで、魚も手づかみができるほどいた。

・川は六十四歳の話者が知つてから、3回改修された。(1)  
土手に柳を植えた。(2)石垣の堤防に変えた。(3)現在の  
高いコンクリート堤となる。

・祭りは昔から六月第一土曜日で、十日ばかり前日が来ると、  
子供等が力を合わせて、川の藻を刈つたり、周囲の清掃をし  
たりの奉仕から始まつていた。終ると、部落を回り寄付を集  
めた。殆んどの家が出してくれた。現在では1軒で千円〜  
二千円だという。これで花火を買つて夜遅くまで楽しむ。忘  
れてならないのは、祠も子供たちで作る。昭和初年度(戦時  
初期)までは、子供が中へ1人入るくらいのもを作つてい  
た。勿論、本物の子供が1人えんこうのような想像姿勢をし  
て中に座つていたという。入口を灯した1個の提灯が、奥に  
座したえんこうさんを不気味に照らしていたのではあるまい

か。

また隣組同士で争いもあった。  
・暗に乗じて空に吊り巡らした提灯をゆすりに来る。大きく  
ゆすられると、ローソクが傾き、提灯が燃えてしまう。これ  
に対抗してやつて来る土堤の道にばら木を刈つてきて積み上  
げたりして防いだりして、何とか○○?の習俗も行ったよう  
である。

打ち上げの行事  
・夜も深けて漸く遊びが終る。この最後の行事として、板切  
れに提灯の台を座えて火をともし、燈灯のようにして、一灯  
だけ川下に流して祭りを終えたという。川の聖霊への供養の  
一灯であろうか。

・家に帰ると、父母たちが集会所に「ごもく」などたくさん  
のご馳走を作つてくれたるので、これを頂いて、明朝もま  
た残りを食べに行つたという。  
今年の「ショウブ小屋」には、ショウブが少なくて向うがす  
けて見えていた。子どもたちの信仰心が薄いという問題だけ  
では片付けられない。コンクリート堤はショウブをなくして  
しまった川になった。

・江戸時代に街頭で売つたカップの膏薬がよく効いたという。

南国市聞き取り調査記録

◎前浜里組 近藤貢 大正十三年生まれ  
平成二十八年六月四日聞き取り

・前浜里組で生まれ、現在も在住。  
・養成所を出て農業技術員になった。  
・徴兵により、普通寺師団で訓練し、近衛騎兵に入つて東京  
で戦車に乗つていた。  
・復員して農業をやつており、おとしまでハウスをしてい  
た。  
・エンコウ祭は満州事変とともに自粛となった。  
・明治三十五年生まれの父の時は盛大にやつていた。

・下田村はもともと1つの組でやつていた。

・自身の時は道を境に2つに分かれてやつていた。  
・寄付金は基本5厘だが、地主の家とか多いところは1銭の  
寄付をもらった。

・絵金の芝居絵のような古い幟があった。1mちよつとくら  
いの小さな手織りの幟。絵金の時代のものだと思う。今はど  
こにあるか分からない。西と東とでその幟の争奪戦だった。  
夜取り返したりした。西は穏やかな子ばかりだったのではな  
かなか手に入らなかつた。

・自分は小学2〜3年の頃に宿をやつた。大將は今の中学2  
年の男で、宿とは別。

・中3以上からは寺の観音祭りに入る。  
・お坊さんに祈つてもらつた後、宝生寺の境内で相撲をとる。  
・翌日に「シデアゲ」(落語家呼んで、話しをしてもらう)。  
・他に荒神様、荒神祭りがあつた。

・青年が中心となつて各家を農地反いくらか計算して集める。  
・戦争が始まつて廃れた。  
・それまでは青年団24〜5人が集まつてやつていた。  
・青年団のリーダーはタイショウと呼ぶ。(青年団は徴兵検  
査のある20歳まで)

・腕つぶしの強い人がタイショウになる。  
・エンコウ祭はすべて子どものみでやつた。  
・棚の作り方は代々伝わっている。  
・棚は青竹でショウブを挟んで作る。  
・いたるところにショウブは生えていた。

・花火は戦後になつてからやるようになった。火薬は兵隊が  
使うものだから。  
・自分たちの頃は寄付集めが一番の楽しみ。昭和六〜七年ご  
ろで1銭を全戸周つて集めた。農家でお金に触れる機会がな  
かつたから。お金を集めて経済を覚えた。出納帳は書いた記  
憶がない。

・ショウブ小屋で祭りをする。  
・提灯とろうそくを買つたら寄付金はほとんどなくなる。少  
しけんびを買つたこともある。  
・宿の家がそうめんを作つてくれることもあつた。

- ・きゅうりを2本くらいもってきてシヨウブ小屋に供えた。酢もみは作っていない。
- ・ナスもあれば供えることもあった。

・中組に深い湖があった。そこにカワウソがいたので、それがエンコウのイメージ。  
 ・湖のことを明治初年生まれのおんちゃんにはヒノと言っていた。ヒノで水遊びしていた。

- ・カワウソは秋田川にも泳いでいた。
- ・エンコウに石を投げて大熱が出たという話を聞いたことがある。
- ・エンコウ祭では相撲はしない。小学生は観音祭りで相撲をとる。
- ・観音祭りは秋の祭りでエンコウ祭りとのつながりはない。
- ・エンコウ祭のいわれは特に聞いたことがない。
- ・エンコウの川流れもしていない。
- ・別の地区のことは全く知らない。

・東の集落は曾根や蔵入、北屋敷など多く、西は土居など少ない。

- ・エンコウ祭の日にそうめんにみそだれをかけたものが出てきたらごちそうだった。
- ・女の子は全くかかわらない。
- ・提灯を壊し合うことをしていた。シヨウブ小屋は壊さない。
- ・他の集落も同じ日に実施。六月の何日と日が決まっていた。(六月十日か?)
- ・学校から帰って来てから準備を始める。
- ・寄付金集めは4〜5日前からやり、提灯等も買っておく。
- ・お供えしたきゅうりは食べないで、シヨウブ小屋と一緒に川に流す。
- ・なぜシヨウブを使うか不明。
- ・小屋には提灯はつるさない。お酒は供えない。
- ・当時カメラを持っていたらスパイ扱いされるので写真は撮っていない。
- ・寄付金集めの時は「エンコウ様やお金ちょうだい」という。くれない大人にも「この前川に入ってたからお金ちょう

うだい」と言ってお金をもらっていた。  
 ・その頃の川はきれいで食器洗い等にも使っていた。野菜も洗っていた。

- ・家に池があつて、羽釜をつけておくと鯉がきれいに食べてくれた。物部川のながれ流れてくる。夏には泳いでいた。
- ・川舟は入ってこない。
- ・田村川はホタルもいっぱい飛んでいて、家の中に入ってくるくらいいた。
- ・秋は落ちアユが下がつてくる。フナやタニシ、ボラを食べた。兵隊へ行くときの送別会はタニシとナスを煮たもの。タニシは白でついて殻を流して調理した。魚は出なかった。

・自分が十四歳の時に父が戦争に召集された。(昭和十二年頃)  
 ・家ではカイクを飼っていた。  
 ・第2伊勢湾台風の時、桑がなくて渡しに乗って横浜(現高知市)まで桑を買いに行った。  
 ・十市の札場でも買った。

・戦前は前の警察のところに納めていた。(農作物?)  
 ・農事試験場に勤めてから兵隊へ。

- エンコウ祭の流れ
- ・学校が終わってから昼二時か三時くらいに低学年だけでシヨウブ刈り。
- ・シヨウブは新しいほどいいので、直前に刈る。
- ・刈ったシヨウブは宿にまとめておく。
- ・近くの竹やぶに行つて、今年の新竹を鎌で刈つてくる。
- ・ここで高学年が合流する。
- ・小屋作りをする。柱になる部分は古い竹でつくる。針金でとめて組み上げていく。提灯を灯す。小屋にきゅうり・ナスをお供えする。提灯の壊し合い。
- ・男の子もだけで完結していた。大人は小屋にお参りもしない。
- ・エンコウ祭は宿には泊まらない。夜九時か十時くらいで解散。
- ・宿も子ども達で決める。日程が近くなつてから決める。宿

とタイシヨウは別のもの。  
 ・大人はそうめんを作ってくれるくらいで、一切口出ししない。

・小学5〜6年くらいまでは着物を着ていた。

- ・場所は今の4号掩体の所の田村川のほとりでやったが、宿が変わればその近くの川でやったので、定位置はない。
- ・牛馬を連れて足を洗う坂を下りたところであった。
- ・東の地区はヒエジリ川でやっていった。(飛行場接収前は旧秋田川の西に平行して川が流れていたの、そのことか?)

・エンコウ祭は小学生から中学2年までと決まっていますが、小学に入るまでは入れてもらえず、早く入りたいたいと思つていました。  
 ・江戸時代からある。

- ・戦争で青年が少なくなつた。
- ・稲生で17〜18歳の時相撲をとりに行った。県内から力自慢が集まるものだった。他には、船岡山でも相撲が有名だった。強い人が来る前に仲間と示し合わせて5人抜きし、5円もらつて後免で飲んだ。相撲はコンドウマサヒロさんが有名。
- ・山田とかの近くにいる嘶家さんに来てもらった。(カリヤシヨウラクさんとか)
- ・エンコウ祭はたぶん戦争中に数年やっていない時期がある。
- ・お参りするときはケツをぬかれんように(溺れんように)と祈つた。
- ・同級生は小学の時男が30数人いたが、今残っているのは自分だけ。

・寺子屋が家の前の木の生えたところにあつた。バンセイジュクといい、三百年続いた。

- 今のエンコウ祭について
- ・昔からやっているので、続けてもらつたらいい。
- ・子どもがもうちょっとおつたらいいと思う。

◎前浜中組 西山 幸雄 大正十三年生まれ  
平成二十七年三月二十日聞き取り

・西山さんは下駄屋で3年間修業。その後3年間佐世保の海軍工廠へ。20歳の時徴兵検査を受ける。浜松飛行場へ配属になり、昭和二十年朝鮮の漢口へ終戦時にシベリア抑留。シベリアへ行き、昭和二十三年に戻ってきた。  
・戻ってきてからは百姓をした。田は無しで、畑2反から始めて、5反以上に増やしていった。畑は浜側にあった。前浜砲台の西にモートルがあった。水をくみ上げていた。  
・大根・ねぎを高知の九反田市場へ出荷していた。  
・障子紙で園芸をしていたところもある。  
・西山さんは露地野菜。砂地なので、水やりなど世話は大変だが、大根にはいい土質だった。ねぎも毎日水をかけないといけない。  
・水をやるには、ヒキヌキという水をやるタゴを使っていた。

・家の屋号は紺屋(こんや)。父の代に染物屋。藍釜が家にあった。染物の型もあった。

川について

・橋の場所は今と違う。今より東。東側の道との真ん中くらい。  
・クミジで洗物、洗濯をしていた。  
・川の流れは2回変わった。  
・最初は南へ西へとグニャグニャ曲がっていた。今の県道くらいまで曲がっていた。  
・ヒドウといって、深いところがあった。そこで泳ぐ練習をして平泳ぎなどを覚えた。  
・はだかで、下着はパンツをはいて泳いでいた。上級生は水泳パンツで泳いでいた。  
・練習をしてからその後、上級生に海に連れていってもらうようになる。海は底が凸凹して深いところと浅いところがあった。橋の上流も下流にも泳ぐところがあった。  
・ヒノというところは足がつかないほどの深だまりのあるところ。  
・畑に水をやるための水で塩を流していた。モートルから水が出ていて、タンクに常に水をためていた。たごで畑に水をかけていた。

昭和十年のエンコウ祭について

・小学6年がタイシヨウで、自分は昭和十年にタイシヨウをやった。  
・6年のものが宿をとる。提灯をつけてからその家でおきやくをする。  
・カヤとシヨウブで小屋をつくる。カヤもシヨウブも前の川でとった。  
・キュウリのもみゆりをお供えする。  
・小屋には木で作った枠がある。枠は伊都多神社にある御通夜堂に入れていた。  
・シヨウブは棚に並べる。周囲にカヤをやっていた。  
・まっすぐに切って形を整えた。屋根の上はカヤも折りたたんで平らにしていた。

・提灯は部落の人の寄付で20個ほど吊っていた。  
・浜田商店(浜田ゆきみ・まさよし)で買い物をしていた。  
・提灯は高知で買った。ろうそくはこの辺で買う。  
・橋の欄干に竹で支柱をやっている。  
・寺家は道が広いので、提灯も多かった。西組も多かった。  
・橋のたもとに杭を打って柱を立てて提灯を吊る。橋の部分は欄干に固定する。  
・中組は15人くらいいた。六月の第一土曜日にやっていた。  
・2〜3日手前に草刈り。子供が鎌でヤシロを作るあたりを草刈りしていた。  
・普段から通るところは草を刈ってあった。鎌は家にある鎌を持つてくる。  
・昔も橋のたもとに小屋を置いていた。橋の東手前の位置。

・5年、6年が寄付集めに行く。中組の家を全部まわる。金額に決まりはない。1銭でお菓子が買えた時代で、寄付は5銭か、多くて10銭。ノートに帳簿をつけていた。毎年そのノートを次に送っていく。多くくれない家があった時は洗濯しているときに上流で悪さしてやろうという話はしていた。  
・中組は今60軒くらいの家がある。  
・昔は家は少なかったが、子どもは多かった。  
・漁業が多く、家の手伝いをしていた。

・百姓も多かった。

・花火は手持ちの花火をしたくらいではないか。打ち上げ花火はしていない。  
・寄付は晩の宿でのお客の料理に使う。キュウリのもみゆり、五目寿司、みかん水など。  
・子どもの出したお金もあった。  
・祭りが終わったら5年生にノートを渡す。  
・マッチで提灯に火をつけていた。  
・上級生は隣の寺家組へ提灯をゆすりに行ってくると言っていた。自分は行っていない。  
・当日のうちに提灯は片づける。宿へ持ち帰ってから、来年の宿をやる家へ持つていく。  
・夜のうちにほとんど片づけて、翌朝に少し掃除をする。  
・相撲はやっていない。  
・エンコウの川流れというものもない。  
・久枝でエンコウ祭をやっていたかは分からない。下田村ではやっていない。

エンコウについて

・エンコウのイメージはかっぱみたいなもの。  
・お盆に川に行ったらエンコウに引かれるという話はない。  
・浜で昔シバテンと相撲をとったという噂は聞いたことがある。(高木貞夫さんの祖父)

昭和四十年代のエンコウ祭

・自分の子どもがエンコウ祭をしていた時。  
・昭和三十三年生まれの子供の時中3で大将をしていた。  
・花火が増えた。  
・片付けは6年の家がやっていた。  
・同級生は5人くらいいて、川に近いということで大将になった。  
・家から電気を引っ張って行った。

地域の年中行事

伊都多神社のお祭り

・旧暦八月十五日と新暦十一月十日。

- ・前浜寺家、中、西、久保、浜改田細工所(さいくせ)、東場中ノ丁の組単位で当屋をまわす。前浜東、浜窪は別だった。
- ・当屋からおなばれ(おみこし)が出ていく。
- ・昔はよそからも太鼓を借りてきていた。一宮からか？
- ・当屋の組が朝からお宮でご飯を炊く。ハクチョウという役(神輿を担ぐ人、8人程)がやる。
- ・おみくじ(にぎりめし)をもらいに皆行く。それを食べるという言い伝え。
- ・御通夜堂でハクチョウの人は十一月九日〜十日に寝泊まり。
- ・小学卒業してから25歳までの未婚の人がやる。
- ・ほら貝の貝吹き↓太鼓敲きの役↓ハクチョウ↓世話焼きになる。
- ・ハクチョウの人数は年によって変わり、8人とか10人とかになることも。
- ・ハクチョウは白い着物を着る。世話焼きは洋服。
- ・神社総代は各部落に3人いるが、祭りとは別。
- ・各部落にあるおこし休みにおみこしを置いて、そこで太鼓をたたく。場所は浜幸(東組の手前)、下田村、浜改田。
- ・当屋を引き継ぐ儀式があり、太鼓が傷んでないか、誰が直すか等を決める。
- 夏祭り
  - ・エンマ(絵馬のような形) 夜、火をつけて小学生の絵を台に上げておく。
  - ・絵金の絵はない。
- ダンゴ様 五月十五日、九月十五日
  - ・田の神で野々神社で行う。
  - ・昔は宮の前でおきやくをしていた。
- 盆踊り
  - ・以前はしていたことがある。
- 青年団 若い衆があった。高等1年から若い衆に入る。
- 中組常会
  - ・運動会の選手を決めたりする。
  - ・1軒から1人出席。

- ・中組を7つの班に分けており、自分の家は5班。
- ・中組のクミジは2ヶ所で、今の橋のところと、東側。
- ・北裏に井戸があった。まわりに井戸はなく、部落の人が汲みに来ていた。
- ・釣瓶で汲むものからポンプ式に変わった。

◎前浜寺家 高木 春美 大正十一年生まれ  
平成二十七年三月二十日聞き取り

- ・生まれてから現在まで前浜寺家に住む。
- ・尋常小学校6年、高等小学校2年、会社(高知、若松町の鉄工所)に入って寄宿舎で暮らす。徴兵に2年いった。
- ・父は農業。田んぼ1町2反ほどあった。
- ・養蚕もおこなう。春秋の2回。最盛期は寝る所がないくらいだった。

- エンコウ祭全体
  - ・エンコウ祭に参加したのは、6年生のときまで。子どもの祭りだから。
  - ・地域としては、東、久保、寺家、中、西、とあった。うちは寺家。
  - ・大将は6年生。自分はやった覚えはない。
  - ・相撲はなかったと思う。

- 小屋
  - ・エンコウをお祭りするものは「コヤ」と呼んでいた。
  - ・四角くて、今のよりはもっと大きかった。子どもの背丈くらいはあった。
  - ・お札とかは特に貼ってない。
  - ・菖蒲ももっと丈夫だったから大きくできたかも？
- 他の祭りや行事
  - ・無かったように思う。

菖蒲

- ・上級生が鎌を持っていつて刈る。
- ・自分のときに高等小学校にいったのは、男が14人、女が6人。自分の上は倍おった。小学校に行ってた子はもう少しいた。全員で行くのではなく、やらん人もおった。
- ・ようやくらんときは、大人が手伝った。
- ・シヨウコウジ(天神さまの北にあった寺。今も井戸がある。当時すでに建物が無く、寺の跡があった)の竹やぶで竹も木も切ってきた。

奥さんのお話

- ・菖蒲は五月節句でお風呂に入れる、というのは昔からやっていた。謂われはわからないが、おじいさんがやっていたから習慣的にやっていた感じ。昔は家の上に菖蒲を投げたりとかもしていたらしい。
- ・高知ではやっていなかった。こつちへきてから知った風習。
- ・菖蒲は、花は咲かず、葉ばかり。
- ・両親の出は前浜で、自分が高知に出て、この人と結婚してまた前浜に戻ってきた。
- ・昭和24年頃に結婚。自分の子もエンコウ祭に参加していた。
- ・公民館で子どものおきやくをするから公民館に集まった。
- ・子どもの時は、(祭りを)子どもだけでやっていた。孫の時には手伝いにいった。
- ・全ての橋に提灯をつっていた。
- 寄付
  - ・6年までの子どもがおるところは、会費のように持って行った。
  - ・寄付を集めたか覚えていない。
  - ・自分らのときは(昭和三十年代)、どこもくれてた気がする。
- 提灯
  - ・昔はロウソク。風で揺れて提灯がよう燃えとった。燃えたら買い足した。
  - ・クミジまでの道を照らす感じの場所につるす。
  - ・木の橋の欄干は寺家にはなかったので杭をうってそれに つるした。
  - ・30個つけて一斉にあげるのは大変だった。
  - ・時間はロウソク1本燃えてすんだらおわり、というくらい。



1時間くらいか。  
 ・他の場所の提灯を取りに行く風習については、話は聞いたことあったけど、取ってきたという人は記憶にない。  
 ・攻めていったり石をほりなげたり、というのは、僕らくらいからかもしれない。

ご飯

・祭りが済んでから各家で食べるので、みんなで集まっていたのはなかったような気がするが、公民館でおきやくをしていたかもしれない。  
 ・祭りが済んでからお米を一合もっていったら、おばさんが五目寿司をつくってくれた。

お供え

・胡瓜の酢の物。お酒1合瓶2本ほど。杯も。来た大人が飲んでた。飲む人も飲まない人もいた。

片付け

・提灯は雨に弱いのでその日に片付けた。燃えてもいかなかった。大事にした。

・小屋の片付けは次の日に。

花火

・あまりない。種類はよく覚えていない。  
 ・暗くなって(七時半くらいか)から、三十分くらいか。数がないので、もたない。  
 ・今のような派手な感じではない。  
 ・高知まで買いに行く。近所の店には置いていない。

汲み地(くみじ)

・寺家の地域には2カ所。1カ所は久保と共通。  
 ・蚕のえびらを洗ったり、洗濯したり、に使った。  
 ・何人かで一度に作業できる広さがある。  
 ・土手からは道(階段)がついていて、足場まで歩いて降りられるようになっている。  
 ・そのまわりの川は、膝からおなかあたりまでの深さ。

川の様子

・川沿いには柳等が生えていた。根のところにはうなぎがいた。  
 ・川の流れるはゴンゴン流れとった。  
 ・ふかりんぼ(深い所)は部落に1つか2つはあった。舟は通らん。舟が通るような川は無かった。田舟は聞いたこともない。

用水

・洗濯物は、家に水道がなく、手押しポンプでくむ。それはどこの家にもあった。  
 ・水道は僕らの中学校くらいの時(昭和三十六〜四十年頃)にきたか。それまでは井戸を共有。  
 ・農業用水は大きなポンプでくみ上げて、溝を流して、田んぼや畑に流していた。  
 ・つるべ井戸が前からあった。お宮にも最近まであった。

エンコウ

・シバテンはエンコウと同じイメージ。  
 ・見たことはない。  
 ・ミズスマシのことをエンコウといったりする。  
 ・エンコウにひっぱられた、という人を聞いたことはない。

エンコウの川流れ

・聞いたことない。やってた記憶はない。  
 謂われ  
 ・大人から聞いた、ということもあまりない。  
 ・いつから始まった、という話も聞いたことがない。  
 ・「悪いことしとつたら、エンコウにひかれるぞ!」とはよく言われた。  
 ・まあ、水難事故にあわないように、ということかなあ、とぼんやり記憶している。  
 ・エンコウの神様ははえらいから、そう悪いことはしない、という感じ。

八月十六日

・川も海もいったらだめ、という話があった。

初盆

・真言宗。竹やヒノキの柵は聞かない。  
 ・明治のお墓はあるけれど、江戸の墓はあるか分からない。

狸

・シヨウコウジに狸が出る。ばかされる。という話は聞いたことがある。  
 ・どつばかされるかはよくわからない。  
 ・〇〇さんが化かされた、という話は聞いた。綺麗な女の人に化けていて化かされた、と。

川遊び

・夏休みは、川で泳いで遊んだ。どんど(深い所。どんどん水が流れるから。どんど。川の合流点でもある)で遊んで上達したら、上級生が海へ連れて行ってくれた。だいたい5〜6年生くらいになつてから。

うなぎ

・「もじ」という竹の筒の道具で取っていた。10本くらい仕掛ける。  
 ・学校から帰ったらシジミ貝(スズメ貝)をとって、ウナギの通る浅瀬(ちよるちよる流れるくらい)のところ。水がゴンゴン流れているところにはいない。あとは勘を頼りにしかけた。  
 ・自分らは、ミミズの太いの。カンタロウとかが餌だった。  
 ・ふかりんぼ(深い所)はウナギは通らん。そこではシジミを採っていた。

・竹の太いのと細いのと組み合わせ、先端の入り口部分(仕掛けの部分)も竹。昭和三十年頃の入り口はセルロイドで作っていた。  
 ・ウナギは売れた。大人の中には仕事でやる人もいた。30本くらい使っていた。竹の先を削ってつかめるようにした専門の道具を使っていた。子どもは川に入って仕掛けを引き上げていた。

・切った竹は川に沈めて、水がしみて浮かないようにしてから「もじ」を作った。

◎前浜濱窪 橋田正廣 昭和十年生まれ  
平成二十九年二月二十七日間き取り

○自身のことについて

- ・前浜濱窪出身、現在前浜中組に在住。兄弟4人。
- ・前浜児童遊園地南の空き家になっていて家がもともとの生家。昭和三十九年に現在の家に引っ越した。堤防が低かったので、家から松林のすきまに海が見えていた。
- ・昔は静かで鳥の鳴き声くらいしかなかった。
- ・堤防に小さい防風林があった。道の北の防風林は大きかった。

- ・学校を出て大工をして、その後竹細工を五十年やっていった。
- ・竹細工ははじめ竹串づくりから始めて、敷物やすだれ作りなどをするようになった。
- ・竹の材料は県内から調達。遠いところでは橋原の新田からもあった。

- ・須崎の竹虎とも長く取引をしていた。
- ・息子さんは昭和三十六年生まれ。

○周辺環境について

- ・東西の小さい道の脇に松の防風林があった。
- ・川へ降りていって、橋がかかっていた。
- ・川幅は今の三分の一くらいしかなかった。
- ・防風林の松は兵隊さんが防空壕用に切って持っていた。
- ・現在の児童館あたりに防風林があり、広くなったところに土俵があって相撲をとった。
- ・川のほとりにショウブでヤシロを作った。
- ・土手を降りたところに橋があった。橋は石橋
- ・浜草履は自分で作っていた。
- ・藁をたたいて柔らかくするための石が部落共同の場所にあった。かけやでたたく。

- ・下島浜のことを昔は切戸（キレト）と呼んでいた。

○エンコウ祭について

- ・川にショウブを切りに行った。久枝の川（ヒサエダガワ？）でショウブで筏を組んで引つ張って持ってきた。現在空港の公園になっている場所に三角池があった。その近くの実盛神社のあたりでとった。2〜3束にくくって運んだ。
- ・筏の縄は藁でつくったもの。買ったものか。
- ・藁は生えていたが、ショウブは近くに生えていなかった。
- ・ショウブをとる場所の縄張りがあった。
- ・小さい頃は久枝が盛んにやっていた。
- ・上級生は他の組の提灯を落として行っていた。

- ・戦時中はやめたか覚えていない。
- ・終戦後、小6の頃に提灯がなく、ロウソクと一緒に吉川を越えて赤岡まで買いに行つた。先輩2人と同級生の全部で6人で1時間ぐらいかけて歩いて行つた。
- ・毎年買いに行つたわけではないと思う。

- ・梓はなく、土台から竹や木で小屋を作った。
- ・土台の下は土だった。
- ・祭りの後におきやくをした記憶はない。
- ・上級生が連れて寄付金集めをした。
- ・いくら集めていたか覚えていない。
- ・当時子供がいらない家庭はなかった。
- ・自分の時に花火を買いに行つた記憶はない。花火をやった記憶もない。
- ・小1の時戦争が始まり、戦時中はエンコウ祭の記憶がなく、祭りはやっていなかったのではないか。

- ・日には決まっていたか分からない。
- ・川沿いの道の北に小屋をたてた。
- ・提灯は3方向に吊っていた。川を渡したかわからない。
- ・中央に竿を立て、3方向に縄をわたし、先は杭にくくるようにした。
- ・「ショウブゴヤ」と呼んでいたと思う。
- ・四角い形で屋根は斜めになっていた。
- ・1人で川に行つたら腰を引き抜かれるとか、四〜五月とか

- ・の早くから川に行かれんなどと言われた。
- ・お供えにお酒はあった。キユウリの酢もみは記憶にない。
- ・ナスやフロ（豆）などを縄に吊つたような気がする。
- ・小屋に提灯を吊つたかは分からない。
- ・お祭りが終わつたら相撲をする。
- ・子どもは1件に4人くらいいたように思う。
- ・男の子だけでやつた。20〜30人くらいでやつたように思う。
- ・タイショウは小6から中2くらいに2〜3年やつた。
- ・浜窪で20戸くらいあった。
- ・同級生で男3人女4人いた。

- ・先輩の面倒見がよく、浜に漁に行つても先輩が教えてくれた。

○川について

- ・川に洗濯にいたりしていた。
- ・昔は割と川がきれいだった。
- ・下島浜のあたりシンデ川（新田？）と呼んでいた。ネコヤナギが咲いてきれいだった。

- ・橋周辺や川の河口で魚、ナマズ、ウナギ、ツガニをとって遊んだ。
- ・河口は「ユル」と言っていた。砂や土がたまっていて、場合によって右や左に流れが変わっていた。
- ・突堤のようにメントで囲いがあつた。
- ・台風の時砂でユルが塞がって、ボラが上がって来ていて釣つたら入れ食いになったことがある。
- ・水中眼鏡をかけて川に潜って、石の下の魚をカナツキやテッポウ（チャンとも言った）でとつた。久保組に店があつて、買った。
- ・漁師は海岸に船を上げていた。
- ・だいたい地引網がメインで、オオシキもしていた。
- ・家は地引網の引き子をしていた。
- ・子供の時は取れた魚をもらっていた。

- ・漁師は海岸に船を上げていた。
- ・だいたい地引網がメインで、オオシキもしていた。
- ・家は地引網の引き子をしていた。
- ・子供の時は取れた魚をもらっていた。

○エンコウ祭の相撲について

- ・鉛筆やノートなどの景品があったのではないかと。買いに行ったら覚えはない。
- ・同じ年同志で組んでいた。行司は大人が仕切っていた。親が必死になっていて、部落の祭りとしてわいわいやっていった。
- ・伊都多神社でも昔は相撲をしていた。
- ・相撲は浜窪だけで他の所はもとからなかったかも。
- ・浜窪の子がやっていったが、東組からも来ていたかも。弟は強かった。
- ・普段の格好でとっていた。力が同じような子と組んだ。
- ・小屋の近くの提灯に灯は灯しているが、相撲場には提灯が無かったので日が暮れるまでのうす暗い時間帯にやったのではないかと。
- ・片付けは翌朝にした。
- ・シヨウブは川に流す。提灯はロウソクが消えるまで。
- ・東組の友達は何か川に流したように言っていたが、浜窪ではエンコウの川流れはない。
- ・お坊さん、神主さんに来てもらったことはない。
- ・寄付集めに便所のウジ殺しなどの商品売ってということはない。
- エンコウのイメージ
  - ・エンコウについての話はない。
  - ・早い時期に行ったらお尻を抜かれるという話は聞いたことがある。
  - ・お盆の時期には殺生をせられんという話は聞いた。
  - ・エンコウはカッパのイメージ。
  - ・漫画かなんかでカッパの絵を見ることはあった。
  - ・シバテンとエンコウはイメージは一緒。
  - ・シバテンの言い伝えはない。

○戦時中の様子

- ・小1で戦争が始まり、小5で終戦。甘いものを食べた記憶がない。
- ・カンシヨ今でいうタイザンカンシヨを伊都多神社に売りに来ていた。黒砂糖にする。皮をはいでかじったら甘い。
- ・おやつはサツマイモ。食べ物も浜で魚もとれるし、都会と比べて困らなかつた。

・学校に兵隊さんが来て宿舎になっていた。今の鉄工所のところ。

- ・前浜国民学校の運動場にサツマイモを植えていた。
- ・伊都多神社の前の家を借りて勉強する場所になっていた。
- ・今の掩体のあるところは全部飛行機の誘導路が付いていた。
- ・学校のすぐ隣に爆弾がおちたのか分からないが、大きな穴が開いていた。
- ・祭りは小6〜中1・2年の頃に復活したと思う。

○年中行事について

- ・子どもの頃から七夕は家でやっていた。
- ・家の庭に竹を2本立てて、縄をはって、ナス、キュウリ、フコを吊った。ナスを割り買いてロウソクをたてた。
- ・盆の時は魚を食べたらいかん。仕事も休み。あとは仏壇にお供えをするくらい。
- ・宗教は真言宗。水棚はつくらない。その年亡くなった人のいる家は灯籠を吊るす。
- ・迎え火を焚くことは話でしか聞いたことがない。
- ・盆踊りは公民館でやった。去年、一昨年もやった。
- ・戦前には踊り子さんが、亡くなった人がいる家で踊ったらしい。
- ・伊都多神社の夏祭りは夜やる。各部落で子供に絵を描かせて、中にロウソクを立てた「エンマ」を飾る。五角形の枠があつて、絵を張り、中にロウソクをたてる。
- ・伊都多神社の大祭は十一月十日だった。今は日曜日にやっている。太鼓をたたく人も少なくなっている。出店も多かったが、今は少ない。相撲やのど自慢などをしていった。
- ・秋祭りは昼におなげれをする。
- ・子どもの時はご馳走があつたので、一番の楽しみだった。サバ寿司、巻きずし、いなりずしなど各家庭で出た。魚屋ができる、サバ寿司は店に頼んだ。
- ・昭和十六・十七年くらいはやっていなかったと思う。
- ・後の戦時中はお祭りをしていなかったと思う。
- ・息子や孫は小さい頃から神祭で太鼓をたたいたりしていた。
- ・浜窪が当屋の時は20歳くらいの時に太鼓をたたいた。
- ・引越してから、昭和四十二〜四十四年くらいのときは神輿を担いだ。
- ・祭りのお当屋がまわってきたらその組がやる。

・各組に1人は宮総代がいる。

- ・組は中、西、改田などでは7〜8組くらい。
- ・終戦後になってからの思い出はある。お小遣いをもらって出店に行った。
- ・秋には町民運動会を盛大にやっていた。

- ・大きな松の上に海側を見る監視塔のようなものがあつた。
- ・戦時中の遊びとしては、学校へ行かずに、こんびらへメジロを落としに行つて先生に怒られた。木にとりもちを巻いて、近くにおとりのメジロ（コバン）に入れて飼っていた。置いて、トリモチに止まったメジロをとる。メジロは家で飼つたり友達にあげたりした。他には、野球もやっていた。

○地区について

- ・組の境は基本的に道で分かれるが、建て替えなどで交差しているところがある。
- ・今の家は寺家でも中組でもよかつたが、中組の場所にあたるので中組に入った。
- ・浜窪の地区だけで集まるのはエンコウ祭くらい。
- ・浜窪の神社やお堂のようなものはない。

○生業について

地引網

- ・だいたい集落の人は引き子をしており、網元は7〜8軒あつた。浜窪にはなく、東組2、切戸1、寺家1、中組2、西組2くらい。
- ・はつきりしたことは分からないが、昭和四十年くらいまであつたんじゃないか。
- ・波の低い時は毎日やっていたんじゃないか。
- ・網を上げるときに引き子が集まる。始めはロクク口に棒をつけて回す。女性は巻いた網を引張る。網が近づいて来たら、ロクク口をやめて男性が引張る。
- ・自分が大人になる頃には漁師をする人がいなくなった。

◎久枝西組 下司 順一 昭和十五年生まれ  
平成二十八年六月四日聞き取り

・昭和十五年一月八日、三島村天皇で生まれ、一歳の時海軍航空隊のため久枝へ家を移築。四十四歳（一九八四年）の頃久枝内で転居。

・天皇では、下司家の勢力が強かった。  
・三島神社も室岡山にあったのが一緒に移転してきた。  
・久枝以外へ移っていった家もどれくらいかは分からないがある。

・移る前に天皇部落の50人くらいで記念写真を撮った。  
・隣の家も天皇から来た家で、全部で4〜5軒くらいある。

・子どもの頃にエンコウ祭はしていた。  
・小学校上がるまで、川は清流だったので、泳いだりしていた。

・多くの家は漁師をしていて貧しく、川で洗濯し、各戸に風呂が無いので風呂代わりに川へ行ったりしていた。川が重宝されていた時代だった。銭湯は久枝に一カ所あったくらい。  
・よく泳ぐところは普段から藻は生えないが、他の所は藻が生える。西組、中組、東組と各組で藻の少ないところはあった。エンコウ祭では、鎌で藻をのけて綺麗に掃除した。藻は鎌で切って下流へ流す。

・川では、カラス貝を取って遊んだりした。土に潜っているので、泥を吐かしとて茹でて食べた。

・昔はタニシも食べていた。

・エンコウ祭の場所は決まった場所。川の形はあまり変わっていない。

・東組は橋がなく、前川橋の東一〇〇mのところで行っていた（昔は川のそばは湿地帯なので家はなかった）。

・前川橋は昔からあって、中組はあまり場所が変わっていない。現在東組にある地蔵は移転してきたもの。下田村から物部川へのつきあたりにあったものを春野赤岡線ができるまでは前川橋の北にあって、地蔵の前でやっていた。元は地蔵の横に灯籠があって、その明かりを頼りに川を渡ったらしい。

・西組は宮前橋の90m東の南岸で、現在家がある前あたりから川に向かってちようちんを飾り、堤防の上にシヨウブ小屋を作る。現在ある家も昔はなかった。

・小屋をつくる辺りが遊び場で、洗濯等をする場でもあった。橋ができたことで、各橋のたもとでやるようになった。  
・西組の北にある地蔵は秋田川の上流から流れてきたもの。

・昭和一桁生まれのツネオさんに聞いた話では、三島村でもエンコウ祭をしていた。エンコウ祭が済んだあと、竹に幟を付けて神社へお参りへ行っていた。それはたぶん実盛神社ではないか？と思う。他の実盛さんは虫追いの祭りを六月にやるので、そうじゃないかと思う。

・今は七月二十五日頃に高知空港が当屋をして空港の安全祈願も兼ねてお祭りをする。

・空港拡張に伴って字実盛より移転してきた。

・田んぼには後川の水を踏込水車で入れていた。

・組の境は基本的に道沿いで分かれるが、家がどの道から入れるかで分かれる。

・遊び場は基本的にシヨウブ小屋のところの川。その場所には特に呼び名はない。

・前川橋から飛び降りて遊んでいたの、そこは橋台（はしだい）と呼んでいた。

・後川ではなく、前川という呼び名もあったように思う。

・エンコウ祭は1週間くらい前から川の掃除をする。

・中学生がリーダーで、小さい子が手伝い。

・女子は含まれない。女子が入るようになったのは二十年くらい前からではないか。

・寄付金集めをした。今が千円くらいだから当時は百円くらいだろうか。

・1戸ずつ「エンコウ祭のお金ちょうだい」と言ってる。  
・公民館はないので、大将の家できゅうりもみや五目ずしを作ってもらって、納屋にムシロを敷いて食べたらしい。

・漁師の家は狭いが、網元の家は広く、今も西は島村さん、中は西村さん、東は山本さんなどがあり、前はもつとあった。

・タイシヨウの家が広くない場合は網小屋でやったり、農家の家なら納屋を使った。

・目の前の川でシヨウブをとったが、ホンシヨウブが少なかったの吉川まで取りに行った。久枝は根元が赤いものを「ホンシヨウブ」と言って使う。

・護岸が石垣の時は水が出た時によく魚が釣れた。

・集落から川へ降りるためのなだらかな土の道があった。川岸は平らな場所があり、杭を打って船をつないだ。

・小屋は堤防の上につくる。

・木を四隅に打ち込んで、木を挟むように竹を結わえ付けて、間にシヨウブをさす。

・屋根を折って作り、真ん中に竹を渡して、シヨウブを敷き並べて棚を作る。

・棚にヒノキは敷いてなかった。中組が格好いいからと近年やり始めたのを真似した。

・きゅうりもみはエンコウさんの好物。お酒も供えていた。

・棚の提灯は一つだったと思うが、自分らの時は二つぶら下げた。

・昔はそんなにたくさん提灯がなかったの、全部で10〜15個くらいしかなかった。

・小屋への道沿いに竹を立てて、縄を張って提灯をぶら下げた。子どもにとっては高い位置に下げているように感じた。

・久枝の同学年は男女7人ずつで14人いた。西組だけで10人以上いた。自分の息子（昭和三十四年生）の時は男だけで10人いた。

・戦前は高等小学校までで、戦後は中学生まで。

・戦争中はやってなかったかもしれないが、記憶はない。

・昭和四十四〜五十五年生まれの人は女子を入れてやってない。東組は二、三年前もまだ女の子を入れてなかった。

・他の組の提灯を石を投げて消したりした。息子の時は、高学年の子が集まって中組へ攻めて行って花火のくらしあいをした。

・小さい頃は花火はなかったように思う。花火をドンドン打つのは記憶にない。

・中学の時に車に積んでもらって花火を買いに行った。この辺には店がなかったの、後免か田村のイノという店に買い

- ・に行った。高知市までは行ってない。
- ・大将が大筒の花火を上げたら終わりだった。
- ・エンコウの川流れをしていた。ロウソクの灯りが見えなくなるまで歌った。
- ・お返しのお菓子は前浜中組の「さかん」で買った。
- ・久枝は物部川に接しているので、水難事故も多かったからではないか。
- ・川に流されていなくなった人を探す方法はすぐ海に出るので、木を集めて夜に浜で火をたく。火を目印にしてここへ帰ってこいという意味があるのではないか。上がってくるまで2〜3日はやる。その火に名前はない。家族や親戚はにぎり飯を用意する。順一さんはやったことは無いが、息子さんは名前を呼んで「帰って来いよ」と叫んだことがある。
- ・海岸に流れ着いた人がいた場合、たいてい身元は分かるので、地元に取り上げられていった。
- ・エンコウ祭で相撲はとらない。
- ・今も七月十九日の夏祭りでは小中学生対象で三島神社で相撲をとる。
- ・久枝は吉川とのつながりが強く、今もトリム公園の北は吉川。前浜とはつながりがない。
- ・子どもの頃はいかんことをして叱られた時に「エンコウにもつていかれるぞ」と言われた。川は深くなったり浅くなったりする場所があまりないので、川では言われてない。
- ・お盆の時は川や海に行つたらいかんとも言われた。エンコウではなく、死んだ人につれていかれるから。
- ・実際に海で溺れた子がいた時にその子はエンコウにしっかりとお参りしてなかったと言われていた。
- ・子どもだけの祭りなので、柵にお札を張ったりはしない。
- ・初盆の家では、竹を組んで、ヒノキの枝を重ねて水棚をつくった。香我美町の自分の山でヒノキをとってきた。
- ・盆の時は軒先に灯籠を灯して迎え火をたく。松の木（肥え松）をたいてたこともある。
- ・昔は葬式を家でやっていたので、器用な人が七つ道具をもつ

- ・ていて、作る人がいた。
- ・「雪」というカゴは3本を組んで作る。竹を半分に分けてまたぐやつや団子をさす串等も作る。
- ・西・組は浜で朝七時くらいから集まって作るが、草履とか、竹に紙を張り付けたりとカゴをなう（左縄になう）とかそれぞれ役割分担してやるので自分のやったことしか知らない。
- ・昭和四十年代でもまだ土葬が多かった。
- ・海岸の堤防の所は昔松林で、国有地に勝手に土葬していた。石を並べたりして自分の墓を線引きした。砂なので、墓穴を掘っても乾燥するとすぐこける（崩れる）から埋めるまで乾かないように木の板を被せておいたりしていた。箱型の棺人がすっぽり頭まで入れる深さまで掘る。
- ・砂地だが、作物は稲以外ならたいいなんでも作れる。
- ・もとは三島村天皇のあたりに田もあつたが、立ち退きでとられ、二次空港拡張の時に全てとられた。今は岩村などに田がある。
- ・昭和十六年の立ち退きの時は補償をもらって自分で代替え地を構えて移り住んだ。
- ・昭和五十八年くらいに空港拡張があつた。
- ・戦争について
- ・空襲でグラマンの機銃掃射の弾が家に入ったたりしてすごかった。浜の方から飛行機が来て、防空壕のほうへ機銃掃射の弾が飛んできてこれはいかんと思つた。香我美町の母の地元へ移転して田を作つた。
- ・日本軍の飛行機が飛び立つてすぐ故障があり、引き返してきたが目の前で墜落した。自分が一番初めに発見した。小1くらいの頃で、橋を渡つて百mほどのところだった。パイロットはベルトした状態で血を流しており、亡くなつたと思う。
- ・地面に防空壕を掘っていた。
- ・戦後弾薬を処理するために空港の敷地内で爆発させた。その灰が何百mか飛んできて当たつて亡くなつた人もいた。空港に大きな穴があいていた。
- ・戦後進駐軍はたくさんいて、飛行場の前をジープで行くのを見たり、金平糖をもらった記憶がある。

- ・エンコウのイメージについて
- ・小さいもの。よく分からない。あそこにエンコウがおるといふような具体的な話はない。
- ・シバテンはエンコウと同じようなイメージ。「相撲をとうろつ」と言つて出てくる。色は分からないが、赤ではない。薄暗い感じ。
- ・鹿の角とか苦手なものはない。怖いイメージはあまりない。
- ・川で泳ぐときにおしっこしても、エンコウに謝つたりはしなかつた。
- ・これをしたらいかんということはなかつた。
- ・海にも川にも泳ぎに行つていた。小さい頃は川が多い。
- ・2〜3歳の時川舟に乗つた時紐が切れて流された経験があり、トラウマになつてか小学4〜5年まではあまり泳ぐのは得意でなかつた。これではいかんと自分で練習して泳ぐようになった。船は川漁のためのもの。
- ・昭和二十二年南海地震について
- ・前浜の方へ避難した。
- ・堤防を越えて津波が押し寄せることはなかつた。
- ・今の放水路のある切戸はもともと低かつた。下に橋があり、橋との間に隙間が空いて、父に自転車に乗せてもらつて突っかかつた覚えがある。

資料提供・協力者一覧（50音順・敬称略）

南国市後川流域のエンコウ祭調査事業を進めるにあたり、南国市後川流域のエンコウ祭調査委員会委員・地域住民の方々を初めとして、以下の方々にご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

今西忠良

香美市教育委員会

唐岩淳子

窪田学

下司雅英

高知県立図書館

高知県立文学館

高知県立歴史民俗資料館

高知市教育委員会

香南市文化財センター

塩田研一

高木正平

永原順子

中村淳子

中脇初枝

西山博史

濱田伸夫

日高村教育委員会

前田節夫

## 南国市後川流域のエンコウ祭

（南国市民俗文化財調査報告書 第1集）

2024年3月31日発行

発行 高知県南国市教育委員会  
高知県南国市大塚甲2301  
電話 (088) 880-6569

印刷 川北印刷株式会社



